

918.6
G341
(6) ⑦

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



27

918.6
9345
16)



崎紅葉集

改
造
社
版

杉浦非水裝幀

大正
15. 12. 24
内交



多情多恨 (前編)

驚見柳之助は其妻を亡つてはや二七日に
去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日
をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては
今朝のやうに、唯の今のやうにも思ふ。餘り思
ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐ
る。なるほど病の爲に敢無くはなつた、水のや
うに冷えて、美しい日も聞く暇いだ、棺へも
置められ、葬送も出た、谷中の土に埋めて
葬の傍にたゞ置いて、現在此に在るから
は、僕でもなれば、夢でもなく、確に死ぬだ
と、思つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其
形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、
その可愛い可愛い妻の類子は、顯然と生きてゐる
のである。

柳之助は多く人を好かぬ、代には又多く人に
好かれぬ性で、男では朋友の葉山誠哉、女で
は妻の類子、此二人の外には世界に柳之助の好
いたものは無い。彼は多くの人を好く代に、唯
分となつて、門弟を養つた。門弟實に二十餘
名、泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋
聲の四子の如き紅葉門下の四天王とさへ言はれ
たのである。

三十一歳にて遷く。二女彌生子は海軍造兵少佐
杉山金作氏に嫁ぎ、一男三女、三女三千代子は、
海軍少佐少佐横尾白夫氏に嫁ぎ、同じく一男三
女を産ぐ。家門の繁榮えに榮え行くのは、これ
また山人が生前積徳のいたすところである。

で、小説の處女作と見らるべきは、同誌第九號
に掲げた「謙紫怒氣鉢巻」であつた。「我多
文庫」の初號より、山人は雅俗折衷體を創造し
て、「風流京人形」を連載し、次第に文名が揚
つた。

明治二十二年(二十三歳)一月、故郷學士吉岡
哲太郎氏の經營した吉岡書齋から發行した
「新著百種」の第一編として「此居る儂悔」を公
にした。是ぞ山人が最初の單行本で、開卷第一
頁序文よりして、其の文章は、日本文壇に、全
く山人が獨創した名文名作にして、世に一躍文
壇の魁を稱するに至つたのである。

春
ほのくと鶴を夢みて明の春
春の日の遊戯蝶に似たるかな
曉の覺替へて來た扶かな
夏
青嵐尾上の鐘を鏡りけり
人訪へば梅干して居る内儀哉
蚊帳の月美人の膝を聞却す
秋
思既に秋の眼を開きけり
二三里の妓許行くや露の中
芋虫の雨を聴き居る葉裏哉
冬
年木樨る黄金の年の切味よ
常綺羅や銅味や市に小栗
誰が見てや木葉袂、し山家

は全く生効の無い體になつて、唯二件の事を思窮めてばかりゐる。

一つは、可愛い可愛い妻の生前の事。二つには、此先何を樂に生きてゐやうと云ふ事、此の二件が渦になつて、間斷無しに柳之助の胸の内を回轉してゐる。甚だに考へたところが此先の樂は無、ばかりか、現在今日生きてゐる空も無いのである、と云つて、豈死なれもせぬ、と云つて、愁ひ生残つて物を思ふも愁い。思ふまいとしても、忘れやうとしても、寤れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛々として胸に集る。

「呀、酒でも飲まう！」

と柳之助は憤れたさうに目を瞑つて首を掉つたが、直に置火燧から身を伸して、床の間の啖鉢を鳴したまふ、内向に手枕をして下ふ。徐に障子を踏むで、物柔さうな四十恰好の婢が昇つて来て、

「御用でございますか。」

と座敷の紙門を啓けると、柳之助は倦いたままで、

「酒を一つ買つて来てくれ。」

その力無げに仆れてゐる體を老婢は怪むで、

「どうぞ爲さいましたか。」

と體を差入れる。

「可いから早く買つて来て。」 と彼はなほ顔を見上げぬ。

「はい、はい。麥酒ならお内にございますが、やつぱり御酒の方が宜うございますか。」

「麥酒でも管はん、早く持つて来てくれ。」

老婢は慌忙しく下りて行く。その聲と俱に一陣の風は颯と梢を鳴して吹懸くる時雨に北窓の障子は氣立ましい音をして倏忽演々濡になるのを、柳之助は幾に首を擧げて見たが、又俯いて了ふ。

空は一面に微晦くなつて、雨は一時劇しく降出す。襟許から肅々と悪寒くなるのに、火燧の火さへ消えかゝるので、横になつてもゐられず、物臭さうに起上つて、急に黯くなつた家の内を、何と云ふ事は無しに惘然悶してゐる。爾時老婢は蠟色の圓盆に、鉢に菓子をつつ、密せて、醬油注に小皿、小善物に箸箱、コップ等を載せて、片手には櫻田麥酒の樽を抜いたのを擧げて入つて来る。

「お火燧にお火はございますか。何だか又寒くなつて参りました。」

「あゝ、火を少し貰はうか。」

と其處に置いた盆を引寄せて、コップを把ると、恐多さうに老婢の酌をするのを、何と思つたか一寸見て柳之助は直に横を向く。それを見付けると、老婢は忽ち點々と涙を零した。柳之助は又其を見るとコップを持つたまふ俯いて、滴々と涙を落す。老婢は壺を下に置くと、袂から鼻紙を出して頻りに泣き始めた。

柳之助はコップを半分ばかりを一息に啜りて、

「元、寂しいな。」と故と元氣よく言懸ければ、

「御尤でございます。」と元は益泣く。

此挨拶では不足らしく、

「あゝ、寂しいよ、寂しくて可かん。」

と重ねて訴へたが、急來る涙を防がう爲に、餘れる酒を又一息に呷と飲むで、

「もう一盃。」

此酌に就いて彼は考へたのである。お茶一つ上るのでも、奥様の御手からでなくば御承知の無かつた且那様が、元のお酌で上るのみか、注げと有仰る。嗚呼御備しい。例ならば(類さん)を呼べと有仰るのであるけれど、その奥様は御在なさらぬ。お寂しいとは御尤だ、と老の泪はいと腕かつたが、やがて忙しく目を拭いて、涙を去むで、もう泣くまいと覺悟し

たやうに紙を袂に入れて了つて、

「それに今日は娘家の奥様も御歸になつたものですから、急に猶の事お寂しうございます。」と盆の物を按排して、菓子割つて其へ出しながら、

「何も御肴がございませんので、本當に御精進なのでございませぬけれど、娘家の奥様が其には及ばないと有仰つて、此間から且那様だけに御魚や肉を差上げて居りますのですから、お菓子も宜うございませう。」

「あゝ、それぢや何か、如家の家母様やお前は精進なのか。」

「はい。」と老婢は又少し萎れる。

「然うか。」と頭を掻いて、

「些とも氣が着かなんだ。」

「いゝえ、且那様はお宜うございます。」

「いや、俺も其ぢや精進にしやう。」

「然うでござりますか。それはまあ何方かと申せば、御精進の方が。」

「佛の爲だ。」

「然やうでございませぬとも。」

と其可憐さに老婢は又涙を誘はれる。

「咳、もう佛に成つて了つた！」

耐りかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の

麥酒を盡して、ほうと息を吐く。老婢は起つて火を持つて来て見ると、柳之助は目を閉ぢて、壁に靠れて、少しは酔つたやうな、多くは物を思ふやうな態で、惘然としてゐる。

元は火燧の始末をして、盆などを片寄せて、起たうとすると、主は佛と目を開いて、

「何時かな。」

その俯つてゐる壁に時計の掛けてあるのを老婢は見えて、

「四時七分前でございます。」

「これから一寸墓詣に行つて来やうかな。」と柳之助は障子の硝子越に外面を眺める。元是有繫に驚いた。如何な事でも一日に二度も墓詣をするものがあらうか。今日は二十七日であるから、朝の内に谷中まで詣つて来たばかりである。それも近い所では無し、まして雨は降る、日は暮れる、これから如何なさうといふのか、と其氣色をば鈍つたが、随分出相もしさうな様子。

柳之助の身になつたらば、懐しい遺骸の眠つてゐる所は、目に見えぬ魂の猶留る屋棟の下よりは、追慕の淵を際するに疑無。彼の墓詣をせうと云ふのは、生きてゐる人を尋ねると同じ意で、慈しさに堪へかねたればこそ

である。

悠々考へたれば、別に不思議は無い。老婢も然うとは考へたのであるが、秘めて不思議に思つた、或は變に思つた、些と氣が如何かしたのではあるまいかと思つた、然う思ふと、何と無く可憐いやうな、心細いやうな、途方に晦れたが、左も右も留めるより外に法は無いと思案して、

「もう今日はお遅うございますから、明朝になさいまし。」

「遅くても可いさ。」

「それでも、今朝もう一度御詣をなすつたのぢやございせんか。那様に一時に幾度も行らつしやならなくつても、日に一度づつで幾々の方が却つて佛様は御喜びでございますよ。」

「然うかな。」と柳之助は稍折れる。

「これから御詣をなさいます代に、御佛前へいらして、御線香を多度お供げ遊ばしました。子供が言聞かされたやうに、柳之助は情々と頷いた。墓詣は思止つた様子に、老婢は胸を安むじて、

「私も御回向を致しますから、いらつしやいませ。」

日暮に薄る空模様は雨の爲にいと晦くなつ

て、製造場の汽笛が響いた聲で泣くやうに聞える。彼は曳入れられるやうに寂寥を感じて、噫、今夜も此寒い、陰気な二階に燈火と相對して居なければならぬか。居られるものではないと思ふと、柳之助は我知れず術と起つた。

起つた所で何處へ行くのである？ 此が自分の住居であれば、何處へ行つたとて、(親さん)は居ない。我家であれば、依然此に居るのだ、と座敷中を胸したが、如何しても居る氣が無い。起つて見ると、もう坐る氣も出ぬ。

例ならばラムプを持つて昇つて来る時分だ。晩飯の支度をするので、元と呼ぶ聲が聞える時分だ。ラムプを持つて来ぬ、元と呼ぶ聲もせぬ、呼吸しい、寂しい。と柳之助は堪へかねて、二階の座敷を往來してゐたが、其でも堪へかねて、竟に階下を下りた。

「元、元！」
と呼びながら玄關の方へ出る。老婢は臺所から駈けて来ると、
「傘を出してくれ。」
と言つたばかりで、焦燥しながら考事をしつゝゐる眼色。元は前垂で濡手を拭き、
「何方へ行つしやいます。」
と其舉動を見てゐる。

「一寸其處まで。」と極めて胡亂に答へる。「御出掛でございますか。唯今お鏡香を供げる」と有仰いましたのに、急に如何爲すつたのでございませう。」
恨めしきやうに元に視られて、少し面目無かつたか、
「やつぱり一寸行つて来る、どうも氣が済まんから。」
「御嘉言でございますか。」
柳之助は唯頷いて座敷の内を例の運動してゐる、心では此幕參を異變なものと思ひながら、氣が済まぬゆゑに行つても見たいのを、如何したものであらうと分別しかねてゐるらしく。

老婢は彌々氣味悪く思つて、之は飽くまでも出しては好くないと、氣に障らぬやうに種々と留めた。留められて見ると、有繁に其に理があるので、振返つてまでも出やうとは爲ぬけれども、又満足して思止ることも出来ぬので、益々烈しく座敷中を往きつ還りつしてゐる。

二

此時格子の外に人力車が駐つたので、柳之助は慌て、玄關に駈出ると、美しい蠟塗の車は帆を交いて、氣遣と雨具に身を固めた車夫が

背面になつて、前桐油を外してゐる。車の音を聞いた時に、柳之助は不圖類さんが生家から歸つて来たのかと思つた。そこで駈出したのであるが、車を見ると、然で無いの覺つた。見覚えのある此車は友人の葉山誠哉。あゝ、葉山が来てくれた、と嬉しいやうな、頼しいやうな、それにも胸が通つて、又涙が出る。

「おや、葉山様が入らつしやいました。好い所(まあ)。」
と老婢は頻りに喜ぶ。
葉山は霜降の厚羅紗の外套を着て、全然と頭巾を被つて、小豆色の爪革を掛けた新しい足駄で、細骨の蛇の目を架げながら、
「あゝ、酷い降だ。」と急いで格子の内に入る。
「此御天氣に好くまあ。」
と老婢は急遽起ちかゝつて外套を脱がせる。
柳之助は憤然した顔の、氣の無い聲で、
「さあ上りたまへ。」

客と主は連立つて二階へ通る。途には老婢が車夫に向つて頻りに愛想を言ふのが聞えた。
葉山は座敷へ入ると直に、
「おや、麥酒かい、洒落てゐるぢやないか。豪氣だね、火爐は。」

葉山は驚いて見てゐたが、
「何だ、あの手巾は？」
「どうも涙が出て困る。」
「それは悉皆濡れてゐるのかい、なるほど臉が腫太くなつて、太く目が赤いと思つた。さあ之を貸さう。」と綿絹の白の手巾を火爐の上に出せば、芬と香水が匂ふ。
「好い香がするね。妻が能く言つたつけ、君が来ると好い香がするって。」
「呑味だと言つたのだらう。」
「君も知つとるけれど、妻は決して悪口を言はなかつたよ。特に君に對しや、何だ、非常に信用して居つたから。」
生前でさへ妻の事を説く柳之助である、まして今日では、其噂を始めたら底止はあるまい。其は可いが、餘り思はせて泣かせるのは健康の爲に好くない、故に慰藉に來たのと思へば、葉山は故と頭を轉じて、
「時に。」と言出した。
柳之助の胸の内は、はや妻の事に就いて落感が満ちてゐるので、何から話出して可いやら、それにのみ氣を奪られて、他の言は、耳にも入らぬ。
「實に馬云ふ時に妻が居つたら御馳走をするの

と術と入つて、
「あゝ寒い、寒い。」と肩を擦る。
性來の無愛相が、愛に心を奪はれてゐるのであるから、柳之助の様子と云ふものは、無い！ 可厭な奴が來たと謂はねばかりである。けれども心の中はなか／＼嬉しいので、
「此方へ來たまへな。」
と壁際の自分の席を指すと、
「何有、此で可い、其代一盃戴かうか。今日は御見舞に來たのだ、然う／＼、持つて來たものがあつた。」
葉山は手を鳴して、
「車の中の包を。」と老婢に命じた。
元はやがて定紋付の萌黄絹の袱紗包と、重箱らしい包を持つて來て、葉山の前に差置いて起たうとするのを、
「一寸待つて下さい。」と袱紗の包を解いて、
「之を御佛前へ。」
西洋林檎を一籠と蒸菓子が一折、鳩居堂の線香を一箱添へて、蒔繪の盆に載せたまゝ其へ出す。

「おやまあ、御見事な、まあ。」
と元は急に手も出さずに眺めてゐたが、
「旦那様、御覽遊ばしませう。」

と其方へ差向ければ、柳之助は頷いたばかり。物馴れた老婢は主人に成代つて百方禮を述べ、
「どれ、御覽に入れて参りませう。」
と起ちかければ、
「それから未だお重だ。これは御茶です。何か旨い物を持つて来やうと思つたけれど、此際のことだから遠慮をして、椎茸、干鰯の類さ。尤も代物は精選だけれど、少しは陰に如何様かしてあるかも知れませぬよ。」
と笑ひながら包ごと元の方に推遣る。
「それは、まあ何から何まで、難有う存じます。お蔭様で私も大助りでございます。旦那様もお重を戴きました。」
「それは難有う。」
と柳之助はやう／＼禮を言ふ。
葉山は手煙を引寄せて、葉巻の細巻を吃しながら、柳之助の又思出してか、俯いてゐるのをじろり／＼と視て、何と慰めたものであらうと思案をしてゐると、柳之助は左の袂から手巾を一握出した。而して隅の方へ投遣ると、其が三つになつて轉がる。今度は右から又二つ引張出した。それをも投出してつゞつて、袖で目を擧る。

葉山は驚いて見てゐたが、
「何だ、あの手巾は？」
「どうも涙が出て困る。」
「それは悉皆濡れてゐるのかい、なるほど臉が腫太くなつて、太く目が赤いと思つた。さあ之を貸さう。」と綿絹の白の手巾を火爐の上に出せば、芬と香水が匂ふ。
「好い香がするね。妻が能く言つたつけ、君が来ると好い香がするって。」
「呑味だと言つたのだらう。」
「君も知つとるけれど、妻は決して悪口を言はなかつたよ。特に君に對しや、何だ、非常に信用して居つたから。」
生前でさへ妻の事を説く柳之助である、まして今日では、其噂を始めたら底止はあるまい。其は可いが、餘り思はせて泣かせるのは健康の爲に好くない、故に慰藉に來たのと思へば、葉山は故と頭を轉じて、
「時に。」と言出した。
柳之助の胸の内は、はや妻の事に就いて落感が満ちてゐるので、何から話出して可いやら、それにのみ氣を奪られて、他の言は、耳にも入らぬ。
「實に馬云ふ時に妻が居つたら御馳走をするの

「おやまあ、御見事な、まあ。」
と元は急に手も出さずに眺めてゐたが、
「旦那様、御覽遊ばしませう。」

「それ、尤だ。然し……」
 「何故死んだかと思ふと、妻は實際僕を愛して居らんかつたかと思ふよ。」
 「無理な事があるものか。」
 「あ、それは無理かも知れぬ、無理だらう、無理だつた、全く無理だつた。」
 彼は最愛の妻の氣に陥つた事を不圖言つて、その不機嫌を見て、遂に執成すやうに、詫でもするやうに、類に願つた、固より無理など言ふ意ではなかつた、思餘つて不知口走つたのであるが、無理と尤められて見れば、無理であるところ着いたので、すると、(類さん)の熱然とした面影が胸に浮むのである。最愛の妻の面影は始終眼前には隠れてゐるが、それが忽ち不興の色をして怨めしうに視たのである。
 柳之助は済まぬと思つた、無理である、と類に詫びた。けれども心が落着かぬ、即ち幻の面影は其色を釋かぬのである。耐りかねて柳

「あ、悪かつた、僕は悪かつた。言過ぎたよ、免してくれ給へ。實際不吉に違無いのだ。」
 苦に柳之助は詫びる。
 「それやら然云ふ話は止すかい。」
 と未だ立膝をして羽織の紐を正してゐる。
 「止す、止す。」
 と片手に葉山の袂を捉へながら、慌てゝコップを空けて、
 「さあ一盃、一盃飲むでくれたまへ。」と突付ける。
 此子供らしい所が、山の柳之助に惚れてゐる所で、彼が他の思はくも管はず、直に(妻が)と言ふのも、不吉と言はれて、今腹を立つ

「あ、居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤獨だ。」
 盃を差して置きながら、酌をするのは忘れて、蒲團に顔を抑付けて柳之助は又鬱ぎ出す。感ひ合手になつてゐたら、編々思出させるばかりと、葉山は不如願弄して了ふ氣で、
 「おい御酌は？」
 「や、忘れた。」
 と慌忙しく壺を取つて注ぐと、たらりと一盃ほど。兩個は思はず顔を見合せる。
 「何だ、壺が違つてゐるよ。」
 柳之助は済したもので壺を替へて酌をする。滾々と出る酒を見ながら葉山は少しく笑を帯びて、
 「有る酒ならば思つて出る、ねえ見。」
 と泡を噴く酒と柳之助の顔とを等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて柳之助はおれの手許を見い、葉山の顔を眺める。
 「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い壺で酌をすることは出来ないよ云ふ事を知つてゐるぢ

「あ、居らん、妻は居らん。」
 と好い香のする手巾を把つて、柳之助はさしぐむ涙を拭ふ。
 「然しね。」と葉山は又言出すと、
 「然し、居らんやうな心地はせんよ、死んだとは思はれんよ。」
 「それは尤だ。然し……」
 「何故死んだかと思ふと、妻は實際僕を愛して居らんかつたかと思ふよ。」
 「無理な事があるものか。」
 「あ、それは無理かも知れぬ、無理だらう、無理だつた、全く無理だつた。」
 彼は最愛の妻の氣に陥つた事を不圖言つて、その不機嫌を見て、遂に執成すやうに、詫でもするやうに、類に願つた、固より無理など言ふ意ではなかつた、思餘つて不知口走つたのであるが、無理と尤められて見れば、無理であるところ着いたので、すると、(類さん)の熱然とした面影が胸に浮むのである。最愛の妻の面影は始終眼前には隠れてゐるが、それが忽ち不興の色をして怨めしうに視たのである。
 柳之助は済まぬと思つた、無理である、と類に詫びた。けれども心が落着かぬ、即ち幻の面影は其色を釋かぬのである。耐りかねて柳

「あ、居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤獨だ。」
 盃を差して置きながら、酌をするのは忘れて、蒲團に顔を抑付けて柳之助は又鬱ぎ出す。感ひ合手になつてゐたら、編々思出させるばかりと、葉山は不如願弄して了ふ氣で、
 「おい御酌は？」
 「や、忘れた。」
 と慌忙しく壺を取つて注ぐと、たらりと一盃ほど。兩個は思はず顔を見合せる。
 「何だ、壺が違つてゐるよ。」
 柳之助は済したもので壺を替へて酌をする。滾々と出る酒を見ながら葉山は少しく笑を帯びて、
 「有る酒ならば思つて出る、ねえ見。」
 と泡を噴く酒と柳之助の顔とを等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて柳之助はおれの手許を見い、葉山の顔を眺める。
 「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い壺で酌をすることは出来ないよ云ふ事を知つてゐるぢ

「あ、居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤獨だ。」
 盃を差して置きながら、酌をするのは忘れて、蒲團に顔を抑付けて柳之助は又鬱ぎ出す。感ひ合手になつてゐたら、編々思出させるばかりと、葉山は不如願弄して了ふ氣で、
 「おい御酌は？」
 「や、忘れた。」
 と慌忙しく壺を取つて注ぐと、たらりと一盃ほど。兩個は思はず顔を見合せる。
 「何だ、壺が違つてゐるよ。」
 柳之助は済したもので壺を替へて酌をする。滾々と出る酒を見ながら葉山は少しく笑を帯びて、
 「有る酒ならば思つて出る、ねえ見。」
 と泡を噴く酒と柳之助の顔とを等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて柳之助はおれの手許を見い、葉山の顔を眺める。
 「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い壺で酌をすることは出来ないよ云ふ事を知つてゐるぢ

「それが、……」
 と柳之助は怪訝な顔をする。
 「それがさ、無い酒も、亡い人も同じ事だらう。だから、餘り然う快々思はないが可いと云ふのさ。」
 と一口附けて、
 「肴をくれたまへな、その鶏子を。君が手づから割ってくれるのさ。」
 「一つ取つて皿の縁へ抵てやうとして、柳之助は一寸控へた。」
 「何を考へてゐるのだ。」
 「僕は今日から精進なんだからな。」
 「君は精進でも、私が戴くのだから可からう。然し精進は解つたが、今日からとは解せないね、今日からとは如何いふ理だ。」
 「もう可いよ、可いよ。」
 と一思に劈然と皿の縁へ打着ける。
 「然うだ、然うだ。下地を注いで、あつ、那處に注いで……如何するのだ。さあ、此方へ貸した。鶏子をもう一個……辛さうだから堪めるのさ。それから盆を、後が箸だ。」
 葉山は之を楯の上で好いやうに撥ねつけるのを、凝然と視てゐたが、
 「君は好いな、一寸那處でも上手にやる。僕

は全く出来んのだ。悉皆妻にしてもらつたのだ。その妻がもう居らんのだ。吁、困つたなあ。」
 口頭に出したのは縁に如此耳であるが、胸の中には千萬無量の思が紛亂したので、彼は蒲團に顔を押着け、擦着けて悶えた。
 葉山は餘りの様子に手を着けかねて、姑く黙つて視てゐると、柳之助は急に顔を擧げなかつた。いつまでも視てゐれば、いつまでも擧げぬので、
 「其話は止すと云つたぢやないか。」
 それでも柳之助は仍顔を擧げぬ。
 「さあ、もう好加減にしないかよ。」
 と肩先を軽く掛け、やう／＼擧げた顔は、洗つたやうに涙に濡されてゐる。
 「如何かならんかな。僕はもう耐らん不愉快で。這處不愉快な事は無い。如何しても慰められん不愉快だ。僕は今迄は甚處不愉快な事があつても、妻の爲に慰められたのだ。僕は其妻を亡つて了つた。今朝葬儀をしたのだ。實に君、夢だね、赤土の土饅頭に一本の墓標が立つとるばかりで、雨が泣しく降つとるのだ。君、之を見てくれたまへ。」
 柳之助の相の手 中で半面を掩へながら、柳之助

は本箱の上にある雲州産の小さな雲形の一輪挿を指す。葉山は見た。葉山は山茶花の半開が輪挿向になつて挿してある。
 「君、是だよ。」
 と柳之助は火燧から這出て、横向になつてゐるのを正面に正さうとしたが、枝が曲つてゐるので、如何しても外方へ振つて了。花入の方でやう／＼動揺をして此方を向かせて、
 「この山茶花だよ、好いだらう。」
 何が好いのか、葉山には少しも解らぬ。
 「君、好いだらう、好いと言つてやつてくれ給へ。」
 「又思出したのかい。」
 困り果てた所爲事無しに葉山は夢酒を飲む。
 「妻は一體賑かなのが好きだつたに、寂しい森の中で雨に降られて、唯一人埋まつとるぢやないか。僕は實に胸が一杯になつて如何することも出来んかつた。而すると、姻家の母がね、此花を見付けて僕に教へたのだ。皿の隅を見ると、此花が唯一咲いてゐるのだね、君、其木に唯一咲なのだよ。母が言ふには、是は親の魂だ。親の思が遺つて花になつて咲いたのだ。親の大好の長襟袴には山茶花の模様が着いとつたから、是は親の魂に違無い、と言つて泣くのだ。僕

も見ると、丁度此方に向けて此花が咲いてゐるのだ。變な事を言ふやうだけれど、其時は此花が實際類の顔に見えたよ。風が来て動くのだ、類が薬を飲むのは否だと言つてね、首を掉つたやうだつた。僕は其時は妻が復活つたのかと思つた。考へて見れば妻は僕等の脚の下に埋まつとるのだ、是は山茶花なのだ。妻の母は紙を出して、泣きながら此花を拭いてゐるのだ。何を爲るのかと聞いたら、君、親子だね……」
 柳之助は明返つて語が續かぬ葉山は茫然酒を飲むのである。
 「母親の言ふには、雨が灑つて冷たさうだから少し拭いてやる、と君、自分の濡れるのも知らずに熱心に拭いてやつとるぢやないか。而して此花を全然鼻紙で裏むで了つた。那處事をするものだから僕は猶悲しい、這處所に獨で置くのは可哀さうだから、内へ持つて行かうと言ふと、それぢや一緒に連れて行つてくれれば、折つて僕に渡したのだ。君、此花だよ、あゝ、君の方を向いとるよ。」

柳之助は壁に頭を推當て、泣出した。餘り愚痴とは思ひながら、浸々哀に掻口説かれて、葉山も誘はれ氣味の稍胸通る。
 「もう言はないが可い、いつまで言つたつて所

と鼻聲になつて顔を推廻す。
 「言はしてくれたまへ。言はずに思つとるのはなほ不愉快だ。言つとれば多少氣が解れるから。」
 「それぢや此方が窮るよ。」
 「君は窮つたつて、僕が窮つとるほど窮りはすまい。」
 と柳之助は涙を拂つて問懸ける。
 「然うどうも理窟を言はれちや困るね。」
 「然し、君は僕が這處に思つとるのに、少しも僕を可哀だと思つてくれんのだ。君は平氣でゐるのだ。妻は君を見のやうに思つとつたのに、君は類が亡くなつても、悲しいとも何とも思つてくれんのだ。君は然云ふ不實な人物とは思はんだつた。類の爲に眞實泣くものは、類の母親と僕と二人限だ。君は類の死んだのを悲しいと思つてくれんかね、僕は悲しい、這處悲しいことは覺えない。」
 柳之助は溜々と泣く。其體は如何にも可哀であるが、葉山は寧ろ首を傾けた。ちと逆上てるものではあるまいかと考へると、誘はれた涙は過つて、葉山は慄然としたのである。
 「それぢや如何すれば可いのさ。もう其話は止

「え、もう、何方でも宜しきやうに願ひませう。」
 と言つた限で、其後は柳之助が何と言はうが、見向きもせず、くびりくびりと獨飲むのである。柳之助は「と思つて、
 「君、腹を立つたのか。」
 葉山は坦然として、
 「あゝ腹を立つたよ。」
 「僕は言過ぎたかね。」
 「あゝ言過ぎたよ。」
 「免してくれ給へ、ねえ。」
 彼は無難に例の子供のやうに過を悔ゆる。
 「宜い、君は僕を不實だと言ひました。」
 「だから言過ぎたと言つて謝るのだ、免してくれ給へ。」
 「君は成程細君は可愛けれど、朋友などの事は何とも思はないのだね。宜い、解つた。」
 「那摩事があるものか、那摩事は無い。」
 「それなら朋友の言ふ事も用ゐたが可いぢやないか。」
 「無論用ゐるさ。」
 「用ゐるね。屹度用ゐるね。」
 餘り念を推れるので、如何なる事かと柳之助は覺束なく思ひながら、

「用ゐる。用ゐる。」
 と言ひは言つたが、さて何を言はれるか、と氣遣はしげに葉山の顔を見てゐる。
 「外の事でもないがね、内にばかり引込むのであるのは好くないから、本當にちと出掛けたまへ。」
 「何處へ？」
 「まづ學校へ行くのは一番好いが……。」
 「未だ腹が亂れとるから、それは可かんよ。」
 「それでは、僕の家へ来たまへ、遊びに来るのだ。御馳走するよ。出掛けた方が氣が舞れて甚麼に好いか知れやしない。氣も進まなからうけれど、まあ購されたと思つて来て見給へよ。屹と来、かい、宜い、来、来、来。」
 柳之助は熱と思案してゐる。
 「如何したのさ。別に考へるほどの事は無からうぢやないか。内に引込むよりは氣が舞れるよ。明日は休日、私も一日内に居るから、朝から来たまへ。何を那摩に考へてゐるのだらう。」
 太く考へてゐるのが葉山には解らなかつた。尤も何事にも直に考へるのが此人の癖ではあるが、己を信ずる唯一人の葉山の云ふ事は、常に自分の了簡よりも信ずるほどであるから、葉山に於ては、

山が右といへば右、左といへば左、つい應と言はぬことは無いのである。今日に限つて、何か考へるにも當らぬ事を太く考へる。なるほど葉山には解らなかつた。
 けれども、是は仔細も無い事で、例の細君の死を悲む餘、何を爲すのも氣が無いので、外へも出たくはないのであらう、と悠々判じたから、猶更勤めて、否應無しに引出さうと考へたのである。
 利發の葉山も是ばかりは踏違へてゐた。なるほど柳之助は何を爲すのも憂いのである。外へ出る氣も無いのである。然し、彼はその最愛の妻を亡つた、女に於ける唯一人の所好を無したのであれば、此上は其心を慰むるには、男に於ける唯一人の所好を慰まねばならぬ、その葉山が深切に云ふ事は、如何にしても背から道理が無い。葉山が強ひて言ふならば、随分學校へも出るのである。掃蕩とならば葉山と連立つて何處へでも行くのである。
 然し、葉山の家へばかりは、柳之助の思案する理がある。それは自分と地下の類との他に知るものはない。さすがの葉山も之を知らぬ。知らぬのではない、知らせぬこと出ぬのである。
 であるから憚るのであるが、葉山は然うとは知らぬから、此男の癖で、我妻も此人には他人であるとして、格別尤もせぬのであるが、榮んぞ知らむ、多くの他人よりも此お種様を彼は一倍好かぬのである。
 常ならば柳之助の言はるゝまゝに出掛けるのである。今は此悲哀熱熱の心を枉げて、蟲の好かぬ人の所へ行かうとは思はなかつた。けれども葉山は常より熱心に誘ふ。因で柳之助は思案に晦れたのである。
 段々責められて見ると、如何あつても否むべき理が無いので、進まぬながらも柳之助は承知をした。其を機に葉山は起たうとする。柳之助は如何しても還さぬ。切つて還ると言へば、出さうな顔をして寂しがる。其をば捨て、還るも無毒さに、出た火燧へ又入る。又有間して又還ると言へば又引留める。葉山は停はずに二度まで引留められた。三度四度と大概三十分毎に還らうとすれば、斟酌無しに柳之助は左右放さうとせぬ。到頭九時になる。此分では十時が十一時になつても放すまいと察したので、葉山は酒がもつと欲いと言出した。柳之助は早速注文通り日本酒を取寄せて出すと、葉山は飲むで差し、飲むで差し、無性に差した。

知られては一大事なのである。
 我家へ来いと切に勸めらるゝのは、恰も此知られては一大事と衝突したので、何事にも直に考へる柳之助は、此際太く考へねばならぬのである。と云ふのは、柳之助は葉山の内容が大の嫌で、彼は固より多数の人を蟲が好かぬその中でも、最も好いてゐる人の妻を最も好かぬのである。其好かぬと云ふに就ては、何等の原因も理由も無い、其處が所謂蟲が好かぬので。自分の兄とも頼む人の内容、其を好かぬではならぬ。と柳之助は常に考へる。それで、先方から己を疎みでもするのかと云へば、氣も無い、葉山同様其を盡してくる。其人をば何故に自分は嫌ふのか、と柳之助は始終心に訊ねて見るが、一向理由は無い。
 葉山の内容と云ふのは、美人ではないが、目鼻立の揃つた、色白の身材の纖削とした、閑雅な、奥様らしい様子の人物。若し其短所を挙げたらば、少し寂しくて、無人相で、何を爲るにも極めて不熱心のやうに見える。然かと云つて萬更義務でしてゐるとも見えぬが、進むで爲てゐるとは猶のこと見えぬ。萬事が機械的で、酌致といふものが無い。恰も其容貌の整つてゐながら何の趣も無いのと、能く一致してゐる。

「用ゐる。用ゐる。」
 と言ひは言つたが、さて何を言はれるか、と氣遣はしげに葉山の顔を見てゐる。
 「外の事でもないがね、内にばかり引込むのであるのは好くないから、本當にちと出掛けたまへ。」
 「何處へ？」
 「まづ學校へ行くのは一番好いが……。」
 「未だ腹が亂れとるから、それは可かんよ。」
 「それでは、僕の家へ来たまへ、遊びに来るのだ。御馳走するよ。出掛けた方が氣が舞れて甚麼に好いか知れやしない。氣も進まなからうけれど、まあ購されたと思つて来て見給へよ。屹と来、かい、宜い、来、来、来。」
 柳之助は熱と思案してゐる。
 「如何したのさ。別に考へるほどの事は無からうぢやないか。内に引込むよりは氣が舞れるよ。明日は休日、私も一日内に居るから、朝から来たまへ。何を那摩に考へてゐるのだらう。」
 太く考へてゐるのが葉山には解らなかつた。尤も何事にも直に考へるのが此人の癖ではあるが、己を信ずる唯一人の葉山の云ふ事は、常に自分の了簡よりも信ずるほどであるから、葉山に於ては、

山が右といへば右、左といへば左、つい應と言はぬことは無いのである。今日に限つて、何か考へるにも當らぬ事を太く考へる。なるほど葉山には解らなかつた。
 けれども、是は仔細も無い事で、例の細君の死を悲む餘、何を爲すのも氣が無いので、外へも出たくはないのであらう、と悠々判じたから、猶更勤めて、否應無しに引出さうと考へたのである。
 利發の葉山も是ばかりは踏違へてゐた。なるほど柳之助は何を爲すのも憂いのである。外へ出る氣も無いのである。然し、彼はその最愛の妻を亡つた、女に於ける唯一人の所好を無したのであれば、此上は其心を慰むるには、男に於ける唯一人の所好を慰まねばならぬ、その葉山が深切に云ふ事は、如何にしても背から道理が無い。葉山が強ひて言ふならば、随分學校へも出るのである。掃蕩とならば葉山と連立つて何處へでも行くのである。
 然し、葉山の家へばかりは、柳之助の思案する理がある。それは自分と地下の類との他に知るものはない。さすがの葉山も之を知らぬ。知らぬのではない、知らせぬこと出ぬのである。
 であるから憚るのであるが、葉山は然うとは知らぬから、此男の癖で、我妻も此人には他人であるとして、格別尤もせぬのであるが、榮んぞ知らむ、多くの他人よりも此お種様を彼は一倍好かぬのである。
 常ならば柳之助の言はるゝまゝに出掛けるのである。今は此悲哀熱熱の心を枉げて、蟲の好かぬ人の所へ行かうとは思はなかつた。けれども葉山は常より熱心に誘ふ。因で柳之助は思案に晦れたのである。
 段々責められて見ると、如何あつても否むべき理が無いので、進まぬながらも柳之助は承知をした。其を機に葉山は起たうとする。柳之助は如何しても還さぬ。切つて還ると言へば、出さうな顔をして寂しがる。其をば捨て、還るも無毒さに、出た火燧へ又入る。又有間して又還ると言へば又引留める。葉山は停はずに二度まで引留められた。三度四度と大概三十分毎に還らうとすれば、斟酌無しに柳之助は左右放さうとせぬ。到頭九時になる。此分では十時が十一時になつても放すまいと察したので、葉山は酒がもつと欲いと言出した。柳之助は早速注文通り日本酒を取寄せて出すと、葉山は飲むで差し、飲むで差し、無性に差した。

Yith

「僕は然うは飲めんと、迷惑するよ。到底君の敵手は出来んのだから……」

と後には柳之助も猪口を取らぬ様にすると、「敵手が無くちや旨くないね。君も獨は寂しいと云つて、僕を引留めたらう。寂しいのは、君ばかりぢやない、獨酌も寂しい。君が敵手をしてくれなければもう御暇だ。」

葉山は直に起ちかけるので、然うは飲めぬながら、還られるのが否さに、受ける。知らず識らず酔が廻れば、體が怠くなつて、柳之助は其處に横仆になると、忽ち積日の疲勞が發して、前後不覺の高軒で、ぐつすりと寐入つて了ふ。

葉山も麥酒の地下に二合未滿も入れたから、大分酩酊の状態で、柳之助の寐入るのを呼びもせずに見てゐたが、竟に軒を揺始めたのを聞いて面白さうに笑つた。

「やあ、到頭盛潰して遣つた。あ、能く寐た。寐るが好い。悠云ふ時は十分に寐て腦を休めるが何よりだ。」

葉山は火鍵浦圍を刺いで、柳之助に被けて、「俺ぢや不足だらう。酔の假寐に何か被けて遣ると云ふのは、朋友の所作ぢやない、俺の爲る事ぢやないが、俺が爲なけりや外に爲るものは無い、嘯、驚見。」

「あ、能く寐てゐる。此贏れた顔を見ると、不便でならない。今に目を覺したら、又泣くのだ。ぢや、もう歸るよ、明日待つてゐるよ。」

立起らうとすれば、本箱の上の山茶花に目が着く、葉山は悚然として寒くなつた。燈影の微昏い所に赤い花の此方を向いた状態は、心ありげに首を延して覗いてゐるやうに見ゆる。葉山は突立つたまゝ其花を睨と視てゐたが、白縮緬の袴巻の端を引出して、窺と目を拭いて、其花入を柳之助の枕頭に直して、

「膝枕だ、膝枕だ。それぢや、然やうなら。」

と言つたが、不思議にも其は彼が常にお類に挨拶をする調子であつた。

三の一

夜露の空は殊更朗に、澄徹るばかりで、習習との風も無ければ、暖さも暖い。肘掛窓の障子越し一面の日影を背負つて、葉山は今朝飯が済むだと云ふ體で、小楊枝を用ひながら新聞を讀むのである。傍には昔癖の赤本やら、鐵葉の喇叭やら、首の無い木馬やら、漆粉細工の鼠が轉げて、ビスケットの食餘が放散飛して、はや男の子が遊したと見ゆる光景。

徐に襖を啓けて入つて来るものがあるので、

いや、成程疲れた！ 煙が滅けて、日も沈むだ。思へば可哀さうなものだ。くの字状になつて手枕をして、座敷の隅に轉つてゐる工合は、如何しても獨身者だ。細君が亡なつたら何と無く急に不潔なつたよ。可哀さうに、憂身を嘗してゐる。」

這慶事を考へながら、葉山は悄然と火鍵浦に倚懸つてゐた。時雨は蕭々と、黒い風の隙洩るにつれて、身軀の出るほど寂寥は外から逼つて来る。其中で老婢が沈むだ／＼聲して方便品を讀む。

「元は感心に同向をしてゐる。あゝ哀だ。且那殿は高軒で寐てござる。實に老少不定だなあ！ 悠う酒などが出てゐると、細君が居ないとは思はれない。俺でさへ然う思ふのだから、驚見が寂しがりのも無理は無いか。」

細君巧くないのに料理自慢だつて、俺の顔さへ見りや、飯を食つて行け、飯を食つて行けが病だつた。一度御世辭に茄子の鳴焼を買めたら、それから毎歲茄子が出るよ、鳴焼の御招待だつて。且那殿が體論御使者に立つて、今日は君種々御馳走が出来るよ、も罪が無くても可笑かつた。もう來年から彼鳴焼も食へないと思ふと、好い心地はしないものだ。いや未だ有つ

葉山は俯いたまゝ、

「おい面白い事があるぜ。難有い、難有い。」

と獨り悦に入つて顔を拵くと、

「何だ。」

と微嗶聲をして、寄つて来て覗く所を、顔を取れば、細君と思ひきや、大違の親人。

「おや、御父様。」

と少しく狼狽する。

「何がそんなに難有い事があるえ。」

と親人は益々新聞を覗き込む。

「何有、難有いと思つたら、何でもなかつたのでした。」

「然か、大層おもしろさうだつたから。」

と其なりにして、親人は何を取りに來たのか持つて行くものを持つて、出て行く。迹に葉山は吃々笑ひながら、

「昨夜は懇談で、今朝は御茶番だ。今度御父様！と言ふと、噂左衛門が顯れるのだから。」

「何を笑つて御在なされる。」

と果してお種が入つて来る。

「それ御覽じろ。」

「何でございます。」

と眞面目で長火鉢の前に坐る。

是が柳之助の蟲の好かぬと云ふ人で、年紀は

た、細君得意の早敷物——魚煎餅に薄汁昆布と云ふので、毎々察せられたよ。當面今晩あたりは、何もございませんでと云ふので、例の金の網の青漆の桶が出る所だ。あゝ又かと思ふやうだつたが、其人が居なくなつて見れば、不味い物も懐しい。果然、いや、果然、氣が着かなかつたが、今日は俺の(所好な)猪口が出てゐない。貴方は奇つてゐらつしやるからと云つて、變に歪むだ、踏潰したやうな、赤染の氣障き加減の耐らない猪口を出してくれたつて、是は貴方だ。と云つて弄讀半分始終出した、彼奴が出てゐない。何だか勝手な奴と思つた。一寸した事が既に悠うだ、驚見の寂しがりのは無理も無い。俺でさへ徳出すと好い心持はしない。」

葉山ははたりと膝に涙を零した。

「懇意にしたものゝ居なくなるのは心細いものだ。俺も來ちや内のやうに我儘を言つたつて。昨日まで赤い手絡を掛けて大きな圓盤に結つて嬉しがつてゐた人は、もう佛様になつて了つたのかい。」

彼は目を連踏いて、涙を吸つた。

「どれ細君でも供けて、御暇としやうか。」

葉山は枕頭に近くあつたらアブを遠く離して、

お種は例のうら後に出ずに、清して茶を注ぐ。葉山は寝癖びながら其湯呑を受取つて、熱と考へてゐる體であつたが、

「然し、可哀さうな事をしたよ。」と憐さうに太息を吐く。

「何がです？」とお種は有聲に訊ねる。

「お類さんよ。鷺見が可哀さうだ。目も當てられない。」と益、昨夜を思出す。

「鷺見さんぢや然でせう。珍しい寶のある方ですわね。」

「お類様の事を言出しちや泣くのだらう、氣でも遣はなけりや可いと思ふやうさ。那も熱しいものかな。」

「それが本當の夫婦の情合なのでせう。」此語を聞くと齊しく葉山は遽然と首を擧げた。

「而すると假の夫婦の情合と云ふのがあると見えるな。」

「まあ、有りませう。」

「まあ、有る？」と葉山は細君の顔を見て、「乃公なんぞは何方だ。本當の口か(まあ)の口かな。」

「道徳費辯を吐くのは、細君は煩くてならぬのである。何故に己の夫は堂々たる男子であり

一家の主人であり、保の父でありながら、焦云ふ愚にも付かぬ事を言つて喜むてゐるのか、と其が始終氣に済まぬ。

男子はおのれの父親のやうに、他くまで眞面目に、何十年にも足を一つ投出した事は無く、可憐な顔をして、威厳を保つべき者と信じてゐる。既に父親が然である。致くなつた兄も然であつた。來る客も知る人も皆其通であつた。傍へ寄りでもしたら睨まれはせぬかと想はるゝやうなのが男子、と心に極めてゐたのである。

然るに己の夫は道徳であるのを、當は可憐しく思つてゐるものゝ、口に出して意見がましい事は出来なかつた。能はざるにあらず爲ざるなりで、自分は母親の父親に對して神に仕へるやうに恭順であるのを見てゐた。人の妻たるものは徳くあれよと、両親の語聞かせる所は、恰も母親の行に符合してゐた。其をお種は他くまで手本にしてゐるから、夫は夫たらずとも、妻は妻たる本分を守らねばならぬ、と了簡してゐるので。然かと云つて、微塵も夫を嫌つてゐるのではない。寧ろ自分の方が眞に惚勝つてゐるので、唯此費辯と眞面目でないの二件は、牛肉は所好であるが膏肉は所惡であると云ふがらゐる所である。故にお種は務めて

か、お種は不憚な色をして暫と夫を見ると、「その代心で泣いてやる。」と直言つて除けて、獨り面白さうに笑ふ。

「泣かない方が本當です。」とお種は極めて熱心に言ふ。

「然らうか。」と葉山は些と案外であつた。

「泣くなんて……。」と益熱心に細君は吐く。是は變だ、と葉山は容喙さすにゐると、

「本當に那腹様子なですか。」

「心あり氣にお種は念を推した。」

「(本當)の好きな人だな、本當なら如何するのだ。」

細君は俯いて黙と考へる。

「本當なら考へるのか。」

「那腹事があるものでせうか。」

と力を入れて訊ねる。

「現在有るぢやないか。」

と言はれて見れば、如何にも現在有るのだが、その現在有るのが不思議でならぬ、と云はぬばかりにお種は考へ込むてゐたが、

「餘りのやうですわね。」と言出した。

「焦云ふ事は希しいので、此細君が話に身を入れると云ふのは、例が少いのであるのに、今日

此膏肉を避けてゐる。避ける爲に自分は益眞面目になるので、餘り眞面目ゆゑ、夫は些と採むてやらうで、彌氣輕にする。因で相去ることは益、遠くなる。

又出たと思ふと、細君は始の内は好加減に遇つてゐて、それでも止まぬ時には黙つて了ふ。すると葉山も張合が無きに、遂には店を仕舞ふと云ふので、毎も落着する。

もはや奥の手の無挨拶を始めても可いのであるが、如何にも聞きたいのは柳之助の事、彼の平生細君を大事にするのは親しく見聞する所であつた。その人がその人を喪つたのであるから、甚だ哀悼をしてゐるであらうとは、女の身にしては最も聞きたい所。

「それよりは、鷺見様は甚だ様子でした。本當に那腹に泣いて御在でしたか。」

「まあ今に來るから見な、可哀さうに瘦殺けて了つた。」

「お瘦せなすつて？」とお種は眉を擡める。

「生きてゐる効が無いなんぞと言つてゐるのだ、あゝでも窮つて了ふ。」

「生きゐる効が無い？」と彌眉を擡める。

お種は例に無く進むて種々の事を訊ねるので葉山も詳々昨夜の様子を話して聞かせた。

「まあ、然でございませう。」

「可いぢやないか、結構な事ぢやないか。(女房に惚れて家内安全)といふ言がある。」

例の口吻は又費辯を始めると見て、

「いゝえ、其事ぢやありません。お類さんのお物故なすつたのを、餘り大騒をなすり過ぎるやうぢやございませぬか、私は然う思ひます。男子と云ふものは那腹に女々しいものぢやありませんまい。」

「女々しいと云へば女々しいけれど、情合が深いのぢやないか。お類さんの身になつたら甚だに嬉しいか知れやしない。」

「嬉しくはありません、否な事です。」

と横を向いて、鐵瓶の蓋の埃を吹く。

「これは可笑いね、お前が否だつて、お類さんは如何だか解るものか。」

細君は此方に向けて、

「お類さんも始終然言つて御在でしたよ。」

「何と言つてゐた。」と葉山は起る。

「お類さんよ。鷺見が可哀さうだ。目も當てられない。」と益、昨夜を思出す。

「鷺見さんぢや然でせう。珍しい寶のある方ですわね。」

「お類様の事を言出しちや泣くのだらう、氣でも遣はなけりや可いと思ふやうさ。那も熱しいものかな。」

「それが本當の夫婦の情合なのでせう。」此語を聞くと齊しく葉山は遽然と首を擧げた。

「而すると假の夫婦の情合と云ふのがあると見えるな。」

「まあ、有りませう。」

「まあ、有る？」と葉山は細君の顔を見て、「乃公なんぞは何方だ。本當の口か(まあ)の口かな。」

「道徳費辯を吐くのは、細君は煩くてならぬのである。何故に己の夫は堂々たる男子であり

言はなければ可かつた、と心を叱つてゐるやうに、細君は慎重なつて火鉢の縁を拭いてゐる。答がないので、葉山は又訊ねたが、猶且答は無い。

「お前なんぞは寄ると亭主の譏訴だらう。」
布巾を投げてお種は屹となる。

「お前事を、あなた。」

「然だよ。お類さんなんぞも大方、内のは煩いとか、お種にやい／＼言はれるのも迷惑だとか、傍にばかり居られるので鬱々するとか、……。」

「お前事を、あなた。」

「好きな事を言つてゐたのだらう。だから女は罪が深いと云ふのだ。男があればほどに思ふのは大抵の事ぢやありません。七人の子を成すとも女に心を許すな。直に増長する奴だから始末に可けない。白い歯は見せられません。」

「それは女ばかりが悪いのぢやありません。」

「それぢや男が可愛がるのが悪いのか。」

「其も可うございませう。可うございませうけれど程度があります。男は何處までも男らしく。失禮な事を言ふやうですが、鷺見さんのやうぢや……。」

後には有聲に言ふを憚つたのである。

葉山は冷笑をして、

「お前は昔氣質だからお前事を言つてゐるのだ。此頃は夫婦の情合の深いのと、綾羅紗の合羽が流行るのだから爲方が無いよ。」

「昔氣質ですから、私は流行物は嫌ひ。」

「では致方が無い。實は一昨日綾羅紗の變で好いのを見たから、お種を拵へてやらうと思つたが、然うかい、お嫌かい、あゝ残念な！」

「餘り空々しきにお種は苦笑をしたばかりで、更に對手にならぬ。葉山はごろりと轉側をして天井を仰ぎながら、

「情合が深ければ、深いで増長するし、薄情なら恨むだらうし、浮氣だつたら焼くだらう、亭主となるのも難しいものよ。」

言終つて俄然たりしが、後は黙となる。

お種は所謂しんねりむつりであるから、何日にも御含むことは無い、かはりに、飽倦むだ様子の見えることも絶えて無い。端然と坐つて煙草は嫌ひ、茶は嗜まずで、唯閑雅に芝居の御臺所のやうに構へてゐる。言の葉の性であるから、思ふ事は半分も言へぬ、まして之は他の陰言であれば、飽くまで憚むのであるが、心の中では、鷺見の女々しさを反復々々非難して、見下げ果てた人物だと迄に愛想を盡してゐる。

「お前は昔氣質だからお前事を言つてゐるのだ。此頃は夫婦の情合の深いのと、綾羅紗の合羽が流行るのだから爲方が無いよ。」

自分が葉山ならば、叱咤してやるのにと思つた。又其平生から考へたら叱咤けさうなものを、何故叱りもせぬのであらう。一縷になつて可哀だ、不便だと言ふのは、例の夫にも似合はぬ事と思つた。男子たるものが、如何に悲しいと云つて、十日も十五日も絶つのに、今でも死なつたやうに、それも獨隠れて泣くことか、他を捉へて復らぬ事を繰返して立てるとは、それでも男子か意氣地の無い事だ、恥を知らないと謂ふものだ、とお種は徹頭徹尾不承知である。其に悪いでは、夫も同じ意氣の如何にしても分らなかつた。

此(想ふだけ)の容を葉山は黙つて見てゐたが、少し寂しくなつたので、

「太く考へ込むぢやないか。」

挨拶の毎も緩漫としてゐるお種は、言を練つてでも出すやうに、口を開かうとする時、婢が

「ばた／＼と駈けて来て、餘り機むで、丁と一つ紙門に抵つて、それに懲りたか、悪く徐に啓けると、且那に譴責を載いて、はつと思ふと、駈付けて来たほどの用事を忘れて、顔を發赤にして、やう／＼「あの……。」と言出す途端に、「葉山、葉山」と二階で聲がする。

「あの鷺見さんが御出になりました。」

と面目を失つた婢は倉皇に逃げて行く。

「あゝ、鷺見が来たか。でも能く来たな。」

三〇二

鷺見は二階ある二階の奥の主の居間に、蠟塗の臺子火鉢の火の無いの、前に、腰潰れたやうに壁に靠れて、袴袴の衣兜に兩手を入れて、毎見ても讀めぬ千萬葉集假名の額を、別に讀まうでもなく惘然として見てゐると、葉山は昇つて来て、

「如何したい、昨夜は、好く眠られたらう。」

「大きに失敬した。」

と氣の重い顔をして、猶且潰れたまゝの仕居である。黒縁のモノニングに藍氣鼠の綾の袴袴、紺通縷の外袴の下と釣合はぬほど新しいのを着て、埃だらけの黒の帽子を稍後低に冠つたまゝ。

「何だ、學校へ出る装束ぢやないか。」

「あゝ今朝草詣に行つて来た。」

「その歸路かね。」

柳之助は頷く。葉山は背後の茶棚から夕顔の烏府を出して、火鉢の灰を平してゐると、婢が裏十能に火を持つて来る。柳之助は外袴の衣兜からピンヘッドを取出したが、まづ例の中輪を引抜いて、自分で一寸見て、

「君、之を見たまへ。」

「何だい？ 是が如何したのだ。」

「まあ能く見てくれたまへ。」と押付に手渡す。頼まれた通り葉山は手に取つて能く見たが、別條は無い！ 其輪はヒンドスタンの婦女が餅のやうな物を入れた盃を抱へて、其一枚を片手に拵けてゐる立姿である。

「能く見て、如何するのさ。」

「解らんかな、能く見たまへな。」

と其輪を覗込むで、後は葉山の顔を眺める。未だ解らぬか、葉山は輪探でも見るやうに、右

「何だ、學校へ出る装束ぢやないか。」
「あゝ今朝草詣に行つて来た。」
「その歸路かね。」
柳之助は頷く。葉山は背後の茶棚から夕顔の烏府を出して、火鉢の灰を平してゐると、婢が裏十能に火を持つて来る。柳之助は外袴の衣兜からピンヘッドを取出したが、まづ例の中輪を引抜いて、自分で一寸見て、
「君、之を見たまへ。」
「何だい？ 是が如何したのだ。」
「まあ能く見てくれたまへ。」と押付に手渡す。頼まれた通り葉山は手に取つて能く見たが、別條は無い！ 其輪はヒンドスタンの婦女が餅のやうな物を入れた盃を抱へて、其一枚を片手に拵けてゐる立姿である。
「能く見て、如何するのさ。」
「解らんかな、能く見たまへな。」
と其輪を覗込むで、後は葉山の顔を眺める。未だ解らぬか、葉山は輪探でも見るやうに、右

さま左さま見てゐるのを、柳之助は堪へかねて、

「背とるぢやないか。」

「誰に？」

「解らんかな、妻にさ、死んだ類にさ。」

と引手繰つて、肥と見る。

「背てゐるものか。」

と憎れた事とて葉山は呆れもせず、

「氣の迷だよ。」と言つて聞かせる。

柳之助は頷いて首を掉つて、

「いや、背とるよ。背とるとも。あゝ背とる。餘程背とるぢやないか。」

肥と覗てゐながら次第に其輪の中へ覗込まれさうな様子。

「何が背てゐるものか。日本人とヒンドスタニイほど差ふよ。」

「背てをらぬ？ 善」と言ふと、上衣の内衣兜に手を差入れた。何を出すかと思へば、紙に包むだ角な物を、披けば中は細君の寫眞！ 鳥田のは見合の時の、東樂と銀杏返と圓盤とので都合四枚。

「見たまへ、背とるから。」

と其處に並べたのである。

之には葉山も少し驚かされた。何を言ふにも此爲算であるから、背はぬが可からうと、故

「何が背てゐるものか。日本人とヒンドスタニイほど差ふよ。」
「背てをらぬ？ 善」と言ふと、上衣の内衣兜に手を差入れた。何を出すかと思へば、紙に包むだ角な物を、披けば中は細君の寫眞！ 鳥田のは見合の時の、東樂と銀杏返と圓盤とので都合四枚。
「見たまへ、背とるから。」
と其處に並べたのである。
之には葉山も少し驚かされた。何を言ふにも此爲算であるから、背はぬが可からうと、故

と眞事に繪と比較べて、
「然云へば骨である。一所にして置きたまへ。」
と眞と眞に紙に包むで、
「骨である。骨である。」
と勿々に返せば、それなり仕舞ふかと思ふ

「骨とるね、不思議だ。」
と又披いて有間見較べてゐたが、
「此眞は眞語に行く途で買ったのだ。」
「然かい。」と葉山は氣の無い挨拶をする。
「然すると之が入つてをったのだ。僕ははつと思つたね、路上で出會つたやうな心地がして。それから其眞屋へ、五錢の白銅を出して、銅錢は呉れて来た。」
それから歸途さ、池の端の仲町を來ると、前
面から婚禮の荷が來るのだね。那は皆青い風呂敷を被けるだらう。」
「風呂敷ぢやない、油單と云ふのだ。」
「然し、僕の所ぢや風呂敷に用つとるよ。」
葉山は思はず笑出した。
「そりや襦袢布でも西洋紙になるさ。」
「然か、油單と云ふものかね。那には紋が付いとるだらう、その紋が、妻の紋さ。」
「細君の紋は何だつたかね。」

「それ、圖に枇杷の葉が三枚、妻が能く着つた鼠色の羽織に。」
「枇杷の葉は異しいね。紋には葉も色々あるが枇杷と云ふのは無い。まあ何でも可い、細君と同じ紋か。」
「其時は實に僕は悚然としたよ。今憶出しててもあゝ寒くなる。」
柳之助は身顛して、徐に俯いた。葉山は其氣色を見て、
「もう滑稽話は止さうよ。陰氣で可けない、陰氣で。」

柳之助は猶凝然と俯いてゐる。
「これさ、又始めたよ。驚見、何だな。」
火鉢に張つてゐる背を葉山は二三度撫せば、漸く顔を擧げたが、はや兩眼の涙は溢るばかり。
「困つた人だねえ。」
と葉山はその肩を丁と打つて、
「お、僕の手巾を未だ用つてゐるのかい。否だぜ、否だぜ。」
と話を轉しにかゝる。驚見は其手巾で涙を拭いて、
「少し貸して置いてくれたまへ。僕は手巾が無いのだ。汚れたのは幾多もあるけれど、綺麗に

して置いてくれるものは無いのだから。」
何を言つても、其方へ話を引付けて了ふので、葉山は弱り果てゐる。
「餘り懐しかったから、僕は引返して其尾に追いつて行つたさ。淺草の方へ行くのだらう、停車場の側を通つて、鐵道馬車の線路の通を何處までも眞直に行つたよ。あゝ氣の毒な、あの人も今に死ぬだらう。彼荷物は何日までも遺つて、其主は直に在なくなつて了ふのだ。考へて見ると、人の命と云ふものは、實に儂い。昨日まで話をして、笑つたり、憎つたりしてゐたものが、今日は忽ち在なくなる。儂いね。呼、儂い！昨日まで陸じくしてゐたものが、もう土になつて了ふのだ。土になつて了ふのだからね、考へて見給へ、假のやうだ！妻などを有つものぢやないね、僕等を有つのは一つの悲を増すのだ、僕も妻を有たなかつたら這處思はずに済むのだ。向者のなども僕のやうな悲のあることを知らんで、結婚をするのだらう。氣の毒な！彼も今に死ぬのさ。」
葉山は思はず八の字を寄せて、
「可哀さうな道徳不祥を付けるものぢやないよ。これからお目出度いと云ふのに。」
「目出度い事は無い、僕が好い例ぢやないか。」

折から次の間に人音のするのを、柳之助は心も着かず、
「實際然だから仕方が無い。人生朝露の如しだよ、僕だつて焦して君と話をしとるけれど、これ何時死ぬか知れやせんものね。」
と言ふ時紙門が啓く。不圖見向けば、婢とばかり思ひしに、内君であるから、慌てた。彼は此時も机の横に靠れて、片手を火に煎し片手を袴袴の衣兜に入れて、窮屈に立膝してゐたのであるから、お種が馴れると與に闕越に手を支へて、辭儀をするのが唐突であつた。不意を吃ひながら、呼吸を合せなければならぬので、柳之助は周章狼狽して、膝を正すやら、机の角に背を打付けるやら、兩手を交くやら、頭を低げるやら、其邊を舐かして、辛くも挨拶をした。お種は何處までも沈着いて、

「然ぞお寂くてゐらつしやいませう。」
と兩手を膝に端然と其處に坐る。
「はあ。」と柳之助も刺膝に跏つて、屹と相對ふ。
「先日一寸上りました節は、種々御混雜の中で染々御目にも掛りませんで、甚だ失禮を致しました。」
とお種が辭儀をすれば、柳之助も同じやうに

頭を低げて、
「はあ。」
「昨晚は又遅くまで御厄介になりまして。」
「はあ。」
「何が御厄介になるものか。」
と葉山は兩箇の照隠に容喙す。
「今日は好く入らつしやいました。」
「はあ。」
「柳之助の迷惑してゐるのを、葉山は見るに見かねて、
「あゝ、もう道徳固くるしい挨拶は可止さ。今日は御馳走をする約束なのだから、何か旨い物をね。」
と細君の顔を見ると、心得て頷く。柳之助を見ると、下を向いて、窮屈さうに、手持無沙汰さうに、意見でも聽いてゐるやうな、氣の毒な恰好をして、跏つてゐる。
「おい、這樣に改まつて居なくても可いぢやないか。膝を崩さないかい、大事な袴袴が傷むよ。」
「驚見様、どうぞお樂に。」
「はあ。」
「遠慮をする事は無いぢやないか。よう、胡坐を掻き給へ。女房の二忍のは、月の末と、内を

空けた朝ばかりさ。」
「はあ。」
と上置でお種を見て、察且思つてゐる。
「それぢやお客様は私が引承けるから、お前様は御馳走の方の周旋を、此は宜しい、御隨意に御引取なさい。」
細君は一體して起つて了ふ。柳之助は跡を見送つて、吻と一息吐いたと云ふ體で、主の方に向直ると、吃未了の眞を把つて、一口煙ちして、黒々と葉山の顔を見てゐる。
「何を惘然してゐるのだ。」
「君の所には細君が居る。」
「何を行らない事を……。」
と言罷して急に笑ひながら、
「彼も何せ今に死ぬのさ！」
柳之助は忽ち座敷を向して、
「君の家は明くて可いな。」
「這處結構な御住居を譽めるのに、明くて可いとばかりは何事だらう。」
「だつて、明いぢやないか。明いから陽氣だ。僕の所は妻の居つた時は明かつたけれど、此頃は非常に暗くなつたよ。始終薄暗くてね。」
「お類様がお天道様ぢやあるまいし、形様理窟

春を伸ばしながら、
 「富士は名山だね。好い景色だ。」
 「譽めてばかり居すと、お茶代でも置いたら如何だ。」
 「始終、焦して富士を見といたら好いだらうな。」
 「終極には風を引くわね。」
 「好い！ 君の家は好いな、僕の家は可かん。焦云ふ所に居たい。」
 「居なければ、如何だい、當分來てゐては。」
 「此にか！」 と柳之助は目を腫る。
 富士の雪は好い、座敷は綺麗で、陽氣で好いが、唯一つ好くないのは、細君が居る！ その處の好かぬお種さんと同じ家に居られやうか、と柳之助は其で目を腫つたのである。とは知らぬから、葉山は定めて二つ返事の意で、
 「然うさ。」 と軽く頷く。
 今更否とも言はず、何と挨拶をしたものかと柳之助は窮つて愧じてゐる。
 「單身で焼つてゐるよりは可いよ。見たければ毎日富士を見てゐるさ。當分來てゐたら如何だ。それが可いぢやないか。」
 柳之助は益々窮る。
 「元を徹手に所帯を持つてゐる所が、一向芽え

ふ君の所好だだけ。羊羹を二杯切らずに持つて來な。」
 「安だ、安だ。もう那は行りませんよ。」
 お種の手前少く極の悪い狀で、柳之助は連に頭を掉る。
 お種は、是がお種様を慰しがつて、女々しくも二七日過ぎた今日までも諦めかねて泣く人か。と其様子をば見て見ぬ風で、なか／＼注目してゐる。
 果然腐れてゐる、色も蒼白めてゐる。可過ぎた髪は亂れて、髷鬚深い顔は汚れて、宛然病後の貌。能く視ると、内背に影が滑いて、外套の襟は雲脂を被つて、耳の根から薄皮を塗つたやうな襟頃、もう蛆が生いてゐるのか、とお種は氣の毒になつて、傍を向いて了ふ。
 「ぢや羊羹でもないのか。」
 「うむ、何も要らんよ。」
 「それぢや是で辛抱するかい。」
 「それ合ふ菓子を見せれば、」
 「それも要らんよ。」
 と氣の重さうに机に倚掛つて、又頬杖を支く。
 「太く振られたね。」
 と葉山は松風を振むで、吃驚しながら、

「ぢや菓子はいから、御馳走の支度だ。」
 其を聞くとお種は起つて、出際に又一目柳之助を見て行く。連は對座で、茶を出す、柳之助は火鉢の彼方に在る菓子を覗いて、
 「僕に一箇與れたまへ。」
 「おや！」
 「一箇！」
 「何だ、食べるのかい。」
 「食べたくなつた。」
 と翁笹を口に入れて、不味さうに咀嚼始める。
 三日三
 春日のやうに煦々と暖いのに、火鉢は在る、日照は好し、頭痛がするので、葉山は西窓の障子を取けた。
 澄渡る空は藍でも滴れさうに、何處に一點の雲も無い、唯凜然と富士の白妙は四邊を拂つて其樹には、此名山の細工屑を捨てたやうに、鹿子斑の山が起伏と續く。何處とも無く長閑な人聲がして、此處彼處に鳥が囀る。折々動く風は日影の熱を冷すほどに輕々と面に當る。
 「好い景色だ！」
 と柳之助は瞬もせず富士の雪に見惚れて、

も無いけれど、陰氣になつたらう。陰氣になつた所へ君が鬱き込むでゐるから、いよく濕り勝たのさ。」
 「然だ、全く然だ。」
 と柳之助は太く思當つたやうに合點する。
 「それだから、僕は此頃は内に居るのが否だよ。内が否になつて了つた。焦やつて餘所に來るとね、然すると他と話をしとる間も、始終内へ歸るといふ樂があつたのだけれど、もう那樣氣は無いな。寧ろ内を忘れて了つとる。些も歸りたくないよ。」
 「まあ御寛大なさいまし。」
 と葉山が笑へば、柳之助は太息を吐いて、
 「還るに家無しだ。滿らんなあ。」
 どつかりと火鉢の角へ頬杖を支くと、直に火箸を把つて、灰を平しく、結晶の團を畫散してゐる。お種は又并つて來て、縁高に菓子容器れたのを、其處に置きながら夫に見せて、
 「何か買はせませうか。」
 「何だい、有りますものは。粗粉落雁に翁餅、松風が少々、拾葉ものだな。意見には遺廢物は可けない、餅菓子が可からう。」
 「餅菓子は否だ。」 と火箸を捨て、身を起す。
 「それぢや羊羹！ 然う、那は丸味に限ると云

ない話だ。然かと云つて、今の所ぢや、今後何爲やうと云ふ計畫も未だ無からうけれど、急に後……。」
 と言未了で、少し塞つたのは、後を要ふ事情にもゆくまい、と言はむとしたのであるが、其話をしたらば又氣を悪くせうかと、
 「急に後が寂しからうから賑なことは私の家だ。賑な方が好れて可いよ。君の家は暗いと言ふのも、畢竟老者を敵手に、上と下とで一人法師だからさ。まあ洒落に一月でも二月でも來て見たら如何だね。」
 實意で説かれるほど柳之助は困却を極めるのである。此場に臨むで無下に斷りもならぬ、然と何と言つて逃げたものであらうか、と皮を失つたが、一言でも早く、歸るものなら歸つて了はねば、義理に逼つて出人のならぬ境になる。と考へたから、妄に急込むで、
 「そりや可いけれど、面倒臭いから。」
 と不問なことを言出す。
 「何爲、面倒臭いと云ふのは此方の挨拶だ。君の方に面倒臭いはしない。」
 之には柳之助の無會釋も返す辭が無い。多少か間の惡さうな顔をして、
 「そりや然うだ。然うだけれど、他の家は矢張り

「ぢや菓子はいから、御馳走の支度だ。」
 其を聞くとお種は起つて、出際に又一目柳之助を見て行く。連は對座で、茶を出す、柳之助は火鉢の彼方に在る菓子を覗いて、
 「僕に一箇與れたまへ。」
 「おや！」
 「一箇！」
 「何だ、食べるのかい。」
 「食べたくなつた。」
 と翁笹を口に入れて、不味さうに咀嚼始める。
 三日三
 春日のやうに煦々と暖いのに、火鉢は在る、日照は好し、頭痛がするので、葉山は西窓の障子を取けた。
 澄渡る空は藍でも滴れさうに、何處に一點の雲も無い、唯凜然と富士の白妙は四邊を拂つて其樹には、此名山の細工屑を捨てたやうに、鹿子斑の山が起伏と續く。何處とも無く長閑な人聲がして、此處彼處に鳥が囀る。折々動く風は日影の熱を冷すほどに輕々と面に當る。
 「好い景色だ！」
 と柳之助は瞬もせず富士の雪に見惚れて、

「何が困るのだ。」
 「困るなあ。」と顔ばかり曇り、言葉もな
 らぬ。
 「何がさ。」
 「細君が居つちや困る！」
 と一生懸命に思切つて。
 「それほど困るなら引退げるけれど、然う君の
 やうに、人さへ見りや毛嫌をするのも困るぢや
 ないか。何故那樣に可厭なのだらう？」
 「何故と云つて理由は無いけれど、僕の性質な
 のだから。」
 「性質だつたつて。蛇や蛙ぢやなし、同じ人間
 を、然う否がるとは何云ふものだらう。他の者
 とは違つて、私の家内だ、私の家内だけは切
 て格別の御詮議に預りたいね、然でない、種
 種不都合な事があるものね。ちと所好になる修
 行を爲てくれたまへ。然う君のやうに一國でも
 通らないよ。君は不吃不食だから困る、まあ吃
 つて見て、それで可けなかつたら、遠慮無く
 吐出してはうぢやないか。何も内のお神を
 女房に持つてくれと言ふのぢやなし、高が親交
 つてもらへば可いのだ。可厭にした所が、苦
 い丸薬を飲むやうなものさ。そのくらゐの辛抱
 の出来ないことはあるまい。」

「此人は誠に變人だね、どうも所悪が多くて
 可けないのだ。」
 お種は歪を受けたまゝで、
 「ぢや其御着なんぞは……。」
 「え、食物の談ぢやない、人間が嫌なのだ。」
 柳之助は開辛顔をして控へてゐる。細君は
 なほ此應答には窮つた體で、其人の方を見ぬや
 うにして、爲う事無しに聞いてゐると、
 「甚麼好い女でも、甚麼金持が來ても、取合な
 い人なのだ。難有い事には私は大相好かれて
 ゐるのさ。お前なんぞは不可方なのだよ。」
 是はお種も柳之助も御互に氣の毒で、兩
 弱に弱つたが、有繋に柳之助は黙つてもゐかね
 て、
 「那廢事があるものか、妄です、妄です。」
 とお種に向つて慌忙しげに辯る。葉山は固に
 乗つて、
 「然し、愚やつて兄弟のやうにしてゐるものが
 無君に附てるやうでは面白くない。」
 「附てやせんよ、僕は。」
 と柳之助は辯々してゐる。
 「だから、以後は手前同様御懇意に願ふやう
 に……。」

「可厭ぢやない、決して可厭でない！」
 「可厭でなければ、御酌ぐらゐに出てるたつて
 可きやうなものぢやないか。」
 「けれども實際僕は窮屈でな。」
 「その窮屈が解らないよ。」
 「此時階子を踏む音がする。柳之助は悚然とし
 て、又硬くなる。
 「細君の前で今の事を言つちや困るよ。」
 と忙しく囁いて、手の遺跡が無さに、空の
 歪を取つたが、口へは持つて行かれず、置所
 も無し、持餘して葉山へ差す。
 お種は手料理の茶椀を能代産の通盆に載せ
 て、入つて來て、其處に坐るか坐らぬかに、葉
 山は吃々笑ひながら。
 「おい嘘は出なかつたか。」
 柳之助は小くなつて膳の上を突々廻してゐ
 たが、之を聞くと齊しく臆然と起上る。葉山は

柳之助は困じ果て、ぼり／＼頭を掻くと、
 紛々雲脂の飛ぶのが、日向で能く見える。お種
 は其を見附けて、可笑いにも笑はず、横向に
 俯いて口を掩へてゐる。

三の四

「其を清く頂戴して、御返すのが可いね。何
 を探すのだ。盥洗？ 盥洗などは水臭い、それ
 で宜しい。肺病さへ無けりや遠慮には及ばな
 い。」
 と夫に急付かれて、
 「それでは失禮ですが……難有うございま
 した。」
 と返すれば、柳之助は肩を聳して、
 「はあ」と受ける。葉山が注ぐ、お種が手
 す、婢が鉢子を持つて來る。柳之助は失望して、
 いや／＼此内君が動かぬと極つたならば、此方
 から退くより外は無いから、何とか説へて、早
 く退らう、と覺悟を爲變へた。
 旋て後の肴味を取りに行くと、お種は起つ
 たので、やれ嬉しや、と緋の顔でも解かれた
 想で、
 「僕はどうも窮屈で可かん。困る、僕は困る。」
 と柳之助は泣付くやうに言つた。

「如何した、如何した。」
 「未で出ていらつしやらないのですよ。」
 「長いね。」
 「お長、ごさいます。」
 「長い！ 廊下から呼んで見な。」
 又下りてお種は廊下から、
 「驚見さん、驚見さん。」
 一向返事がない。お種は考へて、玄關へ行つて見ると、靴が無い！ 急足に二階へ昇つて、
 「貴方、御歸去なすつたやうですよ。」
 「何歸る奴があるものか。其處に靴子があるだらう。」
 果然靴子は在る。
 「煙管が在るし、手巾が在る、尤も是は乃公のだけれど。それに彼は茶碗蒸が所好だから、歸りはしない。」
 「それでも、貴方、靴が在りませんもの。」
 「靴が無い！ 靴だから歩いて行つた、と云ふ洒落でもなからう。」
 座を起つて葉山も捜索に下りたが、家の内には何處にも居らぬと極つたので、
 「それぢや歸つたかな。兜を委いて逃げるとは卑怯な奴だ。臺所の者に聞いて見な。」

お種は婢に訊ねたが、一向知らぬと言ふ。餘り出意表なので葉山も呆氣に奪られて、縁側に突立つてゐる。
 「貴方、お歸去なすつたのですか。」
 「どうも然だらう。妾が見えなくて靴が無いのだから、まづ確だ。」
 「變な方ですね。」
 「餘程變さ。」
 思ふ所に裏口から保といふ男の子を負つて登々腹々した十七ばかりの傳が、後手に買物の包を擧げて、小聲で童謡を唱ひながら入つて来るのを、お種は誰かと臺所に出て見ると、
 「あの唯今驚見さんに其處でお目に懸りました。」
 「おや、然かい。」
 「内へ行つたら宜しくと有仰いました。」
 「まあ、然かい。」
 之を開けて葉山も出て来る。
 「何だ、宜しくと言つた？ 宜しくも無いものだ。」
 傳は捷くも驚見に就いて事有りげと見て、一廉忠義の氣で、
 「あの、お帽子も冠らずに隠行行つしやいました。」

お類に死なれてからの所帯は、火の無い火鉢のやうに、柳之助には堪へられぬ怪しいものになつた。おのれの家には居るよりは、外に居る方が、氣が舞々として、幾分か浮世の觀あるやうに覺える。好い朝日和に墓詣をした往復と、葉山の二階座敷で酒を飲むので、其は纏綿したに就いて、外は何處も明くて陽氣なのに、内は陰氣で暗いと云ふ事を悟つたのである。
 閉籠つて居るよりは、出るが勝だ、と考へた矢先へ、學校から人が来て、出勤を促されたので、出て見やうと云ふ氣になつて、明日からでも、と受けて還したのは、葉山の座敷を退出した翌日の午後である。
 其日になつて見ると、鼻の頭が縮るやうな風が颯々吹いて、衣類を着るものも可厭な、洋服は格別寒い日和であるので、忽ち氣が挫けて、九時頃まで火爐に入つて、遅々と練むのである。
 毎ならば、お類が早速昇つて来て、「さあ、貴方」と憤れたさうな聲をして、幸袴を持つて傍から返立てるやうに爲るのだと考へると、「さあ、貴方」と云ふ聲が遙に耳に聞いて、尋に就

四の一

お類に死なれてからの所帯は、火の無い火鉢のやうに、柳之助には堪へられぬ怪しいものになつた。おのれの家には居るよりは、外に居る方が、氣が舞々として、幾分か浮世の觀あるやうに覺える。好い朝日和に墓詣をした往復と、葉山の二階座敷で酒を飲むので、其は纏綿したに就いて、外は何處も明くて陽氣なのに、内は陰氣で暗いと云ふ事を悟つたのである。
 閉籠つて居るよりは、出るが勝だ、と考へた矢先へ、學校から人が来て、出勤を促されたので、出て見やうと云ふ氣になつて、明日からでも、と受けて還したのは、葉山の座敷を退出した翌日の午後である。
 其日になつて見ると、鼻の頭が縮るやうな風が颯々吹いて、衣類を着るものも可厭な、洋服は格別寒い日和であるので、忽ち氣が挫けて、九時頃まで火爐に入つて、遅々と練むのである。
 毎ならば、お類が早速昇つて来て、「さあ、貴方」と憤れたさうな聲をして、幸袴を持つて傍から返立てるやうに爲るのだと考へると、「さあ、貴方」と云ふ聲が遙に耳に聞いて、尋に就

かされるので、うか／＼と思が紛らされるの
に、新しい空気に襲まれ、華かな日光を浴び
て、賑しい往來の中を行くので、柳之助も我を
忘れて歩行が果取る。
此町通を二町ほど来ると、唯角に軒
の花屋がある。店の外に華道の贈花が四對立
派に仕上つて、内には四人掛で残る一對を精
精と掛へてゐる。

お類は花を売ったので、此店が買付であつた
から、柳之助は今日の手向の花も此で買つて行
かうと偽たのであるが、之を見ると有難に不
を感じて、入るも可厭になつて、五六歩行過ぎ
たのである。此先の横町には未だ一軒大きな
のがあるが、此が好いと云つて、類さんは愚
であつたから、此で買つた方が佛は喜ぶであ
らう、と思つて、竟に直と入る。狭い土間に
四人も仕事をしてゐるのであるから、足も容れ
られぬ。關の上に靴の頭を踏懸けて、
「おい、花を呉れんか。」
と内を一目向したが、並みである花溜には屑
のやうな物ばかりで、何も無い。主は格の枝
をばちりと剪むで、
「今日は如何も御氣毒様で。」
と此方も向かず仕事に掛つてゐる。

「花は無いのか。」
「へい、今日は……。」と益々取合はぬ。
「其處に在るぢやないか。」
柳之助は土間に轉してある蘆の南天をステツ
キで指せば、
「是は御註文で。」
「少し賣つてくれ。」
「どうも然は参りません。此先の横町に花屋が
ございますから。」
「我家ぢや始終お前の所で買つとるのだよ。」
「へい、どうも毎度難有うございます。」
「其南天を二枝と、水仙を少し賣つてくれ。」
「是はお上げ申す譯には参りません。此花に用
ふのですから。」
類いと云ふ氣色で、主は掛へてゐる花の陰
へ廻つて類を見せぬやうにして丁ふ。
「賣れんのか。」と柳之助も愕然とする。
「へい。」とばかりで、後はちやきり／＼と銀の
音ばかり。丁稚や手傳は連に柳之助の類を見て
悪く黙つてゐる。

柳之助は主の隠してゐる類を提出しては眼
付けて、姑く動もせねば物も言はずに店の内
を向して、又主を睨付けて、ふいと此を出ると
忽ち悪口でも言つたらしい語が聞えた。
「要らなきや止め！」と同じ調子で車夫も
言返した。
柳之助はステッキを揮回して、大膽に此を立
退いたが、途々考へれば考へるほど、折角の
花を疵物にされたのが、無念で／＼堪へられぬ
のである。
車夫風情と争ふのは如何にも仿ない。仿な
いには違無いが、尋常の花ではない、佛に供
へる花を這腰にして置きなから、一言の謝罪を
爲ぬのみか、問拔と言つた！彼類類を此ステ
ッキで撲つて／＼撲曲けてくれなかつたのが遺
憾だ、と今になつて見ると、争はなかつたのも
残念で、車夫の無禮に亞いでは乗つてゐた奴等
の無禮！彼等から一言の挨拶は有つても可然
である。

柳之助は益々憤懣して、跋るやうに足疾に急
いで、横町の花屋へ行くと、其處は倍も店が大
きくて、無辭が好くて、代物も山のやうにあ
る。思ふまゝの南天と、水仙と、格もあつたか
ら格も買つて、寒菊もあつたから寒菊も買つて、
前の口惜紛れに販と買つて、それで胸の舞れた
は可かつたが、片手に餘るほど有るのに、南天
の實が悪く搖々して、急ぐと落ちさうで、歩
難いこと夥しい。平生服車を好かね健脚の柳
之助も、二三町行くと大きに持扱つて、巴む
を得ず、乗らうと決した。

車夫は寄つて来て、谷中までの直を言ふと、
無論不當であつたから、柳之助は其三分の二に
直れば、もう三錢遣つてくれ、と六七間も跟
いて來るのを、其で乗らうか、乗るまいか、と
生返事をしながら過つてゐる側へ、一臺の馬車
が駈けて来て、此飛ばすやうに聲を懸けた。
見ると、若夫婦の合乗。仕入の外套を着て、
遊獵帽を横冠にして、黒い顔に眉と髭の歴々
と濃い、眼光のきよりとした男が、大圓盤に
結つて、水色縮緬の羽織の衣紋が掛けて、半分
肩を出して、眞白に掛く塗つた、縮緬の燈籠理
の毒々しく太つた細君に纏をされて、危さうに
推付けられながら、其肩頭へ手を廻してゐるの
似とる。

が、俯つてゐるとよりは、取着いてゐると見え
る恰好で、細君は惡澄に澄してゐるのに、夫は
獨欣々として話をしかけてゐるのである。
慌て、躍ける機に、柳之助は手に持つ南天の
枝頭を否と云ふほど其車の輻に擦られて、はつ
と思ふ間に、最も大きい二葉は引離されて、轍
の迹に滾つた。車は委細管はず一間ばかり行
過ぎる。
「おい、待て！」と柳之助は覺えず呼止めた。
車夫は歩を緩めて首を捻向けると、車の上の
二人も一様に類を揃へて見返る。其三つの面を
柳之助は一つに睨むで、
「失敬ぢやないか。」
「何が失敬だい。」
と車夫は憎々しく言返して、なほも對手にな
る氣か、足を止めたのである。
柳之助は一時赫と立つたが、車夫風情と争
ふとは、我ながら餘に仿ない、と思つて口
を嚙むだが、道に落ちてゐる南天の葉を見れば、
有難に口惜くも情無くもある。

「間拔めい！」
と言捨て、車夫は大急に横町へ曲つて了つ
た迹に、無念を怏へて柳之助は茫然立つてゐた
が、旋て落された二葉を拾つて、外套の衣兜に
入れた。直を付けた車夫は此時又動めるのを、
「要らん。」と言つたのが、其氣でも無かつ
たが極めて腹食に、前の車夫を極付けるやうな
調子であつたので、
「要らなきや止め！」と同じ調子で車夫も
言返した。
柳之助はステッキを揮回して、大膽に此を立
退いたが、途々考へれば考へるほど、折角の
花を疵物にされたのが、無念で／＼堪へられぬ
のである。
車夫風情と争ふのは如何にも仿ない。仿な
いには違無いが、尋常の花ではない、佛に供
へる花を這腰にして置きなから、一言の謝罪を
爲ぬのみか、問拔と言つた！彼類類を此ステ
ッキで撲つて／＼撲曲けてくれなかつたのが遺
憾だ、と今になつて見ると、争はなかつたのも
残念で、車夫の無禮に亞いでは乗つてゐた奴等
の無禮！彼等から一言の挨拶は有つても可然
である。

第一、彼夫婦は如何であらう、醜態極まる！
類様が見たら何と言ふだらう。我家の裏に居る
巡査が、何處へ行くのか、折々覽詰して夫婦連
で出るのを、類さんは見れば、始終可厭だ、可
厭だと言つて居たが、其様子は今の奴等に能く
なかつたけれども、柳之助の方から問着けて、
類を振向けると、前の車は、藤鼠の頭巾を冠つ
た所は高島田らしい、金縁の眼鏡を懸けて、白
茶地に疎い飛形のシオールを着た類を載せて、
後の車は、圓筒に結つた、四十五六の氣源とし
て、口噴しさうな、黧肌、赤光に光つた、其
母親と見える。鼠ばい毛絲の機械織のシオー

「好くまあ入らつしやいました。」と幾度言つたか知れぬ。

お島母子は八畳の間の殆ど中央に四邊を拂つて端然と置物のやうに並んで、手届は出たが、茶の出ぬ内は、極が付かぬと云ふ趣である。

「お前さん單身で然ぞお困りせう。私もね、旦那が云ふ様子だったから、如何して御在かと思つて、其ばかりが氣になつて、一寸来たかと思つてゐると、此間から内の家翁が風を引いて、久しく寐たものですからね、手放されなくて。」

と母親は眞を吃ひながら、隣茶の間の隅に茶碗の音をさせてゐる老婢に話しかける。

「おや、其は如何も。それでも、もう全然御快しうらつしやいますか。」

と其邊を啓散して何か投してゐると、お島が入つて来て、

「つまらない物ですが。」と最中の折を出す。

「おや、まあ如何も！」と推戴いて、

「奥様御土産を、どうも難有う存じます。」

旋て茶を調へて持つて出ると、

「手の無い所を、もうお管ひなさるな、お客様ぢやないのだから勝手に何しますから。」

「いえ、もうお管ひ申す所ぢやございませ

る。

シオールを後へ取ると、小豆色の縮緬の羽織に御白絹の裏裏の二枚裏、空色の紅入友禪の襟を懸けて、海老茶に瓦蓋の縮緬の丸帯。玉入の織い指環を穿めて、髪飾は、本甲冑の政子形の櫛に、モオル細工の前挿、後は金被の透彫の玉に松葉形の籠甲冑、命被の管根掛をして、結立ではあるが、髪飾の薄い所爲か、籠の坐が悪くて、どうやら鳥田を假りて載せたやうに見える。笑顔をすると、齒の黒いのが一寸見えて、片鬢が入つて、透徹るやうな聲で、物言の人懐しげな、軟かと云へば差含まぬ質であるが、途中の不意の所爲か、物も言はずに、重くしく會釋をしたばかり。柳之助も同じく黙然で、極を悪さうに挨拶をした。

「これから墓詣に行かうと思つたのですけれど、歸りませう。」

「おや、なるほど大相にお花を。」

「まだ南天の好いのがあつたです。」

と口惜しうに言つたが、其を如何したとも母は訊ねなかつた。

「それぢや折角御出掛のところを何ですけれどお墓詣は明日でも御一緒に。」

「はあ、今日は止めます。止した方が可いです。」

「困つたものですね。學校の方へは毎日……」

「いえ、此間學校からお人でございましたけれど、其後未だ一度も御出掛が無いのでございますよ。而して唯毎日響き通して在つしやるのでございますから。」

「困つたものですね。」

と考へながら吸殻を擧ぐると、眞入の傍に飛むだのを、お島が見付けて始末をするも知らずに、母親は黙と考へてゐたが、

「私が都合が出来ると、些と来てゐて世話をし上げていただけれど、内も無人でね……」

「然やうでございませうとも。」

話の途切れる折から、門の外に靴音がする。

「おや、お歸りだ。」

と母親は居住を正す、老婢は起つ、後からお島も出迎へに起つたが、格子の啓く音と與に迷込むで来て、口を掩へて吃々笑ふ。

ルを絞つて、車も箱古りたのに乗つてゐる。

「おや！」と後の車から聲を懸けて、止れと命じながら五六間曳れて行くのを、

「やあ！」と柳之助も轡を取つて、足早に追ひかける。

藤鼠の頭巾は遙に行並びたのを、後の車夫がおいゝ呼むだので、漸く止つて、今引返さうとする時、柳之助は後の車の側に立つて挨拶を始めた。

「好い所でお目に掛りました。」と車から言へば、

「何地へ？」と柳之助は訊ねる。

「お宅へね、上らうと思ひまして。」

「あ、然でしたか。」

「お島も御墓詣がしたいと言ひますから、連れまして。」

「はあ、其は。それぢやもう墓詣はなさいましたか。」

「いえ、御一緒にと思ひましてね、家から直に参りましたよ。」

前の車も引返して来ると、お島は頭巾を取つてゐる。色の白い、髪は薄い、目鼻立の發端として賑やかな、姉のお類よりは容色勝との噂であるが、小軀で瘦過ぎた所は何と無く精巧である。

「これから墓詣に行かうと思つたのですけれど、歸りませう。」

「おや、なるほど大相にお花を。」

「まだ南天の好いのがあつたです。」

と口惜しうに言つたが、其を如何したとも母は訊ねなかつた。

「それぢや折角御出掛のところを何ですけれどお墓詣は明日でも御一緒に。」

「はあ、今日は止めます。止した方が可いです。」

私は後から参りますから、貴方は御先へ行つて下さい。」

「貴方お車は？」と母親は訊ねる。

「私は車は所悪ですから。」

「それぢや、失禮ですがお先へ参ります。その御花は持つて参りませう。」

「あ、然ですか。」と母親へ渡さうとすると、

「あの、私が持つて参りませう。」

とお島が車を寄せるので、柳之助は其方へ渡すと、例の笑顔をして受取る。二臺の車は再び轡を正して逸散に走出す、遂から柳之助は片手を穿袴の衣兜に入れて、ステッキを鞆に隠し、踵と歩いて行く。

四の二

此日来老婢も鬱々して、病人の枕頭にも附いてゐるやうに、心配やら陰氣やらで精を疲らしてゐる折から、思應けの今日の來客には、雲霧も一時に霽れて御日様を拜むやうな心地がして、華美な縮緬の文色に薄暗い座敷も急に明るくなつて、聞いてさへ元氣付く、母親の涙々とした高調子、元は何か無しに飛立つばかり嬉しくて、物も手に付かず、ちやほやと待しながら、座敷を出たり入つたりする間に、

の都度母親を呼立て、力を藉りる事もあれば、相談を懸ける事もあり、陰ながら其保護を受けてゐたのである。獨り何時でも呑気な柳之助は、米の直も知らなければ、膳の魚の名を聞くでも無く、月々お親に扶持を宛行つて、日々其又宛行扶持を受けて、所帯向の事は一向御座であつたから、お親も御坊様は敵手にせず、母親ばかりを頼にして、炭敷貯つてゐたのであるが、那様事も柳之助は悉く知らず、ひたひたである。

内証に憑云ふ關係があつたのであるから、驚見に歸いだ娘なれば、既に庶とした一家の主婦である、赤い切掛けた鳥田の内とは違ふものを、母親は猶且内に居る娘が親類へ泊にでも行つたやうな氣で、昔に愛らぬ愛情を有つてゐた爲に、折々お鳥から怨言を云はれて苦笑をした事さへある。

故に其關係から謂はうなら、驚見は横濱(お類の生家の姓)の別家と云ふ狀で、會計上の關係こそ無かつたが、其他の一切は、存は延餅の厚さから、夏は浴衣の見立、夜寒に風をお引かせ申すな、炭の廉いがあるから買つて置いてあげた迄、事とあれば「阿母さん、阿母さん」であつた。懼も無く煩く面倒を見させ

られるので、子は可愛い、母親はいつまでもお類を子供のやうに思つて、其子供に世話される柳之助は、子では無いが、他人では無い、明かには、人、其人は、無邪氣一方の、お坊様が成人して歸の生えれば、お鳥は彼の可いのよりの、驚さへあれば男は彼の方が可い。お親は常に言つて、漆は割けるが生地は割けぬ、いつも柳之助の同じなのを、第一の取柄にしてゐる。

實意で語れば必ず實意で受けてくれる、信に人の親らしい、と以て柳之助は此母親を信じてゐた所へ、お親の病中の世話から、續いてその亡後の始末まで、身一つに引受けて、而も自分と同じやうに悲むで、同じやうに泣いたのを見てからは、いと頼しく思ふ人の今日来たのは、何にも換難く心嬉しいのである。

嬉しくは思ひながら、口頭に出しては言得ぬのも、母親一人ならば未だしもなれど、お鳥と云ふ例の他人が傍に居るので、氣屈さうに、柳之助は思々してゐる。母親は前から話の内も浸々柳之助の顔を見てゐたが、

「何處ぞ御不快ですか。」と竟に訊ねた。

私も然う思つてゐたと言ひさうな顔で、臨正前からお鳥も肥と目を着けてゐる。

「いや、別に……」

「然うですか、大變お瘦せなすつたよ。」

「氣遣しさうな目をして母親は益々眠る。」

「お瘦せなすつてねえ。」とお鳥まで言出した。「毎日どうも不愉快で……可けません！」

と言ふのを待構へてゐたやうに、母親は、「その所爲ですよ。」と一も二も無く言へば、果敢言中てられた風情で、柳之助は返す言も無い。

「而して内にはばかり御在なされるのは可うございませぬよ。未だ御出勤をなさらないさうですけど、外へ出ると氣が紛れて、却つて好いものですから、お可厭でもね、無理に御出勤はなさいませぬよ。又餘り長く休んで御在では不可のでせう。」

「何有、それは病氣屈をして置いたですか。」

「だつて、病氣でもないのに病氣屈をして遊んで居ては、酷いぢやありませんか。」

お鳥は一寸笑ふ。

「皆行りますよ。」と言ひながら眞面目の柳之助が可笑いとて、お鳥は又一寸笑ふ。母親も

生眞面目、

「他は他ですわね。身體の爲にも良うございませぬから、奮發して出て御覽なさいまし。」

「それは出やうとは思ふです……」

「思ふばかりぢや可けませんね。」

外に所在も無いので、お鳥は又笑ふ。

「思ふですけれど、朝になつて、行かうとする可厭になつて……」

「それぢや何にも成りませんね。」

「如何か爲やうは有りませんか、毎日寂しくて、寂しくて、實に居ても起つても居られぬすがね。」

「元とも其話をして居たのですがね、それは今迄居たものが急に居なくなつたのですから、然うでせうとも。」

「實際然うです。」と俯き勝の顔で柳之助は屹と振擧げる。

「私が内の方が手が放されると、當分の内でも来て居て上げたいのですけど、何分にも……」

「それは好いですな！ 来て居て下さい。可いでせう、好いですがね。」

乗地になつて柳之助は顔に膝の前を覺えず、爲に母親は膝頭の痛いほどぐいぐい手爐を挿付けられながら、心靜に思案をしてゐる。

「お内の方は如何かなるでせう。」

「如何もねえ。」と母親はお鳥と見合ふ。

「然うねえ。」とお鳥も睨みばかり。

「何とか考へませうけれど……」

暫く委の見えなかつた元が突然出て来て、「さあ御掃除が出来ましたから、何卒御二階へ。」

柳之助は先づ案内に起つ。母親とお鳥は續いて縁に出ると、柳之助のコオトの襟がびみなりに折れてゐるのを、お鳥が見付けて、

「あの、襟が。」

と心着けると、一寸正したのが、猶可笑しく歪むので、お鳥は奇つて、整然と正して、次に肩の雲脂をば持つてゐる細の手、巾で二つ三つ拂へば、如かしい香が鼻の頭へばつと立つ、柳之助は忽ち思出して、階子を踏むさへ氣の無さうに、づしりたり、づしりたり。

「何しろ、憑して家を有つて御在なのに、世話をしてあげる人が無くては、信に不都合ですねえ。」と其ばかりを母親は切に苦にする。

「不都合ですとも！ 然し、唯不都合だけなら我慢は出来るけれども、寂しくて、寂しくて、内に居られぬですな。始終類の事ばかり胸に浮むで、考へれば考へるほど氣が蒸氣して來

て、奈何したら可からうと思ふです。今日なども思やつて貴方が来て居られると、何と無く類が今に昇つて來るやうな心地がするですね。——死んだとは想はれんです。」

故と他を見てゐる母親の目には零れさうに涙が一杯になつてゐる。柳之助は表情無く前から滴々と落ちてゐるので、お鳥は未だ然ほどでもないが、他の泣くのを見てゐられず、愁然と俯いて、どうやら身に浸みる氣色。

「病中は非常に貴方が世話をして下さつた。私の心配も非常でした。吁、然し死んで了つたです！ 死んでくれば實に困ります。私は這般困つた事は無いです。種々未だ用があるのですに……もう一遍逢ひたいですな。」

と破れたやうに柳之助は泣出す。

「もう……其話は余計ませう。貴方も諦めて下さい、よう、過ぎた事は爲方ありませんから。何でも氣を引立て、身體が大切ですよ。つまらない事を考へて病ひでもすると可けません。」

まだ泣きたいのを控へて、母親は涙を拭つて見せる。

「類の事を考へてゐながらも、今日のやうに貴方が居られれば、未だ幾分か心強いです。」

「早くお爲なれ。」と少し眠まれて、漸く友禰、禰と黒子の晝夜帯を解始めると、母親が、「喪衣を持って来て、その上へお揃折り。」故と彼方に向けてお鳥は返事も爲すに、出来るだけ遅くしてゐる。其間に母親は支度をして、忙しげに下りて行くと、遂はお鳥の舞臺。最初の所作は、其處に解いて置いてある帯揚げを取って、放付けて見る。それから、くるくると帯を解いて、又放付けて見たが、是は根から都合なかつたのである。「此寒いのに、他の家へ来て掃除なんぞを爲すても可いのに！」とお鳥や、お鳥！と階子の口から母親が喚ぶ。「何？」

「下へ来てお着替へ。」

餘り指いたら阿られやう、と有聲に其も可恐に、お鳥は帯と帯揚げを抱へて、旋て下りる。程無く三人繋つて押寄せたりと云ふ勢で昇つて来たが、いづれも効々しい襦袢の手拭冠、帯に拂塵、バケツトに雑巾、座敷等の御物を西々用意して、先戸欄を始めて、座敷中の道具を順繰りに繰へ運出して、煤掃ほどの掃除を始めたのである。

四邊に出てゐるお鳥の値のやうなものは、盡く取片付けて、従来老婢の手の届かなかつた不潔をば剥去るやうに綺麗にして、天井裏も拂へば、塵も拭く、散かして在つた道具を秩序よく揃直して、障子の硝子を磨いて次に火鉢の灰も飾つて、午まで保つて三人とも委靡して、お鳥は在合ふ椅子に靠れて奄々いつてゐれば、母親は平坦と坐つて息繼の食を吃しながら、相對して少時は語も無かつたが、一杯に射入る日影に座敷は輝くやうで、暫然と隅々も際立つて、列ぶものは列むで、納る物は納つたので、處々としたのを、

「ねえ、お鳥、見違へるやうになつたぢやないか。」

と楽しさうに母親は問ふ。

「此座敷こそ仕合だけれど、お客は災難だわ。」

午後には下も略と掃除をして、一通片付いた所へ、柳之助は精々と歸つて来て、何も知らずに内に入ると、間違へて他の家へ飛込むだか、と疑はれるほど綺麗になつてゐるので、

「誰か今日来るのか。」と偶然元へ訊ねると訊ねられた方が却つて希有な顔をして、

「何でございませう。」

「客でもあるのか、大相綺麗になつたぢやないか。」

「之を聞くと思はは笑つたのである。」「面白い事を有仰います！ 貴方が且那樣でゐらつしやいながら、且那樣の御存じの無い御客様が有るものでございませうか。」

「然だなあ。」と又茶の間を覗いて、

「やあ、綺麗になつた、如何したのだ？」

「まあ、一寸御二階へいらつして御覽じませう。」

と獨り喜むでゐる老婢に返答せられて、柳之助は煙に捲かれながら昇つて見れば、實に二階の綺麗になつたことは、任された我家の備は無くて、別けて置かれたのは、始終陰々として一種の氣の曇つてゐたのが、廓然と晴れて、隅々まで眩いほど明るかつたのである。而して不思議なのは、二人の居らぬのである。控平と座敷の中央に坐つて、四邊を珍しさに眺めてゐると、元が昇つて来る。

「お客様は如何した？」

「今し方御風呂へ御出になりました。」

「綺麗になつたな！ 如何したのだ。」

元は始めて大掃除の始末を明して、御客様の骨折の疎ならぬ趣を陳べる。柳之助は至極満足して、然れば此母親に當分居てもらつたな

唯一人で考へ出す時は、實に其は耐らんですね。」

「ですから單獨は可けません。」

又母親は單獨で置かぬ工夫を案じてゐる。

「貴方に當分泊つて居つてもらふ譯には行がんですか。」

「それが、ね……。」

「然うすると非常に都合ですけれど。」

「それでは、ね……。」

とやうく、母親が言出すと、柳之助は變好く話の方に顔を向ける。

「如何にか都合をして何しますから、明日はまあ御慕詣をして、明後日から學校の方へ御出なさいませうか。」

「出ませう！」と柳之助は一層勢付く。

「お出なさる？ なら左も右も都合をして……。」

「來とつて下さるか。」

「え、可うございませう。」

「これは難有い！」

まづは愁の眉も展びて、菓子が出る、旋て午餉の膳が出る。是から日の暮れるまで唯坐つてゐるのも退屈、幸ひ天氣は快し、珍しく然ほどは風も起たぬから、明朝と云はず、今から慕

詣をしては、と急に話が着いて、一時といふ頃三臺の車を聯ねて、谷中へ走らせたのである。上野邊の一才した所で晩の支度をして、點燈頃に歸つて来たが、其夜は久しぶりで二階の灯も下の灯も暗かに、臺所も前に舞き、開の本戸の開閉も聞えて、それが一時鎮ると、物の響は幽しい琴の音となつて、絲の調が絶えれば話聲がして、話聲が賑めば又爪音がしく續いて、十時前まで即かに歡樂を盡す氣勢がした。

五の二

翌日柳之助は遂に出動したのである、すると直に母親は、釜に湯を沸すやうに元へ吩咐けて、二階へ昇ると、お鳥は新聞を用意して、是から冬籠をする氣で、火鉢に火を入れてゐる。

「可けませんよ、それ所ぢやない、さあ〜用が有るのだ。」

と突如に急立てられて、迅雷を捲ふに違あらず、お鳥は火箸を持つたまま、

「何？」と長く引張つて、其間、瞬も爲さず母親の顔を見る。

「掃除をするのだよ。」と母親の急ぐほど、

「何處の？」とお鳥は驚落着く、落着く

ではない、餘程吃驚したのである。

「大掃除をして、此二階を綺麗にするのだから。」

「此二階の掃除？」

何だかお鳥には全然理が釋らぬ。

「何故、阿母さん。」と依然急かずに訊ねると、母親は益々落着きかねて、

「何故でも可いから、早く支度をおしな。」

お鳥は悔しさうに折角入れた火を埋けて、憤れたさうに立起つて、怒めしさうに母親を見たのである。掃除を爲るなら爲せうが、始の約束だ、お慕詣に來たので、お客に來たので、泊に來たので、何の爲に好い着類を着て、髪を結つて、御土産を持つて來たのであらう。如何考へても、他の家の掃除をしに來たのではない！

親の言ふ事ではあるが、お鳥は不服であつた、が不服とは言得ぬから、

「この寒いのにねえ。」とばかりで、母親が傍で精々と身支度するのを棒立になつて拜見してゐる。母親はぐいといつ下髪を緊めて、

「さあ、よう、寒いことがあるものかね、阿母さんさへ思ふぞだ。」

「好い勢ね。お、寒い！」と袖を重ねて身を凍める。

らば、幾許慰められるであらう、と益懐しくなるに就いて、昨日あたりから、必ずしも忘れるではないが、幾分か紛れるかして、此日頃、身と胸に盈ちてゐた愁も次第に蒸發して、其量を減じて行くやうに覺ゆるのである。

もう歸るか、もう歸るか、と待つ間を獨兀然としてゐると、一旦蒸發したものが忽ち集合して、又胸が苦しく塞がる。
這處に家を綺麗にした所をお類さんに見せて、喜ぶ所を見たい。此家には限らぬ、甚だ物がある、甚だ事を爲しても、自分一人が喜ぶだけでは、一向都合は無い。類さんに喜ぶでもらふのが自分の一種の喜である。愁い事がある。類さんが傍から慰めてくれる！ 樂な事がある、類さんが一所に喜んでくれる！ であるから何を爲る効もあつたのだ。今では其都合を失つて了つた。呵、寂しい、心細い！ 渺々たる大洋に唯獨泛んでゐるやうなものだ。世間には人が多けれど、其は浪のやうなもので、決して頼にはならぬ。頼になる人は死んで了つたのだ。
情無い。情無い！ 生きてゐたらばと思ふと身も世もあらぬほど慄しくなつて、コオトの内衣兜から急に紙包の寫眞を出して、ずらりと

して置いて、現在給仕に付いてゐながら、自分の氣儘に手を塞げてゐる時には、「おい、飯！」と言ふのを、「貴方、手があるぢやありませんか。」と見向きもせぬ。それほどならば好からず、柳之助が好いと云ふ其片意地を慰めるには、千萬の或者の深切も、到底如何とも爲ることは無い。
然し、其が深切であつて見れば、柳之助も喜ばぬではない。唯他の或者の邪慳に比べては、不足と思ふ所もあるが、決して其をば深切の到らぬ故とは考へぬ。母親をも懐しいものと思ふ、が其裏に例の不足があるので、彼の心は安くない、獨で居れば憶出す、憶出せば耐らぬほど戀しくなる。如何したら此の不足が無くなるか、と云ふ事に就いては、柳之助は全く考へなかつた、類さんさへ慰つたならば、と始終思ふ外には。而して類さんの外には此不足

四枚疊の上に並べて、片手を支いて、腕と腕めつてゐるが、總て東裝の一枚を取擧げて、生けるが如く接吻をしようと、涙がほつたりと眞眞の横顔を濡した。手早く手巾を出して、尙と拭いて、次は鳥田のを取つて、視てゐる最中、二人の歸つた物音に、慌て、掻集めて、紙に引裏むで、衣兜に入れて、手巾を連れて立起る。直に二人は昇つて来て、柳之助の顔を見ると、泣いた目は未だ濡れてゐる。母親は何とも言はぬがお鳥は類に見る。拭かうにも手巾は無しに、顔をしながら、鼻聲で掃除の禮を述べ

を充すものは斷じて無いと信するほど、追慕の念は彌々巴まぬのである。
獨り母親が其を考へたのである。葉山も陰に心掛けてゐるが、母親の方が差迫つて考へてゐる。其事に就いてか、外に用事があつてか、此日柳之助が出る間も無く、母親はお鳥を遣して單身で出掛けた。それを送つて、二人は奥へ入りながら、
「お嬢様、お一人でお祈り下さいませう。」
「お嬢様が居ると好いのですけれど。」
「然やうでございませう。折角御泊にお在あそばしても、奥様が在らつしやいませんではお樂がございませぬえ。今日は半休でございませうから、直に旦那様も御歸來になります。」
「兄様ぢや困るわ。」
「御嬢様の代に御世話なすつて上げて下さいますし、何を致しまして私では御意に入らないのでございませうから。」
「私も困るわ。」

お類に成代つて氣を着けるのが母親で、動くのがお鳥で、此二人が寄つて、お類の居た時のやうに柳之助の世話を爲るのであるが、その行届く點から謂はゞ、世慣れぬお類が、人形に衣類を着せるやうな世帯の持方とは違つて、一家の爲にも、一身の爲にも、彼此柳之助に取つては、數倍の利益はあるのである。
母親の善く爲てくれる事も、お鳥の善く働いてくれる事も、柳之助は有要に解らぬではなかつた。或事に就いては用意と謂ひ、懇切と謂ひ、母たる人は母だけに到底類様などは企及も無い。葉山が會つて（年寄も世帯道具の一つなり）と云ふことを言つて、自分の經濟の不取締を責めた事も今更思中る、ではあるが、爰に一件其等には換へられぬ大缺點があつて、謂ふに謂はれぬ不足を感じる。それは懇切に於て、用意に於て、秋毫申分は無いやうなもの、又全く無いでもない云ふのは、總ての仕事が機械的である。其實決して那樣事實ではないのであるが、左右柳之助には然ら感じられる、此機械的——其大缺點が柳之助の最も胸に徹して、益類さんへ忘れられぬ所以である。
母親を始として、お鳥も元も寄つて來つて、下にも置かねやうにして待す。お類は殆ど放出

五の三

柳之助が歸つて來る、食事を済す、寢然と二階へ昇る。續いて元は勝手へ退つて片付物をする。半時間ばかり経つて、其處を仕舞ふと、茶

「あ、然ですか。」と聲に彼の答を返して、少しばかり慌惚ついたが、「お茶でも點れませうか。」と火鉢の傍へ寄りかかると、柳之助は迷惑さうに尋ねてゐた。「はあ。」と机の方へ向直る。見ると、火は大方白くなつてゐるので、お鳥は炭を續ぎ始めたが、餘り細々と煙との近いのが眩いやうで、柳之助は益々迷惑する。お鳥は割に隠した様子も無く、小取廻に其邊の始末をして、湯の沸くのを待つてゐる。机に向いて、書見を爲すでもないのに、柳之助は何を一言言ふでもなければ、此方を見てもない。實はお鳥も話がないので、鐵瓶の柄を摩りながら、

「何方にはお母様は歸りますか。」
「あ、然ですか。」と一寸此方を見向いたかと思ふと、直に彼方を見向いて了ふ。
「御歸になつたら、能く氣を着けてあげると、然う申して参りましたけれど、私には何だか一向氣が着きませんから……。」
と例の片断でお鳥は微笑む。
「いや、別に用も無いですから。」

「あ、然ですか。」と聲に彼の答を返して、少しばかり慌惚ついたが、「お茶でも點れませうか。」と火鉢の傍へ寄りかかると、柳之助は迷惑さうに尋ねてゐた。「はあ。」と机の方へ向直る。見ると、火は大方白くなつてゐるので、お鳥は炭を續ぎ始めたが、餘り細々と煙との近いのが眩いやうで、柳之助は益々迷惑する。お鳥は割に隠した様子も無く、小取廻に其邊の始末をして、湯の沸くのを待つてゐる。机に向いて、書見を爲すでもないのに、柳之助は何を一言言ふでもなければ、此方を見てもない。實はお鳥も話がないので、鐵瓶の柄を摩りながら、

「何方にはお母様は歸りますか。」
「あ、然ですか。」と一寸此方を見向いたかと思ふと、直に彼方を見向いて了ふ。
「御歸になつたら、能く氣を着けてあげると、然う申して参りましたけれど、私には何だか一向氣が着きませんから……。」
と例の片断でお鳥は微笑む。
「いや、別に用も無いですから。」

「御用が有りましたら、御遠慮無く。」
「可いです。」
「話は又此で斷れて了つたが、湯はまだ沸きさうにもせぬので、お鳥は氣にして炭を直してゐると、

「茶は私が點れるですから、鳥さんは下へ行つても可いです。」
「あら、何せ用は無いのですから、私が致しませう。兄様は御勉強なさるなら、爲すつて下さいまし。今直に沸きます。」
それでもとは推して言はれぬので、柳之助は已むを得ず書見を始めたが、氣が侵して讀むではなれぬ、如何かしてお鳥を逐拂はう、と其ばかりを考へる。

お鳥の方では逐拂はれる人とは夢にも知らぬから、一應引承けた氣で勤めてゐるのであるが、自分も亦多少面白づくで、彼此世話をした見たい氣味の無きにもあらざる態で、内に居て阿茶様の腰を接つて睡氣催すのは、同じ而倒を見るのでも、大分氣持が違ふ。

若し柳之助が尋常であつて、此くらゐに口敷を寡く、此くらゐに冷遇をした事なら、お鳥は暢然として起つて逸氣ないけれども、柳之助の素氣無きことは、豫て心得てゐる。其口敷の

「あ、然ですか。」と聲に彼の答を返して、少しばかり慌惚ついたが、「お茶でも點れませうか。」と火鉢の傍へ寄りかかると、柳之助は迷惑さうに尋ねてゐた。「はあ。」と机の方へ向直る。見ると、火は大方白くなつてゐるので、お鳥は炭を續ぎ始めたが、餘り細々と煙との近いのが眩いやうで、柳之助は益々迷惑する。お鳥は割に隠した様子も無く、小取廻に其邊の始末をして、湯の沸くのを待つてゐる。机に向いて、書見を爲すでもないのに、柳之助は何を一言言ふでもなければ、此方を見てもない。實はお鳥も話がないので、鐵瓶の柄を摩りながら、

「何方にはお母様は歸りますか。」
「あ、然ですか。」と一寸此方を見向いたかと思ふと、直に彼方を見向いて了ふ。
「御歸になつたら、能く氣を着けてあげると、然う申して参りましたけれど、私には何だか一向氣が着きませんから……。」
と例の片断でお鳥は微笑む。
「いや、別に用も無いですから。」

「あ、然ですか。」と聲に彼の答を返して、少しばかり慌惚ついたが、「お茶でも點れませうか。」と火鉢の傍へ寄りかかると、柳之助は迷惑さうに尋ねてゐた。「はあ。」と机の方へ向直る。見ると、火は大方白くなつてゐるので、お鳥は炭を續ぎ始めたが、餘り細々と煙との近いのが眩いやうで、柳之助は益々迷惑する。お鳥は割に隠した様子も無く、小取廻に其邊の始末をして、湯の沸くのを待つてゐる。机に向いて、書見を爲すでもないのに、柳之助は何を一言言ふでもなければ、此方を見てもない。實はお鳥も話がないので、鐵瓶の柄を摩りながら、

「何方にはお母様は歸りますか。」
「あ、然ですか。」と一寸此方を見向いたかと思ふと、直に彼方を見向いて了ふ。
「御歸になつたら、能く氣を着けてあげると、然う申して参りましたけれど、私には何だか一向氣が着きませんから……。」
と例の片断でお鳥は微笑む。
「いや、別に用も無いですから。」

「御用が有りましたら、御遠慮無く。」
「可いです。」
「話は又此で斷れて了つたが、湯はまだ沸きさうにもせぬので、お鳥は氣にして炭を直してゐると、

「茶は私が點れるですから、鳥さんは下へ行つても可いです。」
「あら、何せ用は無いのですから、私が致しませう。兄様は御勉強なさるなら、爲すつて下さいまし。今直に沸きます。」
それでもとは推して言はれぬので、柳之助は已むを得ず書見を始めたが、氣が侵して讀むではなれぬ、如何かしてお鳥を逐拂はう、と其ばかりを考へる。

お鳥の方では逐拂はれる人とは夢にも知らぬから、一應引承けた氣で勤めてゐるのであるが、自分も亦多少面白づくで、彼此世話をした見たい氣味の無きにもあらざる態で、内に居て阿茶様の腰を接つて睡氣催すのは、同じ而倒を見るのでも、大分氣持が違ふ。

若し柳之助が尋常であつて、此くらゐに口敷を寡く、此くらゐに冷遇をした事なら、お鳥は暢然として起つて逸氣ないけれども、柳之助の素氣無きことは、豫て心得てゐる。其口敷の

無いが上に、温和に品好くといふのであるから、お島の子にしては極めての難題である。右の通賢いから、母親の前では怒り振振をして置られようよりは、榮な温和の方が勝と極めてゐたから、それで丁度好い加減に如才無くて、十に七までは母親の氣に稱つてゐた。因で親の前のお島と人中へ出てのお島とは、大分調子が變るのである。

柳之助は始めて其調子に出會つたので、唯呆れるばかり。細君の類さんさへ、然るまでは爲てくれなかつた事を、この人は立入つて爲てくれさうなので、何と無く氣味悪く思はれる。お島の方では又、變人とは聞いてゐたが、浸々傍にゐるのは今日が初度であるが、なるほど變人に感心して、彼の姉妹が能く此人に辛抱が出来たと云ふものゝ不思議と驚くばかり。

柳之助は如何とお島を逐拂ひかねて、爲う事無しの一寸通に、其最嫌ひのものゝ一つである浴になりと行て來うと思立つた。借したものを背負るやうにして勤めたが、毎も薄黒い顔をして、傍へ寄ると芬と臭いのは類さんも弱らされた、やう／＼諷めて一週間に一度とした、其さへ傍から突々かれば容易に出て行かぬ人が、今日は自分から浴には變だといふ。

元は思つた。

其日の薄暮に母親は還つて來たのである。柳之助は首龜に浮木の歡喜であつたが、例の素氣無のことであるから、然ほど顔色にも言語にも顯はれぬ、唯火鉢の前面に坐らせて、何を焦と話を爲すやうでもないが、内心は切に悔しいので、怨靈は仍其處に委を顯してゐても、此難有い護符のある爲に、寄らうにも寄られず、立竝になつて怨めしげに見てゐる、それでも有氣に氣丈夫であるやうな想。その護符の母親が還つて來ると與に、怨靈のお島の様子は脱然と變つて、是ならば傍に居られても未だ／＼辛抱の出來るほど、遂に温雅になつて、殆ど別人のやうに端然としてゐる。如何にも端然としてゐるは可いが、母親が居ると居ないとは、是程違ふかと思へば、何の故に母親が居れば温和にしてゐて、居なくなると忽ち馴々しくするのであるか、柳之助は甚だ事にもお島の了簡が解めぬのである。實に柳之助の怪む如く、お島は急に内端にしてゐる。それをば柳之助は不思議さうに、且は氣味が好さうに、折々見遣つては母親の話を聞いてゐた。

折角の好意ではあるが、折角にも好意にも換へられぬので、柳之助は思ひつて其折角を斥つたのである。斥りは斥つたが、随分斥り難いのを、重くするし口ではいふと語が足りなかつたので、母親は此人がお島を所悪とは知らぬから、斥る理が解らなくて、唯唯の變人から否むのであらうけれど、此人の爲から云はば、如何して自分かお島か附いてゐるに越したことは無いと信じたから、設むば少々可厭がつても、是非附人は置いて行くと、薬を飲ませる了簡である。其も決して母親の一存ではない。お類が弱くなつてからの柳之助の様子は、一部始終元から聞いてゐる。どうでも家内を些と罵にせねば、益々悪してつて彼分では病氣にもなりかねぬ、恚である、那である、自分が見てゐて心配でならぬ通を話して、それには是非ともお嬢様を當分お貸し下さい、と懇々も陰で元から頼むのである。自分の所見も然である處へ、元からも然言はれたので、母親は柳之助の遅々した謝絶は沸湯へ水を滴すやうなものであつた。一言云へば二言に返されて、柳之助は母親から泣々説得されて、終には言句も出なくなつて、話に其に極つて了ふ。

を言つて下さる。御母様の顔を見ただのである。「貴方の方でもお使ひなさるのに氣が置けなくて、却つて可からう、つてね。それは間に合ふことは、私よりはお島の方が餘程間に合ひますのさ。嚴君も今晩あたりは又些と氣分が悪いので、私に行かれては困るとお言ひなさるのを、直に歸つて來る約で出たのですから、其話旁今夜は行つて、明日早く歸つて参りますと云つて、無理に出て來ましたので、ですから、お島をね、私の代に遣いて参りますから、何分お頼み申しますよ。」

呆れて柳之助は何とも言ひかねた。此人を傍に附けて置かれるよりは、獨で寂しい方が遙に勝。設へば山道を行くのに、杖も無いが、其が無ければ無いでも、無いからとて荷物を持たせられるのは迷惑。柳之助は幾と挨拶に窮つたのである。此儘にして置けば荷物を持たせられるし、折角好意で言つてくれるものを、無下に斥るのも氣の毒なり、如何したら可からう、と頭に考へてゐる側で、母親はお島に向つて、明日からの心得を諄々と説いてゐる。

「それからねえ……。」と言出したが、餘り言ひたくはない事らしい様子で、「お茶を一つおくれな。」と故とお島の方を向いて、何と言つたものであらう、とそのまゝ考へる跡であつたが、旋て此方に向くと、「内へ歸つて、今日話をした見ただのですよ。」何の話やら一寸解らなかつたので、柳之助は却亂に、「はあ。」と先づ應へると、「あの話、私が當分此方に來てゐる話ね……。」それでよく解つて、「はあ、はあ、はあ。」「話をしました所が、嚴君の言ひますには、未だ如何も加減が爽快しないのに、私が居なくては信に不都合だ。何ならば焦しては如何だ、お島はどうせ遊んで居るのだから、私の代に當分お島を置いて、お世話を爲てあげたが可からう、つてねえ。」衝跳したのは柳之助、お島は別條も無く聞いてゐる。「私と違つてお島ならば、若いものゝ事であるししますから、お島代りになるし……。」と言つた時は、有氣にお島の日は(情無い事

御手傳といふ資格で、二階掛と爲つたのである。彼は金縁の眼鏡を掛けて、薄色縮緬の羽織を着て、お嬢様として見たよりは、働きぶりの世話に變じた娘形の方が、愛に様子がよく見えるので、同じ同胞でも、致くなられた奥様は召物の裾を曳いて、人の働きの懐手して立つて見ておらしやるのが御好であつたし、又其が好く御似たなすつたが、と元は何方かと云へば、如才ないお鳥の方に惚れたのである、若し是で眼鏡さへ無かつたら、と顔を見る度氣にしてはゐるが、左にも右にもお鳥は能く行届いて柳之助の世話をした。總ての仕向が姉よりは深切で、而してなか／＼實意もある。好く爲れるだけ柳之助は懐懐と、三日四日と経つほど益々怪へかねる。後に居られたら、勿論の事、聲が聞えてさへ心地が快くないのに、否といふほど附絡はれるので、内には居禁らなくなつて、一日學校から歸ると直に飛出して、類さんの所へ行つた。

空は雪氣に曇つて、野廣い墓場に人見一人見えぬ。高い木と赤土と、無数の墓石と測れた花と、鳥の音と自分ばかり、其間をば悲しい風が絶えず吹いてゐる。此に来ると胸が忽ち張裂けるやうになる。忘れてゐた事も盡く憶出されて、我ながら怪しいまでに涙が出る。柳之助は隣りの墓の裏石に腰を掛けて、森としてゐる四邊の閑寂を、もしや地の下に聲など爲はせぬかと待つやうに聴き流しては泣いてゐた。吹募る日暮の風に落葉は雨の如く降被るを、頭から一杯に浴びても、仍動かずに復らぬ事を思窮めて、折々名残惜しげに、傾く日影を見返つては、起つにも起たれぬ氣色であつたが、今まで見えた其處の高い碑さへ模範となるまでに暮れて来たので、

「もう行かうか。」とやうく起上る。落葉の中の二坪ばかり、是が類さんの居間か。雨囀の音の五寸角、是が類さんの今の姿か。無常は世の習とは云ひながら、見れば見るほど考へれば考へるほど、情無いやら、怪しいやらで、如何にも見捨てゝは歸りかねたのである。いつまで居た所で際が無い、歸ると決して、その墓標に寄つて浸々と別を告げた。暫く類子の墓、其字は葉山が書いたのである。「あゝ葉山！ には幾日會はんのだらう。爾來未だ會はんのだ。此方から行かんければ例も尋ねて来るのだけれど、働つとるのか知らん。さも無ければ、道塵に久しく來ん事は無い。或は

六の二

「あゝ、丁度好かつた。今君の家へ寄つて歸つて来た所だ。久しく見えなかつたぢやないか、帽子以來だ。」と葉山は可憐がる。然言はれるほど面目無くて、柳之助は總に苦笑をする。「けれども君も些も来てくれんぢやないか。」「彼翌々日急に名古屋の方へ出張して、昨夜歸つて来たばかりさ。」「あゝ、然うか、居なかつたのか。」「留守見舞ぐらゐには来てくれさうなものだ、と實は此方から恨むてゐたのだよ。」「少しも知らんだつたものだから。」「元々聞いたが、此頃は毎日學校へも出るさうだね。」

「あゝ、爲方が無いから出る。」「何が爲方が無い奴があるものか 結構さ。其外に未だ變つたことがあるだらう。」柳之助は首を傾げて、「何も無いな。」「否、有る理だ、能く考へて見給へ。」指圖通り柳之助は改めて首を傾げて能く考へたが、

「何か知らん、どうも無いがな。」「君の家に美しい人が居るぢやないか。」之を聞くと柳之助は苦い、苦い顔をして、「うむ彼か！」と言つた限。「獨で承知してゐたつて、私には解らない。彼は何處の人？」「彼は何でもない。」「何でもないとは妙ぢやないか。何かだらう。」「類の妹さ。」「それ見給へな、お類さんの妹なら君にも義理の妹だ、それを何でもないとは怪しからん事だ。」柳之助は是非に及ばず、「それは然うさ。」「あゝ、それぢや泊懸にお手傳に來てゐると云ふやうな事實かね。」「然うさ。」「始めて見たが、姉様には些も背てゐないね。」「背とるものか！」と吐出すやうに言ふ。「大層愛相の好い、氣が利いてゐさうだね。」「如何だか僕は知らん。」「何といふ名だい。」「お鳥さんか、婀娜な名だ。」

君、強に還す方はあるまいかね、僕はもう彼が長く泊つとるやうなら、内には居らん意だ。」と柳之助は思込むで言ふ。

「何を知らない事を云ふのだ。内には居ないと云つたつて、誰の家なのだ。」
「僕の家さ。」
「自分の家を駆出すのかい、不見識極まるねえ。」と葉山は顔を顰める。

「それだから、何とか方はあるまいかと聞くのに、君はお島に惚れとるもんだから……。」
「おい、大概にしてくれ給へ、惚れてるとは餘りだよ。」

「けれども好いと云つたぢやないか。」
「好いと惚れたとは別さ。君はお島さんは嫌ひだらうけれど、憎いと云ふほどでは無からう、其と同じ事さ。」

「まあ其は如何でも可いとして、如何か還したいのだがね。」
「其程可厭なものならば還すが可いけれど、私の考でも、當分居てもらつて萬事の世話を頼む方が可からうと思ふ。有難は阿母様の經營で、私も同意だがね。」
柳之助は鼓舌をして、
「不要だ！」と顔を背ける。

「私の言ふのは、細君に其程情があるならば他にも相當の情が無ければならない、ねえ。忠臣は孝子の門に出づさ。一妹君は妾に人を嫌ひけれど、嫌ひにも二様あるよ。第一が不吃嫌ひさ。所謂蟲の好かないと云ふ奴だね。第二は理由が有つて嫌ふのだ、恨が有るとか、説が合はないとか、善人が悪人を嫌ふとか。同じ嫌ひでも是は可いが、君のは第一の方で、性質の悪いのだよ。それも性分なら是非も無いけれど、其が爲に他の深切まで無にすると云ふに至つては不都合だね。切めて深切にされたらば、今まで嫌ひだつたものも、好きと云ふ途には行かずとも、嫌ひでなくならぬには成つてもらひたいものだね、如何しても然う行かないかい。」
「僕は怎云ふ人間なのだから。」
「さあ、然云ふ人間だから困ると云ふのだ。」と葉山は稍喋り勞れた妹で、息を續きながら少時柳之助の様子を眺めてゐたが、
「それともお島さんに内に居られては、大いに迷惑するやうな事情でもあるのかい。」
此は如何なる意味であるのか、柳之助には解りかねたのである。
「迷惑するのは、可厭なのだからさ。」
「可厭なの？」

「お島に又可厭なものならから断れば可いのに。」
「今になつて那樣事を言つたつて所爲が無い。」
「それは此方で言ふことだ。」

葉山も母親と同意といひ、且お島を好いと云ふ人であるからは、智慧を借りたいにも、到底出来ない相談と思つたから、もう言出すまいと爲すが、是から還れば、又お島を見なければならぬ、と思ふと悚然とする。是ばかりは如何でも忪へることは出来ぬのであるから、其に就いて智慧を借るには、此葉山より外に人は無いと考へて、
「何と云つても僕は可厭なのだから、助けると思つて工夫してくれ給へ、ねえ僕は頼むのだ。」
「君が然う言ふなら然う爲るも可いけれど、考へて見たまへ、誠に理窟の合はない話ぢやないか。」

葉山の聲は漸く鋭い調子を帯びて来る。
「ねえ、他が折角深切に世話をしてくるのを嫌ひだからと云つて断る？ 人情として出来なないことだ。幾許嫌ひだと云つても、少しは其深切に絆されさうなものだがね、君のやうな變人は全く多度無いよ。」

時に因ると、葉山は其平生と打つて變つて、
「嫌ひだからさ。」
「嫌ひなの？」
「嫌ひなのは……可厭だから……。」
「それぢや逆戻だ。お島さんが君の世話を善く爲ると云つて、一妹甚だ感極に世話を爲るのだね。餘り世話を爲過ぎるので、それが可厭で還してつたのかい。」
「其も有るさ。」
「は、あ。」と葉山は口を開いたまへ考へてゐる。其(は、あ)が極めて怪しげな(は、あ)であつたので、柳之助は怪訝な目をして、其(は、あ)の後に來るべき言葉を私に待構へてゐる。
「それぢや嫌ひが變なのだね。」
「別に變な事は無い。」
「無い？ 君が懐儀がるのは、お島さんが何か大いに女房氣取で世話を爲るからぢやないのかい。」

「女房氣取？ 然うさな、然云つても可いかな。」と顔に胸の中で解釋してゐる。葉山は矢庭に、
「然うだ！」と膝を拵つて、
「確乎したまへ。」
「何が？」
「君は惚れられてゐるんだよ。」

極めて率直に、極めて痛切に、飽くまで痛切に言はねば止まぬ。其時には自から言す可らざる氣力があつて、必ず人を動かすのである。柳之助は面目無げに黙と俯いた。

「君の目にも能く世話を爲てくれると見えるのだから。見える？ 然うだらうとも、それで君は嬉しうとも、何とも思はないかい——如何だね。黙つて居る所を見ると、嬉しくはないと見える、是は怪しからん！ して見ると、君がお島さんの事を思つて顔に零す涙、あれは空涙だね——あれは偽だね！」

「何故？」と柳之助の尖聲を應けて、
「何故？ 偽に違無い！」と葉山も劣らず意氣込む。
「何故？」と柳之助の目は彌輝く。
「それぢや、他の深切も嬉しうと思はなければならぬ理だ。」

「思ふ！ 僕は思ふとも。然しお島は僕は嫌ひなのだから爲方が無いぢやないか。君は無理な事を言ふよ。僕が類を愛して居るならば、お島も愛さんければならんと言ふけれど……。」
「誰が那樣言を云ふものか。」と手酷く極付けられて、
「然うかい。」と柳之助は問ひて了ふ。

「馬鹿な！」と柳之助は可憐い目をする。
「馬鹿なことがあるものか。女房氣取で君の世話を爲ると云ふのだらう、それが惚れてゐるからさ。」
「惚れてなへぞ居やせんよ。」と鬱陶しさうに横を向く。
「惚れられてゐるか、ゐないか、其を感じない奴があるものか。」
「だから惚れてゐやせんと言ふのに。」
「惚れてゐないものが、何で女房氣取に世話をする？ 其が何よりの證據ぢやないか。」
「證據でも何でも、僕は可厭なのだ、嫌ひなのだから、如何かしてくれ給へ。」
「然う聞くと益不便だね、可いぢやないか、最少し一所に居て遣つたつて。」
「可かん可かん！」と膝を拵つて柳之助は其耐ふべからざるを示した。
葉山は柳之助が(女房氣取)と言ふ語を拒まぬ所から、切當お島は惚れてゐるものと早合點をしたのである。如何にもお島が殆ど(女房氣取)に世話をするのは事實に違無いが、その(女房氣取)は決して柳之助の女房氣取ではなくて、女房の女房氣取で、お島(女房氣取)の心の内には一點も柳之助に對する類は無

然として、益々劇しく流石に掛けたが、柳之助は背面になつてゐたから、其は石に矢を射るやうなものである。然しお鳥は立つ矢もあるものをと云はぬばかりに姑く見遣つてゐた。今日にも限らぬ、實に此頃は往々と然でない爲方が見える。自分に言ひさうな用をば元と言ふやうな事がある。それも慙云ふ氣の人物であるからと段々辨もして見たが、何やら然ばかりでもないらしい所もあるやうに想はれて、氣掛くないでも無かつた折から、此一條と二度まで挨拶を爲ぬ無愛相とが、酷くお鳥の心地を悪くしたのである。因で彼は自ら肩くして矢庭に二階を下りて了つた。其音を聞きながら柳之助は可憐いものを見るやうに振向いて、

「あ、慙つた！」

慙つたお鳥は其時は遂に二度と机の傍に來なかつた。氣の毒な事をしたとは柳之助も思ひながら、又慙なく可いとも考へる。然う考へる中にも、氣の毒なと云ふ念は絶えず往來して、餘り好い心地ではなかつたが、明る朝になると、お鳥ははや機嫌を直して、毎に變ることとも無い。慙なつて見ると、昨夜の氣の毒は忽ち忘れられて、寧ろ又慙らして遠くたくなる。可厭で、ならぬお鳥に三食ともに給仕をされ

るのが、毎日の苦痛で、渴いて飲まうとする水から煙が起つやうな想で、お鳥の顔を見ると、柳之助は半分の食慾を減じざるを得ぬ。家内なるもの、快樂が十とすれば、寡くとも其四は膳の上に無ければならぬ。外で金を費はうでもない柳之助は況て人一倍家内で慰められてゐた。類さんの給仕でなければ、決して案を把らなかつたものが、是では彌満足の出來やう理が無い。彼は其樂を享くべき時に最も深く苦まされるのであるから、彼のお鳥に對する不快の念は一食毎に増長すると云つても、敢て差支は無い。柳之助は近頃自分の氣で、色澤の悪いのを見て、是は畢竟お鳥の爲に消化力を得られて、十分に飯が食はれぬからではあるまいかと疑つてゐる。けれども此朝は平生よりも食が進むだ、葉山に授けられた策も今日中には行れて、明日から光風無月の天地に呼吸するのであると云ふ希望の爲に離されて、側刻に柳之助は出勤した。お鳥は食事をして二階の掃除をして、浴に行つて歸つて、身仕舞をして、丁度了つた處へ車の音がして、客來の様子であるから出て見れば、思も寄らぬ母親が來たのである。

傍に居られては嫌たい母親でも、少し遠く

て居て顔を見れば、飛立つほどに可憐い。早速二階へ案内して、

「よく來てねえ。」とお鳥は珍しさに摩付いて坐る。母親は然ほど嬉しくもなさうに、

「あゝ。」と鈍い返事をして、お鳥の白粉の薄過ぎるのを何か言ひたさうに見て、

「驚見さんは御出勤かい。」

「あゝ、毎日御勉強よ。でも阿母様能く出られてねえ、内も忙しいでせう。」

「あゝ。」

「何か用なの？」

「あゝ。」と母親は何やら屈託してゐる。その氣色でお鳥は屈託してゐるのは其用であらうと嗅つた。若しや自分に關つた事ではあるまいかと思へば、善かれ悪かれ氣になつて、

「何の用なの？」

「お前の事だ。」と母親は罪ある如くお鳥を見る。

「私？」と胸は怦々、

「何？」と目を瞠る。

實は此方に来る一週間ほど前に薄々縁談があつた、それをお鳥は小耳に挟むでゐたから、多分は其が關つたものではあるまいかと思つた。其外には自分の事で母親が飛んで來るほどの用事

はない理、それほどにして叱られるやうな咎のある覺は無し、十が九までは縁談と合點したのであるが、其にしては母親の様子と異なつたので、然して見れば縁談でもあるまいし、何とも推測は着かぬけれど、(お前の事)とあるから自分分の事。さあ何であらうか、と切ない固唾を嚙むでゐると、母親は又お鳥を見向いて、前替の顛倒になつてゐるのを一寸正して、

「今朝此から手紙が來てね。」

「兄様から？」とお鳥は覺えず顔を出す。

「あゝ。」

「然う？」とお鳥は昨夜の事が思合される。彼の様子と謂ひ、母親の氣振と謂ひ、何に爲る吉い耳ではあるまいと思へば、心弱くも胸は騒ぐ。

「而して兄様から何と言つてあげて？」

「お前に還つてもらつて、私に來て居て欲しい。」

お鳥は自分の耳を疑つた。

「何ですつて？」

其顔色を見ると、母親も二度言ふには忍びなかつたか、黙つてゐれば、

「私に還れと云ふの？ えゝ、還りませうとも！ 昨夜書いて居たのは那樣手紙…：然う、

それで阿母様今日來たの？ 然う。」

何氣ない鉢を見せやうとするほど、お鳥の懐へかれる胸の内は輪廻する。頬の邊は燃ゆるやうに赤くなつて、

「何云ふ理でせう。」と聲の調子さへ變つて來る。

「何も那樣に慙らなくても可いぢやないか、異しな子だねえ。」と母親は笑を作つて、

「畢竟お前では若いから何と無く氣が置けて窮屈だから、それで年寄の私の方が可いといふのさ。」

「然う手紙に書いてあつたの？」

「書いてはありはしないけれど。」

「それぢや如何だか判りはしない。阿母様其處に手紙を持つてゐて？」

「置いて來たよ。」

「何と書いてありました。」

「お前では馴染が薄いから何も遠慮があつて、用が頼み難い——まあ謂へば、お客が來てゐるやうで氣屈でならないから、私と代つてもらひたいと云ふのさ。」

「何日私がお客のやうに爲てゐたらう。」

「然うは書いてやないけれど。」

お鳥は少時考へてゐたが、忽ち手巾を

抛却して、

「それぢや私は嫌はれたのね！」

「然云ふ事情ぢやないよ。」と口には言ふものゝ母親も決して快い心地は爲ぬのである。お鳥は顔の熱氣で弱る目を襦袢の袖で二三回擦つて、後は眼鏡を拭き、

「然うに遠無いのよ。」

或は然うに遠無いと思ふのか、母親も嬉しく續く語は無くして居たが、旋て氣を變へた氣色で、

「何かい、不斷那樣やうな様子が見えてゐたかい。」

「私が嫌はれてた様子？」とお鳥は悔しきうに故と言ふ。

「又那樣事を嫌ふと云ふ事情ぢやないけれど、氣屈で迷惑さうな様子でもさ。」

「えゝ、それは始終那樣様子。」

どうせ嫌はれたからにはと云ふ氣で、お鳥は捨鉢な挨拶をする。

「お前はどうぞ嫌はれたくとお言ひだけれど、何ぞ嫌はれるやうな事でもお爲なのかい。」

是こそ母親の最も難かむと欲する所で、始めお鳥を見て不興であつたのも、正に之ばかりを懸念したからである。と云ふのが、母親の胸

中には別に深意のあるゆゑで、それは柳之助も
お島も、恐くは阿母様さへ餘り深くは知らず
唯母親一個で會得むでる一件の事がある。柳
之助がお島を嫌ふと云ふ事は、實に其件とは根
本的關係があるのであるから、それで母親は然
も無い手紙の一條も怪しからず苦になるので。
「私は別に嫌はれるやうな事をした覺も無け
れば、お島に入らうとも爲やしない。だから私
は歸るわ、兄様に嫌はれたつて些も困らな
くよ。」

思へば思ふほどお島は胸に据ゑかけて、
「私は這度悔しい事は無いわ！」と言ふより
蚤く手巾を顔に掩て、飲泣を始める。
「何だね、お前は。」と言つては見たもの、
嫌はれたとしたならば、然ぞ娘氣には悔しから
う、泣きたからうと、母親も不便の心の起らぬ
ではない。まして可愛い我子の事である、なるほ
ど悪い所は悪いと言はれてさへ、親の情では
快い氣持はせぬものを、嫌はれたと云ふ事情で
はなからうけれど、自分と代つてくれは餘り嬉
しくなかつた。自分は還されても、娘は来て居
てくれの方が、親の身にしては好ましい。
お島に泣かれる迄は、然まで深く母親は考
へなかつた、唯一個で會得でる件にばかり届

托して、何ぞお島が我儘な事でもして、柳之助
に疎まれたのではないかと、寧ろお島に對する
不興であつたが、さて此場に惹き見ると、我
子は我子で、依様可愛い。然し柳之助がお島を
嫌ふと云ふ事は、手紙の表にも無ければ、お島
に聞いた所でも、別に怎と云ふほどの事は無
い。その無愛想な性分で、變人なのも今更
た譯ではないから、何かに就けて打解けぬと云
つて、其をば直に嫌はれた證據に取ることは出
來ぬ。彼此考へ合せて見るに、嫌はれたと確に
言斷るほどの目處は無い。因で母親も一時は
疑つたやうなもの、全く例の偏屈から出た
事と思直して、お島を慰めたが、本人は容易に
得心は出來なかつた。假令嫌はれたでないに爲
よ、喜ばれたのではない。又嫌はれたならば嫌
はれたで一向管はぬ、柳之助などに好かれなく
ても困らないと思ふが、是までに氣を溜けて
世話もし、働きもしたものを、何が不足で中途
から還されるのか、其がお島は悔しくて、な
らぬ。自分は從來何處へ出ても、必ず氣が着く
と云はれた、如才無いと持てた、顔さへ出せ
ば、お島さんが来た！と他から囁しがられぬ
事は無かつた。それほどの自分とお島は私に信
じてゐる。此度泊に来てゐるのも、何も自分の

辭興ではない、種々母親にも頼まれたし、柳之
助が寂しがつてゐる様子を聞いて見れば、あ
氣の毒なといふ心から、故々世話を爲にも來た
のである。其世話を爲るに就いても、姉様への
同向と思ひ、兄様が可哀さうとも思ふから、有
らむ限の力を盡した意なので。設は程の事を
傳で爲たならば、甚慶に喜ばるであらうと思
ふのに、中途から還されるとは何事であらう。
それほど自分は足はぬものであらうか、不東な
ものであらうかと、お島は這度取辱を掻かされ
た事は無いやうに、返す／＼も唯其が悔しいの
である。

固より母親の知つた事ではない、母親に向つ
て怨を抒べる筋は無い、又餘り言過ぎると叱ら
れるに極つてゐるから、もう母親には言ふまい
けれども、言はねば濟まぬ胸の内、言ふ人には
屹と言はなければと、やう／＼涙を拂つて、柳
之助の歸來を嘆しと待つた。母親は又外に苦勞
があるので、是も浮かぬ顔をして、互に身に沁
みぬ話をしてゐた。

七の二

三時少し轉ると柳之助は歸つて來た様子。元
と話す聲が聞えるので、母親は指圖をしてお島

を出迎に起たせると、起ちは起つたが、階子を
下りると殆ど柳之助と擦違ひに、すうと着れて小
座敷へ入つて了つたが、其姿を見れば、悔し
いのが忽ち上衝けて、扉を開けると奥に、お島
は潜々と涙を零した、その又胸の内は沸返る
やう。

阿母様さへ居なければ、追駈けて行つて言ふ
だけの事を言つて遣るのだ。而して理屈が違つ
てゐたらば、兄様も何も有るものか、謝罪して
遣る。端然と手を支いて御辭儀をさして、立
派に謝罪せなければ承知しない。劈頭、どう
せ貴方の御細君やありませんから、姉様のや
うな理には參りません、と然う言つて遣らなけ
ればならない。然すれば彼人の事だから、必然
相俣して疎に口も利けはしない。暗々した聲を
して、決して那樣理ぢやないとか何とか曖昧な
ことを言つて、狼狽するに違無い。然う爲れば
猶言つて遣る、どうせお島に入らないのですか
ら、早速歸ります。長々どうもお世話様になり
ました、然ぞ御迷惑でございましたらう。お島
に入らないものを、私の方でも切て置いて下さ
いましてはお頼み申しません、自分の家があり
ますから、自分の家へ歸ります。
家への土産に、又私の後學の爲にきなること

ですから、何處がお氣に召さないのですか、其
を聞かして下さいましたと、管ふ事は無い、思入
れ諷話を言つて遣る。管ふ事があるものか、甚
慶事があらうとも、二度と再び此家へ來るもの
か、死んだつて、殺されたつて來るものか。決し
て決してもう／＼來ることではないから、
何でも管はず言ふだけの事を言ふ。而して、今
迄貴方の爲には是々々働いてあげましたが、
貴方は其が判りますかと、少し酷いけれど言つ
て遣る。それくらゐの事を言はなくて償ふもの
ぢやない。第一私の爲た事に何處に不足があ
るのでございませう!! 何處にでも不足があ
るなら、言つて御覽なさいまし。自分では不足
の無い意でございませう、貴方のやうな萬事に
お氣の着く、行届いた方の目から御覽なすつた
ら、私のやうな不東者の爲る事は、然ぞお氣に
召さないだけでございますから、何卒御遠
慮無く有仰つて下さいまし。

宛然敵の柳之助が目の前に居る氣になつて、
言ふだけの事を言つて去る其場の光景の想像が
終には事實であるやうに思はされて、
「え、悔しい!」とお島は我知らず片
膝を疊に撃きつけて、手巾を収裂いて、身悶
をして、悔し涙を零す。

え、もう言つて遣りたい、言つて遣りたい、
けれども、阿母さんが居るから、那樣事は言へ
ない。彼人單身なら屹度言つて遣る、然したら
偽ない女だと思つて吃驚するだらう。那樣人
に吃驚されたつて管ふものか、思入れ吃驚さし
て、可憐い女だと思はせて遣る方が可いとも。
何ほ女だつて這度に取を掻かされて、黙つて引
込むでゐるやうな、那樣意氣地の無い事がある
ものか。是非是非! 言はなければ承知しな
い、如何かして言つて遣らう。

考へれば考へるほど、お島は涙して、衝と起
つたが、
「あ、阿母様が居る!」と青菜に沸湯を
沃けたやうになつて、ばつたりと又坐る。坐
れば考へられる、考へれば我慢の爲きれぬほど
悔しい。劈頭一枚の手巾を焼鍋のやうに裂い
て了ふ。

七の三

此間二階では絶えず話聲がしてゐた。何を
言ふとも聞取れぬけれど、折々柳之助の聲が能
く聞える。其度にお島は憤悶する。
様子は知れぬが、如何にも母親とは打解けて
ゐるらしい。變入だと云ふからは、誰にも無愛

相かと思へば、母親とは那様に親しく話をする癖に、自分には如何であらう！ 寄らず願らぬやうにして始終通じてゐる。變人であるから誰にも那様かと思へば、母親には然うでない。然自分には嫌はれたに極つてゐる。那廢人物に嫌はれたかと思へば、我ながら情無いらぬ、とは謂ふものゝ又能く考へて見れば、腹も立たない。那廢理の解らぬ人物に嫌はれたからとて、其が如何したのだ！ 可厭で幸ひ、好かれては迷惑。いつそ此儘無言で歸らうか、とお鳥は思つて見る。同時に又考へたのは、どうも阿母様の語氣では、私が這廢取を掻かされても、那様に悔しいとは思つてくれないらしい。而して何方かと云へば、少々誤つても私を置いてもらひたいやうな様子。先から何を話してゐるのか知れぬけれど、もしや彼人を宥めて、那云ふ不東なもので我慢をして、最少し置いて遣つてくれなど、嘸みでもしてゐるのではなからうか。噫、可厭な事、可厭な事！ 誰が？ 自分は幾ら其氣でも、阿母様が何と話をしてゐるのか知れない。那様事でもあつたら取の上様、私は未だそれほど遠慮はしない。甚麼話をしてゐるのだから、聞きに行かなければならない。もし那様話であつたら、是から直に歸つて了はう。

怒う覺悟してお鳥は小座敷を出た。徐に階子を履つて、次の間の障子を啓けるまでは、密と聞えた聲が、俄に何か掩蔽せられたやうにぱたり歌むで、故とらしく煙管を撃く音がする。其は母親である。阿母様まで袖にして、ええ、水臭い、とお鳥は益腹が立つ。區分の紙門を啓けかけると、捲着るやうに顔を見合せて母親は、
「少し今お話があるのだから、お前さんは下へ行つておいで。」
お鳥は胸が塞つて言が出ぬ、此悔しきは退くにも退かれず、其儘黙と立つてゐると、
「よう、少し下へ。」と言ふ母親の目は更に多くの言を合むで、お鳥の眉間を射る如く見る。母の言には背かれぬ、お鳥の助の姿を見て一言も云はずにのめく、と往かれうか、又水臭い母親に向つて多少の恨の無い理にはゆかぬ。彼此黙つて爰は引込みかねた。
散々怨を言ひたい柳之助は空々しく彼方を向いてゐる、頼に思ふ母親には逐立てられる、而して自分は四五寸紙門を啓けたばかりで、入ることもならず、然も間拔に立たされてゐる。その頃の悪く悔しきは何とも彼とも謂はれぬ。此胸を快くする爲には、如何なる目に遣はう

と、決して苦しくないと思つた。お鳥は上階ける涙を吹むで、
「私は是から歸りますから！」と言ふが否や紙門を確と閉てる。
「何の事です！」と母親の聲のする頃には、階子を亂次へ下る響がして、その中で何を溶したのか、鏘然鏘然！ お鳥は眼鏡を破して了つたのである。物音の氣立しさに驚いて老婢は臺所から溜手を拭き、断着ける。其途で破れた眼鏡を拾つたが、之に就けても尋常事ではあるまいと思ひながら小座敷の扉を啓ければ、道は抑、お鳥は泣伏してゐる。元はおろおろ聲で、
「まあ、お嬢さん如何なさいました。」
嬉しくも問はれるほどお鳥はいと悲しい。今までは忍音に泣いてゐたのが、堪えかねて衝と聲が出る。
「如何爲すつたのでござります。まあ、お眼鏡まで這廢に爲すつて。」
眼鏡と涙とは其實何等の關係も無いのである。然し元は何ぞ關係の有るやうに思つた。三度開返るゝまで、涙を禁めかねたのであるが、やうく、歎ながら、
「私は悔しいわ。」と辛くも言つて、後は

又暫く泣入る。段々飾られて、竟に其悔しい事情を話せば、元は他人でありながら母親のやうに辛くはなくて、
「それはまあ飛でもない事を！」と今更主人の變人に呆れ返つた。有樂に年の効は、其と口へ出して主人の没分曉を喚散すやうな事は爲ぬ、なるほど飽くまでも主人の曲つてゐる事、お鳥の腹を立てるのは理の筋を言つたのである。然し彼は主人に成代つて重々其心得違を詫びて、お鳥の心を和げやうと努めた。而して、今往かれては自分一人は何程困るか知れぬから此年寄を助けると思つて、最少しの所胸を撫つて辛抱をしてくれるやうにと、お鳥が來てから家の爲になつた次第を陳べて、
「御存の通り且那は那云ふ一國者でゐらつしやるけれど、お肚にはもう少しの毒も無い、宛然子供の方な方なのですから、何卒まあ惡からず、決してお氣にはお留めなさらぬやうに。」と元は幾度も頭を低げて詫るやう、宥めるやら、語に語を盡した。お鳥も今は氣の毒になつて、元の手前は泣くに泣かれず、涙は拂つて見せたが、柳之助に對する(悔しい)の念は、之が爲に一涙でも減じたのではない。寧ろ、他人の元さへ這廢に思ふものを、其世話をされた當人

が難有いと思はぬのみか、こつそり母親へ手紙を出して、好く逐排はうとは何事であらうと、なほくくく其處置が然でない、其了簡が憎い、と執念は益々深くなる。
この元が柳之助の母親であつて、此様に手甲摩つて詫びたにしても、お鳥は決して恨を忘れやうとは思はぬ。彼が奉公人であるからは猶の事、那まで言つてくれる志は嬉しい、無に爲たくはないけれども、誤られる筋が違ふからには、勘辨の爲やうも無ければ、又勘辨を爲すべきでもない。元の謝罪は元の謝罪、柳之助への恨は柳之助への恨、とお鳥は其二件の胸の納所を別にして、元の前は好く作へて左も右も済した。
程無く夕飯の膳立が始まる。お鳥はもうくもう這廢家の用は火箸一本持つまいと覺悟したなれど、年寄の元を一人動かすのも勿し、先の種々言つてくれた深切も忘れられぬ、彼との馴染も今日が別と思へば義理からも情合からも手傳はずには在られなくなつて、此家の爲に働くのではない、元の手傳をして遣るのと極めて、お鳥は小座敷を出たのである。旋て座敷に膳が並べば、元は二階へ知らせに行く、續いて二人の徐々として来るのを合圖に、お鳥は飄

然と其處を出て、又小座敷へ入つて了つた。柳之助も母親も席に着いた、——お鳥は出て來ぬ。二人は箸を取つた、——未だ出て來ぬ。因で元は迎に行つたが、姑くすると、情々還つて來て、
「お嬢さんは御飯は召上らないと有仰います。」
翌日の午前お鳥母子は二挺の車を揃へて柳之助の門を出たが、それより母親も還つて來ず、鷺見の家内は再び其寂しい主人と老婢の二人になつて了つた。柳之助は引續いて出勤を怠らず、朝々例のステッキを擧げて籠籠と出て行つては、籠籠と歸つて來る。生徒の受は不相變善い。授業に於ては決してお鳥を取扱ふやうに不深切なものではないのである。彼を(妻が)先生と呼ぶ同僚も、其妻(が)を失つた後の柳之助を見て、別に變つた様子も無いのを酷く怪むだ。休憩の間も人とは話を爲せぬやうにして、毎も窓の側に立つて、兩手を背後にして外を眺めてゐる。折には書を見てもゐれば、其も吃ふ。それらは皆舊の通で、唯一事變つたのは、(妻が)と言ふ言を口に爲ぬやうになつたのである。

八の一

夜になつてからは一時机に向つて勉強を爲す。柳之助は開ゆる勉強家である。悲の爲に久しく其勉強を廢してゐたのが、學校へ出るやうになつてから氣を取直して又始めたのも、究竟は己の好む所で憂を忘れやうと云ふ氣。彼は世間の狭い身であるから、平生他よりは机上に多く友を求めて、心を慰むる所は其専門學の研究である。

宵の内は昔く無理にも其で紛らされるが、到底長く思出さずにはゐられぬ、一二時間の後には必ず不覺心になる。其時は又夕暮に慄まされるやうなものではない、常に彼が學理の研究にも、晝間よりは夜中こそなかく深く思を凝し得るやうに、生憎其事も亦鋭く考へられる。彼が最愛の妻に就いて考へるのは、失望に就いて考へるも同じことで、深く考へるのは則ち深く失望するのであつた。人は渴くと理不盡に水を欲がる、柳之助の戀しさも其の理不盡で、幾と身も世も爲に忘れられるまで悶えても苦むでも、仍放されず苛れるに堪へかねては、寧ろ快く死なうかと、弗と迷の出ることさへある。

或夕暮から遙に甚しく凄涼に慄まされたやうに、又或夜から遙に此失望の苦痛を耐へ

元が頻に語を爲るやうに仕向ければ、懊惱がつて、他の言は能くも聞かずに、思出しては、「元、寂しいなあ」とばかり。言はれる元の身も随分寂しい、お島に歸られて落膽してゐるさへあるに、主を見ればいと氣が滅入る。四十九日も過ぎた此頃でも、未だ悲歎は少しも薄がぬ様子で、折々目を泣腫してゐるのを見る。其當座のやうに取亂してこそゐないが、思窮めてばかりゐる證は、始終憮然としてゐる。此分では如何なるであらう、病氣でも出なければ可いが、と元は其も亦苦勞になる。何程傍から氣を揉むだ所で、別に爲む方も無い、自分も配稱を喪して、經驗がある、まして豫人の夫に先立たれたのであるから、其悲歎は可愛い奥様に別れたやうなものではない、それでも日子の經つに於いて、終には何か忘れられるもの。半年も一年も然らう、思窮めてゐられるものではないから今に、と思直しても、氣の滅入ることは猶且滅入る。

柳之助は近頃遙に甚し、思類れて、問さへあれば太息を吐いてゐやうと云ふので、有繋に學校に出てる間は、氣の浮かぬながらも左にか右にか紛らされてゐるが、内へ歸るとなると、其途から漸次鬱出して、門を入ると俱に胸は憂

感じた。固よりその凄涼もこの失望も今に始つたのではない、切なる悲を覺えた日から引續いて、日毎に夜毎に其が爲に苦められてゐるのではあるが、此頃になつて遂に一層甚しく感じられるのである。夕暮の凄涼は左も右も例の散歩で漸く夜、夜の更に此間々に澆ぐに一合の酒を以てして、酔を藉りて無理に睡る、睡つて總に忘れるのである。恁して酒の力で忘れるのが夜毎の例である如く、彼は一時から二時までの間に必ず目を覺すが癖となつた。覺めると與に戀しさの念は再發する、謂ふに謂はれず仕くなる、忽ち全身の血は水りつゝ、或所へ曳入れられるやうに覺える、耐りかねて寒さも何も忘れて寢床から跳起きる、而して劇しく室の内を運動する。其間も絶えず胸の内では悶え悶えしてゐるので、此時彼の眼は全く乾いて、懼の有る如く腫きながら、或ものに逐はれるやうに慄々しく往きつ復りつして、我と我胸を抱き合せて、焚ゆる如き呼吸で喘いでゐる。稍一時間も此状態で、漸く疲れて寢床に倒れると、それから朝までは一息に寐る。是が夜毎なので、柳之助は苦しさも苦し、不思議にも思つて、後には病ではあるまいかと考へた。夕方の微昏なる時の其の身に沁みて凄

る。或人は之を或人に不審した、すると、乙の或人は笑つて、「當然ぢやないか、無は指す事は出来な

「然でないよ。」と甲の或人の曰く、「無の現在は無ぢやけれど、過去よ、過去を言出さんのが餘程不思議ぢやないか。」誰も誰も此疑問に對して確答を與へる者は無かつた。(妻が)先生とまで仇名を取つたほどの柳之助が、弗と其(妻が)何であつたとも、恁であつたらばとも言はなくなつた。

外に異常の點を覺めたなら、顔色が憔悴して、何となく氣力が衰へたが、始終惘然と窓の外ばかり眺めてゐるやうな風であつたから、彼等の目には、平生も彼の顔色は憔悴して、氣力は衰耗して見えたので、今更際立も爲ぬのか、舊の仇名をそのままに彼は(妻が)先生と呼れてゐる。或人は此の今は妥當でないことを説いて、プロフェツサア、キンドウ(窓)と改めるが可からうと言出したが、行はれずにつた。

學校に出てるは此有様、家に歸つては全く二階に閉籠つて、寝てゐるのか起きてゐるのか知れぬほど閑寂にしてゐる。せめて食事の時には、

つて、座敷へ入る、二階へ昇る、机の前に坐ると、今まで辛くも紛らしてゐた思が一時に紛と寄せて来て、埒も無くお類の事を考へさせる。其が爲に柳之助は悲み、悔み、嘆き、慕ひ、恨み、憐み、而して遂には泣かされる。漸く其涙を抑へたかと思へば、又追懸けて泣かされるまでの順序を反覆される。悲歎無で、如しく同じ事を反覆し反覆しても、涙は飽くことを知らず毎も新しく催される。但之を幾度と無く反覆す心は遂に勞れて、其苦に堪へかねると、忽ち机の傍を起つて、例の室の内を頻に運動する。

其最も能く悲環の廻るのは夕暮である。四邊は次第に暗くなるにつれて、凄涼は逼つて来る。哀は頻に誘はれる、其時こそ胸も張裂けるばかりに切思めて、在るべき心地も爲ぬやうに覺える。或夕暮時に耐りかねて、戸外へ飛出して、近邊を行遍つて見たのであるが、氷を擦したやうな寒い風の中でも、家の内よりは其思を紛らす便は有つたか、翌日からは黄昏になれば必ず戸外へ出なければ慄はぬやうになつて、其時刻には六七町も歩いて歸つて来るのが、毎日の習慣となつた。恁して歸つて来ると、恐るべき夕暮は過ぎて燈が點いてゐる、

夜になつて憶出す時の其の味氣無き！酒が醒めて眞夜中に目を開く時の其の仕しき！尋常ではない、と自分も熟思つて、(何故近頃急に這腰になつたのであらう？此有様で一個月も續いたら、病氣にならずには指かぬ。或は既に病氣なのかも知れぬ、一種の精神病かも知れぬ。幸に病氣でないにして普通、普通の病氣よりも更に苦ししい。或病人が發熱するやうに、時を限つて始る所は、如何しても一種の病のやうだ。噫、精神病にでもなつたのか!)と柳之助は遂に疑を抱いたのである。

畢竟恁云ふ事になるのも餘り類さんの事を思ふからだ。類さんの事はかりは然し忘れられん。忘れられんけれど、毎日毎晩のやうに苦しむ想をして、それで類さんが復つてくれるなら可いが、唯苦むばかりで何の効も無いのだ。此後彌那が劇しくなれば、必ず體を傷める、體を傷めれば彌那痛苦を益さんければならぬ。自分が此上病氣になつた日には、其心細さは如何であらう。看護をしてもらふ類さんは居らぬ、傍から慰めてくれる類さんは居らぬ、此二階に唯獨瘦衰へて臥て居る？ 咳、思出しても悚然とする。病氣にはなるまい、病氣

でもないが、君だつて長い間には何れ機嫌を迎ふのだらう。まあ聞き給へ、唯話だから。何、迎はない？ 一生迎はない。それなら病の事、所帯を持つてゐるには當らない理だ。直に機嫌が来ると云ふのなら、折角持った所帯を疊むで了ふ事は無いけれど、君の今の様子では、なか／＼急には迎ひさうもないから、それなら……」

「急にも晩くも僕はもう一生妻を有たんと言ふのに。」

と柳之助は忽ち機嫌を損じる。

「らむ、是は悪かつた。一生有たない！ 然うだ。然うだが。是は話だからまあ聞き給へ。有つにした所で急な事ぢやない。あれさ、話だと云ふのに、可いかい、斷つて置くよ、話だよ。急な事ぢやないと、而するとだ、君は彼家に獨法師で居る間は、必ずお類さんの事を思出さずにはゐられないよ。如何して、如何して忘れられるのか。忘れなくつても替はないのさ、始終思つてゐるのも可いやね、唯其だけの事で済みさへすれば、いや、所が済まない！ 然だらうね、現在病氣にもならうとしてゐる始末ぢやないか。ねえ、體を働して了はなけりやならない。然して見れば、不實なことを言ふや

うだけれど、是は如何あつても全然忘れなければなるまい。其處で、忘れやうと云ふには獨で居るのは極悪い、――紛れると云ふ事があるまい、何でも紛らさなけりや可くないのだ。幾らお類さんの事だから好いと云つたつて、忘れられずには快々してゐるのは随分辛からう。苦しい？ 然だらうとも。體に障るよ。今の分で打遣らかして措いて一月も續いて見給へ、立派な發狂になつて了ふ。今更所帯を疊むで下宿をするよと云ふのも變なものだから、曩日も言つた通り、まあ當分私の家へ来てゐたら如何だい。下宿から見れば遙に上等さ。座敷料は戴かず、炭錢は御附にして、それで浴が立つて、洗濯もしてあげて、第一食物が好いよ。少々滞つたつて可厭な顔をするぢやなしさ。高いから減けると言へば無料までには減けやうと思ふ。何と如何だらう！ 觀音様が店を出したつて悠うは行くものか。實の有つたものだらうが、これで惚れなきや先方が無理です。」

柳之助は少く所思があるので、即答しかねて熟と考へてゐると、

「強ひて勤める譯ぢやないが、君の病氣に對する國手葉山の處方はまづ此外には無いね。左も右も獨で子然内に引籠むで居るのは何より毒

だよ。」

太息交りに柳之助は、

「實際然うだね、僕も然う思つとる。」

「それぢや別に那様に考へることは無いぢやないか。折角持った所帯だから、疊むで了ふのも面白くないと云ふのかい。」

「何有、那樣所帯など！ 君の言ふ通りだ、妻が居なけりや無用なものだ。妻が居なくなつてからはね、自分の家も自分の家のやうな心地は爲やせんもの。唯飯を食つて生きて居るだけなら、別に所帯を持つとる必要は無いさ。」

「然う思ふなら疊むが可いのかい。」

「然うだね。」

彼は葉山の忠告を容れて、我家とは思はれぬ所帯は疊むで了つて、身輕になつて勉強爲やう氣になつたのである。然し、深切に再三言つてくれる同居の件に就いては、左か右か言を濁して、全で諸君は言はずに別れて了つた。

八の二

一日二日は切に其事ばかりを考へてゐたが、さて分別は容易に着かぬ。葉山へ同居はしたいが、お種と云ふものがある、是が必ず第二のお鳥となつて、自分を苦めるに違無い。又獨で子

になつては困るから、今後は類さんの事を忘れるやうに努めやう、類さんの事さへ忘るれば病氣にはならぬ。何とかして忘れやう、今日から斷然忘れやう、と固く心に誓つた其夕暮も、昨日に同く凄く寂くて、其夜も同く味氣無くて、其夜中も同く目が覺めたので、翌日は其に懲りて、一層固く心に誓つたのである。誓つても誓つても仍日毎夜毎に苦められることは變らぬので、柳之助も有難に我ながら可憐いやうな氣がして、

（如何したのだらう。我は如何しても如何かしてゐる。固よりそれは類さんの事は忘れられん。自分で忘れやう、忘れやうと爲るけれど、猶且始終考へてゐる。その通り思ふことは思ひいけれど、十分もう諦めては居るのだ。是程諦めてゐるのに、如何いふものだらう、解らん！ して見ると病氣かなあ、醫者に係らうかなあ。）

彼も今は幾と其辛さに堪へかねて、此上は人手を藉りて苦患を脱けるより外は無いと思つて、一軒急云ふ事があるものであらうか、其を先づ賢ねやうと、葉山に會つて仔細を話したのである。

一々聞いて見ると、葉山も心釋でない。

「それは成程病氣と云つても可からう、まあ病氣だね。然し藥を飲むだから直に復ると云ふ理には行かない、腹の痛いのや、便通の無いのとは大分違ふから。何しろ子然獨で居るのが其が大毒なのだよ、病は其處に在るのだ。學校へ出てゐる間は那處事は無からう！ 然だらうとも。君は思込が深いから、獨で居るとお類さんの事ばかり考へてゐるのだらう。それほど思ひい人だ、その人が居なくなつたのだから、世の中が面白くないのも無理ぢやない、それは察する。萬々察してゐるが、その思ひいを棄却しなけりや逆も可けないね。成程忘れやうとしてゐる？ それは可い。如何しても忘れられ……ない？ それが可けないぢやないか。

然う言ふと又憶られるかも知れないけれど、忘れる方は幾多もあるのだ。然し君は強ひて忘れやうと爲ないのだから困る。甚處にしても忘れやうと思へば……あゝ有る段ぢやない、大有りさ。唯内に打坐つてゐて、忘れない、忘れないと言つてゐたつて、それは不可だよ。君は其種だらう。笑つてゐる所を見ると手の筋だね。それぢや可けません、依樣木に據つて魚を求めるのだ。因だから、此間のお鳥さんの件などは好かつたのだけれど、君が變屈だから困るよ。其

後音信は無しかい。阿母様も内々悩んでゐるのだらう。此頃然やつて苦しませられるのも、一はお鳥さんの怨念だね。で、阿母様は君の今後の事に就いて何と言つてゐる。別に何とも言はない？ 因でだ。君の意見は如何いふの？ あのお類はあのまま長く持つてゐやうと云ふのかね。別に考へない？ 最一つ因でだ、女片の無い所帯と云ふ奴は不都合なものだ、何、元が居る？ 元などは女片の部ぢやありません！ 那は極切か、極切切さ。もつと好い女片さ。

細君と云ふものが無ければ、所帯を持つ必要はまあ無いのだ、然うだらう。それでは如何だい、彼所帯を疊む氣は無しかい。而して如何する？ まさか國に出るのぢやないよ、一先所帯を疊むで、小綺麗に下宿でもして、暢氣に勉強を爲たら如何。

「然しね、又憶られるかも知れないけれど、」

と一服付けたがら柳之助の氣色を見れば、

「何を、僕は何も憶りはせんよ。君の忠告に對して僕は憶る方は無い。」

「巧く言つてよ。」 と葉山は煙管を落して笑ふ。

「善し、屹と憶らないね、話合つたね？ 實は外

然らば、可厭なことは日毎毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出来ぬ。葉山の所へ行かぬまでも、此所帯は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう？ 相當の下宿を探るか、葉山へ同居をするか。何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帯に越した事は無い點もある。因で擦つたり揉むだりして、幾度も考直しくした末、如何あつても所帯は仕舞つて、轉居をして、氣を變へるのが何よりであると決した。

然らば、可厭なことは日毎毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出来ぬ。葉山の所へ行かぬまでも、此所帯は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう？ 相當の下宿を探るか、葉山へ同居をするか。何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帯に越した事は無い點もある。因で擦つたり揉むだりして、幾度も考直しくした末、如何あつても所帯は仕舞つて、轉居をして、氣を變へるのが何よりであると決した。

然らば、可厭なことは日毎毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出来ぬ。葉山の所へ行かぬまでも、此所帯は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう？ 相當の下宿を探るか、葉山へ同居をするか。何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帯に越した事は無い點もある。因で擦つたり揉むだりして、幾度も考直しくした末、如何あつても所帯は仕舞つて、轉居をして、氣を變へるのが何よりであると決した。

然らば、可厭なことは日毎毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出来ぬ。葉山の所へ行かぬまでも、此所帯は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう？ 相當の下宿を探るか、葉山へ同居をするか。何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帯に越した事は無い點もある。因で擦つたり揉むだりして、幾度も考直しくした末、如何あつても所帯は仕舞つて、轉居をして、氣を變へるのが何よりであると決した。

然らば、可厭なことは日毎毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出来ぬ。葉山の所へ行かぬまでも、此所帯は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう？ 相當の下宿を探るか、葉山へ同居をするか。何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帯に越した事は無い點もある。因で擦つたり揉むだりして、幾度も考直しくした末、如何あつても所帯は仕舞つて、轉居をして、氣を變へるのが何よりであると決した。

然らば、可厭なことは日毎毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出来ぬ。葉山の所へ行かぬまでも、此所帯は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう？ 相當の下宿を探るか、葉山へ同居をするか。何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帯に越した事は無い點もある。因で擦つたり揉むだりして、幾度も考直しくした末、如何あつても所帯は仕舞つて、轉居をして、氣を變へるのが何よりであると決した。

分別は後にして容易に手の着けられる始末から
と思付いて、一日元の針仕事をしてゐる所
へ出掛けて、

「お前急になつて裁縫をしてくれんか。」

見苦しく取散した所へ恐多くと云ふ風で老
婢は慌て、座間を片附けながら、

「甚だお仕事でございます。」

「夜具だ。」

「お夜具？ 縫直すのでございますか。」

「いや、新しく縫ふのだ。」

老婢は（へえ）とばかりで、異しな事と思つ
た。

「縮緬の夜衣と云ふのはあるかなあ。」

「はい、御座います。」

「紋付は異しかなあ。」

「へえ？」 と元は彼の問よりも未だ異しい
顔をして、縮緬の紋付か、夜衣の紋付か、其意
が解りかねてゐる。

「紋の付いた夜衣だ。」

「如何な事でも……」 と元は笑出した。此
に葉山が居たならば、然ぞや呼吸の續くまで洒
落のめした事であらう。柳之助は眉を動かさず、
「然うかなあ。」 と老婢の笑止むを待つて、

「夜衣だから、紋が付いても誰も見やせん
から管はんぢやないか。」

老婢は又可笑がる。

「私は又わざ／＼御紋付の夜衣をお拵へなさ
るのかと存じたのでございますよ。」

「それは可笑いさ。」 と柳之助も始めて少し
ばかり笑つて、

「俺の言ふのは、夜衣の紋付よ。お前は紋付の
夜衣だと思つたのか。」

夜衣の紋付に紋付の夜衣、何方でも同じ事で
ありさうなものを、と老婢は又其が可笑くて
健か笑ふ。

「那樣に可笑いか。」

「且那樣は本當に面白いことを有仰います、而
してまあ何をお拵へになるのでございます。」

「紋付で夜衣を拵へるのだ。」

「へえ？」 と老婢は又解らなくなる。

「尋常の衣服で夜衣は出来るのかな。」

「何と有仰います。」

「一反あれば夜衣は出来るか。」

「然やうでございますよ。」

「然すると、尋常の衣服を解して、それで夜衣
は出来るのだな。」

「然やうでございますよ。」

此の答の末柳之助は佛間の小座敷へ老婢を連
れて、押入の簾からお類が大事の縮緬の紋服
を出させたが、其は亡人が祝言に用いた、鳩羽
鼠の襦袢で、質な更紗縮緬の二枚下着が附い
てゐる。其更紗の質なものも、裾襷でないので、
長く着られるやうにと、母親の心を籠めたので
あるものを、未だ／＼裾襷も着られる筈で、
其主はじき数に入つたと思へば、形見こそ今は
仇なれで、元は不覺に鼻を塞らせる。花桶の
其ではないが、簾筒を啓けると蒲団と起つ麝香
の香に、柳之助は胸迫つて、少時は主従とも言
は無かつた。

「もう一枚、能く着とつた綿の衣服があるだら
う、那を見せしてくれ。」

と柳之助は簾筒の傍を離れて、座敷の内を歩
き始める。

「あの縮緬のでございますか。」

「縮緬だか何だか知らんが、びか／＼光るの
さ。」

細い矢新崩の、（おさすり）に着た縮緬の小袖
を出して見せると、其だと言ふ。さて縮緬の紋
服は夜衣にして、縮緬を蒲團に爲る、出来るだ
け早く仕立てるやうにと重ねて縫へたが、爲
を思つて飽くまで元は不承知であつた。なる

「それぢや拵へてくれ。」

「へえ。」 と元には未だ全然と會得ぬ。

「蒲團は如何だ。蒲團も出来るかな。」

「やつぱり御服でございますか。」

「然うだ、やつぱり衣服で拵へるのだ。」

「而して其は且那樣が御召になるのでございま
すか。」

「然う俺が着るのだ。」

元は慥然として、さあ大變！ 且那樣は頭
お氣が觸れたさうなと、然う思へば此五六日別
けて色澤の悪い柳之助の顔を、其と無く打目成
つては、眼色に氣を著けたが、變つた所も無い
らしい。幸ひに未だ然ほど劇しくはないが、些
少は確に違つてゐると見て取つた。

彼が二十年も前深川に所帯を持つてゐた頃、
隣の長屋に要結が住んでゐて、その夫は荒の
者であつたが、是が不圖發狂した。その病の
初發は、或日外から歸つて來ると、蒲團に妙な
ことを言つて、氣味が悪いから一寸來てくれと
呼れたので、直に行つて見ると、手拭を掛けて
藥籠の中を覗き散して、もう少しだ／＼と言つ
てゐる。容器に怨うと變つた所は無いが、唯眼
色が可惡くなつて置々してゐた。狂人は何で
も眼色で知れると云ふことを、其時人に教へら

ほど主の命であるからは、而して主の物である
からは、煮て食はうと、炙いて食はうと、おの
れの横出る所でないとは知つてゐるが、當初に
疑つた如く、此所作は如何しても正氣ではな
いと思ふから、如何に奉公人でも餘の手前唯諾
諾とばかり言つてはゐられぬ。まして如家の母
親などに對しても、演戲無事な事を爲しては合
はず顔も無いわけと、口を締めて此思立を止
めたのである。然し彼は既に止める時止る
まいとは覺悟した。何故となれば、徳云ふ無法
を思立つほどに氣が狂つて居るからは、是非を
開分ける耳は得持つまいと思つて、が、左も右
も止めるだけは止めて見て、開分けたらば幸
ひ、聴かぬやうならば、脇は長まつて置いて、
此始末を如家の方へ知らせやう、と胸を定めて
さて止めて見たのである。

案の定言へば言ふほど氣色を損じて、

「お前が拵へるのが可厭なら頼まん、仕立屋へ
遣る、俺が持つて行く。」

と例に無く息巻く工合、元は斷然其の正氣で
ない事を確めたのである。因で、然やうならば
私が致しますから、と御意次第になつて、件
の二枚を風呂敷に包んで、其を抱へて茶の間へ
退ると、なほ跟いて來て、直に取掛れと通る。

元も之には弱つて、種々に言飾へたが、柳之助は傍に坐つて押でも動かぬ氣色。又此で遅々してゐたら、引攪つて飛出しさうに見えるので、爲む方無さに溢々膝の上に紋服を披けて、鉄を持ち持ったが、懸立つやうな紅絹の色と、好もしい染の香氣とに、目も眩れ、心も消ゆるばかり、(勿鉢ない)で胸も張裂けるやう。餘り切無さの一寸道に、元は鉄を委いて、用ありさうに又紋服を把玩引廻して、襟を見たり、裾を見たり、力の有らむ限恠恠してゐると、其氣も知らず柳之助は、

「好い夜衣が出来るだらう。」

其尾に附いて元は再び懇々と播口説いた、恠した立派な紋服をば夜衣などに爲て了ふことの暴珍と、朝家の親御様に對しても辨辯の無きに、如何も鉄の刃が當てられぬを、之ばかりは思止るやうにと。

誠は面に動れて、命乞もするやうに、如何に老婆心とは謂ひながら、餘りの事々しさに柳之助も驚かされた。實に元は此を先途と面を犯して諷めたのである。爲に彼の心も動いて、なるほど年寄の身にもなつたら、傍に附いてゐて恠云ふ無法な事を爲せるには忍びぬであらう其とても畢竟は此方の益を思ふから。左も右も

「つまらんよなあ、世の中は。」と縁縁の小袖を引寄せて、それを丸めて枕に仆れる。

元も其胸中を察して見れば、お可憐と思はぬではないが、男の口からは餘な言分で、様子を知らぬ目には、同然手拭を擧げて薬罐を覗くやうに見ゆるであらう。何處までも情の深いには違無いが、深過るもの變なものと考へた。

「それは然らでもございませうけれど、女子は女子、殿方は殿方で別でございませう。一生お獨では、それこそ御不自由で、逆も續くものでございませぬ。昔から女子は操を立通しませんが、殿方の然らざるりませぬのは、女子の寡居で不自由なのは左か右かなりますけれど、殿方では其辛抱が出来ないのでございませう。ですから、殿方は奥様を二人有たらが、三人有たらが、誰も何とも申しは致しません。女子の方は爲れば辛抱の出来るものを、又外の男を有つては濟まない義でございませうから、操を立てるが道としてあるのは、其處なのでございませう。」

「やあ、元はなか／＼學者だね。こりや感心した、感心したよ。」

「あれ、可厭でございませぬ。」

「然らう言ふ、世間では然らう言ふのだ。然し、男

事情を話さぬのが悪かつた、裁から棒に註文したゆゑに、如何するのかわたし驚いたのであらう、とやう／＼心着いたので、百個日の後は此所帯を巻む事から、荷物は朝家へ還す一條、彼への形見額まで具に聞かせると、元の驚愕は益々太甚しい。それでこそ紋服の一枚くらは引裂くのさへ無理は無と思つた。事情を聞くほど、如何かしてゐるのではあるまいかの疑團は彌解けぬ。

なか／＼紋服を暴珍にするくらゐな事ではない、もつと／＼大きく氣が觸れてゐるらしい。其大きさは到底催娯風情の手も口も出せる所ではない、いづれ朝家の親御様も何とかが言はれるであらうし、葉山様も其晩には又何とか爲さるであらうからと、まづ／＼手拭を擧げて薬罐を覗くやうな取留らぬ所作の無いのを、元は其身の厄免にして、左か右か柳之助の言ふことが會得めたのである。然らう思つて見れば、始から深川の隣のキ印のやうに眼色が變つてゐたでもなし、變な調子も無かつたし、世間で謂ふ發狂とは違ふ、女に溺つて譯もなく家藏を潰したり、恠に牽かれて見す／＼大損を爲る例と同じやうな、一時の迷とでも云ふのである、と其は其で釋然解つたとして、さて此を仕舞つて其

だつて女だつて人間に差は無からう。男は不自由しては困る、女は不自由しても困らんと云ふ理窟は無いぢやないか、誰の不自由も同じ事だ。

世間の人はね、能く話をする時自分の細君の事を(驕)など言ふよ、ね、然らう言ふ人が能く有る。それがお前、紳士とも謂はれる人がだよ。俺には如何いふ理だか解らんね。何ぼ自分の妻だからと言つて、(驕)とは失敬ぢやないか。何で那樣に輕蔑するのだらう。俺は他が(驕)など言ふのを聞くと、(畜生)と言つるとやうに思はれて、不愉快で耐らんね(畜生)と言ふのも同じぢやないか、那樣に輕蔑しとる細君なら、有たんが可いのだ。其等の人は一鉢如何云ふ精神で妻を有つとるのだらう。妻と云ふものを下女か何かのやうに考へとるのだ、それだから其細君が類さんのやうに死なりでもすると、下女が出て行つたやうに直に代を迎ふ。而して其を當然のやうに考へると、世間一般に、那樣方が有るものか！俺は然らうぢやない、俺は細君は朋友だと思つとるのだ、深切な朋友だと。實際然らうぢやないか。」

「然らう言ふ、世間では然らう言ふのだ。然し、男

から如何爲るのやら、有繋に其も聞きたい。「それで、何でございませうか、一先此をお引攪ひ遊ばして、暫く御勉強を爲さいますして、又何頃御家をお持ち遊ばすので？」

「それは今から解らん。」

「いづれお持ち遊ばすのでございませう。」

「もう面倒臭いから持つまいかとも思つとる。」

「それでも貴方、又奥様が御出になりましたら然らうは……。」

と言ふのを柳之助は引手繰つて、

「奥様なんぞ来るものか！俺は死んだ奥様の外に奥様は有りませぬ。」

元も或物を引手繰られた心地で、柳之助の顔ば探すやうに詢して、

「では、もう奥様はお有ちになりませぬので？」

「有つものか、一生有たんのよ。」

「一生お有ちになりませぬので？」

「もし俺が先に死んで、奥さんが残つて居つたら、元、猶且奥さんは一生寡で居るよ。然らう云ふ約束だもの、俺も一生獨で居るのだ。それだから一生忘れん爲に是で夜具を拵へて置くのぢやないか。」

彼の語氣は漸く沈むで、後は氣の腐つた太息をして、

「然らうだらう、然らうさ、無論然らうさ、二人と無い朋友だ。朋友が死んだと云つて、直に代が出るが、出来やせんだらう。下女なら幾多も代がある、其だつて、是は好いと思つた下女の代は滅多にあるものか。猶更細君ぢやないか、其代が容易に……所か全く有りはせんよ。」

「それでは有りましたらはお迎ひ遊ばしませう。」

柳之助は嚴に頭を掉る。

「有つても迎はん！又有る理は無！」

「それは御座いませぬか存じませぬが、若や御座いまして、お迎ひ遊ばしませぬので？」

「うむ、迎はん！決して迎はんよ。それは不自由な事も知つとる、男は女と違つて、操を守らんでも可い事も知つとるさ、然し俺は他の者を奥さんに有つ氣は無いのだ。類さんの事は如何しても忘れられんもの、忘れられん間に有つことは出来ん。然らう。然し俺は一生忘れられんから、一生有たんと極めたのだ。既往の事を考へて見ると、類さんには非常に世話になつたのに、生きとる時ばかり大騒をして、其人が死んで了ふと直に忘れるなど云ふ、那樣薄情な事があるものか。死んでも死ななくつても、世話になつたのは世話になつた

のだし、可愛いのは依然可愛いのだ、死んで了つたから如何でも可いと云ふ氣になるやうでは本當の夫婦の情ではない。だから、俺は類さんは死んでも猶且生きると時のやうに思つると、一日だつて類さんの事を思はん日は無いよ。類さんが生きると内俺が他の女を可愛がつたら、類さんは甚だに恨るだらう。恨る恨らんは措いて、類さんは俺一人の事を思つとるのに、俺の方では他の者を可愛がると云つては實に濟まん義だ。那樣事が人情として出来るものではな

いさ。可い可い、生きると内できへ那樣事が出来るもの、死んで了つて居らんからと云つて出来るかい、死んだらば猶更氣の毒で出来んぢやないか。既に死ぬと云ふ事が可哀さうなのだ、親や夫やね、又那したい、恚したいと思ふ事を遣して、未だ二十二や約で死ぬ！ 遺棄可哀さうな事があるものか。何爲に世の中に生れて来たのだ。唯悲しい思を爲に來たやうなものぢやないか。其だけでも十分可哀さうなのだ。

ほつたりと涙を零して、

「其上に俺が又他の者を嫁に迎つて、今まで類さんと暮して居つたやうに面白さうに一所に居つたら、類さんの心地は甚だだらう！ 屍に纏つと云ふ語がある、死んだものを打つのだ、

酷い事の譬に能く言ふ。幾許怨が有つても、死んだものを敵手にするのは卑怯だ。死んで了へば怨は消える、ねえ、怨が有つてさへ、死ねば線香の一本ぐらゐは上げて遣るべきだ。まして陸じくした夫婦ぢやないか、那樣氣の毒な事が出来るものか。如何なる不自由にも換へられんから、俺は一生獨身で暮す。死んだ上に夫は他に奪られる！ 遺棄可哀さうな事があるものか。死んだのは如何も爲方が無いから、せめて俺だけは他の者と夫婦にはならん、是が類さんへの寸志だ。類さんの死んだのに較べれば、俺が不自由するくらゐは何でもない。類さんも死んだら、俺も不自由する！」

元は話をしてゐながら、思迫る餘に半は獨語になつて、覺えず悲を漏すのである。元は挨拶に窮つて、

「御尤でございませうとも。」

餘りと思ひながらも、理詰めて哀さに、その意に恃ふことは折から言出されもせず、縮緬の紋服を暴珍にするぐらゐに止立を爲すも氣毒になつた、彼の鉄は情氣もなく竟に小袖の襟の縁を非と斷る。

十

お種はふと目を感じた。枕頭のラムアの光は幻のやうに、添寝の保は餘念も無い顔をして小い肝を立てる。何氣無く隣の寢床を見れば安火を入れた夜着は人の膝を立てたやうな形をしてゐるが、枕ばかりで夫の姿は無い。はつと思つたが、居ない理、未だ歸らぬのであつた、晚い歸來であるが、それとも未だ時が早いのか、と起回つて枕時計を見れば二時十分過。

二時過ぎたのに歸來の無いのは、今夜はもう歸らぬのであらうか。會社の方達と小飲に行くと夜の更けぬ事はないが、理事の百瀬様は御一所では、又大勢藏者などを呼散して、舉句は何處かへ……に違無。交際も可し、間には御外宿も可いけれど、此頃は近所に能く火事があるし、又方々へ縁元が入つて物騒だと云ふのに、恚ふ時は可成早く歸るやうにして下されば可いのに、猶且酔ふと面白くなつて、後では何も百瀬が所好だから敵はないなど、好いことばかり言つて、御自分もお嫌ひではないのだから爲やうが無い。

外では風が凄しく吹捲る。

あゝ可厭だ、劇い風だ。

壺所の方でびりりと柱などの干割れる

音がする。何だか氣味の悪いと思ふ矢先に、ぱたりと紙門に打當る物音。お種は懐然として息を凝したが、傳聲が轉側を打つたらしい。

今は全く目も覺めて了つて、火事でも無ければ可いがなど、案じ過して黙々してゐると、風の隙を滑つて遙に狸囃子が聞える。庭の軒端を簞々と風が何かに觸るのであらうけれど、人などが忍むで屋根へ昇るやうにも意はれる。地盤の鳴くやうにラムプはぢい、時計は札札、或は遠くに、或は近くに、何とも付かぬ響きが絶間無く耳に入つて、睡らうとしても落着かれぬ鼻頭へ、床の梅が香が芬々と来る。

睡られぬに就けて夫の歸來が待たれる。二時は過ぎたが、三時頃に歸つたことも無いではない。お歸來が有るか知らぬ、有れば可いが、頼に思はるゝ車の音さへ聞えぬ、巡查も巡らぬ、誰も通らぬ、卒然に二三羽の月夜鴉が啼立てる。

思はしき目に目を瞑つて凝然として居ると、忽ち戸外に登音がしたのである。もしやお種は袷まで被つた夜着の襟を背けて、聴耳を欲てれば、其音は駒下駄で、はたはと我門に近く、子。さてはお歸來か、と胸を動悸させて、猶能く聴けば、夫の登音ではない。夫の登音でも

ないものが、益近いて、遂に門口と覺しき邊ではたと停つたので、お種は背筋を氷で麻でられるやうに悚然として震へる。

停つたまゝで、待てども動かぬ。

胸は早鐘を撞くやうに騒ぐのを、熱と悸へて益耳を澄してゐれば、やうく動いて、其聲は後戻をした、かと思へば又立返つて門口の邊に停る。放火か、賊か、二つの内！ とお種は耐りかねて起きて見やうとしたが、其も可恐し、何か爲るまで打遣つても措かれず、如何したら可からう、と首を擧げて四邊を眺すと、夫の枕頭に煙草盆がある、煙草がある、是則免と引寄せて、氣立ましく唾壺を連打にして、

「えへ、えへん、おほん。」

後に又二つ撃いて、外の様子を覗せば、何處から喚付けて來たのか、はや二三頭の犬が必死と吠立てる。其聲に保が目を覺して泣出すのを、隠しながら氣を配つてゐると、最も善く吠える犬は、一聲高く叫んで、健か打据えられた音、お種は寝んれんやうも震舞で、斷然奥の阿爺様を起さうと覺悟した。もう呼ばうか、さあ起たうか、と躊躇してゐる間に、外の曲者は聲を揚げた。

「葉山、葉山！」

是はと思ふ間も無く、徐に門の戸を丁々、犬は輪連に吠付くのを、逐ひながら又丁々。

「おい、葉山、此を啓けてくれんか。」

まづは怪い者でもなかつたか、とお種は味と息を吐いたが、さて誰の聲やら記憶が有るやうでも、急には心當が付かぬ。左も右も寢間を出て、出窓の戸を一枚啓けると、外は眞晝のやうな月で、眩さに顔も向けられぬ。颯と吹込む風は折角の寢温を餘さず振擻つて、殆ど絶えも入りさうな寒さ。格子の間から斜に覗けば、蹠蹠つて唸る犬、退歩しつゝ吠ゆる犬、餘り吠えて勞れたらしい犬、見えるのは大ばかりで、人の姿は隠れて、但其影法師が長く地に曳いて眼前に横つてゐる。

「何でございませう。」 と聲を懸ければ、其影は動いて、

「あゝ、驚見です。」

記憶のある聲と思つたお種は、と聞いて今は少しも疑はぬ。

「おや、大相お遅く。」 と言ひさま閑然と戸を閉てる。

犬は未だ倦かずに吠切る。柳之助は例のステツキを擲つて又一つ吃はせると、見事に外されて、發天と大地を撲たされる、凄然と落して、

「あ、痛……つ。」と手を振るやら、嘘くやらしてゐると、門の戸が啓いて、

「如何なさいました。」とお種が顔を出す。

「今大を撲失つて、手を撲つたです。」

「勿々にステッキを拾つて、門を入りながら、遅く出て如何も御厄介です。」

「如何いたしましたか。」と閉鎖をするお種の横顔をば、身近に置いてあるラムプの光が一杯に照してゐるのを、柳之助は側へ突立つて、暗い所から眺めてゐたが、平生の無愛想！その無愛想が絶然としてゐるやう。その絶然としてゐるのに劣らず柳之助も苦い顔をしてゐた。

閉鎖をして丁ふと、お種はラムプを把つて前に玄關を上りながら、

「此方へ入らつしやいませ。」と、

「入らつしやいではなくて、逐出すやうに開える。其後に置いて、柳之助は座敷へ通れば、火鉢の角に燈を置いて、お種は直に次の間の関へ入つたので、外套を着たまゝ寒さうに立つてゐたが、此時気が着いて見ると、鐵瓶が架けてあつて、湯がちん／＼沸いてゐる。もう三時だと云ふのに、慙して火を熾して、湯が沸いてゐる、何の爲であらう。葉山は夜中に起きて茶でも飲むのか知らぬ。葉山は随分種々な事を識つて居つて、

種々な事を爲る男だから、是も亦自ら用ゐる所があるであらう。今に聞いて見やう、と自分は燈をさへ消して寝るのに、湯が沸してゐるには、何の爲かは知らねど、その用意に驚きながら、冷たいと痛いで痺れる手を鐵瓶の胴に摩擦して、葉山の起きて来るのを待つてゐたのである。お種の寝間へ行つたのは、葉山を起しに行つたのとのお種の助は想つてゐる。庭でお種は寝衣の上に銘探の不斷羽織を引被けて出て来る。

「大相お遅く、何方の御歸で。」とお種は火鉢の前に坐ると、直に鐵瓶を下して、馳走ぶりに火を撥ける。

「家から来たです。」とばかりで、柳之助は寝間の方へ氣を奪られて、一向葉山の起出でる氣勢のせぬのを待違うが、つてゐる。

「おや、然うで。」とお種は炭を加いで、側面に布巾を被けた茶道具の盆の在るのを引寄せながら、

「何ぞ急な御用でも？」

「いや、別に……。」と可成く話を避けるやうに逃げながら、葉山の起きて来るのを待つたが、寝間はいつまでも聞寂として、誰の起きたらしい音もせぬので、

「あ、痛……つ。」と手を振るやら、嘘くやらしてゐると、門の戸が啓いて、

「如何なさいました。」とお種が顔を出す。

「今大を撲失つて、手を撲つたです。」

「勿々にステッキを拾つて、門を入りながら、遅く出て如何も御厄介です。」

「如何いたしましたか。」と閉鎖をするお種の横顔をば、身近に置いてあるラムプの光が一杯に照してゐるのを、柳之助は側へ突立つて、暗い所から眺めてゐたが、平生の無愛想！その無愛想が絶然としてゐるやう。その絶然としてゐるのに劣らず柳之助も苦い顔をしてゐた。

閉鎖をして丁ふと、お種はラムプを把つて前に玄關を上りながら、

「此方へ入らつしやいませ。」と、

「入らつしやいではなくて、逐出すやうに開える。其後に置いて、柳之助は座敷へ通れば、火鉢の角に燈を置いて、お種は直に次の間の関へ入つたので、外套を着たまゝ寒さうに立つてゐたが、此時気が着いて見ると、鐵瓶が架けてあつて、湯がちん／＼沸いてゐる。もう三時だと云ふのに、慙して火を熾して、湯が沸いてゐる、何の爲であらう。葉山は夜中に起きて茶でも飲むのか知らぬ。葉山は随分種々な事を識つて居つて、

「あ、痛……つ。」と手を振るやら、嘘くやらしてゐると、門の戸が啓いて、

「如何なさいました。」とお種が顔を出す。

「今大を撲失つて、手を撲つたです。」

「勿々にステッキを拾つて、門を入りながら、遅く出て如何も御厄介です。」

「如何いたしましたか。」と閉鎖をするお種の横顔をば、身近に置いてあるラムプの光が一杯に照してゐるのを、柳之助は側へ突立つて、暗い所から眺めてゐたが、平生の無愛想！その無愛想が絶然としてゐるやう。その絶然としてゐるのに劣らず柳之助も苦い顔をしてゐた。

閉鎖をして丁ふと、お種はラムプを把つて前に玄關を上りながら、

「此方へ入らつしやいませ。」と、

「入らつしやいではなくて、逐出すやうに開える。其後に置いて、柳之助は座敷へ通れば、火鉢の角に燈を置いて、お種は直に次の間の関へ入つたので、外套を着たまゝ寒さうに立つてゐたが、此時気が着いて見ると、鐵瓶が架けてあつて、湯がちん／＼沸いてゐる。もう三時だと云ふのに、慙して火を熾して、湯が沸いてゐる、何の爲であらう。葉山は夜中に起きて茶でも飲むのか知らぬ。葉山は随分種々な事を識つて居つて、

種々な事を爲る男だから、是も亦自ら用ゐる所があるであらう。今に聞いて見やう、と自分は燈をさへ消して寝るのに、湯が沸してゐるには、何の爲かは知らねど、その用意に驚きながら、冷たいと痛いで痺れる手を鐵瓶の胴に摩擦して、葉山の起きて来るのを待つてゐたのである。お種の寝間へ行つたのは、葉山を起しに行つたのとのお種の助は想つてゐる。庭でお種は寝衣の上に銘探の不斷羽織を引被けて出て来る。

「大相お遅く、何方の御歸で。」とお種は火鉢の前に坐ると、直に鐵瓶を下して、馳走ぶりに火を撥ける。

「家から来たです。」とばかりで、柳之助は寝間の方へ氣を奪られて、一向葉山の起出でる氣勢のせぬのを待違うが、つてゐる。

「おや、然うで。」とお種は炭を加いで、側面に布巾を被けた茶道具の盆の在るのを引寄せながら、

「何ぞ急な御用でも？」

「いや、別に……。」と可成く話を避けるやうに逃げながら、葉山の起きて来るのを待つたが、寝間はいつまでも聞寂として、誰の起きたらしい音もせぬので、

「あ、痛……つ。」と手を振るやら、嘘くやらしてゐると、門の戸が啓いて、

「如何なさいました。」とお種が顔を出す。

「今大を撲失つて、手を撲つたです。」

「勿々にステッキを拾つて、門を入りながら、遅く出て如何も御厄介です。」

「如何いたしましたか。」と閉鎖をするお種の横顔をば、身近に置いてあるラムプの光が一杯に照してゐるのを、柳之助は側へ突立つて、暗い所から眺めてゐたが、平生の無愛想！その無愛想が絶然としてゐるやう。その絶然としてゐるのに劣らず柳之助も苦い顔をしてゐた。

閉鎖をして丁ふと、お種はラムプを把つて前に玄關を上りながら、

「此方へ入らつしやいませ。」と、

「入らつしやいではなくて、逐出すやうに開える。其後に置いて、柳之助は座敷へ通れば、火鉢の角に燈を置いて、お種は直に次の間の関へ入つたので、外套を着たまゝ寒さうに立つてゐたが、此時気が着いて見ると、鐵瓶が架けてあつて、湯がちん／＼沸いてゐる。もう三時だと云ふのに、慙して火を熾して、湯が沸いてゐる、何の爲であらう。葉山は夜中に起きて茶でも飲むのか知らぬ。葉山は随分種々な事を識つて居つて、

彼は長年此家に往來してゐる事であるから、可成會はぬやうくとは代つてゐたもの、主の妻であつて見れば、萬事會はずにも済されなかつた。會ふことは数知れぬほど會つたが、傍に出で居られても、早く行けがしと思ふばかりで、目を着けて浸々視るほどのことは無い。又他から見るやうなれば見られぬやうにして丁ふので、可恐いものは見たさであるが、可厭なものには誰しも傍目も轉らぬ。見ることも見られる事も、柳之助は快しと爲ぬのである。今夜ばかりは不思議に例の可厭でもなく、然かと云つて別に如何と云ふ氣のあるでもなく、究竟お種なる蟲の好かぬ細君ではなしに、或一個の女子に對する心地で、其細なら容なら様子なら、思はず譲らず目を留めて視た。今夜見るお種は彼の平生考へた葉山の妻ではない、葉山の妻は却然として、愛憐の無さうな、何處かに圭角のある、男らしい理窟でも言ひさうな、一から十まで彼の氣に適はぬものであつたが、今夜のお種は信に靜波に、弱々とした所も見て、不相變愛嬌も世事も無いが、更に憎むべしとも覺えぬ迄に、女らしく可憐であつた。其所爲か又美しくも見えた。固より醜い容色ではない、人に依つたら軽々しく美人と言ふかも知れぬ、

色も白し、目鼻立も揃つてはゐる、が、自分は決して美しいなどと思はなかつたのが、今夜は左も右も美しいと可されたのである。何故に然うまで變つて見えたのかは、柳之助も自分ながら解らぬので、洗晒した小豆色のフランネルの單衣に襟を懸けた柳條の布子を重ねて、紫太織の細帯を緊めて、寝亂れた襟は直け勝に胸の白いのが覗かれる。天神の鬘が少しく縫れて、萎えたやうな肩狀をして、何處と無く取締無く、寒さうにしてゐる姿に、夜闇の燈の射した所は、格別好く見えたのである。柳之助がお種を見る時は、毎も神々しく髪を結つて、服裝を整然として、一寸坐るにも勿躰奥く、専ら奥様として見識を取つてゐる最中のみであつたから、此人に這般柔い様子の有らうとは實に想も着かず、之が大きに柳之助の目には美しく見えたのである。猶彼の心を動かしたのは、夫を待たびて目を覺してゐたのと、床を暖めて、湯まで沸して待つてゐると、其まで爲てゐながら、夫の今に歸らぬとで、其胸の中を思遣れば、明日は知らず今夜の所は不便の人でならぬ。自分は歸つても誰待つものは無い人、お種は待つても歸られぬ人、大小の差こそあるが、心細さは似た

ものである。自分は一度たりとも親さんに想ふ思を爲せたことは無いが、之が親さんであつたら如何するであらう。柳之助は獨で考へて獨で益不便にして丁つて、何とか慰めて遣らなければ心が済まぬやうに覺えて、「どうも居るものが居らんと寂しいですなあ。」と取着も無く言出した。「然うでございますよ。貴方も然ぞ種々御不自由で在つしやいませう。未だ些の昨日のやうに思ひますけれど、もう廿日計で百個日にお成なさるのでございますねえ。」「然うです。」「然ぞ御不自由でゐらつしやるだらうと思ひましてね。」「不自由は可いですが、唯寂しくて、寂しくて、それが如何も敵はんですね。葉山君は何ですか、今夜のやうに他で泊られる事が折々あるですか。」お種は寂しげに笑を洩して、指環を拵りながら微に俯いた。「種が悪い時、言出し難い時、指環を拵りながら其を眺めるのは、お種の癖であつた。其の癖はれぬ可愛らしい様子をば、葉山の妻に見せられやうとは、甚慶事にも思設けなかつたから、

柳之助は殆ど其人のお種であることも、恐くは自分の柳之助なることも忘れて、心のみ怪しげに衝跳いた。例には内を空けるが、其は交際で如何も爲方が無い、とばかりでお種も深くは言はぬ。因で話は切れて了つたが、四時も半となるのに、柳之助の歸る氣色は無い。お種は益々寒くはなるし、少しは睡くもなるに、假初にも客であれば、一人置放にして御免を蒙る譯にも行かず、泊れと言へば、今にも歸るやうなことを言ふし、如何にも手を着けかねて困果てた。柳之助は又、午前と午後とを取違へてゐるやうに優々と坐り込むで、それで想と話のあるでもなく、睡くもなから如此徹夜の明けを待たう、と云ふ了簡でもあるらしく唯兀然としてゐる。此寒いに歸りたくもないとならば、泊りさうなもの、泊るが好ましくないならば、面白くも無さうに惘然してゐるとも、勿々と歸りさうなものを、行きたくもなければ、泊りたいでもない懸極で氣の重さうにしてゐるのは、何ぞ心の落着かぬ事が有るに違無い。其でこそ昨夜更に故々尋ねても来たのであらう。左も右も葉山に逢つて歸らねば氣が済まぬので、恚して何

方付かずに遅々してゐるのとお種は考へたから、切めて話でも無くては彌撒手をしてゐられるので、又其事を訊ねて見る。二度まで柳之助は(いや、別に)で紛らして了つたが、今度はやうく寒みかねた牀で、「用ではないです。用ではないですけど、：實に僕は弱つたです。」と泣出しも爲さうに見えたので、お種も驚かされて膝を前めると、折から鶏が啼立てる、其にも管はず柳之助は家を飛出した仔細を話始める。成程彼の言ふ如く、用事ではない、然し尋常一様の用事よりは未だ厄介な、久しく打絶えてゐた夜半の寢覺が今夜卒に再發して、而も其が從來つひに覺えぬほど、寂しくて、心細くて、抑へてもく、曳入れられるやうで、如何にしても内には居耐らなくなつて、寒いも夜深も考へる邊無く、寢衣の上に外套を引被けたまま、飄然と飛出して、實は來る氣も無しに來たのである。お種は唯呆れるばかり！一鉢那樣事が有るべきものだか、何だか、皆無暗には落ちぬので、餘程變な人もあれば有るものと、却つて余にも懸けず軽く聽いてゐたが、柳之助は尋常ならぬ氣色で、その心細い家へ還る氣力は無いらしく見えたから、いつそ泊めたが可からう、

とお種は獨斷にして、夫の寢床をば此方に移して、須臾夜も明けるゆゑ、暫く横になるやうに勧めたのである。すると柳之助は何と思つたか、衝と起つて、「いや、歸りませう、僕は歸ります。」翌日の點燈頃柳之助は又尋ねて來た。葉山は此から一盃飲まうと云ふ所で、茶の間の火鉢の傍に膳を控へて、鯛の菘乳羹を沸々いせながら、柔かい袴を引被けて、全然冬籠の支度の出来た所を、今更起たせられるのも辛いと、奥へ通されるのは嫌ひの柳之助とは知りながら、幸ひ誰も居らぬから此へ、と婢に案内をさせる、可恐吃驚と云ふ應で入つて來たが、葉山一人で細君は見えず、桐の世話なども自分で爲てゐるのを、希しげに眺して、「お寒う。」「いや、お寒う。今旨い物が出來る所さ、まあお坐んなさい。」「遊びに來たよ。」と柳之助は外套のまま火鉢の前面に跼坐を掻く。「昨夜も來たさうだつたけれど、生憎留守で。」「君は何處へ泊つたのだ。」

「好い所さ。」と葉山は片笑みながら鐵瓶から徳利を引出す。

「何處だい、好い所と云ふのは。」

「毒見をしたのを柳之助へ差して、情人の所さ。」

「情人?!」と稍愕然とした柳で、

「怪しからん! 虚だらう。」

「虚な事があるものか。」と葉山は眞顔になつて見せる。

「怪しからんね! 其は何處だ。」

「聞いて何に爲る。」

「柳之助は叩と塞つて、

「何にも爲やせんけれど、唯聞くのさ。」

「漫然情人の所なんぞが教へられるものか。」

「何故?」

「財の在所を云ふのも同じ事で、物騒だからね。」

「馬鹿な!」と柳之助は苦り切つて、然も衝付けるやうに盃を返して、

「虚なのだらう、君、ねえ、本當の事を言ひたまへよ。」

「で、もし本當なら如何する氣だね。」

「那樣事を! 無論僕は黙つては措かん。怪しからんぢやないか、情人なんて何だ。君は細君むでゐるから、漫然飛込まうものなら啖ひつかれる、用心をして行き給へ。」

「偽を八分に聞いても少しは懸念の氣味で、

「那樣馬鹿なことを!」

「偽と思ふなら、行つて啖ひつかれてお出なさいな、手前は知らないから。」

「啖ひ付くは、葉山が例の滑稽にしても、風を引いたは、何やら信らしいので、柳之助は氣を變へて弱く出る。

「それは濟まん事をした。實は僕もね、昨夜更に來ては迷惑だらうとは思つたけれど、實際内には居られんかつたものだから... 悪かつたね。君が居ると思つたから來ただけだ。」

「...」

「知れた事さ、丑の時詣の行く時分に亭主の留守を視つて來れば...」

「何時僕が視つて來たよ、失敬な!」と柳之助は眞に成る。

「何時僕が視つて來たと言つたよ。他の細君を病氣にして置きながら、逆捻を吃せるのは手厳しいぢやないか。」

と聞けば又氣の毒になつて、

「本當かい、君。」

「偽だと思ふなら奥に寝てゐるから行つて見る

が有るぢやないか。細君を何と思つとるのだ。」

眉を上げて詰りかければ、

「是は難しくなつた。ぢや情人は虚で、實はと行かう、實は、飲過ぎて朋友の所へ詰り込むで了つたのさ。」

「それぢや可いけれど、家を空けるのは止し給へよ。」

葉山は笑ひながら、頭を抑へて、

「畜生め、昨夜細君から頼まれたな。」

「何を? 僕は頼まれやせんよ。」

「お種が宜く申しましたよ。」

「逸早く柳之助は間違をして、

「細君何處かへ行つたの。」

「何處へ行くものか。今朝から奥に寝て居る。」

「寝てゐる? 如何してね。」と少しく慌てれば、葉山は故と萎れながら、

「病氣でねえ、困つたよ。」

「病氣? 本當かい、君、風でも引いたのかい。」

「なか〜。」と葉山は苦々しうに首を擡る。

「甚麼病氣だよ。」

「だから甚麼だと言ふに。」

「大病! どこと噂に就いてゐるのさ。」

「それは僕は濟まん事をしたなあ。」

「君は誠に濟まん事を爲たよ。」

と不知しく爲れるほど、傍に居るのも奇痒いやうで、何と挨拶を爲たものであらうか、と大目に柳之助は氣にしてゐるのを、葉山は其と横目に見ながら、ちびり〜と飲みかける。

「君、濟まん事を爲たね、僕は。風邪は氣を着けんと可かんよ、妻も初發は風邪だつた。風邪は一寸した事のやうに誰も思つとるけれど、多くの病氣は風邪からだ。それは早く薬を飲まん可かんね。」

彼は意を留めなかつた浴後の風邪が因で、最愛の類さんを亡つたのであるから、今お種が風邪と聞いたのは、心の痛と聞いたよりも、腸加答兒と聞いたよりも、なか〜死に近い病であるやうに、怒せならず可惡く覺えたのである。

「體は大事に爲んと可かんよ! 人間と云ふものは割合に脆いものだ。」

と後は何か物の見えるやうに柳之助は壁を睨めてゐれば、葉山は一寸振向いて、

「旦那、お吸物が冷めます。」と言ふのを現に聞きながら柳之助は趨然と座を起つて、

有繁に柳之助は眞偽を疑つて、葉山の顔を見めたが、其顔には何と書いてもなかつた。

葉山は鍋の物を椀に取分けながら、

「而も君大病は君ゆゑさ。」

「君は何を言ふ? 僕が知るものか。」

「君は知らない? 然うかい、それぢや君の所爲ぢやないのだらう。して見ると誰だらうな、昨夜遅く來た客は? 今朝の天明まで居たのは。」

と諷刺られて、柳之助は躍起となる。

「僕さ、それは僕だらう。」

「あ、君かい、それぢや依然君だ。」

「僕は妻君を如何も爲やせんよ、怪しからん?」

「何ぼ阿多福でも、豈敢に君が今戸焼の火入と間違へて、蹴付けてお出額を打毀した義ぢやないさ。けれど君のお合手を爲てゐたらう、ねえ、それで頭風を引いて、今朝から頭痛で、眩暈がして、悪寒がして、鼻が塞つて、苦しがつて唸つてゐるだらうぢやないか。成る程風を引いたのは自分の洒落さ、然し引かせたのは驚見柳之助君だよ。さあ、それだから切めて見舞にも行つて遣り給へ。濟麼苦しい思を爲るのも驚見さんの御前だと、今朝から言續にして君を懸

「一寸僕は行つて來やう。」

「何處へ行くのさ。」

「妻君の所だ、僕は見て來る。」

「御見舞かい、それは御奇事な事だ、...は可いが啖ひ付かれるよ。」

「可い、もう那樣言。何處に臥とるのかね。」

「本當に行くのかい、是は不思議だ。君は始終來ても家人に會ふのを可厭がつてゐるぢやないか。二十九歳になつて人見識を爲る人ぢやないか、その驚見君が如何したものだ、寒いから雪でも降らなけりや可いが。」

「行つちや異しいかな。」と葉山の胸を見下して杉立に立つてゐる。

「何が異しい事があるものか。それが體なので、從來の方が餘程異しくて御在なさる。」

「然うだらう、だから行くのだ。それに君は僕の爲に妻君は風を引いたと言ふぢやないか。」

「いや、それぢや自分が風を引かせたから見舞に行くので、然も無ければ死ぬほどの大病でも訪ねてはくれぬ氣かい。不實なものだ。」

と横を向いて飲むでゐる。

「決して那... 那樣事は無いさ。まあ行つて來やう、何處だか教へてくれ給へ。」

葉山は婢を呼んで、案内を吩咐ける。其に續

「好い所さ。」と葉山は片笑みながら鐵瓶から徳利を引出す。

「何處だい、好い所と云ふのは。」

「毒見をしたのを柳之助へ差して、情人の所さ。」

「情人?!」と稍愕然とした柳で、

「怪しからん! 虚だらう。」

「虚な事があるものか。」と葉山は眞顔になつて見せる。

「怪しからんね! 其は何處だ。」

「聞いて何に爲る。」

「柳之助は叩と塞つて、

「何にも爲やせんけれど、唯聞くのさ。」

「漫然情人の所なんぞが教へられるものか。」

「何故?」

「財の在所を云ふのも同じ事で、物騒だからね。」

「馬鹿な!」と柳之助は苦り切つて、然も衝付けるやうに盃を返して、

「虚なのだらう、君、ねえ、本當の事を言ひたまへよ。」

「で、もし本當なら如何する氣だね。」

「那樣事を! 無論僕は黙つては措かん。怪しからんぢやないか、情人なんて何だ。君は細君むでゐるから、漫然飛込まうものなら啖ひつかれる、用心をして行き給へ。」

「偽を八分に聞いても少しは懸念の氣味で、

「那樣馬鹿なことを!」

「偽と思ふなら、行つて啖ひつかれてお出なさいな、手前は知らないから。」

「啖ひ付くは、葉山が例の滑稽にしても、風を引いたは、何やら信らしいので、柳之助は氣を變へて弱く出る。

「それは濟まん事をした。實は僕もね、昨夜更に來ては迷惑だらうとは思つたけれど、實際内には居られんかつたものだから... 悪かつたね。君が居ると思つたから來ただけだ。」

「...」

「知れた事さ、丑の時詣の行く時分に亭主の留守を視つて來れば...」

「何時僕が視つて來たよ、失敬な!」と柳之助は眞に成る。

「何時僕が視つて來たと言つたよ。他の細君を病氣にして置きながら、逆捻を吃せるのは手厳しいぢやないか。」

と聞けば又氣の毒になつて、

「本當かい、君。」

「偽だと思ふなら奥に寝てゐるから行つて見る

が有るぢやないか。細君を何と思つとるのだ。」

眉を上げて詰りかければ、

「是は難しくなつた。ぢや情人は虚で、實はと行かう、實は、飲過ぎて朋友の所へ詰り込むで了つたのさ。」

「それぢや可いけれど、家を空けるのは止し給へよ。」

葉山は笑ひながら、頭を抑へて、

「畜生め、昨夜細君から頼まれたな。」

「何を? 僕は頼まれやせんよ。」

「お種が宜く申しましたよ。」

「逸早く柳之助は間違をして、

「細君何處かへ行つたの。」

「何處へ行くものか。今朝から奥に寝て居る。」

「寝てゐる? 如何してね。」と少しく慌てれば、葉山は故と萎れながら、

「病氣でねえ、困つたよ。」

「病氣? 本當かい、君、風でも引いたのかい。」

「なか〜。」と葉山は苦々しうに首を擡る。

「甚麼病氣だよ。」

「だから甚麼だと言ふに。」

「大病! どこと噂に就いてゐるのさ。」

「それは僕は濟まん事をしたなあ。」

「君は誠に濟まん事を爲たよ。」

と不知しく爲れるほど、傍に居るのも奇痒いやうで、何と挨拶を爲たものであらうか、と大目に柳之助は氣にしてゐるのを、葉山は其と横目に見ながら、ちびり〜と飲みかける。

「君、濟まん事を爲たね、僕は。風邪は氣を着けんと可かんよ、妻も初發は風邪だつた。風邪は一寸した事のやうに誰も思つとるけれど、多くの病氣は風邪からだ。それは早く薬を飲まん可かんね。」

彼は意を留めなかつた浴後の風邪が因で、最愛の類さんを亡つたのであるから、今お種が風邪と聞いたのは、心の痛と聞いたよりも、腸加答兒と聞いたよりも、なか〜死に近い病であるやうに、怒せならず可惡く覺えたのである。

「體は大事に爲んと可かんよ! 人間と云ふものは割合に脆いものだ。」

と後は何か物の見えるやうに柳之助は壁を睨めてゐれば、葉山は一寸振向いて、

「旦那、お吸物が冷めます。」と言ふのを現に聞きながら柳之助は趨然と座を起つて、

有繁に柳之助は眞偽を疑つて、葉山の顔を見めたが、其顔には何と書いてもなかつた。

葉山は鍋の物を椀に取分けながら、

「而も君大病は君ゆゑさ。」

「君は何を言ふ? 僕が知るものか。」

「君は知らない? 然うかい、それぢや君の所爲ぢやないのだらう。して見ると誰だらうな、昨夜遅く來た客は? 今朝の天明まで居たのは。」

と諷刺られて、柳之助は躍起となる。

「僕さ、それは僕だらう。」

「あ、君かい、それぢや依然君だ。」

「僕は妻君を如何も爲やせんよ、怪しからん?」

「何ぼ阿多福でも、豈敢に君が今戸焼の火入と間違へて、蹴付けてお出額を打毀した義ぢやないさ。けれど君のお合手を爲てゐたらう、ねえ、それで頭風を引いて、今朝から頭痛で、眩暈がして、悪寒がして、鼻が塞つて、苦しがつて唸つてゐるだらうぢやないか。成る程風を引いたのは自分の洒落さ、然し引かせたのは驚見柳之助君だよ。さあ、それだから切めて見舞にも行つて遣り給へ。濟麼苦しい思を爲るのも驚見さんの御前だと、今朝から言續にして君を懸

「一寸僕は行つて來やう。」

「何處へ行くのさ。」

「妻君の所だ、僕は見て來る。」

「御見舞かい、それは御奇事な事だ、...は可いが啖ひ付かれるよ。」

「可い、もう那樣言。何處に臥とるのかね。」

「本當に行くのかい、是は不思議だ。君は始終來ても家人に會ふのを可厭がつてゐるぢやないか。二十九歳になつて人見識を爲る人ぢやないか、その驚見君が如何したものだ、寒いから雪でも降らなけりや可いが。」

「行つちや異しいかな。」と葉山の胸を見下して杉立に立つてゐる。

「何が異しい事があるものか。それが體なので、從來の方が餘程異しくて御在なさる。」

「然うだらう、だから行くのだ。それに君は僕の爲に妻君は風を引いたと言ふぢやないか。」

「いや、それぢや自分が風を引かせたから見舞に行くので、然も無ければ死ぬほどの大病でも訪ねてはくれぬ氣かい。不實なものだ。」

と横を向いて飲むでゐる。

「決して那... 那樣事は無いさ。まあ行つて來やう、何處だか教へてくれ給へ。」

葉山は婢を呼んで、案内を吩咐ける。其に續

出て来たかと思ふと、直に柳之助は入つて来て、慌忙しく外套を脱捨て、行く。

奥の六疊へ伴れられて、紳の紙門を啓けた途端に内を覗くと、胡中形の大衣着を山のやうにして、お種は腹這になつて、枕頭に保を据ゑて、張子の面を被つて首を掉つてゐると、保は千葉子の松葉を面の口へ撥つて、面白さうに遊ぶてゐたが、

「奥さんお客様か。」と紳が通じると、お種は屹と振向いて、思懸けぬ面色で黴い紙門の外を見込む目筋へ、柳之助が衝と動かれたので、

「まあ是は。」と夜着を撥けて、早速等の上に着直ると、保は呆れた顔で、肝々した目をして、

「どうも這様に取亂して居りまして、大變失禮でございます。」

「はあ。」と應じた限で、其を外套の衣兜に入れて置いたのも忘れて、有るだけの衣兜を撈廻して、やう／＼手に觸つた手巾をば切めて曳張出して、出たくもない涙を去む。

「昨夜は又失禮を。」と實は此方から言ふべ

き所をお種に先を越されて、彌引込むではゐられず、

「いや、私こそ失禮しました、御病氣くださりですな。」

「いえ、何有、ちよいと風を引きました。」

「昨夜お引きに成つたのださうで、どうも實に僕は失禮しました。」

「いえ、貴方、お午後にお湯に參つて、一寸寒いと思ひましたら、それから頭痛が爲出しました。」

「はあ、然し御氣分は如何ですか。今葉山君に聞きましたら、大變そのお悪いのださうで、僕は心配しました、ですから一寸お見舞に。」

「又手を背廣の衣兜に入れたが、其は依然無氣にして正しながら、

「それは如何も恐入りました。何有もう些の鼻風なのでございませすよ。葉山が那樣事を申しましたか。」

「はあ、昨夜僕が晩く来た爲に貴方が風を引いて、今朝から喰つて居る、と然う言ふです。」

「何でございませすよ。」

「偽ですか、あ、偽ですか！」

「もう始終冗談ばかり言つて居つて困ります。」

「然し、風邪は注意せんと可かんですな、薬は？

「はあ、飲みましたか、それは一番可いです。死んだ妻は薬が大嫌でした。究竟其が爲に死んだと謂つても可いせう。初發け風邪でした。實際風邪は總ての疾病を誘ふですね、それだから注意せんと可かんですよ。一寸した風邪なので僕も那腹に思はんでした、それに妻は能く不慮風を引いたですから、自分は勿論、僕も大した事は無からう、と平氣で居つたです。」

「忽ち打つて變つて柳之助が喋るのにお種は驚いた。」

「其が失禮でした！ 輕い内に酒々薬を飲ましたら、何でもなかつたです。實に残念したので、貴方の今の風邪ぐらゐの時に薬を飲むなら、難は無かつたです。貴方は善い、貴方は善い！ 薬をお飲みなさるから善い、妻は其薬が嫌なのだから爲やうが無いぢやありませんか。ですから僕は喧しく言つたです、然すると直に慍るです。から好加減に爲て惜いだすけれど、僕も不注意でした。本當に貴方も注意ございよ。體は大事に爲なければ成らんです。死んぢや可けません、死んぢや大變です。もし明日にな

「黙然で唯脱鏡かい、あゝ氣の利かない！」

「いなや。」

「然うでもない？ ぢや其腹だらう。」

「病氣の事に就いて種々忠告をして居つたのだ。」

「君が？」

と葉山は眉を皺めたが、

「ふむ、不思議だ。何しろ、女と應待を爲るのは、どうも照れて可かんものだ。私などは極意の無い方だが猶且窮るね。それを君が今まで察いだのは感心したものだ。」

「いや、毎も言ふことだが、恚してお互に兄弟のやうにしてゐながら、細君には他人行儀なのは面白くない、是非股様同様に御見識り置かれて、未長く御懇意に願はなければ非き。能く世間に在るぢやないか、獨身の内は仲を善くしてゐたものが、所帯を持つと妙に遠かつて、毎日のやうに往來をしてゐたのが、段々と御無沙汰になつて、結局には年始だけの顔出になるよ。それから其先が、到頭一錢の郵便はがき一故とまでなるのは酷からう。お互に何かまあ葉書にはなりたくないぢやないか。」

それに、甚だ意氣地の無いやうだが、他が細君を持つと、何と無く其家へ行難くなる奴さね。と云つて、持參附でなければ、御臺所を持つて

来て居るでもないのだよ、それなら別に細君に對して遠慮も糸瓜も無さうなものだけれど其處が妙さ、道は生きたがら山の神とも崇められるほどの徳があると見えて、十七八の可愛らしい娘でも、頭に圓い鬘を載せて火鉢の前に端然としてさへゐれば、さあ諸の出入る悪黨輩は戦慄いて、私のやうな益友までが自と氣を爲るよ。そこへ行つて長尻をしたり、夜を更したりさ、就中時分時に落着拂つて、其擧句が引張出しの、其晩が且那樣晩歸など、来た日には、神罰は忽ちだね。

君などは然云ふ事は御心得はあるまいけれど細君と云ふものは何處でも必ず一冊づゝ、親にも見せないと云ふ、それはなかく、嚴しい顔面を皆須むでゐるものだよ。え、妄ぢやないとも、捜して日給へ、お類さんのもあるから。その帳面と云ふのが、名を聞いてさへ凄然するね。」

葉山は我面白に調子付いて、
「何と書いてあるかと思ふと、可いぢやないか、(乾度覺帳)。(乾度)が面白。此二字の裏に、伸上つて、え、悔しいといふ細君の顔が見えるやうだ。」

柳之助は一向氣の乗らぬ顔で、

「その帳面は何だ、君。」
「お、その帳面、その帳面には第一に、内の亭主を引張出す遊蕩友達、來ると飯を食つて行く客ね、一寸貸せを言つて來る奴、其外亭主の酔つて歸つた晩、内を空けた日、怪しい手紙の来た日、など、云ふ所を一々記けるのだ。別して、家の不爲になる友達の名は、洩無く留めて置く爲の帳面だから可恐からう。何の爲に留めて置くかと云ふと、それが(乾度覺帳)だ。此御帳面に留められた奴が、其次に踏々行かうものなら慘憺! 輕い所で、異うに踏々行かれ、少し重いと、顔色を爲れます。一通お帳面に留められたが最期、もうそれから行く度に冷遇を蒙るのだから、有難に誰も行く氣は無くなるわね。因で自然と足が遠くなる、すると、其奴が乾と他へ行つて吹聴します、誰某の家へ行くも可いが、あの噂が左衛門尉胸悪だから面白くないとか、見たくでもない不見識な面を爲てゐるとか、是が又亭主の名折にもならうと云ふ一件だ。那樣評判でも立つと、來て差支の無い人までが自と來なくなる。然かと云つて、是が何も、女戀うして牛の肉と馬肉と間違へた義ではない、お帳面に記けられる奴の方が重々悪いのだけれど、一寸聞くと細君

れど、那樣不見識なのぢやないよ。實は從來度度言つた、けれども君が聴いてくれないから諦めて居ただけけれど、昨夜と云ひさ、又今の見舞に出掛けた手際と云ひ、如何して胸へは置けません。不斷其呼吸で遣つてもらへば何の事は無いのだ。遣れば其だけに行くものを、變に疎むで居なくても可いぢやないか。その呼吸さ、その呼吸で是非一番今日から改めて始めてもらはう。それに、いづれ君の彼處の所帯を仕舞ふと、内へ來るのだらう。」

「來る意なのだらう。」
「其顔は柳之助は眩しさうに見て、ほやけた聲で、
「未だ極らんのだよ。」
「未だ極らない? それぢや此方ばかりで極めてゐたのか、大失敗だ。來たら可いぢやないか、それとも何處か外に所期があるのかい。」
「有りは爲んけれど。」
「それぢや如何なのだ。」
「柳之助は黙々してゐる。」
「もう何とか極めてなけりや、實際になつて狼狽だらうぢやないか。」
「深切にも言ひ、推しても了節を聞いたけれど、

の爲方が善くないやうに言はれるのは、そこが女子の損、罪の深い所なき。

尤も人間と云ふ奴は弱いもので、所帯を持つた日には、から意氣地は無いのさね、幾許才子だの色男だのと頭を撫で、も、それは阿爺のソツプを吸つてゐる時分の太平樂で、尙と徳圻を擧げて親睦會を抜けて歸ると、貴方また差配が來ましたよ、など、脅迫されるやうな始末ぢや、萎縮すには居られないよ。何と云つたつて、獨身の内のやうに氣散は無いのさ。前前で蕪麥を食つて、歸りがけに、一寸その時計を貸し給へ、など、云ふ體態に物事が手輕に行きません。それが一つは實際の疎くなる發端で、お互に育つて、いつか鼻の下に髭でも生えれば、何か紳士のやうな面にも見える。いや又諸々も一廉紳士の氣さ。因で種々外飾もあつたり、言はれない内情も出來たり、彼此生活が複雑になるに就けて、隔離の出來るのは、實に致方が無いのだ。

然し今の(覺帳)の一件でね、花菱の爲る所も大きに有るのさ。其が又所帯の方から謂へば、爲筋にもなる所だから、帯になれば帯には長しだ。だから考へたね、家に女房あるはさ、恰も庭に畑の有るが如しだらう。

「可哀さうに元は一人で寂しからう。」

「不都合かい。」
「不都合な事は些とも無いが、希しいことを言ふからさ。」
「又此二三日寝られんで窮る。還らうと思つたら可厭な心地になつたから、泊めてくれたまへ。」

「可哀さうに元は一人で寂しからう。」

十二の一

所帯を疊むのは姻家の母親は大の不同意で、男たるものが一家を構へたのは一人前になつた證と云ふもの、それでこゝ始めて男の數に入つたのである。世間にはやれ政治家だ、學者だ、高慢ちきな顔をして、満足に一軒の所帯さへ張切れぬ人が幾多もある。甚だに可重人か知らぬけれど、高が自分の身始末、それが出來ぬやうで、何が出來やう。私に謂はせれば、三文

御様子では、御病氣にでもお成なさりはしまいか、と私は懐々いたして居りました。「段々聞くほど母親は膝に落しかねる。近頃は夜泊を爲る、而して一時のやうに鬱いでは居らぬ、百個日が経つと所帯を疊む、而して此間も言ふには、もう一生妻は持たぬと決心した。如何も言ふ事爲す事が變だと思つたが、それでやうやう解めた。一生妻を持たぬのも、所帯を疊むのも、近頃は機嫌の好いのも、皆其の夜泊が爲る業。何處の葉山か知らぬが、はて困つた事になつた、と母親は遂に投首をして熱と考へ始めた。元は其跡を見て、是は何でも迷はねば濟まぬ用があるのであらうと察して、

「遠くもない所でございますから、車を持たしとお迎にあげませう。」

と氣輕に起つのを、母親は力無げに頭を掉つて、

「まあ、止ませうよ。」

「でも貴方、折角御出あそばしたものを、もう一服あがつて在らつしやいまし、雜作はございません、直でございますから。」

「い、え、葉山さんには居りますまいよ、いづれ百個日には會ひますから……」

思案真に雁首の熱くなつた煙管をば、思切つ

たやうに筒に容れて、母親は幼と長吁を吐く。「日曜でございませうから葉山様と御一所に御出遊になつたかも知れませんけれど、まあ左も右使を遣りませうでございませう。」

強ひては母親も止めぬので、元は早速迎の車を跳へて来る。

程経つて門の外に車の音がして、

「へい、唯今。」と車夫が格子を啓ける。元は飛んで出る、母親は耳を欲てる。

「え、今朝ほど彼方の旦那様と龜井戸へ梅見に御出になりましたさうで。え、御歸來は晩方だらうと有仰いました。」

「おや、然でしたか、御苦勞様。」と元の言ひ切らぬ間に、奥から聲が懸る、

「其車で直に私は歸りませうよ。」

十二の二

梅見とは虚妄、宿から使の来た時柳之助は確に葉山の二階に居たのである。思懸けぬに母様の訊ねて来たは、恐らくお鳥の事、會つては大變と、用捨も無く居留守を遣つたことは違つたが、さあ後になつて胸の安からぬこと太甚しい。彼の率直の了簡では大罪でも犯したやうに、居ても起つても在られぬ様子で、黙つて考

へてゐては、時々堪へかねて、

「僕は悪い事をしたなあ。」と餘り煩く言ふのが、頭葉山の耳に障つて、

「それほど悪いと思ふ事なら、初發から遣らなかが可いぢやないか。後で又悪いと氣が着いたのなら、此で暗々言つて居ずと、先方へ行つて悔つて来るのが早手廻だ。高が居留守を遣つたのぢやないか。それしきの事に憂懼するやうな事ぢや、君とは漫然と同乗も出来なないよ。何故も無いものだ、車の底が抜けはしないかと、輪が一つ轉がる度に聞くだらう、弱蟲！」

呵られると、それで落着いたが、依然内々は氣にしてゐるので、葉山は竟に咬むで嘔めるやうに、怒ひ歸つて會つたらば、徒足をさせたくらむには換へられぬ氣の毒の想を爲ねばならぬ次第を説いて、漸く安堵を爲せたが、之に就けても、旋て所帯を疊む大事件の隨行が此人に出來やうか、と危いものと思つて、其始末方を試に訊ねたものである。

如何いふ方寸の内か、と葉山は固唾を嚥むでゐると、柳之助は平然としたもので、荷を積んだ車の後から、鐵物の標本とラムを兩手に持つて、率直して行くらるに、いと易く考へてゐる。葉山は呆返つて洒落も用ぬ、慙云ふ場

の値値も無い人士、昔の武士は幾許貧乏しても皆武具の用意はしてゐたと云ふ。紳士とも謂はれやうものが、家を一軒持たずに居て済むであらうか。世間へ對しても誠に愧しい譯——腑効の無いことである。それとても意氣地が無く持つて持たない所帯なら爲方が無いが、然でもないものを、醉興にも程が有つたもの、今更下宿住とは何事であらう、と云ふのが母親の了簡。そこへ話をしたから以ての外で、柳之助は太く意見を爲れたのである。而して、一旦歸いた娘は、身體さへ差上げて貴方の物になつてゐるものを、離縁を爲れたではなし、その荷物を復される理は無い、私方では請取りませぬと云ふ口上。母親は辯舌爽快、柳之助は口不調法と云ふのであるから、弄々言捲られて、ぐうの音も出なかつた。

然し、如何やつても不愉快の所帯は疊むで了はうと思ひだした柳之助は、辯解がましく反復して、その不愉快の事情を打つたのである。すると母親の言ふには、其不愉快も當座の事で、長くて半年も経たうなら、左か右か忘れられる。一旦所帯を持つたものが、下宿住や同居などをして、その不自由の辛抱が出来るものではないから、一途の了簡で那處事を爲やうより、

年寄の言ふ事は聞かうもの、那處にもお類をば可愛いものに思つて下さる貴方の事を、悪いやうには思はぬのであるから、まあ、願された氣で、もう二月三月あつたまゝで辛抱を爲るやうに、と理を分けての意見、と云ふよりは頼むやうにして言開かせたのである。

段々談話の裏に、柳之助も(はてな)と氣の着くことがあつた、其は正しく後妻の事に就いて母親が謎を懸けたので、此謎を懸ける前には微見したので、微見す前には句はしたしたので、實は句はしても利かなかつたから微見し、微見しても通ぜぬやうであつたから、到而謎を懸けて見ただので、柳之助も有業に(はてな)と思つたのは其時で、是は長く話をして居る所ではないと心着いたから、

「それでは一度考へて見ませう。」と草々に切掲げて別れたが、因で思合せると、母親の不同意なのは、お鳥を後に直さうといふ肚に違無い。それでは愈彼所帯を持つては居られぬ。母親が不同意なら不同意でも管はぬから、此方は此方で斷行するより外は無い、と柳之助の決心は益々固くなる。

「考へて見ませう。」と言つて別れた限、七日経つても十日経つても、考へて見た扱が無

いので、母親は氣にして、百個日の法事の打合秀柳之助を訪れたのである。

その日は日曜で、彼人の事であるから休日だとして出懸けは爲まいけれど、然し朝の間に、十が十まで在宅と見込むで、好物の菓子土産に喜ばれる氣で来て見れば、案外の留守!

「何からお話し申さうやら。」と云ふ顔で、可憐さうに元が駄待をするのも、餘り嬉しくはなかつたが、之から様子を見て見れば、昨夜から歸來の無いのは葉山へ泊つたのであらうとの事。と言置いて出たのかと聞けば、然うでもないが、近頃は毎晩のやうに食事を了ふと葉山へ遊に出かけて、内は寂しくて寝られぬと言つては泊つて来る。それから直と出懸して四時に歸る。日暮までは内で、又葉山へ出向く。

「内は私一人のやうなもので、もう、寂しくて敵ひませぬ。」

と怨言がましい元の口氣。

「それでもまあ、旦那様の御爲には、葉山様が誠に洒落な面白い方でございませうから、お遊びに御出になるのは、御氣舞になつてお宜しうございませう。其所爲か、此頃は一時のやうに微切つて御在なざるやうでもございませんから、其がまあ何よりでございませう。眞に一時の

合には如何する、此處置は何と着けると、先づ柳家への掛合、老婢の始末、差配への挨拶、荷物の世話も有らうし、道具屋も呼ばうし、第一に引越先の算段、慥も爲なければならず、那も爲なければ成るまい、と一人の才覚で八天狗を倒かねば成らぬ面影を、一々並べ立てて責めて見たが、それでも自若として

「那摩事は勿論僕には出来ん。」

「御大名の引越ぢやあるまいし、殿様にも御家来にも一人限の癖に、悪く大東なことを言つて落着いてゐるよ。殿が御手を下して遊ばさなければ、誰が參つて仕るのさ。」

柳之助は莞爾とも爲す、

「僕は無論始から那摩事は君に遣つてもらふ意で居るのさ。」

「えー！」 と葉山は故と目を睨つて、

「恐れながら御前へ申上げますが、只今君と仰の有りましたのは、葉山誠哉の義でござりまするか。」

「何故さ？」

「何故とは酷い。いや此義ばかりは葉山誠哉太夫平に御免を蒙りませう。」

「何故、何故、何故！」 と柳之助は連に狼狽へて、

「そりや可かんよ、可かんよ。」

「何方が可かんか知れるものか。」

「可かんとも、もう然ら極つとるのさ。」

「誰が極めたのだ！」 と澄した顔を柳之助は打目成つて、

「そりや窮る、僕は窮る。」

一切其邊の相談は無かつたから、如何爲るのであらう、と葉山も實は思つてゐたのであるが、いづれ事の有る日には昇込むで来やうと、其肚では居たもの、(無論であるの極めてゐる)のと、何の話も無い先から役割が付いて、萬端委せられてゐるには、少しばかり肝を潰した。然し大方這摩事であらうと思つた、と快く引承ける事は引承けたが、爰に甚だ迷惑至極の一條が有ると言つて、葉山は頻に首を傾けた。

それは外でもない、柳家の思はく、是が極めて辛い。如何あつても由無い恨を受ける人にならねばならぬので、話の様子では、母親は飽くまで所帯を巻むのは不得心得、柳之助が一生獨身も胡亂で、と云ふのが妹のお鳥を後へ直さう下心であるから、其を柳之助が嫌つて、所帯を崩して、行先はと云へば自分の家、此自分なる葉山が日頃自分であることは、母親は能く知つてゐる。して見れば、是は柳之助の智慧ではあ

るまいと来る。何でも葉山の差金に違無いと来る。餘計な事を爲る情い奴だと来る。然ら来られるのが誠に堪くない、と葉山は此の處を考へたのである。

因で、此事情を柳之助に話して、萬端の世話を爲ぬではないが、此を何とか一つ積立たぬやうに、巧く片附けたいもの。君も従来散々世話になつた岳母の事、又此後とも末長く親類の往來を爲なければ義理が済まぬから、事を手暴に遣過ぎて、此限暗喑面になつて了ふのも甚だ好ましからぬ。又自分にしても、親類歪の席に列つて、不東な娘を何分とも願ひます、と聞き直つて頼まれた兄様であつて見れば、柳家の阿母さんに睨まれたからと何の可憐いことは無いが、それでは如何も義理が好くない。彼方も立てば此方も立つて、九尺二間に戸が三枚ばかりも實は欲いらぬ所であるから、此は例の變人で遣られては、本人は其で可からうけれど、哀を留めるのが萬端の引承人、是が皆打被らねばならぬから、君たるもの、所作は「大立者の役で難しいね。」と葉山の腕組は容易に釋けぬ。

成程然らでもあらうけれど、素より自分が組立てた所帯、其を自分が毀すのに、然まで他に

(三十年七月)

氣兼ね爲すとも可さうなものである、と柳之助は甚だ其意を得ぬのみならず、母親も亦故障などを言ふべき理ではない。然るに今度の件に就いて不服なのは、畢竟お鳥を妻に與れたいが爲、其を此方が否むだからとて、それで感傷を害するのは手前勝手と謂はねばならぬ。手前勝手に對して會釋を爲る必要は無い、と柳之助は獨で業を沸すばかりで、一向件の始末に就いて智慧を絞らうとも爲なかつた。實は其智慧も葉山に委せた萬端の内一つに勘定して、那摩思想は全く自分には無いからと高揚杖である。そこは宜しく葉山が引承けて、工夫をしたが、さて思はしい智慧は出ぬもので。

此夜も柳之助は泊つて、翌日學校の歸途に直と柳家を訪ねたのは、無論葉山の指圖で、其から二週間の後が百個日の法事、葉山誠哉も親類の格で其席に招かれたが、此が聊か兄分の技倆と、手藝煉を引いてゐた効に、柳家の兩親と懇談數刻に涉つて、左やら右やら例の件は落着いた狀。此上は別して親しく末々まで不相變など、嗜く中に、母親も頻に満足らしく爲てゐたが、時々忘れたやうに可憐い目を爲る。苦い口角を爲る、氣が着いては温容にしてゐるのを、絶えず見てゐたのは座中に葉山一人。

「そりや可かんよ、可かんよ。」

「何方が可かんか知れるものか。」

「可かんとも、もう然ら極つとるのさ。」

「誰が極めたのだ！」 と澄した顔を柳之助は打目成つて、

「そりや窮る、僕は窮る。」

一切其邊の相談は無かつたから、如何爲るのであらう、と葉山も實は思つてゐたのであるが、いづれ事の有る日には昇込むで来やうと、其肚では居たもの、(無論であるの極めてゐる)のと、何の話も無い先から役割が付いて、萬端委せられてゐるには、少しばかり肝を潰した。然し大方這摩事であらうと思つた、と快く引承ける事は引承けたが、爰に甚だ迷惑至極の一條が有ると言つて、葉山は頻に首を傾けた。

それは外でもない、柳家の思はく、是が極めて辛い。如何あつても由無い恨を受ける人にならねばならぬので、話の様子では、母親は飽くまで所帯を巻むのは不得心得、柳之助が一生獨身も胡亂で、と云ふのが妹のお鳥を後へ直さう下心であるから、其を柳之助が嫌つて、所帯を崩して、行先はと云へば自分の家、此自分なる葉山が日頃自分であることは、母親は能く知つてゐる。して見れば、是は柳之助の智慧ではあ

るまいと来る。何でも葉山の差金に違無いと来る。餘計な事を爲る情い奴だと来る。然ら来られるのが誠に堪くない、と葉山は此の處を考へたのである。

因で、此事情を柳之助に話して、萬端の世話を爲ぬではないが、此を何とか一つ積立たぬやうに、巧く片附けたいもの。君も従来散々世話になつた岳母の事、又此後とも末長く親類の往來を爲なければ義理が済まぬから、事を手暴に遣過ぎて、此限暗喑面になつて了ふのも甚だ好ましからぬ。又自分にしても、親類歪の席に列つて、不東な娘を何分とも願ひます、と聞き直つて頼まれた兄様であつて見れば、柳家の阿母さんに睨まれたからと何の可憐いことは無いが、それでは如何も義理が好くない。彼方も立てば此方も立つて、九尺二間に戸が三枚ばかりも實は欲いらぬ所であるから、此は例の變人で遣られては、本人は其で可からうけれど、哀を留めるのが萬端の引承人、是が皆打被らねばならぬから、君たるもの、所作は「大立者の役で難しいね。」と葉山の腕組は容易に釋けぬ。

成程然らでもあらうけれど、素より自分が組立てた所帯、其を自分が毀すのに、然まで他に

多情多恨 (後編)

さて一所になつて見ると、お種の想つたほど、柳之助は其事を苦に病むのでもないらしい。夫から聞いた所では、間がな隙がな思窮めて、食べるものも食はずに泣いてゐるのかとも考へられたのである。猶夫は懇々も言つた、驚見はまるで病人なのだから、其心得で取扱はなければならぬ。何でも看病を爲る意で、深切に、優しくと、聞いた時はお種も自失した。

手一杯の大役である。一日の務はそれでもうもう深山に、四歳になる保といふ子もあれば七十に近い男もある。或時は最一人お種の欲い場合も有るのに、同じ厄介ながらも偶には何かの手助になる人物でも有る事か、目に見えて手の掛る、相應に氣苦勞も爲ねばならぬ、所謂二人の夫を有つやうなものと思へば、有業に慄然としたが、案ずるよりは産むが易しで、まづ柳之助が一日の生活は、朝の八時に學校へ出て、午後の四時に退けて来る。それから二階へ昇つて燈の點く頃迄机に向つてゐる。其内には夫も退けて来る、一所に夕飯となる。二階を驚見に貸してから、夫は大方茶の間にゐる。夜になれば其處へ話に来ることもあり、又此方から二階に遊びに行くこともある。やがて寝る、それで仕舞なので。

て持つて行つて、合手を爲なければ済まぬのでなかつた。然し、柳之助は無口で、無愛相で、世話になりながら氣毒さうな顔も爲らずで、構つてもらはなくとも困らぬといつたやうな風で、始終不足らしい、折角世話をして効の無い、居られて面白くない御客ではあるが、其處が正是手の掛らぬ所、お種は少しも可厭な顔も爲ずに、彼此と陰ながら心着ける。

お種の注意で怠らず滋養物を薦めてゐるが、引移つてから未だ漸く二週間計と云ふので、然したる驗も見えぬ。それをお種は頻に遣立つて、如何か最少し發揮しやうなものであるが、と折に觸れては言出すと、一日葉山は揆つたいやうに笑ひながら、
「尋常の病氣擧句ぢやなし、牛乳やソツプのやうな物で賣立てたつて、然う着々肥立つて耐るものか。那云ふ病氣には又別に結構な適薬があるのさ。」
「何でございます。」とお種が眞に承ければ、
「お前たちの嫌ひな薬よ。」と益々揆つたさうに笑ふ。

「然やう、然やう、彼此一時過でしたかな。」
「言へば冷かされるか、露弄されるに極つてゐるので、お種は其なり黙つて了つて、暫く無言である内に、葉山は直に我を折つて又話出す。
「實に不思議な事もあるものぢやないか、昨夜俺は吃驚した。」
お種は應答もせずに精々と縫仕事をしてゐる。
「え、おい、吃驚したと言ふのに。」
「然でございますか。」
「もう止さう、張合の無い。」と葉山は座を起たうとすれば、
「はい、伺ひますよ。」
「心身に聴くなら話すけれど、…昨夜まあ社員の員と行つたと思ひな。」
「行らしたのですか。」とお種は顔を擧げる。
「まあ行つたのよ。」
「それ御覽なさいまし。」
「餘計な事を言はずに話の要領を聴きなよ。行つたのだ、すると顯れたのが、四五日前に披露をしたと云ふ藝者だ、可いかね、それが料らず俺の乳母の娘で、やゝ貴方はと云ふ事實でも何でも無かつたけれど、吃驚したね。其藝者が十八九だ、十八九は少しも驚かなかつたが、

お類さんに生寫し！」
「へ、え。」とお種も有業に針の手を停める。
「それ、聞いてさへ吃驚するだらう。まして正の物を見たのだから、驚いたらうぢやないか。」
「本當でございますか。」
「背恰好から態度、聲は全然で違ふがね、それは目鼻立から顔際、頼の工合、いやもう骨たは未だ。」
そこで俺は反復思つたね、嗚呼之を驚見に見せたら、甚だに喜ぶだらう。驚見は屹度泣出すよ。で、調子が又馬鹿にお類さんに似てゐるのだから耐らない、何處か怒う女學生來みた、それは餘程似てゐる。那は是非驚見に見せたい、見せなくちゃ譯だ。那は全く驚見の爲に出来てゐる藝者だよ。」
葉山しいにも程が有ると言ひたさうに、お種は獨り面白さうな夫の顔を視るばかり。
「何と不思議ぢやないか。」
「然ですんねえ。」と不承々々。
「然ですんねえ、この、這様結構な薬が亦と有るものか、ソツプや雞子で那の藝の虫が治りつ事無し、所謂氣保養と云ふ奴でなけりや。疾から其は考へてゐただけけれど、何しろ精通中の體だ、そいつを曳張出して茶屋小屋這入は、第

「佛の前へ對しても済まずさ、俺も亦餘り無分別のやうで、そこらが何と無く工合が悪かつたから、實は今日迄控へてゐたのだ。」

それで、日増に驚見の様子が好ければ、酷く譽めた話でもないのだから、那樣事はお合諸に爲やうと思つただけけれど、何しろ那してお前が切と盡力してくれるけれど、牛乳やソツプぢや逆も可けませんよ。其處へ持つて来て、今の瓜二つと云ふ藝者を見たものだから、もう耐らなくなつて了つた。如何だい、右の薬を少々ばかり用ゐるのは。」

法界格氣でも無しに、細君は徹頭徹尾の不賛成。

「まあ那樣事はお合諸なさいませよ。」

極めて冷々に言つて退ける。

「何故？」

「何故でもお合諸なさいませよ。」

「家裏は困る！ 解らな過ぎるぢやないか。」

お種は色を正して、

「私も家裏でなし、驚見さんも家裏です。」

「成程。」と夫は餘所々々しく言ふ。

「ですから那樣意氣な薬は症に適ひはしません。」

「適つたら如何する？」と葉山は意氣込めれば、

と言つたが、其聲を返して、

「おい、おい、何處へ行くのだよ。」

「まあ何でも可いから跟いて來給へ。」

「僕は西洋料理が可いな。」

「西洋料理でも何でも御好次第。」

柳之助は不安な顔をして、前後を眺しながら葉山に追付いて、

「非常な薬者屋だね。」

うんともすんとも言はず、葉山は勿々と歩くばかり。

「え、葉山、僕が出る時細君がね、今晩は早くお歸んなさいと言つたよ。而して何だか心配さうな顔をしつたが、如何云ふのだらう。」

「さあ、如何云ふものかね。」と葉山の目は笑つてゐる。

「だから早く歸るが可からう、飯を食つたら直に歸らう。」

「勿論さ。」と言ふより早く葉山は磨硝子の燈籠を懸けた門へ衝と入つた。案内が入るから柳之助も跟いて入つたので、何屋であるのやら一向知らぬのである。

門の内は奥深く御影石で登むだ露地の正面が秋然とした式臺造で、障子が一枚啓いて、銀地の衝立が電燈に反射してゐる、其陰を隠れ忙

「それですから、適つたら猶大變ぢやございせんか。貴方は、もう……。」と後は言はぬほどお種は眞に呆れたのである。夫は夫で又別に呆れて、

「困つたものだ、辨らない人だ。如何すればお前のやうに家裏で埋るのだ。一寸洒落に藝者を揚げると言へば、もう直に其場で帯か何かの無心を言はれて、翌日は芝居へ連れさせられて、三日目には起請の取替でもして……。」

「もう可うございませよ、解りましたよ。」と勿々針箱を仕舞つて、取散したものを片附ける。

「おや、縁日商人が夕立を吃つたやうに、無闇に片附けるよ、如何したのだ。」

「もうお夕飯の支度を爲なければなりません。あれ、あれ、其を踏むで居らしつちや困るぢやありませんか。」

見れば膝の下に裁片の端を敷いてゐたので、葉山は其を取つて投付けながら、

「飯だ、と、嚇しなさんな、腹なんぞは空いてゐるものか。」

「それでも、う支度を爲なければ。」

「私と驚見のは御無用になさいよ。」

「晩く上るのですか。」

「い、いや、是から。」

しきうに走る人影も見えない。

玄關にかゝると直に婢が顯れて、葉山の顔を見るより空々しく可憐さうに、

「おや、入らつしやいませ。」

何と無く間の悪い狀で、柳之助は葉山の後に立ちながら、見るとも無く目を遣ると、左手の小陰が立派な供待になつて、自用車らしいのが五六臺並んで、車夫は雜然と火鉢に聚つて酒を飲むのである。

何といふ家か知らぬが繁昌する店、と柳之助は思った。奥まつた一間へ案内される途次、思寄らぬ所に階子があつたり、無理な所に座敷があつたりして、頗に藝者の徘徊ふのを見掛けしたが、大分二階の賑やかな様子。

二人の通されたのは、茶掛つた小意氣な六疊で、折廻した縁の外は中庭になつて、その筋向の間では客と藝者の藤八を打つ影法師が映るのを、柳之助は突立つて見てゐるが、

「馬鹿な眞似をしとるな。」と障子を閉て、どつかり坐ると、此狭い間を電燈の光は耐らなく眩く照して、未だ火鉢も出れば、婢も來ず、唯明くばかりあつて閑寂した中に、葉山が床柱に靠れて、象牙の煙筒の頭を附さうに抜き出す音がスポン／＼と鳴る。柳之助は又更紗袖

「では直に上りますか。」

「直に行くのよ。」

「何方へ。」

「へん、家裏め！」

二 湯島切通を葛地に下りて一直線に走らせる二臺の人力車は、三町許も行くくと、唯有る横町の角に停つた。

上野の彼岸櫻も昨日今日吹初めたとはいひながら、未だ薄寒い夜風が砂を捲いて來る。此風さへ無かつたらばと想れるのは、さすがに春めかしい月の色、壁に霞む向御を、古風に辻占や花輪糖が呼んで行けば、此方側では何處とも知らず細かしい三味線の音が幾所に聞える。車を下りた二人は、霜降の二重外套を着て、低付の低いのを踏いたの、後から、洋服の一人は離離と案内されて行くやうな様子、——葉山は到頭柳之助を連出したのである。

旋て其横町を曲ると、忽ち一廓の別天地、狭い兩側に軒ラムプやら御神燈やらが星の如く輝いて、意氣な音々は行くほど繁く、通過る格子の内から突然に太鼓を撃つて、黄色い聲を出されたので、柳之助は不意を吃つて、(あゝ)

の細の上に我張つて貧乏動をしながら、黒部杉の天井を不思議さうに眺めてゐたが、矢處に、

「腹が空いた。」

「これから飲まうといふ前に立つて、どうも腹もしくないね。」

「けれども腹が空いとるのだから爲方が無い。實際此は西洋料理も出来るのか。」

「何でも。」

「ふむ、然うか、成程。」

「何だい、酷く感心するぢやないか。」

「どうも僕は恧云ふ座敷に電氣燈は可笑いと思つたが、其所爲だな。」

葉山は怪訝な目をして、

「どの所爲だい。」

「和洋を兼ねるからだらう。」と大いに發明したやうに言ふ。

「何だ、愚にも付かない。」

所へ婢は火鉢を持つて來て、直に引返して茶と菓子運ぶ。

「あゝ腹が減つた。」と又もや柳之助の呻くのを聞いて、婢は茶を注いでゐるが、

「あら、洪水は岐阜と極つたのですが、飯は、貴方、何方？」

「え、」とばかりに柳之助は驚眼を押が

「お前さん申しますよ。」
 「はて、心得ぬ。」と思入がある。
 「怪しやなものでせう。何ですよう、不知不識しい、其ぢやありませんか。」
 「ぢやお前の話、松松かい。」
 「はあ。」
 「そいつは大失敗だ。」と葉山は頭を圓める。
 「ぢや貴方の御心當は未だ別にあるんですか。」
 「何さ、其は嘘だけれど、困つたねえ。」
 葉山は少し困つたのである。お若の言に據れば、今晩呼ばうとする藝者は、嘘にも自分の事を彼此言つてゐると云ふ。それこそ唯呼ぶのなら困るところではない、至極妙であらうが、生憎妙でないのは、例のやうにわい／＼で推掛けて来た今夜ではない、不思議にも驚見の類に生寫の其藝者が、柳之助に見せたばかり見せての上の分別も随分無きにしもあらざる矢先へ、意外の門遣は難有迷惑とも、不都合とも、お若は那樣事とは知らぬから、彼者には極内で、功德になるから呼んで遣つてくれなど、類に懇願する。考へた所で葉山も今更爲方が無い。
 「看板に許があつたら代は藏くさいね。」

「誰も来やしないよ。」
 「羽の生えた猫と云ふのは何だい。唯猫なら藝者だらう。けれども羽の生えたと云ふのは？」
 「うむ、あれは洒落を言つたのさ。」
 「何の洒落だい。」
 益責められて、葉山も少し落つたが、
 「今に持つて来るから見給へ。」と拙いながらも通つて見れば、柳之助はそれで得心して、
 「うむ、料理だね。何か變つた料理か何かだらう。」
 「愛嬌があるねえ。」と葉山は下肚の痛いのを怪へながら、
 「庭で酒は出たが、食ふものとは、ちよつび

「お前さん申しますよ。」
 「はて、心得ぬ。」と思入がある。
 「怪しやなものでせう。何ですよう、不知不識しい、其ぢやありませんか。」
 「ぢやお前の話、松松かい。」
 「はあ。」
 「そいつは大失敗だ。」と葉山は頭を圓める。
 「ぢや貴方の御心當は未だ別にあるんですか。」
 「何さ、其は嘘だけれど、困つたねえ。」
 葉山は少し困つたのである。お若の言に據れば、今晩呼ばうとする藝者は、嘘にも自分の事を彼此言つてゐると云ふ。それこそ唯呼ぶのなら困るところではない、至極妙であらうが、生憎妙でないのは、例のやうにわい／＼で推掛けて来た今夜ではない、不思議にも驚見の類に生寫の其藝者が、柳之助に見せたばかり見せての上の分別も随分無きにしもあらざる矢先へ、意外の門遣は難有迷惑とも、不都合とも、お若は那樣事とは知らぬから、彼者には極内で、功德になるから呼んで遣つてくれなど、類に懇願する。考へた所で葉山も今更爲方が無い。
 「看板に許があつたら代は藏くさいね。」

「今朝の火事は番町だよ。」
 「あら、然う、番町には私の情郎が居るのよ。」
 と悪身をしながら甘言を言ふのを、柳之助は愕然と打目成つてゐるが、やがて眉を皺めて横を向いた。
 「いや、然うだつてか、はてな、もう臺灣にはゐないのかい。」
 餘り葉山の眞面目さに婢も不覺と釣込れて、
 「おや、何故、貴方。」
 「軍夫の話だらう。」
 「おふざけなさいよう！ 貴方の洒落は例でも罪が深いから可厭さ。」
 「もつと罪の深い事があるのだが、知つてゐるかい。」
 「大知り！」と圓に乗る途端、耐りかねたか柳之助は、
 「早く何か食はうぢやないか。」
 正に是晴天の霹靂、婢は打魂消て、如何に此人が家宰であるか、後學の爲に見て置きたいといふ顔で、彼の面を眺めながら、
 「貴方は餘程賤しいよ。此は待合ぢやありませんか。物を食べるなんて、那樣賤しい事を爲る

「そぢやないの。」
 是も亦柳之助には霹靂一聲で、
 「や、此は待合茶屋か。」
 「はい、待合茶屋でございます。」
 柳之助は僅て氣味で、
 「葉山、此は待合茶屋なのかい、おい。」
 「何爲、和洋兼帯の料理屋だよ。今直に命じるから辛抱したまへ。それぢやお若さん、何ぞ旨さうなものを、大急でね。」
 「何に致しませう。」
 「西洋料理だ！」と柳之助は獨で主張する。
 「御前があゝ有仰るものだから、それぢや西洋料理と爲やう。」
 「貴方も？」
 「俺は謝る。」
 「では、此方は西洋料理、よろしい。そこで貴方の御着は？」
 と御着の二字に悪く力を入れて、頗る風流する所あるが如し。葉山はぐつと呑込みの、
 「それには今日は些と註文があるのさ。」
 「でせう？」と全然心得てゐるのは更に葉山には心得られなかつた。慌して又彼此と手間取るのを、柳之助は可憐がつて、
 「早くしてくれ、もう耐らん。」

「おや、それは又部類が違ふやうだ、誰だい。」
 「誰だいなぢやないかね、かね、かね。」
 とお若は嬉しく。
 「私の今晩の註文といふのは、少々事情ありで、此間の、それ、松松といふのね……」
 言ひも訛らぬにお若の頬は早くも延びて、葉山の鼻頭でびしやりと一つ拍子を打つた。
 急立られて婢も耐らず、好い話は後にして、
 「よろしい、汽車の綱曳！」と忙々出て行つたが、直に入つて来て、(でせう?)の話を續ける。
 「本當に貴方は罪が深いよ。ですが被妓も流石だと思ひましたね。貴方とは感心！ 全く目が高い。一昨日も来て、(先方様は御存無しの片思だからつまらないわ、姉さん。)か何か言つてるから、及ばずながら私も不便になつて、よろしい、今度入らしたら私が是非一本買つていたゞいてあげるからなんぞは、今考へて見ると、お若さん馬鹿だつたね。片思とは世を認ぶ假の名で、實は貴方の方にもトンと胸に應があるのは、こりや凄しい！」
 何を屈違へたのか、獨合點をしてお若の辯じつけるのを、葉山は一向不案内さうに聴いてゐたが、
 「おや、それは又部類が違ふやうだ、誰だい。」
 「誰だいなぢやないかね、かね、かね。」
 とお若は嬉しく。
 「私の今晩の註文といふのは、少々事情ありで、此間の、それ、松松といふのね……」
 言ひも訛らぬにお若の頬は早くも延びて、葉山の鼻頭でびしやりと一つ拍子を打つた。

「解らん。」と柳之助は又一目見て首を掉る。「是がだよ、是が解らない事があるものか。ええ情無い日だ。能く見給へ、ようく！」

「可厭よ、もう、星様、どうせ土鍋でお粥ですからさ。」と姫松は小氣味を悪がつて、外方を向いて了ふ。

柳之助は益希有な目をしてゐるのを、葉山は少しく焦燥氣味で、

「もう解つたらう。如何だい、背てゐるだらう。」

「もう星様、私は深山よう。」と姫松は衝と起つて、座敷の外へ退出した。

「未だ解らないかい、是は怪しからん！ 君は酔つてゐるからだ、……。」

「酔つとるより腹が減つとる。」

「うむ、然うだ。それぢやまあ腹を拵へてから、能く見給へ。」

早速手を鳴せば、漸く今来たと云ふので、姫松とお若が料理を運び込む。柳之助は得たり賢しと、五皿と云ふものを前に並べて、夢の如くスウプを吸つて了ふと、息も吐かずに肉又と食刀を十文字に構へたが、棧を投るやうに左右の上一下するのを、感心して視てゐた姫松は、

「巧いのねえ、あの手つきが。貴方餘程黒人よ、而して第一百上るの、速いこと。」

「そこへ惚れたか。」と葉山は又言懸る。

「いくら惚れてもねえ、私のやうなもの合手にはなつて下さいませんとさ。」

と聞いて柳之助は奇と顔を擧げたが、藪者は葉山の方を睨めてゐるので、又効と食事に掛る。

「又お前ほどのものが片思を爲るなんて、那樣腕の無い話があるものか。それは丁度金の有る奴が泣言を云ふのと同じ心意氣なのだ、誰が本當にするものかね。」

實際姫松はお若の言つた通り此星さんには酷く阿惚れてゐるのであるから、葉山が何處までも茶にしてゐるのが、悔しいやら、愁いやら、嘔吐したいほど憤れたくて、

「好い加減にして下さいよ。何も那樣に異う有仰らなくつたつて、御迷惑なら御迷惑だと有仰いな。」

葉山は然も氣の毒さうに、

「言つても可いかい。」

有繋に意外の挨拶に姫松も今は謝忍袋の緒が切れたやうな海をして

「はあ、有仰いと！」

と、彼は猶頑として、

「僕より確な證據は無いぢやないか。」

間に介つて狼狽されたのが姫松。抑も誰に背たのやら、背ないのやら、始は何だか洒落のやうであつたのが、彼には段々むづかしくなつて、阿惚の星さんは權嫌を損じたやうな顔色。食べる物さへ食べて了へば可憐い事はないと云はなればかりに、彼木訥漢の急に氣の強くなつた面の憎さ。左も右も捨て置いたら悪からうと、

「酷いわ、貴方がたは。他の類を捉へて議論したりなんぞして。」

因で葉山は氣を變へて、

「ちつと心意氣でも聞かうか。」

「是非何ひませう。」と姫松は急遽して壁際に寄せてある三枝を取り起つたのは、是からたつぷりと思の丈を縁に言はせる覺悟、乃至少しは自慢の喉も聴いてもらつて、萬更一山百文の不見手でもない處を見せたい下心。

衣兜の時計を出して見ると柳之助は起上つて、

「行かう、もう十時だ。」

「あゝ行かう。」といふ聲を聞くと、姫松は三枝を擧げて慌忙しく取つて返したが、ずつと落着拂つて、

「言ふよ。」

「有仰いな!! 憤れたい。」

「迷惑……。」

姫松は暫然と見る。

「どころかい。」

「何ですつて?」

「あゝ、食つた、食つた!」

「さあ腹が出来たら見たまへ。」と葉山は忽ち女の方を餘所にする。姫松は茫然して、又今に構つてくれるのを心待にしてゐたが、急には那樣氣色も無いので、不満さうに櫻袴の襟を弄つてゐた。

腹の出来た目で見ても、誰に背てゐるのやら柳之助には解りかねた。葉山は怪へかねて、「類さんに生寫」と打明した所で、成程と横手を拍れる豫想が、なかく蓋然とも爲ぬのみか、

「類さんに!」と呆れられて、

「然う!」とばかりに二の句は續かぬまでに失望したのを、何處を如何見て、何を言つてゐるのやらと、此人にも似合はぬ罵罵々々しき

「歸すもんですか。」

「でも此人が歸ると云ふから。」

「私は此方は留めはしないわ。」

「さあ、葉山。」と柳之助は自分の席から二三尺ばかりを忙しく往きつ復りつしてゐたが、左右女が彼此言つては自分を袖にして葉山を留めたがる、葉山も強ひては歸りたがらぬ様子を見て、往きつ復りつの區域を次第に擴げて、遂に棧の外へ出て了ふ。

三の一

「巧いのねえ、あの手つきが。貴方餘程黒人よ、而して第一百上るの、速いこと。」

「そこへ惚れたか。」と葉山は又言懸る。

「いくら惚れてもねえ、私のやうなもの合手にはなつて下さいませんとさ。」

と聞いて柳之助は奇と顔を擧げたが、藪者は葉山の方を睨めてゐるので、又効と食事に掛る。

「又お前ほどのものが片思を爲るなんて、那樣腕の無い話があるものか。それは丁度金の有る奴が泣言を云ふのと同じ心意氣なのだ、誰が本當にするものかね。」

實際姫松はお若の言つた通り此星さんには酷く阿惚れてゐるのであるから、葉山が何處までも茶にしてゐるのが、悔しいやら、愁いやら、嘔吐したいほど憤れたくて、

「好い加減にして下さいよ。何も那樣に異う有仰らなくつたつて、御迷惑なら御迷惑だと有仰いな。」

葉山は然も氣の毒さうに、

「言つても可いかい。」

有繋に意外の挨拶に姫松も今は謝忍袋の緒が切れたやうな海をして

「はあ、有仰いと！」

と、彼は猶頑として、

「僕より確な證據は無いぢやないか。」

間に介つて狼狽されたのが姫松。抑も誰に背たのやら、背ないのやら、始は何だか洒落のやうであつたのが、彼には段々むづかしくなつて、阿惚の星さんは權嫌を損じたやうな顔色。食べる物さへ食べて了へば可憐い事はないと云はなればかりに、彼木訥漢の急に氣の強くなつた面の憎さ。左も右も捨て置いたら悪からうと、

「酷いわ、貴方がたは。他の類を捉へて議論したりなんぞして。」

因で葉山は氣を變へて、

「ちつと心意氣でも聞かうか。」

「是非何ひませう。」と姫松は急遽して壁際に寄せてある三枝を取り起つたのは、是からたつぷりと思の丈を縁に言はせる覺悟、乃至少しは自慢の喉も聴いてもらつて、萬更一山百文の不見手でもない處を見せたい下心。

衣兜の時計を出して見ると柳之助は起上つて、

「行かう、もう十時だ。」

「あゝ行かう。」といふ聲を聞くと、姫松は三枝を擧げて慌忙しく取つて返したが、ずつと落着拂つて、

「巧いのねえ、あの手つきが。貴方餘程黒人よ、而して第一百上るの、速いこと。」

「そこへ惚れたか。」と葉山は又言懸る。

「いくら惚れてもねえ、私のやうなもの合手にはなつて下さいませんとさ。」

と聞いて柳之助は奇と顔を擧げたが、藪者は葉山の方を睨めてゐるので、又効と食事に掛る。

「又お前ほどのものが片思を爲るなんて、那樣腕の無い話があるものか。それは丁度金の有る奴が泣言を云ふのと同じ心意氣なのだ、誰が本當にするものかね。」

實際姫松はお若の言つた通り此星さんには酷く阿惚れてゐるのであるから、葉山が何處までも茶にしてゐるのが、悔しいやら、愁いやら、嘔吐したいほど憤れたくて、

「好い加減にして下さいよ。何も那樣に異う有仰らなくつたつて、御迷惑なら御迷惑だと有仰いな。」

葉山は然も氣の毒さうに、

「言つても可いかい。」

有繋に意外の挨拶に姫松も今は謝忍袋の緒が切れたやうな海をして

「はあ、有仰いと！」

と、彼は猶頑として、

「僕より確な證據は無いぢやないか。」

間に介つて狼狽されたのが姫松。抑も誰に背たのやら、背ないのやら、始は何だか洒落のやうであつたのが、彼には段々むづかしくなつて、阿惚の星さんは權嫌を損じたやうな顔色。食べる物さへ食べて了へば可憐い事はないと云はなればかりに、彼木訥漢の急に氣の強くなつた面の憎さ。左も右も捨て置いたら悪からうと、

「酷いわ、貴方がたは。他の類を捉へて議論したりなんぞして。」

因で葉山は氣を變へて、

「ちつと心意氣でも聞かうか。」

「是非何ひませう。」と姫松は急遽して壁際に寄せてある三枝を取り起つたのは、是からたつぷりと思の丈を縁に言はせる覺悟、乃至少しは自慢の喉も聴いてもらつて、萬更一山百文の不見手でもない處を見せたい下心。

衣兜の時計を出して見ると柳之助は起上つて、

「行かう、もう十時だ。」

「あゝ行かう。」といふ聲を聞くと、姫松は三枝を擧げて慌忙しく取つて返したが、ずつと落着拂つて、

「言ふよ。」

「有仰いな!! 憤れたい。」

「迷惑……。」

姫松は暫然と見る。

「どころかい。」

「何ですつて?」

「あゝ、食つた、食つた!」

「さあ腹が出来たら見たまへ。」と葉山は忽ち女の方を餘所にする。姫松は茫然して、又今に構つてくれるのを心待にしてゐたが、急には那樣氣色も無いので、不満さうに櫻袴の襟を弄つてゐた。

腹の出来た目で見ても、誰に背てゐるのやら柳之助には解りかねた。葉山は怪へかねて、「類さんに生寫」と打明した所で、成程と横手を拍れる豫想が、なかく蓋然とも爲ぬのみか、

「類さんに!」と呆れられて、

「然う!」とばかりに二の句は續かぬまでに失望したのを、何處を如何見て、何を言つてゐるのやらと、此人にも似合はぬ罵罵々々しき

「歸すもんですか。」

「でも此人が歸ると云ふから。」

「私は此方は留めはしないわ。」

「さあ、葉山。」と柳之助は自分の席から二三尺ばかりを忙しく往きつ復りつしてゐたが、左右女が彼此言つては自分を袖にして葉山を留めたがる、葉山も強ひては歸りたがらぬ様子を見て、往きつ復りつの區域を次第に擴げて、遂に棧の外へ出て了ふ。

「あの奥様が、お茶がはいりましたからいらっ
 しゃいませ。」
 呼れれば猶豫をするでもなく、直に紳の跡か
 ら降りて茶の間へ行けば、お種は葉山の爲るや
 うに茶器を並べて、姿勢までが似てゐるやう、
 傍には保が大人しく遊ぶてゐたが、柳之助が、
 つて来ると、鹿毛の長い、黒睛の、圓い目
 を擧げて、餘り可愛がつくれぬ小父さんば、
 何爲に來たらうと云ふ様子で呢と打目成つた。
 其の狀は彼が馴染の理髮床にある西洋靴の(犬
 の鼻頭(葡萄)を用してゐる子供)の顔に善くも
 似てゐたので、「坊や」と言ひながら其傍に坐る
 と、忽ち俯いて、後が可恐さうに母親の方を見
 向いて了ふ。
 「今日は薩摩瓶が出來ますから。」とお種は
 錫の直截の茶壺を取擧げる。
 「あゝ、然うですか。」と柳之助は例の通り
 話が無い。
 「昨晚は御愉快でしたさうで。」
 柳之助は少しく赤面した。出掛に細君は、早
 く歸るやうに、と心配さうに言つたのを記憶し
 てゐる。それに歸つたのが十一時。彼は早く歸
 るやうにお類に言はれて、曾て早く歸らなかつ
 た例は無い。十時と云つたのを十一時にでも歸
 送を遣へて見る。
 「少しは御保養もなさいまし。ちつとも元氣が
 無くてゐらつしやる、殿方はそれで可いませ
 ん。恁して折角お伴れ申したのですから、甚麼
 事をしても御氣分を復してあげなければならな
 いと、拙夫も始終然う申して居ります。」
 お種の聲は優しげながら命令する力を有つ
 やうに、柳之助は何と無く其が胸に浸みたので
 ある。
 「はあ、自分も元氣の無いのは知つとるです、
 不愉快であるのは可厭なのです。如何した
 ら此心地が一洗したやうに皆忘れて了へるで
 せうなあ。生替つて來たいです！」
 援を乞ふが如く彼はお種の面を鋭く眺め
 た、その苦悶は非ぬ方を見てもられるほど弱
 いものではなかつたので。
 「親は無し、同胞は無し、係累も責任も何も無
 い體だから、實は死んでも可いのです。」
 お種は慌忙しく、
 「那事事を有仰るものぢやございませんよ。何
 ば奥様の事だから可いと申しても、それでは貴
 方は依様女子の爲に身を果すのではございませ
 んか。それでも殿方の……。」と保を膝に
 播載せて、

れば、翌日お類は快々としてゐる。お種も心
 地は同じであらうと思へば、何氣無く茶に呼れ
 るさへ、餘り肩身は廣く覺えぬのである。
 「何爲、愉快ぢやなかつたです、那事事は。」
 「何と云ふ藏者が参つたのです。」
 「何と云ふのですか。」
 「三味線でも弾いて置きましたか。」
 「三味線などは全然弾かずに唯喋つとるばか
 り。あれぢや何の爲に呼むだのか更に解らんで
 すな。御馳走を爲ると云ふから、甚麼御馳走か
 と思つたら、那事ものは御馳走ぢやないです。
 而して類に背とる。背とると云ふのですが、な
 あに何處も背とりやせんので。」
 「然うださうでございませぬ。拙夫では大相善
 く背てゐる、其貴方は全然背てゐないと有仰
 るが、決して那事事は無いから、是非私に見
 せたいなど言つて居りました。」
 「背とるものですか。あれは全く妄で唯那事
 事を言つて僕に妬つたに違無い。」
 「いゝえ、那事事はありませんよ。」
 「然し背て居つたら……。」と柳之助は不
 圖考へて、
 「妙でせうな。」
 其時には柳之助は如何するであらうか、と

お種も差當つて妙に考へた。
 「背て居つた所で藏者ぢや……。」と柳之
 助は苦笑をする。
 「然うですとも。」とお種は吃と頷いたが、
 そのまゝ話は途切れて、二人ともほつくと薩
 摩瓶に手が出る。誰に話を爲るにも、相對では
 柳之助は其人と面を合せることを得ぬので、
 別けて馴染の薄だけ目を露せてゐる。折々見
 向けば眩さうにして、可成庭の方を見い、
 やがて億劫さうに言出した。
 「然し藏者でも可いですから、適には氣の紛れ
 るものがあると大變好いと思ふ時もあるです
 な。酒が所好だと酒でもがぶぐぶ飲むですれ
 ど、然うは飲めず。僕は別に娛樂と云ふ事が無
 いですから、其が實に困るです、毎日々々唯不
 愉快で。」
 長吁を吐いて、見るとも無く保の顔を呢と視
 てゐれば、いつか又彼方に向けて、母親の膝を
 枕にしたのを、彼は猶一瞬もせずと瞼を据ゑ
 てゐる。
 「それは然うでせうとも。宅へお出なすつた時
 分より、此頃では却つてお瘦せなすつたやうで
 すよ。」
 「然うですかなあ。」と柳之助は若黒い顔の

三の二

「あれ、大相生氣な事を申しました、つい喋
 過ぎました。」
 「いや、然うでないです、決して那事事は無い
 ですよ。何卒言つて下さい、十分に言つて下さ
 い。言つてくれる者が無いから、僕は何時まで
 も同じ事を考へて、獨で苦むで居るのです。遠
 慮無く言つて下さい、僕は喜むで聴きます。ね
 え、言つて下さい。甚麼に言つても可いです、
 無論僕が餘り思過して居るのです、自分も其は
 知つとるですから、喜むで聴きます。」
 誠は溢るゝばかり面に露れて、お種は寧ろ
 可恐しく覺えた。

風にお種は柳之助の餘り女々しいのを善くは
 思はぬのである。抑も男の涙を流すのは、決
 して其妻を失つた時などではない、それが又戀
 しいや、可憐いで、贏れるまでに心を悩ませて
 可いものであらうかと考へてゐたから、柳之助
 の所作は馬鹿々々しいと思ふほど氣に合はぬの
 で。男といふものは、もつと屹然としてもらひ
 たかつた。然も無くては、女といふものが、氣
 の弱い、物に動じ易い、迷の深い、事に臨めば
 怯れ勝つもので、左右に獨立の難しいのを、傍

から支へて、手を求いて、仆れぬやうには誰
 が扶けるのである。其は皆男の役、その男
 が柳之助のやうに弱くて如何するであらう。
 男としての價値は少しも無いではないかと、彼
 は此點に就いて専ら柳之助を非難するのであ
 る。
 とは謂ふものゝ、此世に唯一の樂としてゐ
 た最愛の妻を亡つた柳之助をば、何で可憐と思
 はぬことがあらう。瘦衰へて元氣も無く、鬱々
 としてゐるのを見るに就けて、それまでに思込
 むでゐる心の中は甚麼であらうと思へば、女々
 しいのは別にして、謂はうやうも無く可憐でも
 ある。
 偏屈ではあるが、謙直な、温和な、潔白な、
 熱心な、眞率な、眞に惡む所とは微塵も無
 い人物と思ふほど、お種は誰教はぬ其人の苦患
 をば、手も着けずに見ては居られなかつた。出
 來るだけ扶けたい意で、勿論お類が傍に附い
 てゐるやうな譯には行かずとも、他人として世
 話の出來る限はと、靴下の踵の先まで氣を着
 けて、陰ながら善くしてゐたのである。
 他人がそれまでに心配をしてゐるものを知つ
 てか、知らずか、柳之助はお類の外には神も佛
 も無いやうに、義理も人前も管はず、始終苦々

分抗撃を受けても苦しからず思つた。熱心なる抗撃ならば、冷淡の同感よりは幾何望ましからう。左にも右にも其事の噂ならば、彼の心は一時を慰むるに足るのである。久しく慰められもせず、涙にばかり暴かれてゐた彼の心は、忽ち死灰の中に一點の熱を起して、不覺に悸きつつ、彼は通つてお種の口を開けたのである。通られてお種も思ふ言を話した。

其主意は依樣、復らぬ事は諦めるより爲方は無いと云ふに過ぎぬけれど、其言ふ事の裏に、如家の母でも、葉山でも、最愛のお類でも、なか／＼此場合には、慙くまで弱果てた心を働り得まい、と身に沁みて感じた點があつた。其は優しい聲でもなければ、可憐い語でもない、不朽の道理でもなし、高い教でもなし、畢竟は彼が男に仕へるのも、子供を愛しむのも、夫に册くのも、下に臨むのも、皆其同一なる誠(?)があつて、彼の心を動かしたの外は無い。

話は不圖又昨夜の噂に轉つて、例の背てゐる、ゐないの問答になつたが、其末に柳之助は慙う言出した。

「僕の目には如何しても然う見えんのだから爲方が無いです。那樣ものよりはもつと善く侍とるものがあるですから、二三日内に其をお目に

ければ、其人は寧ろ敬すべきもの。其よりも直接に彼の感情に影響したのは、同居する以上主よりは多く細君の世話になるものを、知らぬ顔では済まぬといふ考量、彼の無頓着は、杓子あたりで給仕の動靜を察するやうな工夫が無いが、善くされると悪くされるとが解らぬほどの仙人でもなければ、お種の深切にしてくれるのが決して見えぬのではなかつたから、猶更其に對して感謝の意を表する必要があるから、まして其人は敬すべき細君であるからは、少しも猶豫する所は無いのである。

それでもお種に親むのは何と無く氣の進まぬ所から、然う思ひつゝ、猶且通けるやうにしてゐた。尤も彼は世間の誰にも大方慙云ふ調子で接するので、他から嫌はれるのも全く此點、其代には一旦好かれさへすれば飽くまで好かれるのも此點である。

此頃では柳之助はお種の事を噓氣にも出さぬやうになつた。實は葉山から堅く封じられたので、言へば益々忘れられぬ種であるし、言つたと復らぬ事を、もう／＼君も言ふな、二度とは我も聞かまい、と或時吃と言渡されたので、柳之助は其後は憤むるのであるが、その苦辛

は忍ぶに餘る。當時の彼の身の上は、富も、名譽も、榮達も、學理の發明も、海外留學も、何れも外に所望と云ふは無い、唯一件、言ひもし、聴かれもし幾分の憂を忘れたい。せめて其が彼の心を慰める、一つより無い道、其道を塞がれたのは、彼に取つては呼吸を碍げらるゝほどの苦悶であつた。

如何に然うかとて、打解けた間ではなければ、言ふ効も聴かれる効も無し、お種に向つて訴へやう心はさら／＼無かつたから、他には諦めもしたやうに見えながら、胸の中では一層焚ゆるばかりに思ふれて、此二週間を過したのである。今日料らずもお種に其事を言はれて見れば、有繋に嬉しくないことは無い。設ひ然ほどに打解けた間でないにせよ、一面には敬すべき人、一面には親まねばならぬ人の口から出たのであれば、而して彼は其事に就いて熱心に忠告してくれさうな語氣であつたので、もし其事に就いてならば、如何なる言でも柳之助は喜ぶて聴くのである。人が有つて、忘れて了へると謝へるならば、自分は復らぬ事は忘れたいのである、喜むて忘れる、忘れる方法を聴きたいのである。彼は其思に同感を求めたいばかりでない、隨

しい顔をしてゐるのは、餘りと云へば世話効の無い、と能く勘辨はしてゐながら、折に觸れては心地を悪くもする。其とても畢竟餘り女々しいから起る事と考へれば、猶更その女々しいのが堪へられぬほど憎くもあれば、尚痒くもあつたが、決して色にも口にも出さなかつた。適には夫までに咳く事はあらうけれども、慙く／＼柳之助に對しては其不快を洩すやうな粗忽は無かつたのである。

同居してから柳之助がお種の事で淺調話をするのは今日が初發と云つても可い、又逃げるやうにしてゐる柳之助が同感を求めるやうな理も無い。未だに彼はお種に打解け得ぬけれど、外に居て見た葉山の妻と、今は朝夕を共にするお種とに對する感情の良違つたのは事實である。彼の男に仕へる工合、保を愛する様子、夫を待たぬ顔、他に對するから下に臨む調子、一家を治むる技術まで、一因より、那樣事を注意する柳之助ではないが、一所に居れば、見るとも無しに長い間には自づと目に入る、彼は人の妻として非難すべき點は無いと見たのである。従來は故無く嫌つてゐたもの、實は其人は一家の主婦として答ふべき所は無いのである。人の妻であつて人の妻として缺けたる所が無

ければ、其人は寧ろ敬すべきもの。其よりも直接に彼の感情に影響したのは、同居する以上主よりは多く細君の世話になるものを、知らぬ顔では済まぬといふ考量、彼の無頓着は、杓子あたりで給仕の動靜を察するやうな工夫が無いが、善くされると悪くされるとが解らぬほどの仙人でもなければ、お種の深切にしてくれるのが決して見えぬのではなかつたから、猶更其に對して感謝の意を表する必要があるから、まして其人は敬すべき細君であるからは、少しも猶豫する所は無いのである。

それでもお種に親むのは何と無く氣の進まぬ所から、然う思ひつゝ、猶且通けるやうにしてゐた。尤も彼は世間の誰にも大方慙云ふ調子で接するので、他から嫌はれるのも全く此點、其代には一旦好かれさへすれば飽くまで好かれるのも此點である。

此頃では柳之助はお種の事を噓氣にも出さぬやうになつた。實は葉山から堅く封じられたので、言へば益々忘れられぬ種であるし、言つたと復らぬ事を、もう／＼君も言ふな、二度とは我も聞かまい、と或時吃と言渡されたので、柳之助は其後は憤むるのであるが、その苦辛

は忍ぶに餘る。當時の彼の身の上は、富も、名譽も、榮達も、學理の發明も、海外留學も、何れも外に所望と云ふは無い、唯一件、言ひもし、聴かれもし幾分の憂を忘れたい。せめて其が彼の心を慰める、一つより無い道、其道を塞がれたのは、彼に取つては呼吸を碍げらるゝほどの苦悶であつた。

如何に然うかとて、打解けた間ではなければ、言ふ効も聴かれる効も無し、お種に向つて訴へやう心はさら／＼無かつたから、他には諦めもしたやうに見えながら、胸の中では一層焚ゆるばかりに思ふれて、此二週間を過したのである。今日料らずもお種に其事を言はれて見れば、有繋に嬉しくないことは無い。設ひ然ほどに打解けた間でないにせよ、一面には敬すべき人、一面には親まねばならぬ人の口から出たのであれば、而して彼は其事に就いて熱心に忠告してくれさうな語氣であつたので、もし其事に就いてならば、如何なる言でも柳之助は喜ぶて聴くのである。人が有つて、忘れて了へると謝へるならば、自分は復らぬ事は忘れたいのである、喜むて忘れる、忘れる方法を聴きたいのである。彼は其思に同感を求めたいばかりでない、隨

顔を擧げて、
「一寸解りますまい。」

四の一

柳之助が前觸をした二三日内もはや明日あたりとなつた。忘れたのか、氣にも留めぬのか、お種は別に何とも言はずに居ると、夕飯の膳に坐るや否や、

「明日ですよ、此間のお話したものは。」
と柳之助は然も其人の待ちに待つ事でも注意するやうに、顔を見ると言出した。お種は生得の昂然とした調子で、

「はあ、然うでございましたね。」

「明日です。」

「明日何だい、此間お話したものだなど、暗號電信を打つたりなにかして。」と葉山はお種から聞いたのを忘れて了つてゐる。「一言心着けられて、

「うむ、あの(解りませんか)事件、彼がいよいよ明日? それは面白いね。然し、君の日は腐つてゐるのだから、是が本當の駄目だ。あのくらゐ背てゐるのを、(何處が背てゐると)とは何事だらう。女の方は見ずに物ばかり食つてゐる人物だから可厭になるよ。」

「まあ明日のを見てくれ給へ、此間の鐘を復るのだから。」

「へ、反討にならないやうに用心するが可い。」
「然し君は何でも難すから、何せ難すだらう。難されても僕は管はん、自身が善いと信じたら、それで善いのだ。」

「それで善いとも。誰も然うだらうぢやないか。私だつて善いと思へばこそ這樣お種にでも添つてゐるのぢやないか。」

お種よりは柳之助が極を悪くして、顔の遠端に困り果てる、お種は又始つたと云ふ体で、黙つて聴いてゐる。

「今話をすると實に嘘のやうで、小々氣が尤めるけれども、私が嫁を娶ふと云つて騒いだ最中には、一時に八軒から申込が有つて、如何だ如何だと擧げから娘人が玄關に詰掛けて、我勝に話を付けやうとするので揉めるね、始末にいけないから、香札を渡して會ふ事にしたが、近所では噂だつたさうだ、葉山様の玄關は嫁取のやうぢやない、薬取だ!」

細君も柳之助も笑はされた。葉山も可笑かつた口角を改めて、
「其よりもつと偉い話がある、横濱物産會社の支配人をしてゐる、それ、あの木澤ね。」

し、年が十九で、箱入で、教育があつて、器量好で、相應な身分なのだ。いくら陽氣が悪いつて男早は爲やしまし、何も好き好むで、那小父さん見たやうな所へ……噫、情無いなだ! 若い娘の身空で色も戀も無しに、窓の一點張とは如何たい! 然云ふ匹婚の腸こそ、X光線でお願ひ申すのだ。而して眞眞腹に取つて、娘のある家へ一枚づつ配つて置きたいね。」

言はれても言はれても酒を零し零し葉山は仇のやうに罵つた。
「女も然うだけれど、その木澤と云ふ人も……然うな、世間のものは妻を失ふと、直に又娶ふやうだけれど、那は如何云ふものか知らん。死んで了ふと直に忘れて了ふのかね。」
葉山の不平は花嫁に在つたが、柳之助は却つて男の方の了簡が聴きたいので、十九で二度目の所へ嫁入る娘よりも、十五年も添つた妻の一周年も爲ぬのに後妻を迎へる男の心を疑ふのである。

「それは別問題だ。」
「別問題だ。然し僕は常に疑つとるのだから、聞してくれ給へ。」
葉山は手を揮つて、

「え、溝井様の御親類の。」とお種も知つてゐる。

「あの木澤、もう其方此方四十だらうが、財はあるし、嬌飾すと來てゐるから若い。細君の瘦なつたのは去年の秋の末だつたかな」
好加減に聞流してゐた柳之助も急に身に沁みて、

「はあ、何で死んだのかい。」

「子宮病だ。子宮病だの、胃病だの、熱病卒中、赤痢など、來ると、まことに死架のしな病氣さね。そこで此間中領に繼勝を探してゐると云ふ噂だつたが、いや、貧病者の有ること有ること、それが、木澤の所望は初婚のものに限ると云ふのだよ。財の力だね、四十面を擧げてさ、十五年も添つた先妻があつたのだ、それで初婚の候補者が腐るほど有るとは、日本の婦人も好い度胸になつたものさ。」

歐羅巴では七十にもなる伯爵の所へ、花の若の十八ぐらゐるのが喜むで適くなどは珍しくないさうだ。其を考へると、人氣は悪い國に違無い。借老同穴の契と云ふのが本文なのに、後家になるのが山で嫁入るとは好い畜生だ。

成程財は貴いには極つてゐるが、然う又

「もう止さう。明晩の前觸と致さうよ。」
獨で葉山の辯じてゐる内に、柳之助は勿々と食事を了つて、此時は膳を離れて、次の間で巻簾を吃してゐるが、獨語のやうに、聞かせたいやうに、

「直に後を娶ふ人が能く有る。」と壁に靠れて、目を瞑つて、簾々に煙を吹きながら、其語を黙讀するやうな体であつた。
當時は葉山も物を言はず、連に飯を食ふ氣勢がして、折々お種が給仕をするらしい物音。隠居所には保の障が開いて、急に鎖つた途とて夜の更けたかと思はれる閑寂を、熱と柳之助は聞澄してゐるが、やがて何氣なく目を開くと、眞晝を照くラムアの光は鮮に夫婦の姿を照して、舞臺の幕が開いたやうに、今更異しくも目を惹ける。

愉快らしい夫と満足さうな妻とは見好げな一間に相對つて、夫は外の勤から歸つて暢々としてゐれば、妻は一日の事を寛々物語らうと、誠を詰めた調子をして、待ち待つたれつした二人は、安樂の天地に愛世を忘れてゐる。
嗚呼、夫婦一日の身は夜食に在る。目の前に那樂しげな夫婦が居れば、一間隣には這那儂い獨身が、其樂の無い外に更に一の悲を

懐いて、暗い處に蹲つてゐる。ラムプの光は夫婦ばかりを照して、殆ど自分の所へは來も爲ぬ。彼等は明い所に集むるのみに、自分は暗い所に集むるのや、何ぞ世に在る我身の上の此居所と相似たるや、幸の光は此身を照さぬのである。彼等は集むるの自分ばかりは悲む。何故に同じ人間でありながら此不幸があるのであらう。如何にせば昔の幸を取復し得るであらう。考へても、唯物可憐いほど儂くばかり覺えて、或は此點滴い所に閉籠められたまゝ、遂に葬られて了ふやうな氣がして、居附らずに明い方へ飛出すと。

二人の驚いたこと！

四の二

此夜は思寄らずも柳之助には格別不愉快なるものであつた。二人を驚かして明い處へ刺さむだ所で、その樂しげなのが尙たれるでもなく、二人は二人だけ、自分は自分で、暗い所に居たのと異らぬのである。其實葉山も自分達の方は掛いて、柳之助に話掛けるやうに、努めたのであるが、彼は一向嬉しくもなく、心の中には、(自分は二人の樂を知つてゐる、彼等は決して

て自分の此苦は知るまい。嘗て葉山が大醉して年始めに飛込む事があつた。其時頼様と二人で非常に介抱した事がある。頼さんが水袋で葉山の頭を冷しながら、二時間も附切で枕頭に附いてゐた、自分は衣類を脱せたり、夜具を出したりして、大騒ぎをやつた。それでも二人して騒いでゐるのは樂であつた。二人が心を一つにして、互に手足の如く動いて、或一つの事を二人して半分づゝ爲るのは、一種の謂ふべからざる幸が自から其中に在る。二人は今如何に幸であるか知れぬ。大醉の葉山は其時前後も知らなかつたが、自分は今知過るほど何も彼も知つてゐる。大醉したやうに此悲がもつと劇しくもつと急であつて、寧ろ前後も知らなかつたならば、此不愉快は覺えぬかも知れぬ。此悲がもつと劇しく、もつと急であつたらば自分は甚だなるのであらう！) 彼は果して其を願ふのであらうか。此悲の大醉は發狂である、その醉覺の水は無論自殺でなければならぬ。彼は自殺を喜ぶ狂人ではなかつた。發狂に樂まむとするほどの變人でもなかつた。然し、彼は何を樂に生きてゐるのか生きてさへ居たらば失つた樂が又得られるのか、と常に考へては迷つてゐたのである。

(二人の 幸なのに就けて、自分の 苦は葉山の 大醉は一時であつたが、自分の 憂日は是から長く、或は一生涯の 苦である。)

憊思ふと猶更世の 幸を見るに忍びかねて、彼は遂に起つて、二階の 居間へ還つたが、還つて見れば、なかく還つて來るがものは無くて、暗黒の中に唯一個心を引込めたラムプが有るか無きかの悲しみに、其載せてある机の上を照すばかり。而も其光を受ける物は一様に死顔の色をして、傍へ寄つたらば然ぞ身毛も豎たうと冷たげに見える。此微寂しい影の中に白銅鏡の寫眞立が漸く取つて、筆筒の筒に飾つてある佛は眞實で波服の半身、誰のと問ふまでもない。

柳之助は行くよりラムプを化と明くして、坐ると眞實を眺め見入つてゐたが、其目は瞬くのを忘れたやうに、始く暗つてゐる間に、机掛の花唐草の上に滴々と露を零した。始めて其時、露を爲ると與に、兩臂を張つて机の上に俯いたまゝ、容易に顔を擧げずにあつたが、やがて思切つた林で振上げば、涙は頬の邊まで溜してゐる。左の掌で腹立しげに其目を掌拂ふと、ラムプの火屋は響を作して、裂けて落ちて落ちる、火は翻られ黒煙を噴く、慌忙しく吹消せば

お類の寫眞も、机も本箱も、二階も我身も、有つたものは皆無くなつて、唯一面の闇の中に柳之助は身動もせず沈としてゐた。何を考へてゐたのやら、火屋の碎片の冷徹するまでも、其儘に居竦つてゐると、何時來たのか階子の口で例の元氣な聲、

「や、眞暗だ、如何したのだ。」

柳之助は萎縮した聲をして、

「待つてゐたまへ、待つてゐたまへ。」

「如何した、如何した。」

五の二

今日はと何處をした今日であるのに、柳之助は何も持たずに歸つて來たので、お類も有聲に尤めずには措かなかつた。彼は失望に堪へぬ險しい顔をして、

「もう二三日待つて下さい。」

と言ふさへ殘念さうな、其氣色を見てお類も、

「はあ、然うですか。」

で済して了つたが、今日には限らぬ、毎でも歸つて來ると、不思議に機嫌を悪くしてゐる。別して不思議な、朝出て行くのに斷て那樣事は無い、顔の色なら言語なら、朝は割合に冴々して、謂はゞ樂しげに心の急がれる風がある。それが歸つて來ると憔悴と

して、門を入るも脚の重いやう、或は然も無く歸ることも敷の中には有つたなれど、朝出する時に氣の済まぬらしい様子が見えた例は前後に一度でも無い。

不圖思ふ見出した以來氣を着けると、往と還との容體は版で捺したやうに、いつも同じである。それは持つてゐられるステッキ、あのステッキでも知れる。往は飛ぶやうで、還は引掛る、と年寄の耳ながら閑さに聞出した隠居所の勇が面白い證明。

返すもお類は不思議でならぬ。何故に出て行く時は機嫌が好くて、歸つて來れば苦しい顔をするのであるやら。女氣の思過して見れば、餘り好い心地は爲ぬのである。歸つて來るのは誰の家である？ その家へ歸るのが不愉快となら、不愉快の因は其家に無ければならぬ。此家の何處が不愉快で、何が氣に入らぬのか。もお類さんが此家に居ないからとならば、學校へ行つたとて居るでなし、又始終鬱き通してゐるものが、毎日の勤が何の面白から、誰にしても意勝になるが當然である。然も此家が可厭さうに、出て行く時は冴々として、歸來と云ふと憔悴してゐる、之には何ぞ理が有らう。それとも母に還る鳥の疲れた翼に飛ぶさへ

意が見えるのか、但は例の變人ゆゑかと種々に判じたが、固より何も當推量、唯類の無いのは其事實で、

「誠に御父様の有仰つた通り、成程其に違無い、ステッキの音からして然らだ。」

左にも右にも仔細の有りさうな、不思議な、けれども其より未だ心得られぬのは、學校の出動を怠らぬのが、不思議の中で不思議と謂ひたい。箸を持つさへ力無げに、大息ばかり吐いて、如何に快々してゐる那裏でも、決して學校を休むだことが無い、休まうとしたことさへ無い。人に言を交ささへ物憂さうにして居るものが、如何して面倒な教授が出来るやう、學校へ出る氣が出やう。彼人の氣では、學校も出勤も抛つて、思ふまま鬱いで居さうなものを、是ばかりは願に掛けて一日でも破にせぬのは不思議の中の不思議と謂はうか、不思議の上の不思議と謂はうか。逆も有りさうも無い事、出来さうも無い事！ 之に就けても熱く變人に違無い、とお類は思ひに思つたのである。

此日の不機嫌は別けて甚しく、昨日までの氣色は何處へやらであつたが、翌朝も同様で、其睡げな顔はいと恨が有るやうに、其恨をば又抑へるやうに下座敷の縁を踏散しながら、

お種を見ると、
 「僕はどうも病氣です。」
 葉山に呼ばれて茶の間へ入れば、
 「僕はどうも病氣だ。」
 苦痛を洩すのか、不機嫌の辯論をするのか、左にも右にも自分から平生の氣分ではないことを訴へながら、不相變柳之助は學校へ出て行くのである、而してステツキの音も例に依つて飛ぶやうに。お種は呆れる張合も失して、これに歸來は甚だであらう、と午後の退校を待つてゐると、謂ふまでも無く引掛りながら、惜々門を入つて来たが、お種に逢つて始めて出した言は、
 「僕はどうも病氣です。」
 一度ならず二度までも病氣と聞いては案じられる。委しく容體も訊ねて、然らば然らうの様に爲ねばならぬ、と其意で始めた話の中に、お種は竟に口頭の不思議を言出したのである。有繁に柳之助は當惑の極で、
 「はあ、朝出る時は然うですか。歸つて来る時は那樣風に見えますか。」
 「然し實際然うです。今の所では何も樂も有りません、學校へ出るのが、何故樂？」

十年になるが、今でも時々、あゝ生きてゐたらばと思ふ事がある。其當座は忘れられぬものだ、と云うて大切な體を那廢事で傷してはならない。お前たちも何分氣を着けてあげるやうに、
 「う。」
 爾後は飛ぶやうなステツキの音のする朝々、お種は獨り情無し思をしてゐた。彼が歸つて來ての不機嫌も、内に居ての苦い顔も、引續いて始終見せられるけれど、從來偏屈とばかりに勘辨をしてゐたものが、何も病ゆゑと、今では優しい思遣になつたのである。
 お種にははや忘れられてゐた再度の二三日内の期限も今日といふ日、彼の歸來が例より晚いので、例は晚い葉山が先に歸つて、その時をしてゐると、艦々と玄關へ横付にした車がある。婢は取次に出た様子、聞えるのは柳之助の聲。
 「おや、驚見だよ、車に乗つて来た、如何したのだらう。」
 艦が天上でもしたやうに驚いた葉山の顔色。其顔をお種は屹と視て、
 「御病氣か何かぢやないのですか知らん。」
 「行つて見な。」

五〇二

お種の出るまでも無く柳之助は僕々と奥へ入つて来た。新聞紙に包んで、お種は甘文字に掛けた堅三尺許に横二尺程の扁い物を重さうに提げて、お種を見ると口を衝いて、
 「出来たです、出来たです。」
 常は癖のやうな目も輝々して、畢止さへ何と無く都合ひである。お種は呆氣に取られて、
 「何でございます。」と其物の何よりは、今日の彼の何が判じたい面也。
 葉山は小机を引寄せて、其に大美酒の買紙の假綴を六七冊、膝の上にブック仕立の小厚い版本を披けて、會社の調物をして居たが、柳之助が關際立つて、其傍に件の包が壁に寄掛けるのを、振向いて横から眺めながら、
 「何だい、大きな物を。うむ、それで車に乗つたのか。何を買つて来たのだ。」
 「驚見さん、何でございます。」
 「え、今見せます。」
 彼は忙しげに其包を明の好い方面へ立直して繩を解き始めたが、未だ帽子を冠つたまゝであるので、お種は背後から徐と取つて茶櫃の上に置いた。旋て覆の新聞紙を引剥すと、柳之助は一足左側へ寄つて、二人の面前に其物を顯はしたのである。四つの日は忽ち注ぐ。

其理ですか。」と苦笑をして、
 「學校の仕事は都合面白いですよ。それは何です、氣分の悪い時は面白くないですけれど、それでも内に獨り惘然して居るよりは未だ可いです。教場に居ると大勢を相手にして、學問以外の事は全く考へんですね、それが大變善いんです。内に歸つて來ると、紛れる事が無いから、好終類の事はばかり考へるやうになるんです。學校に出て居るとお種が無いです。」
 是ばかりは實に如家の母の、聞だとは僕に常と思ふです。類の亡くなつた當座、僕は學校も罷めて了はうと思つて、もう打遣かして長く休むで居つたです。葉山君にも随分言はれたですけど、聴かんで居つたのを、到頭如家の母に勧められて出たのが發端でしたが、それから今日まで、貴方も知つとる通り、愈して病氣をしとるやうな顔をして、心地も快くないですけど、僕は一日も休むだ事はありません、實際行かん方が不愉快なのですから。若し學校が無かつたら、僕は本當の病氣になつて了ふでせう。
 葉山君にも貴方にも非常にお世話になつて居るです、今度お宅に來てから一層貴方の御厄介になつて居るです。それに内に歸つて來ると不愉快な顔ばかりして居つて、僕は甚だ相濟

まんです。」
 艦に頭を下げたのも、お種には在るよりは可哀に見えて、口には言はぬ心の底までも、それで讀めたやうな想がする。
 「何卒是は病氣だと思つて想して下さい。」
 其聲は重く沈むで、聴く身は緊しく膝へられるやうに覺える。
 「此間も貴方から忠告を受けました、自分も其は承知して居るですけど、それで依樣可かんです。どうも病氣です、愚云ふ病氣ですから、管はずに抱つて置いて下さい。」
 開けば不思議でも偏屈でもなくて、這樣可憐も世には在るものか、人の執るべき務は誰苦に爲ぬものはない。三十になつても四十になつても七日に一日の日照を皆樂にする。大人氣無いやうに思はれるが、務となれば何仕事もそれ程に辛いのである。彼人も學問が所好だとして、衆が一日の日照を思ふやうに、六日の務を喜ぶのでもなからうに、其辛い務をば末しも、樂にする身は甚だ思であらう。何程働いても、彼人ばかりは衆と違つて、待つ日照が無い、其上に七日の間務めるにも勝る辛さが片時も胸を刺ぬのであるから、其辛さよりはとて他の可厭がる務をばせめてもの樂にしてゐる。同

「能く背とるだらう。」と柳之助は左臂を張つてコートの腰に拳を付けて、右の手で眼鏡の端を抑へながら、連略をして二人の顔に向した。是は教場に於ける彼の得意を表す態度で、他の答を聞くまでは、眼鏡に手を觸れては始に見た點を變へずに見るのである。

葉山の先づ笑を含んで迎へたのは、お類の立姿を七分の半身に寫した油畫の肖像。額縁は唐草模様を浮彫にして分厚の西洋木地で、大きと云ひ、裝飾と云ひ、總體に仰山らしく出来てゐる。

繪姿は柳之助の最も善いと云つて居る眞像を本手に、歸寧の風俗を寫したので。高島田に結つて、桃の實に仙雀の挿込、高い前髪の際に牡丹形の櫛の端が見えて、見事に髪が出てゐる。額の廣い、濃くない一字眉の、小さい目の鋭く澄んだ、鼻は平細で、好く緊つた唇の愛らしい、頬から頭の邊の四合した、小造の細面は慧しげに、又何處と無く薄つてゐる。額横に、片手は椅子に掛けて、右を袖に引入れて、白襟に縮緬の三枚襷、上は水色の(丸に四方木瓜)の紋服、下着は鳩羽鼠の更紗で、帯は葡萄色地に金茶の細目を織出して、銀鼠で細く光琳千鳥を一群づゝに、處々唐松を地色

葉山は杯へ次手に最一つ杯へて、溢々しながら、

「それは爲ても可いけれど。」

「出来んだらう。」

言ひたい口の端々するのを顔に推廻して、

「いや、どうも恐入つたよ。」

爾時お類は始めて、柳之助の面上に心の底の打解けた餘波が自から寄せるやうな笑の浮ぶのを見た。旋て彼は油畫の正面の壁に兩膝を抱へて靠れながら、餘念なく眺盡してゐる間に夢見る如く吾を忘れて了ふと、其繪姿の鋭く澄んだ目は忽ち可憐さうに動いて、堅く結んだ唇も緩む。横顔をさへ振向ける、傍に寄つて來さうにしては、又イむで嬉しげな様子をして、遂には物を言懸けた。彼は記憶の出来ぬほど種々の話をした、楽しく過去つた事やら、待たれる行末の事やら、陸じい今の事やら。然し彼は此半年の身に積る歎も、胸に餘る悲も、世は闇の如き凄寥も、それらの事は全く覺の無いやうに捨て置いて、他愛無い私語ばかりに酔されてゐたのである。彼は幻に語つてゐるお類をば、此世に亡い人とは思はなかつた。或時此夫婦は此様に倚添つて、此様に楽しく、此様に話をしたのである、今彼は其の或時の柳之

で配つてある。縁々と結つた緋の花綱の帯揚は胸の邊に雲鶴の形を見せて、帯留の金具は柳の輪の中に金色の一輪楕。

畫は水彩風に見面白く塗つて、飽くまで繪密に筆を用つた、俗氣の多い、仕入染みたものであるが、寸分差はず寫得たとて、柳之助は至極の満足で、二度まで期日を遅らしただけの事は有ると、言分無しに引取つて來たのである。

「まあ大相好く出来ましたこと。」とお種は物珍しさうに眺めてゐる。其顔を見い、柳之助は自分も覗込むでは、

「背で居るでせう、ねえ、随分能く背で居るでせう。」

葉山は元來這油畫なるものが大の所惡で、月の中の兎と油畫の善いのは、話ばかりで見たことが無いと力むのであるのに、別して善くないのを見せられたのであるから、一も二も無い、續けさまに肉が言ひたくて敵はぬのを、やうやう推察へて、寧ろ拙悪加減を拜見する氣でゐるが、柳之助が得意で喜ぶでゐるものを、物が物ではあるし、猶更非は付けられぬので、無理に一箇所を取立て、

「なるほど能く背でゐる。」と左も右も言つたのは、御座つてゐると知りつゝ目を瞑つて眺

嚙にする想。何とか言はれるに相違無いと、毎度の事ゆゑ柳之助も其覺悟でゐるに、恠う聞いでは遠得意で、

「好く出来たらうか、上手に畫いてあるかね。」

葉山は是に於いて益言ひたい、それを最一つ推察へて、

「背でゐるから可いやね。」と無據に答へる。「誠に能く背でゐらつしやるではありませんか。御褒がねえ、好く出来てゐます。」

「然うですか。」と柳之助は額の側に立つてゐたが、不知お種と並んで見物の一人となつて了つてゐる。

「何だな馬鹿々々しい、畫を看てゐる髪の出來を譽める奴も無いものだ。同じ譽めるのなら御器量を譽めるが可いぢやないか。」

お種は挨拶ぶりに少しばかり笑を含み、急に憶出したか柳之助は、

「さあ、君、如何だ、是で此間の仇を復つたらう。」

「仇とは、仇と呼ぶる覺は無い。」

「有る。君は背で居るせん藝者を。」

「うむ、あの一件かい。」

「君は反對にすると云つたぢやないか。」

「實は是は疾に註文したので、其が漸く出来て来たのです。貴方には從來度々言はれたのに、又這處所を……どうも面目無いですな。然し、如何して知れたでせう、下に聞えたですか。葉山君は起きて居られるのですか、あ、然うですか。」

彼は涙を拂つて、襟を擦合せた。

「僕は今まで人の死ぬのを這處に悲しいものは思はんでした。世間には疾に死なれたものは何も僕ばかりと云ふではないですものな、其を僕ばかり這處に悲しがるのは、考へて見ると可憐いんです。葉山君も言つたでせう、僕のやうに何日までも思切れずに愚痴ぼく泣いいるものは無い。然うでせう、然うだらうと自分も思ふのです。然し、僕は決して思切れんものぢやないですよ、思切れることは十分に思切つて居るんです。思切つたのと忘れられんものとは僕は別だらうと考へるんです、如何ですかね。もう死んで了つたものは如何したつて爲方は無い、で思切つと居るんです、併し、始終考へん事は無いですな。それが何も死んで了つたものが思切れんで考へるのではないですよ、唯考へては悲しくなるのです。世の中には種々不愉快もあるんですけれど、死んだものゝ事を考へるほど、そ

りや不愉快はありません。葉山君は善いですが、貴方が居つて。貴方も善いですが、葉山君が居るから。僕は此油畫、油畫の外には、外には何も……。」

と言ひも敢ず顔をば袖に擦り付ける。

「それはお察し申さないではありませんけれど、貴方のやうに然う思つてゐらしたら、御體に障ります。もう現在障つてゐらつしやるせはございせんか、ですから猶々気が閉ぢて、其が爲に、不知粉れて了ふものも附纏つてゐる理でございせんか。全く御體を不良してゐらつしやるのです、胸もお不良なつて居るのでございせんか。」

ちと御保養でもなさいますし、而して御體が良くなれば、御心地も自然と良くなりませうから。而して低云ふ物を御覽なさるは却つて可けませんねえ。今日の晝間は珍しく元氣であらしたから、結構だと思つて居りましたのに、是が出来た爲に今晩のやうな事では、此油畫は毒になりますから、當分の内仕舞つてお置きなさいませう。」

生憎保の嗜癖がするので、

「それでは私は是で参ります、貴方も今晩はもうお寝みなさいませう。」

「はあ、どうも種々……。」

「御様、もう宜うございませうよ。」

お種は降りて了つた。柳之助は枕に就いたが直には睡られぬので、又油畫を見ておれば胸が通つて涙が出る。思切つてラムプを吹消して夜着を引被つたが、未だ目は冴えて轉側ばかりしてゐると、旋て階子を昇つて来る音。

枕を飲つて待つてゐれば、又お種が、片手にラムプ、片手に寢付のコップを載せた銀鏡の西洋盆を持つて、小腕に壺を抱へて、入つて来たが、燈が消してあるので、

「おや、もうお寝みなすつたのですか。」

「いや、未です。」と柳之助は頭を擡げる。

「葡萄酒を持つて参りましたから、之を一盃あげつてお寝みなさいませう。」

「それは故々……。」と起回らうとすれば、

「然う爲すつてゐらつしやい。」と一盃注いで盆を差寄せる。柳之助は腹道になつたままで會話をしたが、其時彼は一種異様の所感を起して、胸の内が漲るやうに覺えた。先一口に其半を盡して、緩かに息を繼いで、旋て飲乾して了ふと、お種は待構へて、

「もう一盃召上れ。」

「はあ。」とコップを出せば溢れるほど注れて、彼は直に口を着けたが、其吃餘を樂しうに燈に照して子供らしく眺めてゐた。又一口飲むとコップを盆の上に置いて、言難さうに少し笑ひかけて、

「妙ですな、恠して居ると何だか妻が居るやうな心地が爲るんです。失敬ですけれど貴方が妻のやうに思はれるんです、大變それで酒が旨いです。」

「多度召上れ。」

「柳之助は嬉しげに、

「飲みますよ！ もう一盃下さい、是で三盃。あ、酔つた。然し這處に愉快な事はありません。毎でも酒を飲むと恠う愉快になれるなら、毎日飲むでせう、今晩のやうな事は實際有りませぬものな。」

何彼と言ひながら三盃目も不知空けて、

「もう一盃、どうぞ。」

「大層上れますね。」とお種は平生と違ふ呟服の手並に少し驚いてゐる。

「旨いですが、貴方。」

「上るのは可うございませう、過ると後が苦しうございませうよ。」

「酒の酔しいぐらゐは何でも無いのです。酒の苦しうぐらゐ！」

と苦笑をして、四盃目も半分飲むで、

「貴方は御迷惑でせうな。」

「いゝえ。」とは言つたがお種も決して迷惑でない事は無い、彼此三時半にもなるのである。

「お寒いでせうな。」と何ぞ寒くない方法を

見出さうとするらしく、柳之助は首を擡げて四邊を眺めた。

「いゝえ。」と又答へたが、實は兩袖を重合せ

て隙洩る風に懼されてゐるので、柳之助は空の

コップを拵廻して姑く躊躇する牀であつたが、

「寒いですから貴方も一盃如何ですか。」

「私はもう……。」

「然うですか、それでは僕が飲みませう。」

「那樣に……可うございませうか。」と内々加減をして注ぐ。

「旨いですが、如何して這處に旨いでせう。

然も非常に愉快なのです。貴方の爲に今晩

は非常に愉快なのです。御迷惑でせうけれど、

もう少し居らして下さい、可いですが、貴方

が行つて了はれると、又寂しくなる、僕は其が

心細いのですから。」

「それでも貴方もう四時ですよ。」

「四時!? 御迷惑でせうな。」

「朝が早うございませうから、もう私も臥りませんでは。」

柳之助は是非も無さうにコップを把つて、未だ有るのに、

「それではもう一盃！」

六の一

今日の日は、國民生命保險會社の取締役、川崎壽平が高輪の自宅に園遊會を催して、葉山夫婦も招待を受けたのである。此催は彼の長男の壽がボストンの商業大學を卒業して、此度歸朝した祝と、支店設立の事に就いて山陽道筋を巡回する主の留別會とを兼ねたので、今や時候も一重櫓の咲きも遅れぬ彼の廣庭は、年月心懸けて名ある花の数を二百餘も寄せてある。時、此時、庭も此庭、誰有つて當日の盛會を豫想せぬ者は無い。夙て壽平の信任淺からぬ葉山は此際秘書官的隨行を命ぜられて、兩三日の内には發足するので、謂はゞ今日の主方である。天氣は人々の願ひに願つたやうな跳向の快晴ではないが、氣遣れる花鏡と云ふほどにも無く、少しく風が有つて、寒ならず、暖ならず、

朝から小鳥などが長閑に囀散して、日曜としては玉の如き日和。

午前十時からあるので、主方であれば九時ほどには行着いてゐなければと、お種は七時前から身仕舞に掛つたが、其間に子供もあるし、夫の世話も爲るので、手廻を爲す意でも、漸く帯留のパチンと緊つたのは八時、疾に車は門に来て軌を並べて待つてゐる。

庭には保が河童頭を十筋ばかりの一寸幅に結つて、黒羽二重の熨斗目の染織様に鶴茶の同じ下着、淡紅色縮緬の兵児帯を繰々と後結にして、紫天鵲絨の靴を踏いて、遊ばしてゐる。保母も赤柳條の二子の新しい布子に餘所行の柳條襪子の帯を結めて、襟はメレンス友禪の華美なことは千代紙のやう、赤毛ながら結立の銀香返を大事さうに翼を長く、坊様の袂の引摺るなどは二の次にして、拘つて帯を拵いたり、襦袢の袖を引張つたり、可笑しいやうに憂身を變してゐる。

お種は支度が出来て、急遽く座敷に出て来ると、其處に兩箇の居るのを見て、「華や、もう行くのだよ。」と聲を懸けて茶の間へ入つたが、葉山は見えぬので、二階であらうと昇つて行けば猶且居らずに、柳之助が唯一

箇、洋服を着けて、外套まで着て、肘掛窓に靠れながら、投足をした膝に帽子を載せて、保が目覚しく着飾つて庭に遊ぶのを兀然と瞰下してゐるが、人音がするので振り返つた。

「おや、此方にも居りませんか。」とお種は襖を脱けたまま、内を見込むだ其意は給にでも畫いたやうで、見違へるほどの美しさに柳之助は思はず、軀を捻向けたのである。

お種は生藍色の小紋縮緬の紋服に、黒緞珍の丸帯を結めて、納戸の染柳條縮緬の二枚下着、白茶の微い綾紗形の襟をして、長襦袢は肉色の中形縮緬、歌舞伎形の圓帯に結つて、髪は艶々と濃いの、肌理は膩なり、色は白し、薄化粧をさへしてゐるので、何處と無く劇然と水際立つて、四五歳は確に若くなつたので、一目見た時は實に別人か、器量勝りの妹かとも思はれた。粧れば愈も美しくなるものであるか、彼も屢ばお種の粧り飾つた姿を見たが、逆も是程に粧榮のしたのを覺えぬので、如何にも奇異の思を爲るより外は無い。變りも變つて、其體度まで例よりは嬌麗に、若氣の羞しきが見えるので、柳之助は呆顔をして見惚れてゐるのを、お種は有聲に嘖ましい、其風情が彼には猶好く見える。

「驚見さん、今日はお人が悪いぢやございませんか。」とお種の方でも、感服してゐる。柳之助はなかなか眞面目で、「いや、本當です。」

「飛んだ事を有仰る。」

「いや、實際！ 大變立派です。」

餘り言れるのでお種も窮つてゐる、柳之助は又悪く眞面目になつてゐる、其の兩箇の様子をば何とも謂れず可笑く見物してゐた葉山は懐へかねた体で、

「大した事になりましたな。」

五分の後に三臺の人力車は南に向つて走つて行く。反対の方角にはステッキを曳いた後妻が寂しうに暫く見えた。

六の二

従来に柳之助は柳家の母にも慰められ、葉山にも慰まれ、元にも勉められたし、お種の世話にもなつた、其度身に沁みて感じたことの無いではないが、其感情は決して胸に留つて長く彼を樂ませるのではなかつた。彼のお類を悼む執着と失望とは正しく此等の力に十倍して、さほどの人の情も水の巖に二三滴の熱湯を澆いだ

此にも居らぬので、お種は挨拶も勿々に降りて行くのを、柳之助は僅らぞ思つて、續いて降した、すると其鼻の先に、夫婦は行合つたまま、座敷の真中で立話をして居る。

葉山の扮装は、黒魚子の五紋の羽織に上は濃むだ平御召の變千筋、下着は紋御召の襦、薄色の仙臺平の袴を着けて、四合として白足袋を踏いた所まで凡ならず見える。彼も此も日覺しく立派になつたのを、彼は陰に驚いてゐた。

平生は餘り色を動かさぬお種も、今日は樂みさうに嬉々して辨の無い保まで殴れたり、笑つたりして入つて来る。恚う一間に打撞つた親子は香美々しく着飾つて、是から同遊會へ行くと云ふのを、縁側を足を出して眺めてゐる人は、此日和の日曜を誰と何處へ行くのであるやら、折々日影に向つては帽子の埃を弾いてゐるが、

「今日は然し天氣で可いね。」

「あゝ大當さ。」と葉山は振向いて、「君ももう出掛けるのだらう。」

「僕の方の同遊會は寂しいばかりだ。」と強ひて笑ひながら、漸く身を起した。彼の行くべき同遊會は何千人の來賓も唯大小の石を並べた谷中の森の中である。それを思ふとお種の胸の中は、此天氣の忽ち曇つたやうに鈍らさ

やうに、總に融ける傍から直氷りついで、後には何の驗も無い。直と其ばかりを思窮めてゐる胸の中には、他事を容る、隙は無いのである。

外にも種々の事を彼は見もし、聞きもした、其等の見聞した事は猶更夢か風のやうに過ぎて、要するに彼の胸にはお種が生きてゐて、始終それを相手に餘念は無かつたのである。

疑はしいのはお種の嘆衣の姿、是ばかりは何故か夢のやうにも風のやうにも唯一時のものに消えて了はず、慕詣の往復にも彼は其儀を見てゐた。歸つてからは猶目を去らず、再び其を實物で見るのが如何にも樂しと思はれて、頻に夕方の歸來が待れた。之をお類にしたならば、珍しくない事で、寧ろ彼の常であつた。學校に出で居ても、歸る途々も、或は人を訪ねて居ても、彼の心の底に此感情の全く絶えた事は恐く無かつた。お種は彼の生命で、彼の神で、彼はお種の彼であつた。

然し、其は最愛のものが存生中の事で、今となつては、所詮其思を樂むことが慥はぬばかりに、彼は瘦せるやら、泣くやらして、失望の苦を極めてゐる。假初にもお類の外他人に對して、彼の此思をするのは、天にも地にも是が初發である。固より思ふとでも、お類に就いて思つた

ほど静しく切に、極めて静しく、甚しく待れるではないが、但其の思の全く同じであるのは、今朝のお種の異様に美しく彼に見えたよりは、更に更に幾分の不思議を加へなければならぬ。

柳之助は考へた―甚だしくして歸つて来るか。歸つて来たならば自分を見て甚だ顔を爲るであらうか、而して甚だ事を言ふであらうか。葉山夫婦は閑遊會の中でも有聲に折々は思出してゐた―内では如何してゐるであらう。孤獨の寂しさに又考へて泣いてはゐまいか。尋常の孤獨の寂しい留守と違つて、夫婦連で遊びに出掛けた途であれば、然ぞ不愉快も一層であらう。お種は別して女氣に、無情な事を爲たやうに思ふのは、門で車に乗つた時―それでは。と柳之助が目禮をして、惜々ステッキを曳いて行つた態が、執念く目に附いて、車の着く迄忘れかねてゐた。其人の心の中を推量すれば、自分たちばかり面白さうに、然も酷しい爲方のやうで、幾度か心地を不快しては思直してゐたが、今日の柳之助は怒りに彼等の思ふやうなものではなくて、却つて愉快に獨り楽しむで、窓の富士を看ては長閑に菓を吃し、茶の間に來て寝轉むでは菓子を握み、茶に呼ばれて隠

居所へ話にも行き、外の廳、かき庭の内を獨歩の閑遊會までして、終局が葡萄酒の手酌と興じて見ると、過日夜深に六盃と傾けたと同じ調子に受けられるので、段々面白くなつて重なる程に、好い心地に酔つたと思ふと、つい横になつたと思ふと、昏々と、嘔吐らぬと思ふと、……。

お種の歸つて来たのを見れば、此半日胸に浮べてゐた保は、なかく朝にも増して柳之助の目を牽いた。保に着更を爲せると、優しく而倒を見てやる片手には、何彼と誠實に夫の世話をする、其様子は一日の疲勞も忘れて、自身の話は後述に、務を大事と心懸ける中に、十分愛情の籠つてゐるのを、傍で觀てゐれば、柳之助も俱共に樂まされる。何個月と同居をしてゐるのであるから、彼も今日始めて之を見たのではない、又お種とも保養を爲してゐた有難さに、今日に限つて現金の働振を爲るのではない、彼は終始同じやうに是だけの事は吃と勤めてゐるので、それは柳之助も今晩と平生との間に如何ほどの相違を見出したのではないが、美しい人の美しく振舞ふだけに、凡ならず胸しく思はれたのである。

此母に育てられる保は幸ひなもの、此親君に事へられる葉山は満足であらう。何を見ても譽める事の無い葉山が、如何して此無人相の、人形のやうな、面白くない細君に添つてゐられるであらう、と常に其をば疑つてゐたが、蟲の好かなかつた自分さへ長い目で見てゐれば、恠して合點も行くのであるから、彼の満足は無理も無い。曩に隱居所で話を聞けば、老人の嫁自慢は非常なもので、我娘でももあるやうに那の恠のと善い事ばかりを擧げてゐられる。口数は寡し、愛相は無し、唯那だけで男の操縦の取れさうな理が無い。其て那處に喜ばれて居るのを見れば、盡すべき所を十分に盡してゐるのでなければならぬ。

始は成程所惡であつた、物を言ふのも可厭であつた。憚無く謂はうなら、葉山が那云ふ細君を持つて居るのが實は不服であつた。類さんも那云ふ勿れぶつた人は附合ひ難くて可厭だと言つて居た。實に其通であつた。それが一所になつてから、段々親しくして見ると漸く解つて來た。別けて此二三週間は急に心の隔も薄くなつて、何か朋友のやうに思はれる。今朝の美しき、又今晩の胸しさに就けて、彼は一層深く其の心立と行とが頼しくなつて、此美

しい、此誠ある人に世話を爲れる自分は、其夫の如くに、其子の如くに幸でなくとも、其友としては最も好き位置に居るものと考へたのである。

左にも右にも其人に對する感情の遂に一變するまでに、柳之助は此日のお種を聞しくも美しく見た。然ほどに美しかつたのも純つてゐた所爲と爲れば、翌日からは又美しくも何とも無くなつて了はねばならぬ。其時彼の感情は果して如何なるであらう。翌朝彼はお種を見た。無論小紋縮緬の小袖も着てゐなければ、絹のハンカチーフも持つて居らぬ。朝の事として未だ寢衣のままで羽織を着て持ち無く保に取附れて胸を被開けてゐる。其爲體は決して立派ではなかつた、水際などは一向立ちさうにも爲ぬ、けれども其顔を見るのが何と無く可憐かつた。昨日見たやうに輝いて美しくはなかつたが、何處か幽しい其人であつた。

七の一

葉山の發足した後の家内は火の消えたやうになつて、客來は無くなる、車の出入は絶える、急に毎日の用は減つたので、自から家中の往來

さへ稀になつて、晝間の不景氣、夜の寂寥、主が居れば意氣がられる臘月にも背寝をして、庭の櫻までが長閑の目を面白くも無さうに散初める。他はともあれ、何かに就けて心細いのはお種の身の上、せめては保を對手に幾分慰められても、旅中の安否を氣遣つて、由無い過慮などを始めると、居ても立つても在られぬ事がある。床の間には陰膳を据ゑて、朝夕其前に神佛を心願して、立つた其日から歸來を待つてゐる。旅先は案じられるし、家内は寂しし、何方を向いても心細い中では、有聲に柳之助でも頼に思はれる、日此此人をば確乎とした所應の無い、卒といふ時には働けさうにも考へぬけれど、無いには勝つて多少かの氣丈夫でもある。それと與に彼は近頃一時の變人で、なくなつて、自分に仕向ける様子の大分變つたのをお種も認めた。微塵も那様氣は無かつたのが、葉山に對する調子で自分にも心易くする加減が見えて、夫からも聞いた事であるが、

「近頃は妻君も一家の人のやうに思はれて來た。」と言つたとやら。然う思へば然とお種の胸にも落ちて、此際其も頼の力にならぬではない。葉山が不在になつてからの柳之助は殆ど主同様の待遇を受けたのである。彼の不

在の爲にお種の彼に爲向ける事と、彼に對する注意とは、大方奇ます與へられて、其様子は、客でもなく、朋友でもなく、嫂が主の弟の世話をする狀で、彼が若し二月前の驚見であつたならば、毒蛇の舌の上に載られたほどの苦患でもあらうけれど、今の柳之助に取つては、草臥れて倒れた處に、絹布の蒲團が敷いてあつた裏にも劣るまい。

主が留守中の兩個の間を簡単に説明する爲に、葉山をば壁に喰へる。矢が内に居ればお種の便は其ばかり、柳之助とても彼の外に頼は無い、謂はゞ双方から奪れてゐた壁である。其壁が取拂はれたらば、勢ひ兩面の背は拵合ねばならぬ。柳之助も對手が無くて寂しければ、お種は猶更である。まして柳之助は當時の感情からも、境遇からも、到底お種を疎遠にして居られぬ。お種とても同じ事で、顔を合せる度の重るほど懇意にもなれば、懇意になるほど好むで顔を合せる、心易い話も出る。過日彼は愉快に葡萄酒に酔つた時、「失敬ですけれど、貴方が妻のやうに思はれるのです。」と言つたが、今は果して何と思はれるであらう！ 彼は久しく病人であつたが、薄紙を割ぐやうに日増に顔色を直して、多くは

油畫の出来た日の機嫌である。

二階は彼の住所であるのに、其二階に昇ると近頃彼は得も謂れず微寂しく覺ゆる。紙門を啓ければ正面の壁に、お種の肖像畫が懸けてあるので、入ると先づ目に着く、柳之助の氣が推されるのは是である。其顔を見ると奥に座敷の内は黯澁くなつて、窺めてゐながら夢に醒れるやうな心地になる。還つて来るまでは此油畫を見るのが一個の心算に思はれて、先づ一目見なければ左も右も氣が済まぬ、因で見れば堪へられぬほど可憐に就けて直に情無くなる。

彼は出入にお類を見れば措かなかつたやうに、此油畫をも生ける人と同じに考へて、朝々出るにも必ず一目は送つて行くのである。然れど忘れられぬ油畫でありながら、彼はなかく其で満足されぬのみか、一方には彌、忘れられぬ不満足を高めてゐる。葉山にも言へば、お種にも言れたが、如何にしても割愛して此油畫を取拂ふには忍びかねた、見れば胸を傷めると知りつゝ、見れば可憐さに堪へられぬのである。

長く此微寂しい二階には居耐らぬので、柳之助は不知降りて来る。下は主の留守中でも、茶の間へさへ行けば人氣も多く物豊に居心好く

柳之助の上に彼の書籍、備忘録、筆、圖引器械等が此間の道具のやうに秩然と据置になつた。

七の二

始終傍に居て見ると、何かの端にはお種の噂が出て、又かと思ふほどお種は一つ話をさへ幾度と無く聞される。其人に殺られてからは謂ふに謂はれぬ不自由があるとの述懐が出たのを機に、お種は以て折が有つたれば勸めて見るやうに夫から含められてゐた再婚の事を其と無く言出した。

「一度奥様のお有なすつた方は、如何しても御獨では可けないものだから、精細した面倒を見たり、傍でお世話を爲したり致すのは、女子でなくては届きません、それが又女子の務なのでございませぬ。」

柳之助は謎とは氣が着かぬから、「然うです。妻が居る時分には何でも無かつた事が、今になつて見ると一々不便を感じるです。一つは其が不愉快の因にもなるのです。而して一番窮るのは、實に寂しいですよ。葉山君が慥して毎日お留守ですから、貴方も寂しいでせう、ねえ、寂しいでせう。僕は能く知つとりませぬ。然し彼の寂しいのは、今貴方の

住馴されて、四下の目に觸れるものは皆が濃としてゐる。其中なれば白湯一杯でもなかく旨いのにお種が居て何彼と傍で氣を着けられる。彼の二階から茶の間に來るのは、草履足を曳いて旅籠屋に着くも同じであつた。入つて來ると容易に起たうとは爲すに、語が盡れば黙つて居て、長く然してゐる中に又何か話出す。お種も客と云ふのでなければ、用の間を缺いて對手を爲るではなし、格別迷惑でもないで、何時までも居たいほど置いて置くのであるが、柳之助は口数は寡し、お種は無愛相の方であるから、此對坐は時として争論した後のやうに、反が合ひかねて兩方で持餘してゐるらしく見ゆる事がある。それでも柳之助は立たうとも爲ぬ。お種の思ふには、近頃彼の顔に茶の間に來てゐるのは、主が居らぬ寂しさに話に來るのであらうけれど、話も所在も無くなつても猶且居るのは、今迄とは打つて變つた仕打、如何いふのか知らぬと獨で怪むであらう。

或日柳之助は例の話を盡せば、所在も無くなつた時、「此一本を持つて來て讀みたいですが、可いですか。お種は何故とも聞かれず、悪い事も無いので、寂しいぐらゐではないですよ。丁度貴方の寂しいのと同じ心地の、もつと〜非常なのですから、察して下さい、僕は實に耐らんです。」

「留守の事ですから私の寂しいのは爲方もございませぬ。」

「それぢや僕の寂しいのは猶爲方が無いぢやありませんか。」

「貴方のお寂しいのは如何でもなと思ひます。貴方は御自分から寂しい思をして在つしやるのですもの。」

「それで貴方が忠告して下さいなら、僕は何でも聴きますから、言つて下さい。」

「御忠告の何のと云ふほどの事ではないのですけれど、唯貴方の御心地が伺ひたいので。」

「ええ、宜しうございます。」

「お邪魔でせうな。」

「いゝえ、何も邪魔な事はございませぬ、お持ちなさいませぬ。」

「然うですか。」

「何故お二階で御覽なさらないのでございませぬ。」

「ええ、二階は單身で寂しくて、此の方が何と無く心地が快いです。此に居ると内へ歸つたやうな氣が爲るですけれども、二階は如何も不愉快で、獨で寂しいと又考出して、工合が悪いでせうから。」

「あゝ、然でございますか。それぢや此で御勉強なさるの宜しうございますが、子供が參つたり私がお用を爲したり致しますから、お話しうございませぬ。」

「それは一向管はんです。此に居つても唯た單身ぢや依樣寂しくて可かんですから、其方が却つて可いのです。」

とは疑いも無いのである。始め老婢の元も其必要の幾分を充さうとした、然し彼の聲は餘り被り吸れてゐた。其次は姻家の母であつたが、此手も柔かながら餘り乾びてゐた。當人に其氣は無かつたやうなもの、實は母親が其必要を全く充させやう爲のお鳥といふものもあつたが、不幸にも彼は全く不必要以上に遇はれて、恨を呑み、ハンカチーフを咬裂いて還つた。葉山も試みに優しい聲と柔かい手を、藉りやうとしたが、柳之助は猫の生えた猫に弄ばれるやうな腐れた愛情は持たなかつた。然ばかりの必要をも、彼は自ら必要とは思はぬのであつたか、或は再び外に求める意は無いのであつたか、左にも右にも必要は必要であつて、必要を缺くのは不愉快で、今の不愉快は昔のお類のやうに、柳之助は如何にしても其傍を離れかねたのである。

薬を美味として服する病人は無ければ、病は其が爲に痊るのでなければならぬ。彼の葉山に同居したのは、而して自とお種に親くなつたのは、好しからぬ薬を飲されたも同じで、姑くは苦い思をしてゐたのである。漸く其にも怯れて見れば、圓らざりき、お種の優しい聲と、柔かい手と、温い心とは彼の不愉快の

苦痛を癒るのであつた。柳之助がお種を可憐く思初めたのは之が爲である。例の彼の氣質であるから、一旦心を傾けた以上は、飽くまで其人に心を傾けるので、お種に對する感情も今は一日に好くなるばかり、葡萄酒に酔つた夜の言が又憶出される、

「失敬ですけれど、貴方が妻のやうに思はれるです。」

然し彼は他の妻をば我妻と思はうとは思はぬ。姉と言つたが、姉に思ふのでもなかつた。葉山が男子としての友である如く、女子の友として彼はお種を愛するのであつた。

八の二

老人も未だ氣は着かぬが、近頃柳之助のステッキの音は出入ともに一様になつて、時としてはなかく歸來の勇しげに響く日もあつた。彼は例として還ると直に二階へ昇つて、油畫を一目見て、直に下りて茶の間へ行く。朝出るにも必ず一寸二階へ昇る。それも彼の居間であるからは、誰か怪むものも無かつたが、或朝件働のお鈴が掃除をしてゐると、柳之助は出勤の服装で昇つて来た。

何ぞ取りに来たのであらうと思ひながら、何

氣なく見てゐれば、直と行つて油畫の前に立つたのである。其前は彼の長と同じほどの高さに掲げてゐるので、前に立てば顔と顔とが丁ど向合ふ。向合せると柳之助は引還して降りて行く。やがて門を出るお鈴が聞えるのを待つて、お鈴は拂塵子を持つたま、階子を駈下りて、臺所の口から、

「お留さん、一寸。」と叫ぶ氣であつたが、李色の婢は淋惜許から、

「何さ。」と見向も爲すに洗物をしてゐるので、「面白い事があるんだよ。あの、ねえ。」と其傍へ寄つて行つて、

「驚見様の、お前……。」

「お容様と言はないと叱れるぢやないか。」

「さあ可いからお聴きよ。彼人の面白い所を見ちやつたんだよ、今。」

「何を見たの？」とお留は用の手を休める。

「私がお二階を掃除してゐると彼人が昇つて来てね、何を爲るかと思ふと、油畫ね……私

はもう考出しても可厭になつちまふ。」

とお鈴は片手に頬を支へて、首を捻曲げて獨笑を爲す。

「如何したのさ、一寸。」

「あの油畫へ憑やつて顔を描付けて、而して降

りて行つちやつたのさ。」

「それつ限かい。」とお留は氣も無い顔。

「それつ限さあ。」

「如何いふ義だらう？」

お鈴は愛想の盡きた目遣をして、

「解らなきや可いよ。」

「油畫へ顔を描付けたのかい。」

「あれさ、油畫ぢやないよう。」

「それぢや何さ。」

「油畫の顔ぢやないか、憤つたいね。」

「依然油畫ぢやないか。」

「それは知れてゐるわね、油畫は油畫だけれど、油畫の顔さ。油畫の顔へ自分の顔を描付けたのぢやないか。」

「お前さんは本當に早口だよ。」

「どうせ貴方のやうにお品好くは参りません。決して、賜なんぞは出でゐない御禮を掛けて、島田の根なんぞは抜けてはゐないで、お、まあ御品の好いこと！」と一心に喋立てるお鈴の顔へ、突然お留は手水を引澆ける。

「あ、何を爲るのだよ！」と棲む所を追寛け、是を先途と濡手を揮舞されて、お鈴は這々二階へ逃昇つて了つた。

此後と云ふものは、柳之助の出入に二階へ昇

るのは、異しとお鈴に目を着けられてあれば、外に用も何も無く、唯其を爲に行くのであると極つて、臺所では(可厭な人)と云ふ事になつてゐた。

八の三

一日彼は學校から還ると、油畫の次には見るものにしてゐるお種の姿が茶の間に見えぬので、隣室へも行ったのかと思ひながら、火鉢の傍へ坐つたが、四下の様子が何と無く變つて、常には取散してあるべきものが片附いてゐるのも心寂しい。例も還つて来る時分には保の聲も爲るのに、その聞えぬのも組合の無いやう。幾側の障子に運々と猫の行く影が大ほどに映つて、老人の喉が一つした限り、室内は森として、眠さうな稽古琴の調が遠く度つて來る。何處で弾くのやら、此爪音が殆ど聞えぬ日としては無いので、其が又耳に附いて、柳之助は可厭で、腹が立つほどに思つてゐるの、今日は殊更小機嫌、餘り嫌ふので先方も疑ひ面になつて執固く弾くのもあるやうに覺えた。

旋てお鈴が爲る、入つて来たのはお鈴で、

「お召更をなさいますし。」

柳之助は要らざる世話を焼く奴だと思つたが

「奥様は如何した。」

お鈴はお鈴で、自分が盗むたものではなし、拷問される理は無いとは思つたが、

「一寸お出掛になりました。」

「はあ、何處へ？」

「本郷の方へ。」

「本郷、何時頃？」

「二時頃でございました。」

「本郷？ 何の用だらう。」

「私は存じません。」と(如何した)の腹癩に少し手強く出たが、柳之助は氣にも留めず、

「何時頃お歸來だ。」

「直にお歸來になると有仰いました。」

「もう四時だ。」と柱時計を見て、不足らしい顔をして考へる鉢であつた。其をお鈴は悪く眞面目腐つて屏のを見て、肚の中は可笑いが一杯。

「あの、御召更をなさいますし。」

「獨で爲るから可い。」

「それぢや御召を出しませう。」と起ちかければ、柳之助は憤慨さうに、

「可い、可い、獨で爲るから可い。」

お鈴は極めて淑からしく、

「はあ、然やうで。」と座を起つて行く。

柳之助は出入の着更には常にお種の手を假る

のであつた。然も無ければ獨で遺るとも、氣心の知れぬ紳士に身邊の事を爲れるのは無氣味なので、お種の居た頃には老婢の給仕で、食事を爲た事が無いのである。

彼は本意無きうに起つて、飄然と座敷へ出て、彼地此地と地平を爲るやうに歩き始めた。然して歩いてゐる間には不知不識時は経つと考へたらしく、間有つて胸衣の衣兜から銀時計の磨かせたら善かりさうなを出して見ると、四時十分！時は彼の歩いた間よりは経たぬものを、最少し経つても可きうに思つたかも知れぬ。猶其時を費させる爲に、旋て二階へ昇つた。

今昇つたと思ふと降りて来たので、又推付けて来たのだよ。と臺所ではお鈴が囁く、お留が笑ふ。

柳之助は又一通座敷から茶の間へ通つて、茶の間から座敷へ出て、座敷から縁へ出ると、お種と保との不躰着が魚を飼いたやうに日南に並べて干してあつた。

其側に腰を掛けて、姑く空と庭とを眺盡してゐたが、空は此頃希しく曇模様で、折々日の光は鼠色に薄れるかと思れば、又急に時明が射して眩いほど見えては、次第に淡く衰へる。

指して雲と云ふ雲は無いが、空は一面に青色を失つて、羅を一重隔て、其を望むやうに例より低くも見える。生温い風が時々吹起つて、沈丁花の甘い香が呼吸を爲るやうに傳はつて来る。庭の樹々は大方一様に青み初めた中に、垣の隅に三株ばかりの一重山吹が引塊つて靨脈に咲散して、趣も無く唯ひよる／＼と高いばかりの辛夷が数へるほどの苔を擧げて風に揺られながら立つてゐる。

いづれを眺めた所で何の風情も無いので、柳之助は庭へ下りて散歩をして見たが、其とても風情は無いので、直に飽いて舊の縁に腰を休めたのである。傍に擧げてあるお種の不躰着を見れば、曩日園遊會へ行つた姿が憶出される。其後は非とお種の粧つたのを見ぬのであるが、今日は甚慶にして行つたのであるか、一寸出たのであれば、然したる事は無からうけれど、恁して着更へたからは無論それだけには見えるであらう。必ず幾分か美しくなつたに違ない、何程美しくなつたか、——左右も美しいお種を見るのは、今の彼には上も無い樂であつた。

園遊會から歸つた時！お種は輝くばかり美しく見えた。お種とは想はれぬほど變つて

美しかつたので、自と氣が改まつて、例のやうに物を言ひかけるのも何とやら憚られたのに、先方からは常に遠はず馴々しく爲れた其嬉しさ。其嬉しさと其美しさを懐へば、今日とても其愉快の幾分を覺えるのであらうと考へると、漸く不興も釋けて、又時計を見れば五時である。六時に歸るとしても、う一時間、と有斐に力付いて、風情も無い縁から起つて、内へ入ると始めて心着く。

「お、試験の答案を檢べるのであつた。」慌て、座に着けば、其處には小机が据つて、飾つたやうに秩然と其上が片附けてある。今日には限らぬけれど、今に歸つて来る美しい、可憐い人の注意と思へば、可頼しき可頼しい。六時といふのを力にして、それまで一勉強と、茶の揉革の手摺れたボットフォリオの見苦しく推込むだのを披いて、三東の答案を取出した。學問には熱心に、授業には懇切の柳之助は旋て鉛筆を把つて答案の檢閲に着ると、傍目をつ奪るでもなく、左の手に額を支へて、右の膝を揺りかけ揺りかけ、鋭意の極は吾を忘れて一心不亂であつた。此間に何程の時が経つたやら、全く覺は無く、唯一級三十四名の答案の半を檢べ了つた時である、沈靜した玄關に

「お歸來！」と車六の聲。
柳之助は衝と起つと、膝頭に机の端を引掛けて、物の見事に打覆せば、机は四本の脚を差擧げて、さながら助を呼ぶやうなのを、機に一目見遣つたばかりで、周章と玄關へ出れば、やお鈴、お留、お勝は居並ぶとよりは推重つて出迎へてゐる。車夫は保を抱いて、一足後れにお種が格子を入つた所。

「やあ、お歸來ですか。」
お種は紺の深張の日傘をお鈴に渡ししながら、一寸會釋をして、

「唯今歸りました。」
此日のお種は買風通織の一つ小袖に黒縮緬の羽織を着て、鳩羽鼠地の淡泊とした更紗縮緬の長襦袢、襟は薄色の金茶に白と江戸紫の藤の折枝を小形に散したので、帯は地模様の革色縮緬と黒縮緬子の腹合。輪の大ぶりの銀杏返に玉珍と黒縮緬子の腹合。輪の大ぶりの銀杏返に玉の簪を一本挿して、昨日結つたばかりの風の有る爲に、夥しい鬢の結を、外の暖かさに上氣した淡紅の頬の邊へ振被けて、何と無く草臥れたらしい體度は、美しいよりは婀娜に見え

られるやらで、おのづと服装も緩むで、腰から裾の邊が稍疎無くなつて、髪さへ亂れてゐるのに、縮緬に縮緬を着て披々とした横姿の如かしさは、平生邸風に堅氣装のお種には逆も有るべからざる様子なのを、柳之助は陰に驚きながら、之もなか／＼可厭ではないのである。然し彼は飽くまで園遊會の姿を標準にして、但それほどに正つては居ずとも、恁まで碎けた風俗をば全く豫想せぬのであつた。曩日のやうに品の高く立派の所は無いが、今日の婀娜に色めかしいのも、又變つて更に得も謂はれぬのは、其様子の打解け易く他を可憐さうにして、動もすれば少しは我儘なども言ひたげに想はれるのである。曩日は葉山も居れば、自分も今ほどの馴染は無かつたので、唯美しいと見るのみで済むのだが、今日のお種は左に右に我物のやうに考へられて、又彼とても自分の考へる如くに自分を考へてゐるらしく考へられる。待侘びた顔を見れば、早く茶の間へ行つて、暢然と相對になつて落着きたいので、柳之助の胸の内は一秒の前後を争つてゐると、縹色絹の裾を曳いて忙しげにお種は隠居所を出て茶の間へ入つて来るので、柳之助は嬉々として何も手には付かぬが、引覆した机の始末をしてゐる。

「唯今歸りました。」
「やあ、可いです。ねえ、まあ、可いです。」
柳之助は誤るやうにして宥めたが、お種は氣の済まぬ顔で、
「でも餘り亂大がありませんから。」
「何爲那樣事が、先から僕は然う思つてるのですかね、貴方は今日は大變變つて見えるですよ。」
「然うですか。」と後を聞きながら待つてゐる。
「一寸何ですな、藝者のやうです。」
お種は吃驚して而して赤面した。まさか自分那樣者のやうに自墮落に見えやうとは、夢にも嘘にも餘り想の外で、信にはならぬ柳之助の見る目と思返しはされるもの、と言はれれば有斐心に慙ぢずにもみられぬ。譯の解つた夫に詰められたよりは、彼の口から出たやうに

「唯今歸りました。」
「やあ、可いです。ねえ、まあ、可いです。」
柳之助は誤るやうにして宥めたが、お種は氣の済まぬ顔で、
「でも餘り亂大がありませんから。」
「何爲那樣事が、先から僕は然う思つてるのですかね、貴方は今日は大變變つて見えるですよ。」
「然うですか。」と後を聞きながら待つてゐる。
「一寸何ですな、藝者のやうです。」
お種は吃驚して而して赤面した。まさか自分那樣者のやうに自墮落に見えやうとは、夢にも嘘にも餘り想の外で、信にはならぬ柳之助の見る目と思返しはされるもの、と言はれれば有斐心に慙ぢずにもみられぬ。譯の解つた夫に詰められたよりは、彼の口から出たやうに

お種は開辛く冷汗を流したのである。

「まあ、可厭ですねえ、早く着更へませうよ。」

お種は羽織の紐を解きかけて起たうとすれば

「まあ、可いですが、貴方、最少し居て下さい。」

「直に着更へて参りますから。」

「まあ、着更へずに、姑く然う爲とつて下さい。」

「何故でございますか？」

「大變貴方は其が好いでももの。」

「其が好いとは？」

「その服装が好いですよ。」

「貴方は實に此頃お人が悪くなりましたよ。」

「何故ですか？」

「服装だとか、風だとか云ふやうな事は、從來些とも有仰らなかつたではございせんか。」

「然う、言はなかつたです。言ふのは悪いですか。」

「殿方は餘り那樣事を有仰らない方が宜しうございませう。」

「葉山君は能く言ふですね。」

お種は呀としたが、柳之助は何の氣も無いので。

「而して種々な事を知つるには感服して下さいますね。」

「それですから拙夫は口が悪くて可けません。」

「然し、妻は始終葉山君の事を譽めとつたですよ。葉山君を譽めては僕の所を攻撃したです。葉山君の着物を見ると、那いふ着物が好いとか、下駄を見ると、大變粹だとか。それから未だ慙云ふ事が有つたです。妻が来て間も無くでした。葉山君は彼時分罷が無かつたですね、然すると妻は切に僕にも罷を取れといふですから、遂に取つたです。それから一時葉山君が生した事が有つたでせう、然すれば又、依舊有る方が男らしいから生せと言ふから、僕は又生したです。葉山君が又取つたでせう、然すると又取れと言ふです。僕はもう那樣に……否だと言つたでせう、然すると妻は非常に不平で、葉山君が来た時其話をしたですね、けれども葉山君は僕は餘の有る方が似合ふと言つたものだから、其で自分も承知してつたですけれど……。」

と柳之助は今も生してゐる罷を掻きで、

「他の客などは来たつて極冷淡でしたけれど、其は實に、葉山君が来ると妻は喜むで、御馳走する……といつて騒いだです。だから葉山君も妻を所好でした。けれども葉山君は口が悪いですから、それは妻に向つて随分酷い事を言つたですね、實際僕が傍で聞いてつても氣の毒のや

うな悪口を平氣で言つても、妻は更に當りはせんで、而して葉山君は淡泊しとつて好いと云つたものでせうね。」

最愛の妻と最愛の葉山の事を最愛の人に聞かせるのであるから、柳之助も心面白く話をした。お種は氣の毒なやうな、嬉しいやうな、又、極も悪いやうな、變な思をして、

「それでは、何卒貴方も澤山悪口を仰有つて下さい。」

柳之助は慌て忙して、

「いや、然云ふ意で言つたと思はれては僕は困ります。僕は貴方に對して悪口を言ふべき理由が無いです。」

「でも私が亂次のない風をしてゐると有仰らないばかりに、藥者のやうだなんぞと……。」

「それは決して悪口ぢやないです。藥者と云つたのは失敬でしたけれど……然う、粹に見えたのです。」

「それが猶且お人が悪いのです。」

此時空は墨の入染むやうに見える。一面に暗くなつて、細い雨が音も無く降ちて来る。

「おや、降つて来たやうです。」 とお種は硝子越に見透した。

「然うですか。」 と柳之助は起つて障子を啓

けて空模様を眺めながら、

「あ、是は降るんですね。」と言ふ間もあらず雲は低く垂れて、小降り益々降注ぐ。

「ほう、降つて来た、降つて来た。最少し貴方遅いと遣られる所でした、善かつたです。」

一向答が無いので返れば、お種は何時か起つて了つたので、座敷の方で聲がしてゐる。

火鉢の一角を見ると、黄金の線巻の指環が脱いで遣いてある。柳之助は座に復つて唯一人の所在なきに其を取つて視てみたが、不知左の薬指に買めて了つた。さて脱かうと爲れば中の節が障へて、牽いても、推しても、扱つても廻しても、いかな上へは動きもせぬので、大きに憤れて曳々と力を籠めれば、皮膚は赤く腫上つて、ひり／＼と疼出すばかりで、指環は益々如何にもならぬ。

「是は可かん。可かんぞ、可かんぞ。」と散散に腕に居る所へ、お種は不躑躅になつて入つて来て、

「あら、如何なすつたのです。」

柳之助は呼吸を過させながら、

「這麼になつて了つたです。」

指の根本は赤蛙の腹のやうに腫腫れて、處處擦傷した痕が細に血入染むでゐる。

「お、まあ是は！」とお種は其の手を執つてと腕視ながら、眉を皺めて、

「お痛いでせう。」

「苦しいくらゐです。」

お種は急いで水油を持つて来て、彼の指に塗付けた。

「さあ、これで騙し／＼抜いて御覽なさい。」

「自分では痛くて可かんですから、貴方様はず呼と遣つて下さい。」

彼は再び柳之助の手を執つて、頻に指環を動かして見たが、勝手が悪いので、彼地此地と持更へてゐる間に、不知四合と小腕に抱いて了つた。

九の一

柳之助は夜も宵の内は茶の間に居て、十時を打つと二階へ引取るのであるが、居間に還れば直に寐床に入つて了ふのであるから、謂はゞ寐に来るまでなのである。

彼は比二階の空気に觸れると、忽ち體を緊付けられて、異しく胸が通つて来る。冷なラムプの光、薄暗い座敷の四隅、幻の如きお類の肖像、物寂しい夜具の様子、右を見て左を見て、其獨身の悦しさを悲まれるやうに感ず

る。一々其思を打破して、自ら慰める勇氣は無いので、葡萄酒を叩つて、纏に醉を假りて、漸く枕に就くことを得るので、何日とは無しに寐際には必ず二三盃づゝ飲むのが習慣となつたのである。

床に入ると腹割になつて、手酌をする度に思はぬことは無い。

「咳、此にお種さんが居つて、何ぞ話をしながら酌をして、自分の寐付くまで枕頭に附いてゐてくれるならば、それこそ定めて満足であらう。自分が寧ろ病人でもあるならば随分それほどの我儘も言はれやうけれど、病人ではなし、お種さんは他の妻君でもあれば、那樣失敬なことは到底言はれぬ。又最一つの事が厭ふならば、酌も伽も要らぬ。其は下の座敷に寐るのである。下の座敷であれば、這麼に寂しく感じ事は決して無い。晝さへ寂しくて居られぬ所に夜は猶更居られる理が無い。寐て了へば其迄であるやうなもの、然う容易に寐付かれぬではないか、寐付かれぬから酒の力を假りも爲る、ついでには種々の所望も起るのである。下の座敷に寐ると云ふ事は如何あらうか。間を隔てるとした所で、謂はゞ妻君の傍に寐るのである。葉山の不在中であつて見れば、憚らなければ

頭の上の谷川の流と、頭蓋の貧しい、獨語は絶間無く響いて、此水の底に葬られる世間は刻々に朽ちて行くかと思ふばかり静さを感して、内を守る燈も今は唯獨りは便無げに點つてゐる。朦朧として壁に佇むお類の姿は、宛然執着の一念に牽かれて、夫の枕上に懸れたかと思ふ。其傍に裾襪の縮緬の夜着を被けて、幾と枕を外した頭を半分出して、柳之助は軀を立てゝゐる。此怪しい夜を此怪しい座敷に、此怪しい人が恠う窺つてゐる其怪しさの、更に如何ばかりかは知るものも無く、唯雨が降つて、夜の更行くばかりである。

此夜に限つて柳之助は時ならぬ寤費をして、始は現心に雨を聴きながら、それなり寐付かうと沈としてゐる間に、煙などの消え行くやうに睡氣は次第に卻めて、何時と無しに目も冴えれば、心も確になつて来る。是ではならぬと思へば、轉側をしたり、夜衣を絡ひ付たり、足を築めたり、手を組むでも見たり、何でも彼でも寐付かうと、種々に身を揉むだ末が、全く覺されて了つて、被つた顔も出さずには居られず、洞然と目を開いた。

朦朧として枕頭に佇むお類の姿は、寄つて来たいにも動くことはならず、物を言ひたいに

まい、誰にも解るまい！ 可愛い、可愛い姿を喪つた人でなければ、而して片時も忘れず思ひに思つてゐるでなければ、

日暮からの春雨は蕭索に降頭つて、屋根に浴せる音は谷川の響くやうに、蔭を纏る玉水の貧しげな響は煙々々々如く聞ゆる。何處と無く榮つた家の内は、我居間ながら心細さに居付かれぬほど陰に沈むで、人の住むとも思はれず、世間は全く物の音を止めて、悄然と雨に降られてゐる。但取着も無く時々風が出ては梢を鳴して、此怪しい單調に騒しい合手をいれて、益聞くに堪へざる疎暴の奏樂を逞くする。

柳之助は之を下物に手酌の葡萄酒を飲むので、鬱陶しい雨の爲に胸は痛む、氣は閉ぢて、酒を口に入れるよりは息を吐くのに忙しい。

「一、耐らん、耐らん、何といふ心地だらう！」

無理に一盃飲むで、額を絞めて、

「うむ、不美い！ 薬を飲むやうだ。」

飲むで早く酔はなければ、酔つて早く寐て了はなければ、不愉快は益募つて来る。又直に一盃注いで見たが、氣が通まぬので其處に置いたまゝ横枕になつて、見るとも無くお類の肖像を見据えてゐた。

も支はぬので、せめては餘所ながら形なりとも願つたもの、それさへ生死の隔に遮られて、幽の影を浮べるばかりを、然も恨めしげに打委れて、その味氣ない身の上でありながら、女心の忘れまいと、生前に可憐がられた、最も美しいと見られた姿を變へずにあるかと柳之助には考へられる。耐りかねて彼は目を閉ぢた。それでも紛れぬので、轉側をした上に猶内く目を閉ぢた。轉側したのは彼の體、閉ぢたのは彼の目で、一度出出した彼の心は千々に碎くるまでも忘れ得ぬのである。

怪しい雨は益降つて、怪しい夜は益更ける。然も無くてさへ獨り居るに堪へぬ此座敷に、生憎も今は寤覺めた柳之助の怪しさは、寧ろ苦められるのであつた、彼は目覺めてから一分経てば一分だけ、五分経ては五分だけ、愈深く、愈急に、彼の心は其の常に忘れ得ぬ事を思ひに思ふので、お類の亡後の何彼に就けて在りし時よりは猶可憐しい現在、其病中の種種可哀であつたり、二年が間樂しく時を暮したりした越方は、繰返々々胸の中を往來する勢に運られて、彼は行末をも想はずには居られなかつた。

此獨身の後來は如何にあるべきと考へた時、

けたく／＼と縁側の隅に物音がするので、化と頭を擧げて聞澄せば、雫の滴る音らしい。

「やあ、雨が漏つたかな。」

起回つて次に其一盃を片附けて了ふと、演少しく酔を催したやうに覺えたが、頭は尙重くなつて、三盃とは飲む氣が出ぬので、ラムプを細めて、今は觀念した寐で夜衣を引被いだ。

雨漏の音は極めて遅に時を限つて、はたりはたりと響くのが、外の雨より風よ、耳に附いて、氣に懸けまいとするほど氣に懸る、氣に懸るほど可思しい音が降しに鈍い拍手を返つて、人を眠らせぬやうに故と遣るらしく續けてゐるので、姑くは忍び居たが、到頭へかねて、

「え、懐かしい！」と起きて、袖を持つて行つて見たが、承ける物が無いので、ハンカチイフを丸めて敷くと、忽ち音を絞めて了ふ。それで始めて念が解れて、床に入れば依舊睡られぬ。是非無く飲まうとすれば、起きる時に頭付けたコップは遙の距離に轉けてゐる。柳之助は其を視ながら堪を引寄せ、椀を抜くと直に口に當支つて、咄々と啣吸で飲むで、慌忙しく大息を吹いて、又引被いだ。

今夜のやうに苦まねばならぬ事は幾度も有らう。是が病で倒れてゐる身であつたらば、葉山にもお類にも遠かつて、不深切の世の中に寄邊も無く獨り疾つて、薬も此酒の如くに誰が世話をしてくれるでもなく、盡も此雨の夜の如くに寂しく閉籠られて、獨り苦むで、獨り死なねばならぬやうであつたらば、自分は何と爲るであらう？ 何と爲なければならぬであらう！

可憐い過去と悲しい現在と、恐るべき未來とを思案める胸の中は、一種の奇毒を服したやうに、消入る如き苦悶を覺えて、柳之助は在るにもあられず夜着を排却して、寐床を出るや否や、油畫に取組つて、お類の顔を意味ありげに見入つてゐたが、忽ち其顔に頬を摺付けると、其冷さは彼の全身を射る如く走つた。其冷さ！ 彼は其冷さを決して忘れぬのである。十一月の東雲の枕に着白く病癒けたお類の顔は此冷さに彼を驚かしたのである。其時彼は其處に倒れた。柳之助は今又其時に會つたやうに、其處に倒れた時のやうに、立ちながら塗方にくれてゐた。

其時の事を憶出すと、今更のやうに得堪へぬ心地になる。我命ほど大事であつて、樂み

ばたらぬ事であらうし、お種さんも否むであらう。葉山は自分を信じてを、妻君も能く自分を知つてを、況むや自分は自分を信じてを、けれども怨ふ事は憚るが道であらう。近頃は妻君、實に自分をば弟のやうにして、何かに就けて一時よりは一層懇切にしてくれる。自分、亦彼人に言はれる事は喜むで用ゐる。けれども怨ふ事は實際何でも無い事でありながら他の事と違ふやうに葉は考へてゐるから、葉に従はねばならぬ。

葉山の歸るまでは苦しくとも之で忍んで、歸つたらば話して何とか工夫をしてみらう。夜になつて此二階に昇つて来る其不愉快！ 床に入つてから寐付くまでの其の不愉快！ 實に何とも譬へやうが無い。若し此不愉快が試ふやうに除かれたらば、自分は蘇生するのである！ 不自由ぐらゐは何としても保へる、是ばかりは逆も長く忍ぶことは出来ぬ。是が一日の生活中の最も大なる苦痛で、而も其に堪へたからとて何の効も無いものを、唯苦痛を受けるばかりなのは愚の極である。

葉山に話したとて、此苦痛の如何に苦痛であるかは決して解るまい。妻君には能く話すけれども、猶且然ほどには解らぬらしい。到底解る

「うむ、不美い！ 薬を飲むやうだ。」

飲むで早く酔はなければ、酔つて早く寐て了はなければ、不愉快は益募つて来る。又直に一盃注いで見たが、氣が通まぬので其處に置いたまゝ横枕になつて、見るとも無くお類の肖像を見据えてゐた。

も支はぬので、せめては餘所ながら形なりとも願つたもの、それさへ生死の隔に遮られて、幽の影を浮べるばかりを、然も恨めしげに打委れて、その味氣ない身の上でありながら、女心の忘れまいと、生前に可憐がられた、最も美しいと見られた姿を變へずにあるかと柳之助には考へられる。耐りかねて彼は目を閉ぢた。それでも紛れぬので、轉側をした上に猶内く目を閉ぢた。轉側したのは彼の體、閉ぢたのは彼の目で、一度出出した彼の心は千々に碎くるまでも忘れ得ぬのである。

怪しい雨は益降つて、怪しい夜は益更ける。然も無くてさへ獨り居るに堪へぬ此座敷に、生憎も今は寤覺めた柳之助の怪しさは、寧ろ苦められるのであつた、彼は目覺めてから一分経てば一分だけ、五分経ては五分だけ、愈深く、愈急に、彼の心は其の常に忘れ得ぬ事を思ひに思ふので、お類の亡後の何彼に就けて在りし時よりは猶可憐しい現在、其病中の種種可哀であつたり、二年が間樂しく時を暮したりした越方は、繰返々々胸の中を往來する勢に運られて、彼は行末をも想はずには居られなかつた。

此獨身の後來は如何にあるべきと考へた時、

けたく／＼と縁側の隅に物音がするので、化と頭を擧げて聞澄せば、雫の滴る音らしい。

「やあ、雨が漏つたかな。」

起回つて次に其一盃を片附けて了ふと、演少しく酔を催したやうに覺えたが、頭は尙重くなつて、三盃とは飲む氣が出ぬので、ラムプを細めて、今は觀念した寐で夜衣を引被いだ。

雨漏の音は極めて遅に時を限つて、はたりはたりと響くのが、外の雨より風よ、耳に附いて、氣に懸けまいとするほど氣に懸る、氣に懸るほど可思しい音が降しに鈍い拍手を返つて、人を眠らせぬやうに故と遣るらしく續けてゐるので、姑くは忍び居たが、到頭へかねて、

「え、懐かしい！」と起きて、袖を持つて行つて見たが、承ける物が無いので、ハンカチイフを丸めて敷くと、忽ち音を絞めて了ふ。それで始めて念が解れて、床に入れば依舊睡られぬ。是非無く飲まうとすれば、起きる時に頭付けたコップは遙の距離に轉けてゐる。柳之助は其を視ながら堪を引寄せ、椀を抜くと直に口に當支つて、咄々と啣吸で飲むで、慌忙しく大息を吹いて、又引被いだ。

今夜のやうに苦まねばならぬ事は幾度も有らう。是が病で倒れてゐる身であつたらば、葉山にもお類にも遠かつて、不深切の世の中に寄邊も無く獨り疾つて、薬も此酒の如くに誰が世話をしてくれるでもなく、盡も此雨の夜の如くに寂しく閉籠られて、獨り苦むで、獨り死なねばならぬやうであつたらば、自分は何と爲るであらう？ 何と爲なければならぬであらう！

可憐い過去と悲しい現在と、恐るべき未來とを思案める胸の中は、一種の奇毒を服したやうに、消入る如き苦悶を覺えて、柳之助は在るにもあられず夜着を排却して、寐床を出るや否や、油畫に取組つて、お類の顔を意味ありげに見入つてゐたが、忽ち其顔に頬を摺付けると、其冷さは彼の全身を射る如く走つた。其冷さ！ 彼は其冷さを決して忘れぬのである。十一月の東雲の枕に着白く病癒けたお類の顔は此冷さに彼を驚かしたのである。其時彼は其處に倒れた。柳之助は今又其時に會つたやうに、其處に倒れた時のやうに、立ちながら塗方にくれてゐた。

其時の事を憶出すと、今更のやうに得堪へぬ心地になる。我命ほど大事であつて、樂み

あつて、便であつて、可愛いものであつたお類が回復もならず事切れて、石のやうに冷たい遺骸となつて了つた。是に死なれて自分は何の生効があらう、無用の命の半を割いて、もう一度生かしたい、と思ふとは知りながら愚痴になる。咳、愚痴だ！ 爲方が無い！ 爲方が無い、と思ふほど胸は張裂けるばかりで、其時は息も絶えたながら、せめては死顔も見られたのに、今となつては如何に死ぬほど可憐くても、谷中の土になつて了つて、お類といふ名のみは此世に残つて居ても、其人は今亡く亡いものである。其時は凄まじく思つた死顔さへ、影も形も消えた今では見ることも克はぬ。幾許思つても其人は亡いものである、亡いと思へば猶思ひ。

其戀しさと憐れさと責めらるゝ心の内！ 彼は其思に打勝つことが出来ぬのみか、暫く支へも爲得ず、同じく火水の中へ飛入つても此苦を免れたいとまで考へる。居ても立つても凌ぎかねて、柳之助は座敷の内を頻りに歩いた。夜更の雨の音は十重廿重に家を包むで、聲を眼に凄しく悲しい歌を謳ふやう、憂身に其を聞かされたながら、歩いてても可憐しい一間の外に行所の無い切なさ、或は悶死に死にはせぬか、と遂に可憐なつて二階を降りたのである。

下は一面の間で、唯僅にお種の寢間から隙波る燈が夢の如く射してゐる。柳之助は茶の間へ行かうとしたが、其處も眞暗黒。ラムブも燐枝も置いてある筈と、足捜に漸く行着いて、燈を點けた。明くはなつたが、火鉢に火も無ければ、其傍に人も居らぬ、怪しい雨の音は此にも聞える。坐りもせずに次の間へ出て、蜘蛛十文字に唯歩いて居たが、胸の内は容易に震らうともせぬ、けれども彼は一步毎に其思を躊躇らうとしたのである。次第々々に心弱く苦められて、終には我力で我胸の亂れるを防ぎかねて、獨り居るには堪へられぬまでになつた。燈の洩れる襖の内には、病氣などの折は實意を盡してくれやうと、唯一人の頼む人が居て居ると思へば、矢も耐らず其傍へ行きたいのであるが、有繋に其もと怪へて、左にも右にも座敷の内を廻つてゐるが、突然襲はれたやうに彼の心は驚しく慄まされると與に、幾と前後不覺に襖を啓けて、柳之助はお種の寢間に入つた。

九の二

返を眞向に見せて、お種は間然と寐鎮つたまゝ、襖の啓く音に身轉も爲なかつた。却つて保が現ながら驚かされて、遂に放してゐた乳を思出して慌忙しく吮始める。

柳之助は漫然と入りはしたものの、其寢姿を見るに與に、是はと思つた。如何に夜深であらうとも、其人が起きてさへ居るならば、憚る事無いが、許されぬ家迄へ踏込むのは、無儀である、狼藉である、後護くもあると思へば、見まじきものを偷見たやうに空可憐く心尤がして、入つた足で直に襖の外に出て了つた。

忽ち目に着いたのは茶の間の燈、彼は身を翻して其影を心當に避寄つたが、行着いて見れば何の効も無くて、僅の間を紛れた胸の内は又凄しく不穩を感じて、遂に一處には居付かれぬので、假初にも運動を絶さぬやうにしてゐた。彼は其胸に築る苦悶を吐き放さむとする如く、懐懐げに頭を掉つては、胸に纏る悪氣を吐かうとして續様に大息を吐きながら、道を急ぐ勢で歩いたが、悲しい雨の歌と物凄しい夜陰の氣色とが、執念く耳と目を侵す方は、益彼の思を其最も悪む方へ曳入れ、曳入れて已まぬ。彼は再び其力と争つた。争ひつゝ、體さへ引掛

られるやうに、座敷の内を幾度と無く廻つてゐたのである。

何故然ほど苦められるのか、柳之助は自分にも解らぬので、如何に戀しくとも、如何に憐れくとも、昨日今日の事ではなし、既に諦め果てる今日、這慶思をすべきではないと十分に心得て居た。然う心得居ながら、何故に其諦めた事を遂に怨う諦めかねる爲に惱まれるのであるやら、自分で自分が解らなかつた。我心であつて我物でないやうに、我任意にならぬのを疑つたのである。餘りの可憐しさに、彼は遂に自分は發狂するのではあるまいかと想つた、と未だ考へ得る今の所は發狂したのではないが此有縁で續いて次第に烈しくなつたならば、必ず發狂せずば成るまい。今の此心地は發狂の境に進みつゝあるのではあるまいか。然も無くては何の故に今更這慶に急に戀しく、取迫つて憐いのであらう。

「不思議だ、不思議だ！」 と呟いては歩き、歩いては考へ直した。

如何に考へても發狂するより思はれぬので、愈耐りかねては無駄も後護さも何も無い、又お種の寢間へ駆入つて、

「奥さん、奥さん、奥さん！」 と夜着の袖

の向にばつたりと坐れば、その聲に睡を覺してお種は顔を振向けると、夢心地に男が一人身近に坐つてゐるので、探然して正氣づく途端に、柳之助は尋常ならぬ聲で、

「奥さん、僕ですよ。」

一人の男であつたよりは其が柳之助であるのを、お種は寧驚いたのである。

「まあ、貴方で……」 と徐に床の上に起直つて、柳之助の氣色を睨と視ながら、

「如何なすつたのでございませう。」

何時か知らねど家内の寢鎮つた此夜深に、男の身として女の寢間に忍むて来たは？ とお種は漫に胸を騒がせたが、餘人は知らず柳之助に那樣了簡が有らうとは思はれぬ。何ぞ是には様子があるであらう、と直に又考へ直したやうなもの、何と言出すやら其を聞くまでは、左も右も氣が釋されなかつた。

此人に限つては然した不心得は有るまい、確に無いとは思ふけれども、萬が一にも有るやうな事があつたら、如何したものであらう。強く言へば、恥を掻かせねばならぬ。柔に言ふくらむでは、男も覺悟して来たのであらう。由無い事になつてくれなければいいが、とお種は身の背を汗に絞られる想をして、故と化となつ

て、睨むばかりに男の顔を見据ゑてゐれば、柳之助は頭を低れて、眉を蹙めながら、頻りに呼吸の過むのを推察してゐる。

「深くて、如何も心地が悪い、もつと燈を明くして可いですか。」

お種が寄らうとするのを、柳之助は早くも起つて有明行燈の覆を取つたが、座に復ると舊の處より猶身近に坐られたので、お種は呀と思つた。

「僕は弱つたです。」 と太息を吐いて、お種の顔を見入る眼色は常よりも鋭く、而上も其に應じた不穩の色を帯びてゐる。

か。「如何なすつたので？」
 「如何なすつた意の聲も稍頗る。
 今晩は如何したのですか、目が覚めると急に不快な心地になつて、苦くて耐らんのです。而して獨り居るのが可憐いやうに寂しくて、それを幾許かへやうとしても休へられぬので、自分でも気が變になりはせんかと思はれるですが、僕は何したのでせう。」
 左右の答を待たが、お種は何とも言ひかねてゐれば、
 「咳、あの雨の音が非常に不快なのですよ。あの音を聞くと耐らんほど寂しくなつて来て……」
 柳之助は肩を窄めて、其の得も謂はれぬ苦悶を面に顯した。それでお種の疑も大方釋けて、決して悪い了簡などの有る人ではないと思ふほど、見る通り惱ましげにしてゐるのが一入氣の毒で、何とか助けたいに、手の着けやうが無さに當惑して、
 「甚だお心地です。」
 「氣が恠う變になりさうです。」
 「此雨で胸がお悪いのでせう。生暖くて薬蕪する晩ですから、其所爲ですよ。いつそ御酒でも上つては如何でございませう。」

「酒ですか、酒はもう飲かないのです。え、悪く降るすな！ 天氣でさへあれば戸外へ出て、其邊を廻るでせう。咳、どうも不快だ！」
 居るに居られず、起つには起たれぬ様で、柳之助は熱と目を睨つて、大息交りに呻いてゐる。
 「まあ御酒を上つて御覽なさいまし。酔ふと發しますから、幾分か可うございませう。頭痛でもなさるのですか。」
 「いや、頭痛は爲んですけれど、胸が變なのです。胸の中が熱くなつて沸えるやうな具合で、それは耐らんのです。」
 益々悶えるのを見て、如何なる事かとお種は氣でなく、醫者へでも診着けるやうに、二階の葡萄酒を取りに行つたが、彼が起つと柳之助も起つて、中の間を無二無三に歩き散した。お種はコップと壺とを持って来て、
 「さあ、一盃まあ吃つて御覽なさい。」
 注ぐとコップに半分も無くて、壺はそれで全
 「おや！」
 「もう無かつたのですか。」
 柳之助よりはお種が逆方に味れた。顔にした

「雨が歇みますよ。あゝ、もう夜も明けけるですな。」
 此一間はラムプも思切つて明く、湯の沸音も賑かに、傍にはお種も居る、彼は始めて、
 「奥様！ 大分心地が快くなりましたよ。」
 「おや、其はまあ好うございませぬ。」
 「全く貴方のお蔭で。然し御迷惑でしたな、實に濟まんですな。」
 「何の、貴方。」
 「濟まんですよ、遺様に世話をしして載いては、遺様に貴方のお世話になる理は無いのです。遺様にお世話になつては僕は葉山君にも濟まんです。」
 餘り遂に今更らしく言立てるのをお種は可笑しかつた。
 「那様事が有るものでございませうか。さあお茶が淹りました。」
 「はあ、葉子が有りますな、ワツプル。噫、心地が變々して來たです。」
 「それは結構でございませう。」
 「考へて見ると、僕は近頃は非常に貴方のお世話になつとるすね。今晚の如きは實に……遠慮もなく、お寐つとる所を、餘り失禮でした。」

「如何なすつたので？」
 「如何なすつた意の聲も稍頗る。
 今晩は如何したのですか、目が覚めると急に不快な心地になつて、苦くて耐らんのです。而して獨り居るのが可憐いやうに寂しくて、それを幾許かへやうとしても休へられぬので、自分でも気が變になりはせんかと思はれるですが、僕は何したのでせう。」
 左右の答を待たが、お種は何とも言ひかねてゐれば、
 「咳、あの雨の音が非常に不快なのですよ。あの音を聞くと耐らんほど寂しくなつて来て……」
 柳之助は肩を窄めて、其の得も謂はれぬ苦悶を面に顯した。それでお種の疑も大方釋けて、決して悪い了簡などの有る人ではないと思ふほど、見る通り惱ましげにしてゐるのが一入氣の毒で、何とか助けたいに、手の着けやうが無さに當惑して、
 「甚だお心地です。」
 「氣が恠う變になりさうです。」
 「此雨で胸がお悪いのでせう。生暖くて薬蕪する晩ですから、其所爲ですよ。いつそ御酒でも上つては如何でございませう。」

「酒ですか、酒はもう飲かないのです。え、悪く降るすな！ 天氣でさへあれば戸外へ出て、其邊を廻るでせう。咳、どうも不快だ！」
 居るに居られず、起つには起たれぬ様で、柳之助は熱と目を睨つて、大息交りに呻いてゐる。
 「まあ御酒を上つて御覽なさいまし。酔ふと發しますから、幾分か可うございませう。頭痛でもなさるのですか。」
 「いや、頭痛は爲んですけれど、胸が變なのです。胸の中が熱くなつて沸えるやうな具合で、それは耐らんのです。」
 益々悶えるのを見て、如何なる事かとお種は氣でなく、醫者へでも診着けるやうに、二階の葡萄酒を取りに行つたが、彼が起つと柳之助も起つて、中の間を無二無三に歩き散した。お種はコップと壺とを持って来て、
 「さあ、一盃まあ吃つて御覽なさい。」
 注ぐとコップに半分も無くて、壺はそれで全
 「おや！」
 「もう無かつたのですか。」
 柳之助よりはお種が逆方に味れた。顔にした

「雨が歇みますよ。あゝ、もう夜も明けけるですな。」
 此一間はラムプも思切つて明く、湯の沸音も賑かに、傍にはお種も居る、彼は始めて、
 「奥様！ 大分心地が快くなりましたよ。」
 「おや、其はまあ好うございませぬ。」
 「全く貴方のお蔭で。然し御迷惑でしたな、實に濟まんですな。」
 「何の、貴方。」
 「濟まんですよ、遺様に世話をしして載いては、遺様に貴方のお世話になる理は無いのです。遺様にお世話になつては僕は葉山君にも濟まんです。」
 餘り遂に今更らしく言立てるのをお種は可笑しかつた。
 「那様事が有るものでございませうか。さあお茶が淹りました。」
 「はあ、葉子が有りますな、ワツプル。噫、心地が變々して來たです。」
 「それは結構でございませう。」
 「考へて見ると、僕は近頃は非常に貴方のお世話になつとるすね。今晚の如きは實に……遠慮もなく、お寐つとる所を、餘り失禮でした。」

うに吩咐けて、寢間に還れば、男が、
 「勢見さんはもう御殿かい。」
 「然うでございませう。」
 旋てお種は床に入ると、兼物語が始つたが、
 始ると程無く其挨拶が途切れ途切になつて、
 「尚が脱けては樂は無いのさ。」
 「……………」
 「お前さんの所の御父様は私よりは確三歳下
 だつたか、なう？」
 「……………」
 男は後ら轉側をして、呼吸を吸いて、退屈さ
 うに大息を吐いて、有間は寢付かれぬ様子。雨の
 音は全く絶えて、ごつとりと風も風いで、保の
 軀が可愛らしくすやくと聞える。
 前には自分の立てた音で他の目を覺した男
 は、更に物音の爲に眼を驚された。次の間に
 寢音がして、彼地此地と絶えず徘徊する氣勢で
 ある。其音を聞着けると、首を擡げて窓とお種
 の様子を窺つた。彼は此方向に前後も知らず熱
 睡してゐる、男は其顔を見ながら、隣に覺音を
 聞きながら、(喉、解らないものよ。)と胸に浮く
 る。
 (萬々那樣事は無からうと思ふけれど、其處は
 若い同士、如何魔が魅して間違ふまいものでも

ないのだ。誠哉が留守になつてから、勢見さん
 の様子が違つて来た。それを臺所のものが噂
 をしてゐる、此奴が極悪い。夜寐する時二階へ昇
 るばかりで、餘は初中終茶の間に來てゐる、そ
 れを亦何の彼のと婢等が陰言だ。疑ふ譯でも
 ないが、其邊の所はお互に氣を着けてくれな
 ければ困るのさ。些と言はうと思つたけれど、
 彼氣だからお種も心配するだらうし、誠哉も直
 にもう歸る事だからと、言はずに居たのが此方
 の不念と謂ふものだ。然う謂へば成程勢見さん
 の様子は變つたな、一時から見ると全然と變つ
 た。)
 お種は身轉さへ爲すに能く眠てゐる。次の間
 の寢音は猶聞える、遠くなつたり、襖の際まで
 來たりして。
 (すると昨夜の始末、彼は何だ！ よしむば悪
 い事が無いにもしろ、二時三時といふ真夜中に、
 亭主の留守の女の寢間へ男が入込むで話を
 して居る、それぢや済むまい！ 世間が済ま
 ない。其處に言はれたからつて爲方があるま
 い。よもや間違は無からう、無からうけれど、
 有ると言はれたつて動が取れるものか。賢いお
 種にも似合ない爲方よ。彼が臺所の奴の目に
 ても掛つて見るが可い、如何する意だ。よもや

問違は無からう、無からうけれど、仕草が善く
 ない。道敷事が有つてはならない、とおれは初
 手から思つたのだ。誠哉があの氣だから何とも
 容喙は爲なかつたし、女房を取られるやうな間
 續な誠哉でもないから、話を聞いた時黙つて
 は居たのだけれど、猶且怒云ふ面倒があるの
 だ。誠哉は留守の事だ、年寄が傍に附いてゐて
 何事だらう、問違は無からうけれど、那樣等
 も立てられたら回復が付くものか。で、まあ、
 二人に意見だ、何の道言はなければなるまい。
 言ふのも實は是非しよ。いつそ何も言はずに
 怒して張番をしてゐて、誠哉が歸つて來たら全
 然引渡すと爲うか知らぬ——其と無くお種にだ
 けは言つた方が可いか知らぬ。それとも此で先
 生に打付つて、尙と……いや、其奴は可かな
 い。はて、なあ、今の所では間違は無いと
 も、言はずに措いたら其間に……早く誠哉
 が歸つて來てくれれば、其が一番可いだけ
 だ。昨夜來て、又今夜彼通り來るのだ。如何も
 是は、はてな……はてな。)
 途端に襖が啓いたので、男は思はず起返つ
 て、故と不知不識しく、
 「誰だ！」
 柳之助は眞二つと研りかけられたやうに動

には解らんですから、貴方の好い物を言つて下
 さい、買つて來ますから。」
 「何で私に？」
 「お禮の意です。」
 「お禮などを載く理は有りません。」
 油に水を注いだやうに、お種は全然取合ひさ
 うにも爲ぬ。
 「それぢや可いですが、貴方は何が所好です、欲
 いもの？ 衣類ですか。」
 「衣類は悪いながら一通り御座います。」
 「帯？」
 「帯も御座いますもの。」
 「髪のは？」
 「欲くもございませぬね。」
 「指環？」
 「然ういふものは欲くはございませぬ。」
 「それぢや何ですか、何か有りませう。」
 お種は少し考へて、若が開かうとするやうに
 笑ひかける。
 「何ですか。」
 「有りますか。」
 「貴方にお嫁が欲しいのです。」
 「怪しからん！」 と柳之助は苦笑をしたが、

お種の嬉しきうに笑ふのを見れば、自分も嬉し
 くなつて一處に笑つて了ふ。
 十の二
 翌日も雨は猶収らず、然しては降るでもなし
 に津濕と、一日通して染垂れた天氣。柳之助は
 (可厭な日だ)と言ひく出て行つたが、歸つ
 て來ても(可厭な日だ)と言ひく暮して、何
 の思出も無く夜になつた。お種は昨夜の件で怪
 へられぬほど睡い、柳之助は一向平氣で、例の
 如く十時までは居る氣組で、敵手欲さうに火鉢
 の傍を離れぬのである。獨り居るのを可恐がる
 ほどに寂しがる人と思へば、萬更置去にして起
 つて了ふのも酷いやうなり、他の事を思へば自
 分が辛し、現實に遣される氣で漸く九時まで
 保へたが、寢間で保が啼出したので、乳を付け
 て横になると、自分の睡るのを目に見るやうに
 承知しながら、ぐつたりと寐込むで了つたので
 ある。耳近く響めく音が爲るので、不圖目を覺
 せば、誰やらが來て、自分の隣に精々と床を延
 べてゐる。お種は大きに驚いたが、餘り有得べ
 き事でないから、是は夢であらうと考へ直し
 た。猶考へ直して見れば、自分は確に目を覺し
 てゐるに疑無い。昨夜は枕頭に男が坐つて

ゐた、今夜は男が床を敷いてゐる！ 昨夜は
 驚されたが、今夜は呆れ果てたので。呆れた
 も呆れたし、可恐さも可恐し、目は覺したが、
 息を凝して、起きも爲すに姑く熱と見澄してゐ
 たが、
 「おや、御父様ですか！」
 「あ、私だよ。今夜は此へ泊めてもらはうと
 思つての。」
 お種は早くも起きて、手代をしながら、
 「些も存じませんでした。」
 「私は若い時分夜道をしつたから、忍ぶのは
 得手さ。はっはっはっ。」
 「那麽事を有仰つて。本當に如何なすつたので
 ございませう。」
 「彼方は今晩は馬鹿に鼠が暴れての、天井裏
 で、や、もう騒々しい事、寢られる所ではな
 い。それで爲方無しに引越して來た。」
 「おや、然うでございませうか。私はつい寢忘れ
 て了ひましたが、何時でございませう。」
 「今し方十時を打つたよ。」
 置去にした柳之助は如何したであらうと、お
 種は男の介抱をして、それから茶の間へ行つて
 見ると、机も片付けて、誰も居らぬのである。
 婢を呼んで四下の始末を爲せて、臺所も寢るや

「はあ、何卒、はあ、何卒能く其事情を。」
 「ですが貴方も自今は夜更けて下りて入来しやるのはお止しなさいまし。若も臺所のものにも見られますと、……。」
 「はあ、然うですとも、止しませぬ！ 然し、何で御老人は昨夜彼處に寐られたのですかな。」
 「隠居所の方は鼠が騒いで寐れないと有仰つて。」
 「はあ、それでは今夜は隠居所へ？」
 「如何なさるか知りませんが、まあ貴方は入来しつては可けません。」
 「無論行きは爲んです！」
 彼は此話の間も始終氣にして居たが、お種は唯見た目に顔色の勝れぬのみではない、口を利くのも解げに、項末の舉止にさへ力が脱けて、左右に物思はしげにしてゐる。是で如何も無い理は無いと柳之助は考へた。
 「貴方眞に気分でも不快ではないですか。」
 「いえ、それ様事は有りは致しません。」
 「それで何か御心配でも有るのでせう。」
 「いえ、何故でございます。」とお種は片笑をしたが、其笑も其聲も強ひて力付けるやうであつた。
 「然うでもないですか。妾です、それは妾で

りませんか、如何爲すつたです。え、顔色が悪いですよ。」
 「然うでございますかね、何とも無いのですけれど。」
 「本當に如何も無いのですか。」
 柳之助は始めて火鉢の傍に坐つたが、未だ胡亂さうに彼の顔を眺めては獨り考へてゐるが、良有つて、
 「貴方。」とお種は言出した。
 「はい。」とお種も改まつて答へたやう。爾時亦と目と目と見合せれば、何故とも知らず互に胸の内を憐み、憐まれるやうな想を誘はれた。
 「僕は實に濟まん事を爲しました。」と投首をして、後は言はずに考へてゐる。
 「何をでございます。」
 「貴方に濟まん事を爲したのです。」
 「私に？」とお種も後は言はずに考へてゐる。
 「御老人が貴方に何かお言ひなさらはせんでしたか、今日。」
 「いえ、何も。」
 柳之助は首を傾けたが、お種は別に仔細を問反すでもなかつた。
 「然うですか。」とお種は猶且何とも言はぬ。
 「幾許だたと有仰つても、然うでないものは……。」
 「其が既に妾です。貴方は前から鬱いで在れる、僕は瞭然と見とるです。貴方が然して不愉快な顔をして在れると、僕は何か心細いのです。気分でも不快のなら何も秘される理は無い、御心配が有るのでせう。で僕が聞いて悪い事なら、それを強ひて聞かうと云ふのではないです。唯心配が有るのだと言つて下されば、それで可いのです。貴方が鬱いで在れると、僕も心配なのですから。」
 「然して御深切に有仰つて下さるのですから、有れば有ると申しますけれど。」
 柳之助も今は意を取直した氣色で、
 「はあ、僕が是まで言ふのに妾を有仰る貴方ではない事を知つとるです。心配などが有るのではない、而して病氣でもない、ですね？ それなら安心したですけれど、如何も無いのに如何して貴方の様子が然う違つて見えるでせう。」
 彼の問詰めるほどお種は思惟むやうに見えたのである。柳之助は其顔を見て、
 「然し、若し……ですね、貴方、御心配でも有つた時には、僕にも話して下さいよ、何卒ね、

「實に僕は昨夜も貴方の所へ行かうとしたのです、二時少し前に。」
 然ぞ驚くであらうと彼が思設けたほどのお種の氣色ではなかつた。
 「それが、昨夜も目が覺めると、一昨夜と同じやうに耐らん心地になつて、又下に來たです。然し、貴方に御迷惑を懸けてはならんと思つたですから、酒も飲むでせう。けれども少しも酔はんです。それから窮つて下に來たですけれど、貴方を起すまいと忪へて見たですが、一昨夜と少しも違はん心地なのです、それで到頭床へられんで彼唐紙を捲けたです。然うすると、實に驚いたですな、貴方の側に御老人が寐とつて、誰だと聲を懸けられたので、如何爲うかと思つたです。で、僕ですと言つて、直に二階へ昇つて了つたですけれど、後で考へて見ると、御老人は或は變に思ひは爲さらんかと思つて、それが心配で、實に是は外の事とは違ふですからな。」
 「まあ、然うでございますか、些とも知りませんでした。然し那樣御心配をなさいますなよ、御父様も那樣方ではございませぬし、又私からも能く事情をお話し申して置きますから。」
 柳之助は漸く其力で力を得て、
 「可いですか。僕は慥云ふ男ですから、何の役にも立たんでせうけれど、是でも一箇の男子です。貴方には非常にお世話になつとることは、能く記憶して居るです、忘れは爲んです。葉山君の外に僕は誰か親友は無いのですから、妻の亡くなつた後は心細くて、一層葉山君を頼にして居るです。そこへ貴方が又深切にして下さるので、僕は熱く思ふです、葉山君と貴方が無かつたら吃度病氣になつたです。今でも葉山君と貴方に別れるやうな事があつたら、猶且僕は病氣を爲るだらうと思ふです。」
 尋常に聽いてゐるらしく擬しなながら、其實お種は胸に徹した林である。
 「慥して葉山君や貴方と一所に居るのが僕は樂みなので、宛然自分の家内のやうに思つとるのです。その貴方が病氣であるとか、心配でも有るとか謂へば、僕は妻が然であるやうに心配でならんです。然云ふ場合には平生お世話になる代に僕は一生懸命で盡す精神ですから、貴方も僕を然う信じて居つて下さい。信じて下さるか、あ、信じて下さる？ それで僕も満足しました。」
 お種は益勢が押けて、慈然と非ぬ方を讀めてゐるので、

して、

「はあ、」 とばかりで二の句が出ぬ所を、
 「誰だ！」
 「ぼ……僕です。」
 「誰だ！」
 「つい、是は失禮を。」と言ふより早く襖を開然、次いで階子を駈昇る音がした。
 「はて、困つた。」と勇は身を倒して、枕を付けることほどと暖入る。お種は漸く目を覺して、
 「何でございます。」
 「あ、何、鼠が出たのよ。」
 其翌日である、柳之助は學校から歸つて見ると、會て然うした事無のお種の顔色が何と無く勝れぬ。お種が嘘一つしても案じて訊ねるほどであつたから、ボオトフオオオを抱へたまゝ立寄つて其顔を見返さむやうにして、
 「貴方如何か爲すつたか。」と答を聞くまでは落着かれぬ牀で坐りも爲ぬのである。
 「いえ、別に……。」といふ聲は彼の側耳でもなく萎れてゐた。
 「那樣事は無いでせう。鬱いでゐられるぢやあ

十の二

「はあ、何卒、はあ、何卒能く其事情を。」
 「ですが貴方も自今は夜更けて下りて入来しやるのはお止しなさいまし。若も臺所のものにも見られますと、……。」
 「はあ、然うですとも、止しませぬ！ 然し、何で御老人は昨夜彼處に寐られたのですかな。」
 「隠居所の方は鼠が騒いで寐れないと有仰つて。」
 「はあ、それでは今夜は隠居所へ？」
 「如何なさるか知りませんが、まあ貴方は入来しつては可けません。」
 「無論行きは爲んです！」
 彼は此話の間も始終氣にして居たが、お種は唯見た目に顔色の勝れぬのみではない、口を利くのも解げに、項末の舉止にさへ力が脱けて、左右に物思はしげにしてゐる。是で如何も無い理は無いと柳之助は考へた。
 「貴方眞に気分でも不快ではないですか。」
 「いえ、それ様事は有りは致しません。」
 「それで何か御心配でも有るのでせう。」
 「いえ、何故でございます。」とお種は片笑をしたが、其笑も其聲も強ひて力付けるやうであつた。
 「然うでもないですか。妾です、それは妾で

りませんか、如何爲すつたです。え、顔色が悪いですよ。」
 「然うでございますかね、何とも無いのですけれど。」
 「本當に如何も無いのですか。」
 柳之助は始めて火鉢の傍に坐つたが、未だ胡亂さうに彼の顔を眺めては獨り考へてゐるが、良有つて、
 「貴方。」とお種は言出した。
 「はい。」とお種も改まつて答へたやう。爾時亦と目と目と見合せれば、何故とも知らず互に胸の内を憐み、憐まれるやうな想を誘はれた。
 「僕は實に濟まん事を爲しました。」と投首をして、後は言はずに考へてゐる。
 「何をでございます。」
 「貴方に濟まん事を爲したのです。」
 「私に？」とお種も後は言はずに考へてゐる。
 「御老人が貴方に何かお言ひなさらはせんでしたか、今日。」
 「いえ、何も。」
 柳之助は首を傾けたが、お種は別に仔細を問反すでもなかつた。
 「然うですか。」とお種は猶且何とも言はぬ。
 「幾許だたと有仰つても、然うでないものは……。」
 「其が既に妾です。貴方は前から鬱いで在れる、僕は瞭然と見とるです。貴方が然して不愉快な顔をして在れると、僕は何か心細いのです。気分でも不快のなら何も秘される理は無い、御心配が有るのでせう。で僕が聞いて悪い事なら、それを強ひて聞かうと云ふのではないです。唯心配が有るのだと言つて下されば、それで可いのです。貴方が鬱いで在れると、僕も心配なのですから。」
 「然して御深切に有仰つて下さるのですから、有れば有ると申しますけれど。」
 柳之助も今は意を取直した氣色で、
 「はあ、僕が是まで言ふのに妾を有仰る貴方ではない事を知つとるです。心配などが有るのではない、而して病氣でもない、ですね？ それなら安心したですけれど、如何も無いのに如何して貴方の様子が然う違つて見えるでせう。」
 彼の問詰めるほどお種は思惟むやうに見えたのである。柳之助は其顔を見て、
 「然し、若し……ですね、貴方、御心配でも有つた時には、僕にも話して下さいよ、何卒ね、

「何だか妙に心細いやうですな。」
「貴方が餘り身に沁みるやうな事をお話なさるからです。」

お鈴が来て、
「奥さん、御隠居様が一寸。」
柳之助は揚息。

「貴方能く事情を言つて下さいよ。」
「可うございますよ。」

お種の行つた後に柳之助は一方ならず胸を痛めて、今か／＼と歸來を待てども、暇取ること夥しいので、

「是は可かん、仕舞つたぞ！ 仕舞つた、仕舞つた。」

と袴袴の衣兜に兩手を挿込み、座敷の内を搖るゝ如く歩いてゐた。

良有つてお種の出て来るのを見れば、柳之助は猶更心許無くて、茶の間へ入るも待たずに、

「如何でした。大變長かつたではありませんか。」

「少しお風邪の氣味で、腰が痛むから按いてくれと有仰るので。」

「あゝ、それで別に那話は無かつたですか。」

「御座いませんでしたと。」

「それは可い、それは可かつたです。而して貴

かと思へば隠居所 夜具を運ぶのである。如何いふ事になるのかと柳之助は其と無く様子を見に起つて、今夜はお種が隠居所に泊るのと知れた。

翌日もお種は隠居所に詰切つて居るので、柳之助は歸ると直に見舞に行つた。老人は床の上で新聞を見て居たが、彼の咳柳を聞着けると、

急に目鏡を脱して巻巻を引被けて、彼方向に横になつて居た、柳之助が入つて来て、語を懸ける迄は。

「何爲、大した事は無いので、唯時々腰が痛むでなりません。」

と云ふ挨拶であつたが如何様病人といふ血色でもなければ、大した事は無いのであらうと柳之助は思つた。さて傍にお種は居る、茶の間へ這つた所で面白くも無いのであるから、暫く此で話さうとしたが、老人が肝然と目を開いて、始終自分を視てゐる、其顔が目前に陰鬱いて何と無く氣に障つて、甚しく居心が好くない、のみならず、お種も相對のやうではなくて、

人目を兼ねるらしく語遣さへ餘所々々しくして居る。返す返すも老人の睨つてゐる眼色が無氣味に感じられると與に、彼は時黒から誰だと咎められた可恐さを想出さずには居られぬ。其

方用はもうお済になつたですか。」

「いゝえ、未だ參つて居らなければなりません。床に入つて在つしやるものですから、附いて居てあげませんと……。」

お種は其を陳謝に來たらしく、立話をして直に勝手へ行つて、何やら吩咐けて、又隠居所へ入つた。

「あゝ、心配した！」と柳之助は小机の前に坐つて、姑く苦めた呼吸を寛緩に嘘いて居た。

爾後日の暮までお種は一度も來ずに、お鈴が折々用を聞きに見えたが、彼は一件もお鈴に頼む用は無かつたのである。

夜食といふ頃に漸く還つて來たので、柳之助は顔を見るより、

「彼方はもう可いのですか。」

「いゝえ、又晩に來て居てくれと有仰るのであります。」

「又晩に！ 餘程不快ですか。」

「いゝえ、唯寢て在つしやるのは御退屈なものですから、それで可いよ。」

「それは僕も退屈ですな。」

「ですから、貴方は早く奥様をお有ちなさいませよ。御獨身では何かに就けて不自由な思をなさらなければなりません。悪い事は申しません

「彼方はもう可いのですか。」

「いゝえ、又晩に來て居てくれと有仰るのであります。」

「又晩に！ 餘程不快ですか。」

「いゝえ、唯寢て在つしやるのは御退屈なものですから、それで可いよ。」

「それは僕も退屈ですな。」

「ですから、貴方は早く奥様をお有ちなさいませよ。御獨身では何かに就けて不自由な思をなさらなければなりません。悪い事は申しません

「彼方はもう可いのですか。」

「いゝえ、又晩に來て居てくれと有仰るのであります。」

「又晩に！ 餘程不快ですか。」

「いゝえ、唯寢て在つしやるのは御退屈なものですから、それで可いよ。」

「それは僕も退屈ですな。」

「ですから、貴方は早く奥様をお有ちなさいませよ。御獨身では何かに就けて不自由な思をなさらなければなりません。悪い事は申しません

「彼方はもう可いのですか。」

「いゝえ、又晩に來て居てくれと有仰るのであります。」

「又晩に！ 餘程不快ですか。」

「いゝえ、唯寢て在つしやるのは御退屈なものですから、それで可いよ。」

「それは僕も退屈ですな。」

「ですから、貴方は早く奥様をお有ちなさいませよ。御獨身では何かに就けて不自由な思をなさらなければなりません。悪い事は申しません

「彼方はもう可いのですか。」

「いゝえ、又晩に來て居てくれと有仰るのであります。」

「又晩に！ 餘程不快ですか。」

「いゝえ、唯寢て在つしやるのは御退屈なものですから、それで可いよ。」

「それは僕も退屈ですな。」

「ですから、貴方は早く奥様をお有ちなさいませよ。御獨身では何かに就けて不自由な思をなさらなければなりません。悪い事は申しません

「彼方はもう可いのですか。」

「いゝえ、又晩に來て居てくれと有仰るのであります。」

「又晩に！ 餘程不快ですか。」

「いゝえ、唯寢て在つしやるのは御退屈なものですから、それで可いよ。」

「貴方は突然妙な事を……如何いふのですか。」

お種はいとゞ思入つて、

「私は始終其事を考へて居りますよ。」

「那樣事は考へて下さらん方が可いです。」

「いゝえ、然うではございません。」

先からの浮かぬ顔は、若や此事を案じて居るのではあるまいかと想はれるほど、彼の氣色は此時益々崩折れる。

「貴方眞に如何したのですか、えゝ。無様事を心配して在つしやるのですか。然うでは無いでせう、然うだと僕は困りますよ。ねえ、如何云ふのですか。」

心配せぬ事は無いとばかりで、詳しい事を話す間は無くお種は又隠居所へ行かねばならぬのであつた。

遂に柳之助は左や右と凡そ考へ得られる限考へたが、お種が彼程に心配するのとは自分の身の上と、如何なる關係が有るのか無いとよりは考へられぬ。今に見えたらば、待つたが、一向とまで心算をして、待つたが、待つたが、一向出て來ぬ。其内に婢共が遽に奔き散すのを、何

懸るから訊ねれば、寐が足りぬ所爲とばかりで、他の思ふほどは當人の苦にもして居らぬ様子。

其後は此始末で浸々話す折も無くて、彼が午後の四時から十時まで獨で寂しく送つた日も四日になつたのである。幸ひに其間は夜中の寐覺も無く、雨の夕暮も無くて、彼の自身は極めて平穩に過ぎたが、氣になるのは老人の眼色、案じられるのは、お種の顔色、茶の間も今は頼む木蔭に雨の漏るやうで。

或日の午前葉山は唐突に歸宅した。今日とは思ひも寄らず無事な顔を見たのであるから、お種は何とも謂はれぬ欣喜であつたが、先觸も無く歸つて來たのが、場合が場合ゆゑ氣懸で、早く何かの様子を聞きたいと思へば、一寸隠居所へ機嫌何に行つたのが、急には出て來ぬので、行つて見ると、暫く外すやうに吩咐けられた。さてはと思へば情無い、けれども覺悟の上の事であれば、一先茶の間へ引取つて、保を遊ばせながら如何に成行く事かと、夫の了簡一つを案じてゐたのである。凡そ一時間半も引住められ、舅から委細話の有つた様子。お種は其間白刃の上を渡るやうな想を爲したが、旋て入つて

「どうも時々腰が痛むでなりません。」

而して不相變の眼色で孔の穿くほど視てゐられる。其はなかく或言を云はれるよりも彼の胸には徹るのである。

寂しいながらも、不足ながらも、柳之助は是非無く茶の間に獨り勉強して居た、偶に用があつて出て來る次手にはお種の一寸でも寄るのを心遣にして、それも乙島の飛ぶやうに、來るかと思へば直に行くので、二言三言よりは語を交す間も無い。而して其二言三言の餘所々々しさは、何の爲に故々來たのかと或時は疑はれるほどであつた。病人と名乗る老人の容體は何處が不快さうに見えるでもなくて、看護を爲る人こそ却つて可憐しげに羸れて居るのが、心に

此日から引續いて三日と云ふもの、舅の腰の疼痛は去らぬであつた。即ちお種は其香病の爲に、晝間は謂ふにも及ばず、夜は夜で枕頭に附添つて、寐るさへ其傍を離れられぬので。

日に一度づゝ柳之助は見舞に行つたのであるが病人の容體にも血色にも少しも變は無く、訊ねれば毎も同じ事を同じ調子で繰返すばかり。

「どうも時々腰が痛むでなりません。」

而して不相變の眼色で孔の穿くほど視てゐられる。其はなかく或言を云はれるよりも彼の胸には徹るのである。

寂しいながらも、不足ながらも、柳之助は是非無く茶の間に獨り勉強して居た、偶に用があつて出て來る次手にはお種の一寸でも寄るのを心遣にして、それも乙島の飛ぶやうに、來るかと思へば直に行くので、二言三言よりは語を交す間も無い。而して其二言三言の餘所々々しさは、何の爲に故々來たのかと或時は疑はれるほどであつた。病人と名乗る老人の容體は何處が不快さうに見えるでもなくて、看護を爲る人こそ却つて可憐しげに羸れて居るのが、心に

此日から引續いて三日と云ふもの、舅の腰の疼痛は去らぬであつた。即ちお種は其香病の爲に、晝間は謂ふにも及ばず、夜は夜で枕頭に附添つて、寐るさへ其傍を離れられぬので。

日に一度づゝ柳之助は見舞に行つたのであるが病人の容體にも血色にも少しも變は無く、訊ねれば毎も同じ事を同じ調子で繰返すばかり。

「どうも時々腰が痛むでなりません。」

而して不相變の眼色で孔の穿くほど視てゐられる。其はなかく或言を云はれるよりも彼の胸には徹るのである。

寂しいながらも、不足ながらも、柳之助は是非無く茶の間に獨り勉強して居た、偶に用があつて出て來る次手にはお種の一寸でも寄るのを心遣にして、それも乙島の飛ぶやうに、來るかと思へば直に行くので、二言三言よりは語を交す間も無い。而して其二言三言の餘所々々しさは、何の爲に故々來たのかと或時は疑はれるほどであつた。病人と名乗る老人の容體は何處が不快さうに見えるでもなくて、看護を爲る人こそ却つて可憐しげに羸れて居るのが、心に

此日から引續いて三日と云ふもの、舅の腰の疼痛は去らぬであつた。即ちお種は其香病の爲に、晝間は謂ふにも及ばず、夜は夜で枕頭に附添つて、寐るさへ其傍を離れられぬので。

日に一度づゝ柳之助は見舞に行つたのであるが病人の容體にも血色にも少しも變は無く、訊ねれば毎も同じ事を同じ調子で繰返すばかり。

「どうも時々腰が痛むでなりません。」

而して不相變の眼色で孔の穿くほど視てゐられる。其はなかく或言を云はれるよりも彼の胸には徹るのである。

寂しいながらも、不足ながらも、柳之助は是非無く茶の間に獨り勉強して居た、偶に用があつて出て來る次手にはお種の一寸でも寄るのを心遣にして、それも乙島の飛ぶやうに、來るかと思へば直に行くので、二言三言よりは語を交す間も無い。而して其二言三言の餘所々々しさは、何の爲に故々來たのかと或時は疑はれるほどであつた。病人と名乗る老人の容體は何處が不快さうに見えるでもなくて、看護を爲る人こそ却つて可憐しげに羸れて居るのが、心に

れ給へ、僕が那様馬鹿な事を爲る人間であるか、ないか。僕の名譽を如何してくれぬ！ 餘り情無い事を言ふ、餘り怪しからん事を言ふ。疑ひ、疑ひでもさ、疑ひでも餘り怪しからんぢやないか。此に置かれんと云ふなら出る。僕は何も出ます、出ますとも！ 今直にでも出るけれど、此疑を舞しては内は僕は殺されるとも……

「誰が殺すと云つたよ、それこそ怪しからんだ。さあ、誰が殺すと云つたか、それから聞かう。」

「それは嘘ぢやないか。」

「あ、嘘かい。それほどの決心だと云ふ嘘だね。然すると、愚父に會つて辯解しても、疑を舞さなかつたら如何する。私の愚父を刺殺して返す刀で君も死ぬかい。」

「如何に、疑でも餘り情無い名譽に關する事を……」

「それは解つてゐるよ。愚父を殺して君も死ぬか、如何するのだ。」

「僕は何ぞそれ氣は。」

「無けりや會ふのは無駄だよ。愚父だつて其を疑つてゐるぢやない、間違でもあつては成らないと、那云ふ事が有つたものだから、取敢苦

れず、言はずには此場が済まず、せめては涙を飲んで、氣の取直されるまでと俯いて居た。此間に介まれては、葉山も有無に手を束ねて茫然するより外は無かつたが、

「然う残念がるほどの事は無いのだよ。誰が甚度な疑はうとも、私といふものが信じてゐたら、是程難な事は無いぢやないか。君にしても、お種にしても、無い肚を摸られるのは、それは残念だらう、當然だ。然し、又愚父の身にもなつて見給へ、私の留守中と云ひ、夜間夜中お種の寮所へ男が遣つて来るのを心配しずに居られるものか。内の愚父ばかりぢやない、誰か聞いたつて、此奴は疑だと思ひます。謂は、君の落度なもの、本来なら私が先立になつて爰は言分の有る所だ。その御本尊が如何だらう、恠して憚り入つて情實を話してゐるのに、未だ残念だの悔しいのと、君も泣けば、お種も泣くなら、如何とも兩人の勝手に爲るが可い、其方が然云ふ解らない了簡なら、此方も没分曉漢になつて、精々兩人を疑はうし、君のお宿も拒絶れば、お種も一緒に叩出して下ふから、然う思ひたまへ。」

柳之助は疑き、お種は懼れて、一齊に語を出した。で、何方が何と云ふのやら、混じて更

に解らぬのであつた。葉山は其を打消して、一愚父の疑ふのは有理だと私は思ふのだ。然し、其は愚父としては有理だが、私としては有理でないから、能く解るやうに愚父には話をし、それで愚父も全然疑は舞れたのだ。疑は舞れたが取敢苦勞だ。萬一の事が有りでもしたら回復が、かないから、有りはしまいが——其處が年寄の愚痴と云ふ奴で、致方が無い。俺の氣を安める、生先の無い俺を喜ばせると思つて、何よりの孝行だと思つて、今度の事は俺の言分を通さしてくれと云ふ愚父の頼みのさ。考へて見ると、臨分念入に家着な頼みだけれど、何しろ親だ。此を能く聞分けてくれないぢや情無いよ。愚父の心にもなりさ、又私の身にもなつて、一番考へてもらひたい所だ。道徳に言つても解らないなら、如何も爲方が無いから、少し古風か知れないけれど、二十四孝と行くのだ。親には換へられないから、友達と女房を棄てる覺悟だ。さあ、如何だい。」

爰で確に急所を抑へて、葉山は然然と銀煙管を九十度度に叩へて、もう此方の物さと云ふ態。濡衣とは謂ひながら、罪は全く己に在るものを、假初にも累を愚人に述べすやうでは、道が立たぬのみか第一に心が済まぬ。嗣へ彼

勞をしてゐるのさ。」

「いや、未だ疑つとるに違無い。僕は残念だ。」

「那樣解らない奴が有るものか。もう疑ひませんと、爰に匿とした證人が居るのに、好き好むで疑はれたがらなくても可きやうなものぢやないか。うむ、疑つてゐるから辯解に行かうと云ふのだね。」

「然ら。」

「で、疑を舞さなかつたら如何する。」

「僕は屹度舞して見せる。」

「幾許此方で力むだつて、天氣と疑ばかりは何方から舞れるのだ。」

「如何あつても舞れんけりや其迄で爲方ないけれど、那樣疑を受けとつて僕は一言も言はずには居られんから、一言言はしてくれ給へ、ねえ、一寸會してくれ給へ。」

行かうとする、遣るまいとする。物音に雜つて高聲の聞えるのを、さてはと茶の間に居たお種は心も心ならず、急いで障子の口に来ると立開をしてゐたのと覺しく、婢等の慌て、裏所へ逃込む後影を見付けた。

柳之助は止められるのを振舞つて降りやうとするのを、葉山が語忙しく宥める——昔かぬの問着の那裏へお種は断着ける。一日見るより

柳之助は、

「あ、奥さん！」

と言つた限で溜々と涙を零す。

「貴方まあ如何なすつたのでございませう。」

とお種は氣遣はしさに通寄れば、今の今まで激してゐたのが、忽ち火の消えたやうに萎々と、柳之助も通寄つて、

「貴方には済まんすな。僕の疑はれるのは爲方は無いですけど。貴方にまで御迷惑を懸けては、僕は實に申譯が有りませぬ。」

彼は眸と目を叩へて、急來る涙に咽ばされる。

「いえ、私は。」

と口には言つても、鼻の目鼻に言はれた一言の無念さを抽出して、其時は候へた涙が今となつて不覺に睫毛を濡したが、夫の前を兼ねて熱と辛抱してゐれば、怪しくも少時語が途切れる。葉山は其跡を流尻に見て、

「お前が何で泣くのさ。」

「はい。」

とお種は忍びやかに唇を拭く。

「お種だつて猶且残念だね。残念さ、残念でなくて、之が残念でなくて、如何するものか。」

と柳之助は二の腕に頬を推附けて歎息をしてゐる。其を見ればお種は猶更誘はれて、何と無く悲が尤進る。泣くまいと爲れば物が言は

は四五日の前お種に向つて、貴方の身に事のあつた場合には、平生お世話になる代に一生懸命で盡す精神であると言つたのである。今お種の身に事のある、合、両も其事と云ふのは、自分から起つたのであれば、甘むじて汚名をも受けねばならず、無念などは勿論忍ばねばならぬ。又一方には、事を分けた葉山に對しても、爰は己の立てられぬ所と、終に柳之助は觀念して、日頃自分の爲に悪かれとは思はぬ葉山の計畫に任せて、穩便に片付けやうに頼む旨を答へた。

夫の理に責められて、始の暴い氣色も無く、何も言はずに一切を打委せるとは、然ぞは惜しからうに能くも可憐くと、お種は彼の性質を識つてゐるだけに、其胸の切なるは幾許かと思遣つては、我ながら怆情無く涙を誘はれて居た。

傍でお種に泣かれるれば、いと増すばかりの涙の中で柳之助は、

「それでは僕はもう此家には居られんのだね。」

是が昨日まで生涯此二階で暮らすとて喜むで居た人の言である。之を繰返しては感々喜ばれたお種の悲さは胸を衝いて、力限にハンカチーフを顔に押當てながら、

「私ゆゑに、誠に済みません。」

二人女房

上の巻

芝罘月町の藤の湯とある長暖簾を推分けて。
 (浅くとも清き流の杜若)と。出端のありさうに
 顯れたる女子二人。いづれも長湯に磨ける
 顔色は瑩々と赤く。對の高島田に髪飾も同じ好
 み。年長けたる方は。容貌優れて麗しく。十九
 ばかりなり。他は二歳も年少と見えたるが。女
 子には厚肉過ぎて。色さへ白からず。顔の左
 に寄りて。薄けれども三日月状の創痕あり。
 美しき方は厚まで清やかに。辨舌爽快にし
 て。口數多く作らぬに愛嬌具りて。人を逸さぬ
 といふ性らしく。美しからぬ方は口重く。常に
 物色し貌なる陰性に。年齢よりは更けて年長の
 様なり。
 「鐵ちゃん。お前の帯は彼だから可いけれど。」
 と舌敵して。
 「可厭だねえ。私のは。衣服が好くしたって。帯
 が悪けりや。依然引立ちはない。どうか爲様

が無いかねえ。」
 年少のお鐵は石鹼を包みたる濡手拭にて。
 小鼻の傍に玉なす汗を一寸拭き。
 「あの帯で可ければ貨事をしやうか。」
 「然してくれれば私の方は可いけれど。お前が
 窮るぢやないか。」
 「私や構やしない。」
 「構はない! そんなら後生だから然してお
 くれな。其代お禮をするよ。それ彼の海鼠絞
 の半掛を。」
 「屹度?」
 「屹度さ!」
 「また嘘かも知れないから。いつそ約束をしな
 い方が可い。」
 と咳くやうにいふ。
 「可厭な女だよ。折角他が深切に上げやうとい
 ふのに。」
 「でも。此間の半掛も。お流れになつてしまつ
 たちやないか。」
 「だから彼の半掛は。上げられない理由をいつ

て。あんなに謝罪したぢやないか。あの事もあ
 るし。帯の事もあから。今度は何度かあげるよ。」
 「有難う。」
 談切れて。無言にて五六間行く。
 「姉さん。もう何時だらう?」
 「もう九時だらう。」
 と言はず語らず急足になる。姉は思ひ出した
 やうに。
 「あの。お四季施は何方のお見立だか。華美で
 なし。質素でなし。實に好い柄ぢやないか。餘
 仙も好いね。一寸見ると宛然お召縮緬のやう
 だよ。」
 「大層立派なものを下すつたね。」
 「だつてお前。孟蘭盆と若様の御卒業の御祝
 と。御祝宴の御手傳のお禮と。三件兼ねてるの
 だよ。」
 「若様の御卒業遊ばしたのは法律だとね。ぢや
 代官人だね。あんな人柄のお方でも。代官がお
 出来遊ばすかねえ。」
 「代官人だつて人の悪い代官ぢやないんだよ。」
 「それぢや上等の代官様だね。」
 「ほ、ほ、。襟付になくつても可いぢやない
 か。」
 「だつて若様の事を命拾にしちや勿鉢ないよ。」

「貴方に然云ふ事を言はれては、僕は何と言つ
 て可いのか、實に——實に——實に……。」
 「いええ、私も心着かなかつたからでござい
 ます。」
 「何爲、考へて見ると、僕が悪かつたのです。」
 「私が致らなかつたので。」
 「全く僕が不注意でした。」
 「いええ、私も……。」
 「それは無論僕が……。」
 二人は一所に又澤々と泣く。
 「何方でも可いよ、今更那様事は。お種はもう
 下へ行きな。あゝ見つともない其顔で、窓へで
 も行つて干すが可い、何なら池へ行くと龜の子
 の件がある。驚見も好加減に爲ないかよ。何だ
 な、何時までも不景氣な顔をして。」
 おい、乾いたかね、其方の人は。宜しければ
 下へ行つて御酒の支度だ。愁嘆場は是で暮の、
 後は陽氣さ。
 さあ、一盃飲みながら、話もあるのだ。」
 葉山は例の可笑く其場を紛らして了つて、酒
 の間に段々話を盡して言慰めたのである。他
 事なき彼の心底と、毎に變らぬ實意と、久ぶり
 の洒落とを聞けば、柳之助も彼の前には無念も
 悲も無い。折から驚見へ郵便として姉が持つて

来る一通。
 「あゝ何だらう、類の如家からだ。」
 「はてな……あゝ解つた。色男め!」
 「何だ!」
 「何だぢやないよ、お島さんが奇來したのさ。
 色男、色男!」
 「止したまへ。」と狀袋の横端を邪體に引
 切つて、早速波いて見て、
 「はあ、お島が結婚すると。其を知らせて來た
 んだ。」
 「然うかい、それはお日出たい。如何いふ所へ
 適くのだね。」
 「何處ともしないが、那産者を娶ふ奴が有る
 かなあ。」
 をはり
 葉山の住居から一町許り隔て、小綺麗にし
 てゐる上等下宿がある。柳之助は一先其に引
 移ることに取極めた。近廻を擇むだのは、一つ
 家にこそ居ずとも、今迄通り世話にもなりたけ
 れば、二階と下ほどの往來もしたので。
 寧ろ起るまでは然も無かつたお種も、いよいよ
 よ彼が出るとなつてから、遂に離れ難い心地の
 爲るやうでもあつた。其と云ふのが、日頃柳之

助は自分を姉のやうに慕つて、一も貴方、二も
 奥様と事毎に相談をしては、殆ど自分の言ふ言
 にも用ゐぬは無い程であつたに就けて、那様にも
 可憐い心立の人に、今更那様の情無く、且
 は出て行く身をも察して見れば、其も可哀やら
 何やらで、如何成るか解らぬ内は心配をし、事
 が稀れば、次いで物思はしい日を送つたが、葉
 山が歸つて五日目に柳之助は終に葉山の門を出
 たのである。
 大方等々の仿ない口から洩れたのであらう
 が、近所では二人の間に悪い事でもあつたやう
 に噂を爲る者もあつた。
 轉居した其夕方から柳之助は遊びに來たが、
 次の日からは降つても照つても毎日一度づつ訪
 ねて來ぬことは無い。お種も自から心待にし
 て、好きな物でもあれば、必ず取つて置くやう
 に爲るのである。
 下宿の床の間には正面にお類の肖像を飾
 つて、胡麻竹の井字の寫眞掛に保を連れたお種
 の立姿が床柱の花人の前に掛けてあるばかり
 で、幅も無ければ花も無しに。
 (二十年七月)

言葉遣ひを氣をつけなさいと。お母様に叱られるもの。
姉は苦笑をして。何か言はむとする時。通りかゝる男に肥と顔を見られ。少し横を向いて遣り過す。

「お名前でもいふんなら。襟付にしくつちやならないけれど。何も代官人といふのに襟が入るものかね。代官人様といふと。何だか隣家の跡目の三百にも襟を付けてやるやうで可厭ぢやないか。」

「さうね。」と肚裏では随分可笑かつたやうな顔色。

此二女子は某省の極く卑いところを勤める丸橋新八郎といふ十族の娘にて。姉の名は銀。妹は鐵。容貌は羽子板の裏表。背てはるねど同腹にて。姉は父親背。妹は母親背なり。

新八郎は桐村家三代の家來筋にて。今も律義に主従の禮を執つて繁々伺候すれば。同家にて至極心易く思ひ。事ありて人手の足らぬ折は。いつも此同胞を借りて重寶するを。此方は結句有難い事におもうて。お邸へくと榮譽にして吹聴するほどなれば。此度も桐村の若殿忠準の卒業祝宴に大客をするとして。例の如く手傳に招かれたるなり。

「ねえ。お母様。ちつとも妖怪の事はありやしないね。」
とお譲らしい銀金具の。帶留をばちんと懸ける。

「白粉を傳けて妖怪なら。先刻見たやうに傳けないくらゐだつたら。なほ妖怪だ。上つ方の前へ出るのに。白粉を傳けないのは。此上もない失禮だよ。官女方を御覽な。私のやうな年齢をしてゐる方でも。みんなお化粧をしてゐるぢやないか。」

といひ、火鉢の前に坐りて。煙草を吃しながら。我娘の容姿を心嬉しく眺めてゐたりしが。とんと吸殻をはたき。指頭を。口に巻きて。

「お、熱い。」と額際の汗拭き。
「銀や。お前の襟は餘り巻着いてるよ。」
お銀は鏡の前へ行き。一寸襟に手を懸け。

「此頃は抜衣紋は流行らないよ。」
「でも餘り巻着いて。何だ可笑いぢやないか。鐵や。一寸此所へおいで。下前が下つてゐる。」と上前の襟を少し引いて。
「懐中から手を入れて少しお引張り。あゝよしよし。」となほ飽かず。
二人の容姿を見較べて。

母親はお銀の立てる後に廻りて。帯を結びて遣りながら。
「奥様にお目に懸つたら。頂戴物のお禮をよく申上げなよ。」

「あゝ。」と帯揚の結餘を。帯の中へ挿みこむ。
お銀は自身の容貌の醜きを識りて。餘り念入りに化粧するを憚らず。さればとて塗らねば母親に叱られるゆゑ。申譯のしるしに一寸々々と塗りたれば。生地が黒いが衣服を着更へたい目立つて。姉とならるとお嬢様と下女の如し。

母親は見かねて。
「鐵や。お前の白粉は薄いよ。」

「私や。餘り濃いのは可厭。」

「濃くなくつても可いけれど。それぢや餘り薄くつて。傳けたのだから。傳けないのだから。知れやしない。最ちりと傳けよ。私が今手傳つてあげるから。」

「澤山ですよ。これで。」
と急遽帯を結みに懸る。

「鐵ちゃん。一寸此方を書いてごらん。」
「もう澤山だよ。」

「澤山ぢやないよ。」とお銀は手を伸して。
お銀の肩を掴まうとする。

「人力車の來るまで其處へお坐りな。」
同胞は人形のごとく取繕うて坐る。母親は左視右瞻。

「まことと好い衣裳だよ。よく似合ふ事といつたら。」
お銀は大事さうに疊みたる絹の手巾を取出し。胸の裏を扇きながら。お銀の髪を見てのたりしが。窓より來る風に髪に毛二三葉解れたるを掻きつけてやり。

「今日の髪は好く出来たね。お母様。」
「まことに上品で好いよ。」
「あらんと車の音の。門口に止りたるに。三人齊しく振向けば。格子戸開きて。

「へえ。お車が参りました。」
「そらつ。」といふ聲の下。どたばた。ばたばた。

「あれ凄然としてお在。」
後から母親に引張られて。「ほゝほ。」と姉の笑聲に。壁を向いて帯を結めてゐたるお銀は。一寸と此方を書くを。お銀は一目見て。

「あゝ眞箇に薄い。もつと傳けておもらひよ。」
「澤山だつてば。」

「澤山な事があるものかね。」
と母親は衝と行つて。お銀の結懸けたる帯を捉つて。無理に鏡の前に坐らせる。

「年齢のいかにものゝ白粉の薄いのは。生靈氣で下品なものだ。ましてお邸は厚化粧だから。矢張濃くなくちやいけないから。」
と最一層塗れば。塗られる間も顔に氣にして。鏡の方ばかり向いたがる。

「其方ばかり向いぢやいけないねえ。」
と小言たらしく大分厚塗して。

「さあ御覽！」
「あら。宛然妖怪のやうだ。私や可厭。」
お銀は鏡の中を見込む。

「そんな美しい妖怪があつて堪るものかね。」
「姉さん多度おいひよ。」とお銀を流防に懸けて。

「そりやあ貴様はお美しうございます。」
「あら可厭な。」と流防に懸け返して。

見せ。縁より遠からぬ萩原の繁茂に蟲籠を忍ばせ。松蟲鈴蟲の聲々席に聞れて。客に扇をつかはせぬ懇待の趣向。衆人杯を片手に見贖す折から。四阿の後に登ゆる老松の梢に十八日の月の懸りたるは。一段の馳走なり。來賓總代として某伯爵が簡單に卒業の祝詞を述べれば。忠準答辭をなし。一族總代の祝詞。藩士總代の祝詞。之にも答辭ありて。満場拍手の裏に表向の儀式が済めば。席上は上客より亂れ始めて。浪の酔くるごとく。末席の方も次第崩れかゝる頃。無禮講にして賑かに。とある家令の聲懸に。此上はいづれも君の御爲計死といふ覺悟で。いよゝゝ亂酒になる。

二

築地なる桐村家にては。晩涼よりの宴會にて。當日の上客は。伯子男の華族十餘名。外に一族藩士五十餘名。廣間の簾を高く掲げて。風を入れ。庭を見せ。葉陰の燈籠三箇所に火を入れて。早影を池水に映し。小華殿といふ瀑の前の岩陰に灯を伏せて。座敷より遙に玉なす水を

「あれ凄然としてお在。」
後から母親に引張られて。「ほゝほ。」と姉の笑聲に。壁を向いて帯を結めてゐたるお銀は。一寸と此方を書くを。お銀は一目見て。
「あゝ眞箇に薄い。もつと傳けておもらひよ。」
「澤山だつてば。」
「澤山な事があるものかね。」
と母親は衝と行つて。お銀の結懸けたる帯を捉つて。無理に鏡の前に坐らせる。
「年齢のいかにものゝ白粉の薄いのは。生靈氣で下品なものだ。ましてお邸は厚化粧だから。矢張濃くなくちやいけないから。」
と最一層塗れば。塗られる間も顔に氣にして。鏡の方ばかり向いたがる。
「其方ばかり向いぢやいけないねえ。」
と小言たらしく大分厚塗して。
「さあ御覽！」
「あら。宛然妖怪のやうだ。私や可厭。」
お銀は鏡の中を見込む。
「そんな美しい妖怪があつて堪るものかね。」
「姉さん多度おいひよ。」とお銀を流防に懸けて。
「そりやあ貴様はお美しうございます。」
「あら可厭な。」と流防に懸け返して。

重ねて。ちんと澄す。
 「此處山口男大抵の氣合にて。頻りに猪口を荷にして。お種の頬を覗つてゐる。お種は何と思つたか、衝と銃子を持つて。
 「どうせ、私のやうなお多福のお酌では……私には彼方へ御遠慮申しませう。」
 腹を立ちましたよ。はい。眞箇に腹を立つたんですよと言はぬばかりに。くつ／＼と口を揺かして。傍を向いて。凛然と立懸ける袂を。賣してなつかと口が捉へて。
 「さう何も怒らんでもいゝぢやないか。」
 「あら可厭な。怒りはいたしませんよ。」
 「怒らんなら。そんなにぶり／＼せんでも……」
 「どうせ心太の拍子木でございます。」
 「これは御挨拶だ。」と少禿の眞顔を撫で。
 「まづ其處で中和にお酌を。」と盃を出して。お種の頬を覗いて。
 「實はね。あの娘の……何といふ名だえ？……知らない？ ぢや其知らんぢやんのお酌で。私が飲みたいなんぞって。さう／＼さうした調ぢやないのさ。此方が。この澁谷さんが……のお酌では非……」
 といひ懸けると。澁谷はとんと山口の肩を撞

いて。
 「怪しからん事をいふ。我は知らんのだよ。」
 とどういふ氣でか眞顔に辯明する。其顔をお種が見て。くつと可笑さを飲込み。此面相ならば。とても思つたのか。但しはお銀を玩らうとでもいふ了簡でか。後を振向いて。
 「お銀さん／＼。」と呼びかけて一寸手招をする。
 「何？」といひながら来て。山口の正面。お種の隣に坐る。其手をお種が矢處に捉へて。
 「山口さん。御執心のお銀さん！」
 「いやなお種さん。」とお銀は羞かしさうに横を向く。山口は澁谷に一寸目授をして。
 「いやお銀さん。」と透さず祈懸けると。お銀は窮屈さうに會釋する。
 「一杯戴きませうかな。」
 「お酌を……。」と銃子を持つ。
 「結構々々。」と猪口を出しながら。お銀の頬を瞥見に大概測量して。一寸氣を變へ。
 「澁谷さん。お銀さんのお酌といふので御一盃如何でございます。」
 澁谷は故と然あらぬ顔で。冷淡に「可からう。」とばかり。なにも言はず。大風にぐつと硝子盃を差出せば、お銀は膝を斜に向けて。少し關寄

つて酌をする。
 見たいと思ふ人の正面に坐るの格言の通り。澁谷の炯々たる巨眼も。此場には平生の力を失つて。猪口を出す。盃を出す。其瞬間に瞥見したばかり。年効もなく羞かしいといふ氣味で。好加減に盃を引いて。口に持つて来て。飲みながら盃越に可厭な眼をして睨と視る。お銀は山口の眼色の可笑らしいのを早くも見て取つて。薄氣味悪く思ひる。先に。さなきだに好かんたらしい眼光の澁谷に秋波を注がれて。愕然として。何となく居心の懸きに立たうとすると。お種が袖の下で手を引張つてゐて一向放さず。立たうにも立たれず。居るのは快くないし。適に澁谷が呑且してゐる。
 澁谷は飲みながら。是ぞ好下物といふ顔で。お銀の容貌を耽視する。眼から。例の刺す如き光は射せど。それと和してまた名狀すべからざる一種異様の光の見えるのは。恐らく其刺す如き光の(愛)に蕩けたるならむ。と難解く言へば謂ふのなり。
 話次分頭。この席の酌人は。藝者半分に素人半分といふ割合で。藝者は新橋の精選と見えて。流石に可憐の春色も見える。素人の方は一群盡く(つぶし)といふ中で。お銀の美貌さは

る。左手の拇指と中指と薬指との三本にて。ハバナの太巻を軽く持ち。かの一種の光ある眼を側て。始終お銀の舉動に注ぐを。隣席にゐる藩士山口昇といふ中老漢が認めて。
 「御意に召しましたか。」と突如に囁く。
 黄金鎖。黄金釦。黄金針。黄金の指環と。黄金づくめの紳士は某省の會計課長にて。驛しは屬官なり。
 (御意に召しましたか。)と星を貫かれて。澁谷課長は愕然。然あらぬ狀にてぎろりと山口に瞳を轉じて。何とも言はずに微笑を含めば。山口は(で御座らうがね。)といふ面色で。
 「あの紺飛白の……今立ちました。彼で……」と扇子の尾で指せば。澁谷は大きく空笑をして。
 「まあ一盃差さう。」
 と麥酒の硝子盃を山口の前に置く。
 「これは。」と一寸戴き。前列に酌をしてゐるお銀を呼寄せる下心にて。
 「一寸お酌を。」といへば。お銀が振向くと齊しく。横合からする／＼と来て。
 「麥酒でございますか。」
 と盃の銃口を向けたお銀は。名もなく雜兵といふ面體。但し甲冑は目指せし御大將と同じく。此家の小間使にてお種といふ連業なり。

澁谷は山口と眼を見合せて。竊に苦笑を取交はせ。餘所を向いて煙草をふかり／＼。知つた顔ゆゑ。山口は折角酌に來たものを素氣なくもしかねて。
 「お酌は實にお種さんの事だ。」
 空々しい愛想に澁谷はくす／＼と笑へば。山口も可笑くなつて。くすくす。何たか理由は解らねど。二人が笑ふから。お種もくす／＼。
 山口は左手を衝いて右肩を斜に突出し。ぬつと頭を伸して。
 「お種さん。」
 「はあ。」と肩を揺かして顔で嬌態をする。
 「あの娘ね。」と頭で箒つて眼で見當をつける。
 「どれでございます。」
 「其さ。」
 「お銀さん？」といふ聲が大き過ぎたので。我を呼ぶのかとお銀は振向いて。
 「何御用？」
 「いゝえ呼むだのぢやないの。」
 「然う？」とまた後姿になる。
 お種は聲を滑めて。
 「あれで御座いますか。」
 「さうさ。あれはたしか御家來の？」
 「はあ丸橋といふ……」

「うむ。」と反身になつて。「さうだつ。」と膝を拵つ。
 「大層感心あすばしませぬね。」
 「なか／＼別品だね。」と扇子ばつちり。お種は手巾を口に當てて。齒を齧め。
 「ふふふ。」
 「何を笑ふんだ。え。何が可笑しうござる。」
 「でも貴下は御前様の前だと。苦しい顔をして眞面目な事ばかりおつしやつてゐらつしやる癖に。今夜に限つて否な事をおつしやるから……」
 「酒を飲むと誰しもかうなるものだ。」
 「虚ばっかり。」と様子笑をする。
 山口は川ありさうに眞面目になつて。
 「時にお種さん。」
 「はい。」と釣されてお種も眞面目になる。
 「あの娘のお酌といふので一盃飲みたいね。」
 「お種はついでと傍を向いて。
 「多度召上りましたな。」
 「は、は、一盃願ひませう。美しいのに。」
 と猪口を出したは。餘程御機嫌を取る氣なり。
 「御遠慮なく……。」とお種は膝の上に手を

「然し些と若過ぎはいたしませんか。」
 「若い方なら過ぎてても苦しからずだね。ははははは。」
 「そりやまあ老婦よりは宜しに相違ございませんけれど。どうも此家の經濟を切廻さうといふには。」と軽く首を括つて。
 「どうぞございませうか。」と尻上りに言切る。
 「そんな事は構はんぢやないか。經濟というた所が格別至難い事は要らんし。二月か三月も償るれば。誰にでも出来る事だ。」
 「へえ。」と山口は思案してゐる。
 「出来んのなら白痴ぢや。白痴ぢやあるまい。山口さん。」
 「白痴な事は。それは。那様事はござりません。」
 「白痴でない以上は出来るよ。我が保証する。」
 「所で貴下は宜しいと致して。いかゞでござりますか。お母様の御意見は？」
 「母の？ 母の妻ぢやなし。我が可ければ別に不服のある理はない。」
 「然し。一應は兎も角もお相談になつて……。」
 「昨夜は話した。」
 「御不服はござりませんか。」
 「母も喜むでをる。」

「左様なら一つ先方へ話して見ませう。」
 「先方はどうぢやらう。承知をせやうか。」
 「此方が二度目といふ所が少々何でございませうけれど。お子様はなし。御姑御様はお一人といふのですから。申分はござりませぬな。」
 「さういふ註文にいつてくれるれば可いが。」
 「何かと思ひ出したと言ふ發端に。卓子の端をとんと拍つて。
 「品行はどうぢやらう？」
 「左様。」と洗魚を一盥口へ入れて。もぐもぐと何を言ふのやら全然解らず。
 「なあ。品行は？」と問はほされて、慌てて噛込み。手掌で口角を横擦して。
 「其點は私にも解りかねます。一つ紅して見ませう。」
 「何分願ひます。」と奥の方を向いて。「こら酒を持て来んか。」
 「はい。」といふ聲が聞えて。四十餘の中老女が徳利を兩手に持つて来て。空いたのを換へて行く。
 澁谷は「熱いのを。」と一本を山口の前に置き。自身も一杯注いで。半分ばかりきゆうと飲む。縁縁の隠居所を。軒の葎簾の下から覗込む。

「御母様？」と又覗いて。「一寸。」と呼べば。六疊の隠居所に新聞を讀んでゐた。六十五六の剪髮の女隠居が。洋銀鏡の目録の上から。まづ座敷を透して。やがて日鏡を取つて。新聞紙の文鏡にして。やつと。と小さな懸障で立上り。腰もしやつきりとして。座敷へ入つて来て。山口を見つと。
 「よう入らつしやいました。」と田舎訛の濁聲で。べつたり坐つて時流を述べる。山口は急に裾をすべり落ち。はつと平伏して。懸障に挨拶をする。
 澁谷は盃に手を懸けて時流を見送つて。
 「一杯どうですか。」
 「今は欲うないから又晩に。」
 「少々召上りまし。」と山口は自身の盃を干して飲さうとする。
 「私は晩と極めてをりますから。」と徳利を取つて。
 「まあ。貴下最一つ。」といはれて山口は軽く顔を腫へ。
 「然し先刻から餘程頂戴いたしてをります。」
 澁谷は椰子實の煙草入に銀の長煙管を添へて。雪洞を懸けた紫檜の煙草盆を母親の傍へ廻すと。隠居は背を屈めて膝の上に兩脚を跨たせ

光明を放つかとばかり。際立つて。藝者も頻にお銀の進退には目を側て。瞬き合ふほどなれば。無論満座の客は現になつて。衆心一人を逐うて移るといふ状で。一見の客も名を聞覚え。お銀が前でも通ると。爲懸けた談話を極めて。「お銀ちゃん！」など温言で呼留める。
 就中某伯と來たら。眼を縁の如くして。お銀とお銀と懐懐いほどのお聲懸りで。少し御自分の前に見えぬと。酒を飲んでも甘うない。と金閣寺の大膳懸りで。頸を延ばして。「お銀は居らぬか。」と御意ある時の鼻下の寸を。玉八といふ人の悪い老妓が。杉箸を鉛直に立て。遠くから測量して。高島屋の忠端といふ身をやつて。妹藝者を笑はせてゐる。
 遂に此處に居る事がお目に留つて。早速彼を喚べとの御意に。お爲といふ小間使が。勅使三度に及ぶといふ始末。
 「お銀さん。一寸でも可いから来て下さいよ。私が窮るわ。」と泣聲を放つ。
 「はい唯今。」と立たうとするを。此時は山口大分酩酊の片律で。
 「まあ可いぢやないか。何。室山の御前様のお召だ？ 然う？」
 とつまらなさうな顔色。べろりと舌を長く出して唇を舐すり。

「あの御前も御高齡にましましてながら。いつもいつもお助兵衛な御前だ。」
 「あれ聞えますよ。」とお爲とお銀が口を揃へて注意する。
 「へへへ。」と冷笑して、
 「聞えるものなら勝手に聞えなさい。」と身體はぐなく。眼ばかり据ゑて。一向多愛ない事を立派さうに云ふ。いつかお銀が立つて了つたとは気が着かず。
 「お銀ちゃん。ねえ丸橋銀子ちゃん。氣を着けないと不可せんよ。あの御前といふものが。いやや尋常ならぬ助前だからね。高い聲では申されぬが。どうか聲色のやうなれど。誰のやら當なし。」一鉢華族といふものは。士族平民より一倍お好色で。お就濃くてゐらつしやる譯のものだから。お給仕は辛いよ。ねえお銀ちゃん。」と再舌紙ずりをして。細い眼を無理に瞬いたが。「おや不在！ 不在ね。お銀ちゃん。いや通した通した。お前たちは。」

泊とした者を三品ばかり列べ。献酬なしと定めて。小さな薬付の硝子盃と京焼の小徳利を銘銘に控へ。山口は葛布の洋服をば。糊にびんと脹つた客浴衣に衣更へて。紅革の糊の上に割膝をして庭の盆栽欄に咬懸けた柘榴の盆栽をまじまじ眺めながら。髪を揺つて待つ所へ。主人も浴衣になりて。濡髪を拭きながら。のつし／＼と出て来て。
 「いや山口さん。貴下も冷水で一寸顔をお洗ひなさらんか。」とどつかり糊の上に胡坐を敷く。
 「いえ私はこれで結構でございます。」
 「水で顔を洗ふより。これで口を漱ぐ方がいゝですか。」
 「うふ。」と笑ひながら山口の盃に盃々と注ぐ。
 「これは。貴下まあ。」と徳利に手を懸けるより早く。澁谷は獨酌してぐつと一息に飲干し。
 「あゝ養生した。貴下も早く養生なさい。」と無縁作に茶碗の汁をちゆうと吸ふ。山口は盃を一寸戴いて口を着け。下に滑いた手で箸を取つて。洗魚の摺山奏を醬油皿の中に摘み込む。二つ三つ撫過しながら。
 「時に彼は眞實御縁約をいたすのでございませぬか。」
 「勿論願ひたい。」

ながら、煙草を取つて、うら／＼と二度ばかり吹いて。煙草を埋めながら、上眼で人を見る癖あり。澁谷の眼の大きくて可憐いのは、遺傳と見えて、此隠居の眼にも同じ大さと、同じ可憐さがあるが、老年に落回むで奥の方で、ひか／＼するだけ、いと可憐くも、涙くも見える。顔色は日に焼けた薄紙の如く、額骨高く秀で、額の先まで瘦細り、七十にも近からうといふに髪は濃くして、目に着くほどの白髪もなく、唯老年の悲しさには、天邊が燦原のごとく、赤い光に充てられてゐる。齒は貝を含めるやうに揃つて、一枚とても取のあるはなく、恐らくは糸は入歯と思ふべし。年老の髪は黒いものと、齒の脱けてないのは、いかにも憎むに見えぬものなるが、此隠居はそれに最一つ並通れて、可憐い眼といふものを控へたれば、一口して牙齦の氣が人に通る。山口は酒を飲みながら頻りに此相を覗いて、(ああ、嫁になる身は不便だ)とつく／＼思つたが、(幸ひに澁谷は、此隠居の相が表はす如き性質ではなくて、外観によらぬ實意のある好人物であるから、嫁を世話しやうともいふのだけれど、あの姑は他人の我ながら氣が置けて、何となく薄氣味の好くない人物だ)と思へば、酒もどうやら旨くなくなつて来る。

「御隠居様にあの御話を。」
 「何かい。嫁の？」 澁谷は首肯。
 「可からう。少し若いやうに思ふけれど、な山口さん。」
 「其處です。」
 「何處かな。」と尋つて見て。「は、は、は、は、なるほど若いやうではございますけれど、女子といふものは老易いのでございますから。」
 「私なども去年までは、餘程若うござつたけれど。」
 「左様でございましたな。は、は、は。」
 「眞箇、ほ、ほ、ほ。」
 隠居はなほ前のごとく扇を握り、緩く煙草を持つて、眉首で澁谷の目を横に摩りながら、鼻の孔からふうと太い煙を出して。
 「私の嫁といふのはござらんから、此人の氣にさへ入つたら、私は構ひません。」
 「なるほど。」
 「士族でありましたな。」と上眼で見ると、たしかに士族で、手前と同藩のもので。
 「小身ですか。」
 「私は交際したことございませんから、詳しく存じませんが。」

「ま、小身でも士族なら……平民は不可。」と憎々しく顰面をして首を擡る。
 「何故な？」と澁谷は笑ひながらいふと、怪しからむ事を聞くとばかり腹立顔で。
 「私は好かん。平民なんぞは。」
 「今は士族も平民も無いです。」
 「否、有る。」といふ／＼腹立つて。
 「貴下が平民の娘なんぞを嫁にしたら、私が先祖へ申言が立たん。」
 と火の極になる。餘り腹を立たしたら、此話がおにならうか。と山口は案じて。
 「それは何と申しても、士族の事でございませぬ。」と隠居の意を迎へると。
 「何というても然うでござるよ。」と煙草を吹いて、これで座敷が白けて、いづれも少時無言なり。
 「山口さん、兎も角も久方へ相談をして見て下さらんか。」
 「承知いたしました。」と盃の底にある酒を干して。
 「大分頂戴いたしました。」
 「まあ。」と澁谷は徳利を向けると、其頭をおさへて。
 「否、もうどうも。」

「何のあればかり。」と無理に注げば、山口は盃に盛るのを見ながら。
 「どうも。もう是は。」など、呟いてゐる。隠居は勃然として、ふか／＼煙草ばかり煙らして居たが、急に吹煙を擧いで。
 「山口さん、それぢや何分お頼み申します。緩りとお上んなさい。まだ戸外は暑うござる。」と言捨て、隠居所へ入る。後を見送つた山口は聲を低めて。
 「御隠居様は御立腹ぢやございませんか。」
 「なあに。いつもの癖だ。」
 「左様でございますか。」と山口は隠居所を見込む。

五

や、煤けたのは去年からの持越。といふ岐阜提灯を、出窓の格子の中に釣して、燈は其ばかりの三疊の薄くらがりに、蚊を拂ふ團扇の音を絶間なく立て、姉妹二人行水後の浴衣姿で、肩と肩と相摩ふほどに密着してゐる。平生に異りてお銀は一向に冴えぬ顔色。窓外の方を眺と眺めて、團扇の柄で膝を小刻みに敲いてゐる。
 お銀は姉の顔を見ながら、多時見込む。

だが、小聲に「姉さん」と呼ぶと、返事なければ、手を把つて。
 「姉さんてば。」
 「え、。」と振向く。
 「そんなに考へなくつても可いぢやないか。」
 「何も考へはしないよ。」
 「考へてるよ。先刻から。」
 推返して然ではないとも言はず。然だとも言はず。お銀の顔を勝手注視ながら又考へてゐる。お銀は少し焦れ氣味で。
 「姉さんてば。」と力を入れて呼ぶと。
 「あ、い、い、い。」と(よう)を長く引張る。
 「否だ。私は。」
 「なぜ？」と平氣。
 「お目出たいのに、那様にお鬱ぎでないよ。」
 「否な子だよ。」とお銀の肩を軽く拍つて。眼中には嬉しうな色も見える。
 「此嬉しうな色を見て取るお銀の眼中には、その(嬉しうな)を嘲るやうな色が見えて。
 「お目出たいのに。」と繰返せば「否な」とお銀の方でも繰返す。
 「何日適くの？」
 「何處へ？」
 「お目出たい所へさ。」と姉の膝を一寸突く。

「否な。」と内向いて、又考へ始める。
 「眞箇に冗談は退けて、何日に極つたの？」
 「何がさ。」と手強く不知をきると。
 「否だあ。」と甘垂れたやうに言ふ。
 「否だあつて、何の事たか。些も解りやしないやね。」
 と慄へやうとするほど、喜色は却つて眼中で舞を跳る。
 「そんなら可いよ。」と少し激して、お銀はわざと横を向く。
 お銀は眼中の微笑を満面に廣げて、「鐵ちゃん！と呼ぶと無言。「鐵ちゃん！いよ／＼無言！ます／＼横を向いて、竟にはくるりと背を向ける。お銀は二本指でお銀の背筋をむづむづやると、「あれ。」と身を顛はせて、「知らないよ。」と後襟に拂ふ手を、透さず掴むで、片手を肩に懸けて、ぐ／＼と力を入れて此方を見せる。「知らないよ。」とぶり／＼するのを、お銀は面白半分、調戲半分。
 「さうお怒りなさるもんぢやございませんよ。」とぬつと手を出してお銀の顔の下を擡る。顔を縮めて、怒りたいにも可笑くて怒られず、仕方なしに採演したやうに笑ひながら、お銀の手を振拂つて。

「呑。もう姉さんは。」と顔を見て。もうお嫁入をして。居なくなると思つて。妄に他を慮めるよ。」

「お目出たいの。お嫁入だの。とおいひだけれど。未だ決定はしないんだよ。そんな事は。」

「決定しないから心配して鬱むの？」

(じれむま)の角に懸けやうでもなく。何気なしの言葉が。鋭くお銀の感情を突いたか。流石をして。「呑な。」と苦々しく剣を返せば。「だつて鬱いでるぢやないか。」となほ執念く問窮める。

「鬱ぎはしないよ。」と叱るやうに説教する。「さう？」と眞面目に。おとなしく聞流して。後は双方無言。

奥には今戸焼の蚊遣猪に。炭俵の刺むだのと陳皮とを懸して。その煙を呉服屋の景物閣層で女房が扇ぐ傍に。新八郎は洗濯した阿波縮の浴衣に。寝ぼけ色の淺黄めりんすの三尺を前結びにして。鹽漬の古茄子ほど平坦となつた木綿更紗の座蒲團に。藻に鯉の印附の。即効紙のやうな色をした撥油團を上敷にして。胡坐を掻き。座敷の真中に釣した小洋燈の火を借りて。赤くなつた能代の膳を持って。餘の鹽漬が二尾と。生乾の雷干で。泡盛をきこしめしてゐると。

決して。いかな事があつても酔はない。あは酔はない。酔つた日には第一前祝に對しても濟まん理だ。別に斷つて飲みたくもないけれど。眞の前祝に飲むのだから。」

「飲みたくないものなら。浪費な事ですから。なほの事お合請なさいまし。」

「そんな皮肉はいひつこなし。後生だから持つて来てくれ。もう猪口に二三盃も飲まして見ろ。いよゝ相談が捗るといふのは。實は此所等に。」と鳩尾の下を壓して。

「好い分別や文殊の智慧なんぞが。雖小きくなつて着むのである。之を迎ひに行かなければ出て来ない。迎ひには誰が可からうといふと。それ酒だ。之を迎ひ酒といふ。」

と眞面目にやられて女房も可笑くなり。仕方なしのくすくす笑。溢々臺所へ行き。現金に少しばかり注いで来て。徳利を膳の上に。印でも捺すやうに。しかと置きながら。新八の顔を観いて。

「もう是限ですよ。」

「今度は神扱ひだ。餘のはお預けかね。」

とにたく笑ひながら徳利を持つて。餘り輕いのに驚いて。思はず。「はい。」と聲を懸けて。少時考へたが。

「怪しからん。酒だと思つたら。此中に子供を入れて来たな。」

「また元談ぢやありませんよ。早く吃るなら吃つて了つて。相談を決めませうよ。」

「いや。何でも子供が入つてゐる。」

「なぜ御座いますよ。」と希有な顔をする。「なぜでも可いから。一寸振つて見な。」

女房は何の氣も着かず振つて見る。

「そら。そら。ぼつちやん。」

「え。もう。洒落所ぢやありません。」と茶漬茶碗の縁底に載せた猪口に溢れるほど注ぎ。早く形付けやうといふ下心から。飯櫃を擔出して側に引寄せ。團中を推して見たり。蓋をことごと。指頭で賣鼓を鳴して。短兵急に押寄せたりしても。一向落城の様が見えぬに飽倦むで。最後の策は蓋を取つて。杓子を入れて。飯を担返して。誰か實のある人は一膳食べてくれさうなものだ。と謂はねばかりに見せる。

其時亭主は少しも睡がず。悠然自若として傍に飯なきが如く。ちびりくと言さうに。飲むといふよりは寧ろ紙めて樂むのである。紙めても眠いでも。もとく三四杯の酒は。竟に一滴も残らぬまでに飲盡して。虚になつた徳利を名残惜しげに膳から下して。やうやく不承々々

「いくら利口のやうでも。やばり十九や廿歳の處女でございますよ。阿郎。不斷の舉動を御覽なさいな。まるで孩提ぢやございせんか。」

「然でないつて事さ。」と徳利を持つと。何時か輕くなつて。ちよろくく猪口に半分ばかり。倒にして。ぼたりくと滴らして。情なきうな顔。女房は横を向いて見ぬ風である。

「もう少し。」と思ひ切つて徳利を出す。「過ぎますよ。また明日の事になさいまし。」

「お銀は子供でもいゝが。乃公まで子供扱にするな。もう少しだ。」

「召上るのは可うございませうけれど。今夜は彼子の事で相談をしなければならぬんですか。お控へなさいましよ。また過ぎると。相談も何も出来やしませんわね。」

「道理だよ。酔つてしまつて相談が出来んと思へば。控へるとも言ひたからうけれど。前祝と思つて。少し。眞のすこうしだ。これつばかり……。」

と徳利の底を。五分ほど指で點つて見せて。一また後を引くと思ふと。止めたからうが。決して後を引くのではないよ。前祝だ。前祝と思へば。憎くはなからう。前言ふ通り前祝に飲むので。酔はうなぞと思つて飲むのではない。

「怪しからん。酒だと思つたら。此中に子供を入れて来たな。」

「また元談ぢやありませんよ。早く吃るなら吃つて了つて。相談を決めませうよ。」

「いや。何でも子供が入つてゐる。」

「なぜ御座いますよ。」と希有な顔をする。「なぜでも可いから。一寸振つて見な。」

女房は何の氣も着かず振つて見る。

「そら。そら。ぼつちやん。」

「え。もう。洒落所ぢやありません。」と茶漬茶碗の縁底に載せた猪口に溢れるほど注ぎ。早く形付けやうといふ下心から。飯櫃を擔出して側に引寄せ。團中を推して見たり。蓋をことごと。指頭で賣鼓を鳴して。短兵急に押寄せたりしても。一向落城の様が見えぬに飽倦むで。最後の策は蓋を取つて。杓子を入れて。飯を担返して。誰か實のある人は一膳食べてくれさうなものだ。と謂はねばかりに見せる。

其時亭主は少しも睡がず。悠然自若として傍に飯なきが如く。ちびりくと言さうに。飲むといふよりは寧ろ紙めて樂むのである。紙めても眠いでも。もとく三四杯の酒は。竟に一滴も残らぬまでに飲盡して。虚になつた徳利を名残惜しげに膳から下して。やうやく不承々々

「呑。もう姉さんは。」と顔を見て。もうお嫁入をして。居なくなると思つて。妄に他を慮めるよ。」

「お目出たいの。お嫁入だの。とおいひだけれど。未だ決定はしないんだよ。そんな事は。」

「決定しないから心配して鬱むの？」

(じれむま)の角に懸けやうでもなく。何気なしの言葉が。鋭くお銀の感情を突いたか。流石をして。「呑な。」と苦々しく剣を返せば。「だつて鬱いでるぢやないか。」となほ執念く問窮める。

「鬱ぎはしないよ。」と叱るやうに説教する。「さう？」と眞面目に。おとなしく聞流して。後は双方無言。

奥には今戸焼の蚊遣猪に。炭俵の刺むだのと陳皮とを懸して。その煙を呉服屋の景物閣層で女房が扇ぐ傍に。新八郎は洗濯した阿波縮の浴衣に。寝ぼけ色の淺黄めりんすの三尺を前結びにして。鹽漬の古茄子ほど平坦となつた木綿更紗の座蒲團に。藻に鯉の印附の。即効紙のやうな色をした撥油團を上敷にして。胡坐を掻き。座敷の真中に釣した小洋燈の火を借りて。赤くなつた能代の膳を持って。餘の鹽漬が二尾と。生乾の雷干で。泡盛をきこしめしてゐると。

決して。いかな事があつても酔はない。あは酔はない。酔つた日には第一前祝に對しても濟まん理だ。別に斷つて飲みたくもないけれど。眞の前祝に飲むのだから。」

「飲みたくないものなら。浪費な事ですから。なほの事お合請なさいまし。」

「そんな皮肉はいひつこなし。後生だから持つて来てくれ。もう猪口に二三盃も飲まして見ろ。いよゝ相談が捗るといふのは。實は此所等に。」と鳩尾の下を壓して。

「好い分別や文殊の智慧なんぞが。雖小きくなつて着むのである。之を迎ひに行かなければ出て来ない。迎ひには誰が可からうといふと。それ酒だ。之を迎ひ酒といふ。」

と眞面目にやられて女房も可笑くなり。仕方なしのくすくす笑。溢々臺所へ行き。現金に少しばかり注いで来て。徳利を膳の上に。印でも捺すやうに。しかと置きながら。新八の顔を観いて。

「もう是限ですよ。」

「今度は神扱ひだ。餘のはお預けかね。」

とにたく笑ひながら徳利を持つて。餘り輕いのに驚いて。思はず。「はい。」と聲を懸けて。少時考へたが。

「怪しからん。酒だと思つたら。此中に子供を入れて来たな。」

「また元談ぢやありませんよ。早く吃るなら吃つて了つて。相談を決めませうよ。」

「いや。何でも子供が入つてゐる。」

「なぜ御座いますよ。」と希有な顔をする。「なぜでも可いから。一寸振つて見な。」

女房は何の氣も着かず振つて見る。

「そら。そら。ぼつちやん。」

「え。もう。洒落所ぢやありません。」と茶漬茶碗の縁底に載せた猪口に溢れるほど注ぎ。早く形付けやうといふ下心から。飯櫃を擔出して側に引寄せ。團中を推して見たり。蓋をことごと。指頭で賣鼓を鳴して。短兵急に押寄せたりしても。一向落城の様が見えぬに飽倦むで。最後の策は蓋を取つて。杓子を入れて。飯を担返して。誰か實のある人は一膳食べてくれさうなものだ。と謂はねばかりに見せる。

其時亭主は少しも睡がず。悠然自若として傍に飯なきが如く。ちびりくと言さうに。飲むといふよりは寧ろ紙めて樂むのである。紙めても眠いでも。もとく三四杯の酒は。竟に一滴も残らぬまでに飲盡して。虚になつた徳利を名残惜しげに膳から下して。やうやく不承々々

「いくら利口のやうでも。やばり十九や廿歳の處女でございますよ。阿郎。不斷の舉動を御覽なさいな。まるで孩提ぢやございせんか。」

「然でないつて事さ。」と徳利を持つと。何時か輕くなつて。ちよろくく猪口に半分ばかり。倒にして。ぼたりくと滴らして。情なきうな顔。女房は横を向いて見ぬ風である。

「もう少し。」と思ひ切つて徳利を出す。「過ぎますよ。また明日の事になさいまし。」

「お銀は子供でもいゝが。乃公まで子供扱にするな。もう少しだ。」

「召上るのは可うございませうけれど。今夜は彼子の事で相談をしなければならぬんですか。お控へなさいましよ。また過ぎると。相談も何も出来やしませんわね。」

「道理だよ。酔つてしまつて相談が出来んと思へば。控へるとも言ひたからうけれど。前祝と思つて。少し。眞のすこうしだ。これつばかり……。」

と徳利の底を。五分ほど指で點つて見せて。一また後を引くと思ふと。止めたからうが。決して後を引くのではないよ。前祝だ。前祝と思へば。憎くはなからう。前言ふ通り前祝に飲むので。酔はうなぞと思つて飲むのではない。

「註文があるならして見な。どちらどの註文か知らないけれど。註文通りより餘程上出来だと私は思つてゐる。十三圓の官員様の娘に奉任の婚は。註文より過ぎてやうぢやないか。慾をいつたら際限がない。實は我も最一杯飲みたいのだけれど。かうやつて控へてゐる。お前も控へて諸と我慢をするが可い。」

「いかにも睡さうな顔をして（べろん）して。遂にはたりと横になる。今作れたかと思ふ間に。すやくと寝入る。酒は是だから可厭だといふ顔で。女房は膳を片寄せ。直と夫の傍に寄つて。肩頭を動揺りながら。

「阿郎々々。お風を引きますよ。阿郎。」

「うゝ。うゝ。」といふ聲に。手を退けば。一向他愛なく又寝入る。

「お銀や。お銀や。」と呼べば。二人はばたばたと駆けて来る。

「此處を形附けておくれ。」

「おや大層な癖だこと。」「ほゝほゝ。」と姉妹は手分をして膳を引く。流石に手洋燈を點ける。跡を掃く。茶碗を洗ふ。揚敷を踏む。がら／＼ばたすたと騒々しい中で。新八心持好まううに熟睡して。折々顔に来る蚊を現で撲く。女房は頻りに搖動かして。（もしと）（阿郎）の二三十唱

ても可い。父親も承知。當人も承知ならば。嫁つても可いやうなものではあるが。唯（二度目）といふのが氣になつてならぬ。尤も二度目といつた所が。新婚といつた所が。二度目だから女房を疎末にする。新婚だから大事にするといふ理もなし。仕立おろしの衣服でも。一度着たのである。着心に格別の異はなし。と思案をして見れば。勘辨もなるけれども。同じ嫁るものなら。外に口が無いではなし。嫁る所に事缺いて。二度目の所を避るといふのも馬鹿々々しい。これが此方も二度目といふのなら當然であるけれど。何にしる初婚で。年齢は十九で。容色が優れて美と來てゐるのだから。それに何も酔興な。二度目の所へ嫁るにも當らない。斷然嫁るまいかしらぬ。

兎も角も夫が退省てからの相談と。煙草盆を引寄せて。すばり／＼と喫しながら。憤然母親は沈思してゐる。姉妹は彼三疊に人氣無きが如く寂然雨と繼物をしてゐる。

やがて新八郎は村齒の下駄を曳すつて。疾歩に歸つて来る。猪口を捺したやうな五枚の紗の羽織の。どうせむでも。銀を置いて。自鉢縁が性を失つて。探めたら些と伸びにくい皺が。最多く裾の邊に髪髷たるを。殊更に折目正し

六

へてもお通じ無しゆゑ。頸に手を懸けて。うんと引寄せば。有聲に少し正氣付いて。

「何だ／＼。」と寢惚聲を出す。

「さあお起きなさいよ。先刻の相談はどうするのございませう。」

「蠟帳へでも入れて置き。むにや／＼／＼。」之を聞くと。臺所では姉妹が腹を抱へて。きやつきやつと笑ふ。女房も持餘して。手を放せば。又ころりと寝て。足をばたん。

子を見ること親に如かずといへど。子を見損ずるも親に如かず。女親はお銀の容色をば。たしかに實價の五倍も買冠つてゐて。お銀ほど美しいものは。世間に二人とは無いものゝやうに想つてゐる。

これまでに數度の縁談も。母親が主唱に立つて毛嫌ひをして。彼でもない此でもない皆棄した。といふのも。畢竟お銀を賣にし過ぎて。慾を乾かしたからではあるが。また一概に慾ばかりとも謂はれぬ。女親の身にもなつて見たら。いかさま十九年來の丹精。二葉から培養に懸け。雨に風に心を働めて。やう／＼花の咲くまでに仕立てたものを。むざと手放すは。いかにも口

く着做したるが。一心に道を急いだ所爲か。四分五厘ほど抜衣紋になつて。然のみならず背縫が二十三度ばかりも曲つて。御紋の上り藤が風に吹かれてゐる。いつそ煤けたなりに委いたら可いものを。山梔子色に色揚げをした麥藁帽子を。仔細らしく入口で脱いで。右手に小さく握つた手拭で。額際から汗が。／＼と湯氣の立つ頭顱まで。一刷毛に拭き／＼。顔を押めて。熱いわ熱いわ。といふ懸聲で入れば。姉は帽子を請取つて。奥の承座の折釘に掛ける。妹は粉の散る白練の村齒を下駄箱に形附ける。鼻に銀を寄せて又と熱い／＼と呻りながら。眞裸體になると。お銀は透さず濡手拭を持つて來て。背を拭けば。老者はげい／＼と二三つ。いかにも胸が開いたらしきやうに。凄じい嘆氣を放つ。お銀は藍地に紺萬筋の嘉平治も。今は寄る年浪の法鉢で。何齋と。ひさうな袴を。最も鄭重に疊む。箆筒に納めてから。辨當の包を解いて。鐵葉細工の漆繫を取出し。梅干の枝を水口へ捨てに行くと。狎面の額白の隻眼の黒毛牝犬が。變に鼻を鳴らして。今にも千切れるほどに尾を掉つてゐるのを。叱々と追ひまくつて。やがて辨當箱を洗ひに懸る。お銀は父親の御所望とあつて。飯糰の一袋を儲さず押込むだかとも想は

惜しからう。世話の焼けるまでは散々世話を焼かれて。これから手助にも相談相手にもならうといふ頃に。ふいと持つて行かれては無念なるべし。又一面は可愛くて／＼。片時も傍を離しかねるといふが。母親が毛嫌の原因でもあつたらしい。けれども慾の方が勝つてゐたには相違ない。して女親の理想の婿といふのは。まづ今度の話ほどの身柄で。男始が無くて。年齢が二十五六で。容親の好い。性質の優しい。自分達夫婦を親のやうに大事にしてくれる。ぐらゐの男なれば。

濫谷に就ては未だ二三箇條の不服がある。男親の方はさほど不當な思想を持たぬ。娘の價値を稍正しく知つて。此上も無い。福ゆゑ。どうか懇めて。早く安心がしたいといふのを。女親の眼から見ると。何も我子を然う卑く見て。損物の強賣でもするやうに。急使つて手放したが。なくては可さうなものだが。男親といふものは。實に女の子には情の薄いものだ。其とは言はねど。心中には恨めしく思つてはゐるものゝ。此縁談が頭から不服でもなく。さればとて。二つ返事といふほどでもなし。昨夜は「晩まんじりともせず」に考へ明して。今朝になつて見た所が。別に決心が出来たわけでもなし。随分分つ

れる。こわ／＼した白地の浴衣を着せる。宛然輕袴を背負うたやうだ。と咲と惡落が來さうなり。姉妹は彼の相談が始りさうな氣色を見て。攝つて次へ遠慮して。針を持つと。

「どうだ。いよく嫁るに決めたか。」と父親の聲。お銀は之を聞いて。姉はどういふ顔をしてゐるだらうと見れば。下を向いて。わざと一心に針を動かしてゐる。

凡そ小一時間ほど相談が有つてから。

「お銀や。一寸。」と母親の呼ぶ聲。聞くとお銀は針を停めて。午後四時ばかりなる標色絹を膝から推下して立起る處を。お銀がわざと徐と顔を見上げると。澄して。ううと立つて二三歩行きかけたが。彼事だと思ふ心があれば。何となく改つたやうな。氣遣かしいやうな。恐いやうな。異な氣持がして。姉と顔が熱くなつて。胸が轟いて。足が寄む。母親を少し離れて。父親を遠く離れて。風入の好さうな。説のむづかしい所に陣取つて。雨親の顔色を忍びやかに覗ふ様子は。いかにも。不氣味らしい。遠慮があるらしい。愈想した下女が譚言を吃ひに呼出された。と云ふ風情に似てゐる。

母親成儀を正し。と云ふ態度で。

「お銀。」と頗る嚴格に口を切ると。改つ

物を置いたら。此御父親大問と躊躇してゐるのを。女房が(二度目)といふのを警敵のやうに氣にして。照けつゝ。やい／＼言ふゆゑ。もしやお銀が悪く取つて。何か可厭な事のあるのを裏むのではあるまいかと氣味を悪がつて。談が破れるやうなこともあつては大變と。言つて聞かせるに決心して。

「子供等があるわけではないが。實はその濱谷といふ人は前妻があつたので。二年前に亡なつたのださうだ。二度目の家へ。此方が年齢が若くて初婚で適くといふのが。少し氣にも入るまいけれど。さうでもなければ。大分格の違ふ今度の話のやうな家へは。我家あたりからは適けるものぢやない。二度目といふのも子供でもあゝるのなら随分思案ものだが。そんな面倒はないのだから。知りさへしなけりや初婚も同じ事だ。男子は三十五六で初婚のものも許多もある。初婚と思へば初婚で済む事だらう。女子と違つて男子は二度目が三度目でも。刑事は少しも瑕にはならない。」

お銀は話の始終顔を下げて。一面は聞き。一面は分別。萬事否でもなければ。(二度目)といふのが。女氣には異なる事なく母親と同感で。咄の間に挨拶をしかねて忸怩してゐる。

「どうだえ。」と母親に促されて。胸は怦々。徐に顔を擡げて。まづ父親の眼色を見て。母親の顔を見て。また首を垂れて黙然。

此處で(否)ときつぱり斷つたら御父様が怒る。又自分にもさつぱり(否)といふほど否でもなし。さうかといつて否とも應ともいはなかつたら。父親が指を發す。母親の様子を見るのに。父親ほど乗つてはゐないらしいから。兎も角も母親を味方に頼むで。好いやうにしてもらうと。

「私はどうでも御父様と御母様さへよければ乗出して。」と言ふを速しや遅し。新八郎は衝と乗出して。

「御父様は善いとも／＼。大賛成だ。お前はどうか。」と女房を見向ければ。

「さうですね。」と娘の顔を見る。

「そんな生返事をするな。しつかりした所をいへ。しつかりした所を。」と商榷さうに言ふ。

「私は宜うございませぬ。貴方さへ宜くば。」

「え。他人がましい事を言ふな。貴方も此方も要るものか。胸を開くのだ。お前の胸をよ。」

「私は宜うございませぬけれども。當人が肝心です。そればかりが善いといつても。今御父様もそれだから。それだから當人も。今御父様

御母様が善いならと。...

「言つたからつて信にはなりませんわね。」

父親は顔を服らして。

何。信にならぬ事があるものか。

「でも然うはいきませんよ。まあ今日は彼にとつくりと考へさせて。而して私が明日すつかり聞いて見ませうから。」

かういふ事は表立つて聞いては實を吐かぬもの。と自身の舊時にも經驗のある母親の調和に。一時の壓服は後來の風波の基と。憎切つた父親も一歩を譲つて其意に従ひ。

「それぢや彼方へ行つて善く考へて見な。」

嫁人は女子一生の大事なり。可か否かは風邪氣の時に浴の分別をするとは大きに寸法が違へば。お銀は頗る案じ煩つて。二層に還つて再び針を把つては見たもの。悵然として溜息ばかり吐いてゐる。胸の中では。どうせう。御父様もいふ通り。先方の身分には實に申分はない。玉の奥だと世間はい。だらう。媒人の山口は。お邸の祝宴の時。お金さんに私を呼ばせて。酌をしるといつた人だ。濱谷といふ人は。なるほど右隣の柱に凭れてゐた。太つた色の黒い。眼の可恐い。髪縮れた。口髭の毛もやもと生えた。あゝいふ風だから更けては見え

て出られた言葉に釣込まれて。

「はい。」とお銀も改る。

「概略は昨日の相談で聞いたらうけれど。お前も最う好都合だ。いつまでも家に居る譯にはいかな身分だし。幸ひ實に似合はしい縁があるから。取極めやうかと思つて。...

「やうかと思ふぢやない。取極めるのだ。」と横鎧を入れられて。

「まあ阿那。」と女房は懊惱さうに貌を夫に回して。やがてお銀の方を見向いて。

「先方は二度目ぢやあるけれど。...

と再び懸けると。父親が突然に。

「これ。直に二度目々々といふよ。」と竹筥返しを恐い眼をする。

「でも。貴方。...

「え。！」と睨みつけて。

「おれが話を。銀。何だ。その先方は小石川水道町でな。...

「あれ貴方。小日向水道町でございませよ。」

「町所ぐるむは如何でも可いわな。唯しい。」と顔を擡めて。

「小日向水道町で。濱谷周三といふ人物だ。奏任四等の上月俸といふから百圓の月給で。なかなか評判の好い有用人物ださうだ。住居は自分

の家作で。下女部屋。車夫部屋。書生部屋。湯殿がある。物置がある。何のかの云つて。間敷が九間もあらうといふのだ。表の樹形の門から玄關まで十間もあつて。庭などは宏々として。立派な物ださうだ。それで六十五になる女隠居様が唯一人。小姑も何も無し。當人といふのは三十六になつて。大肥した長の高い。...

「お前お見だらう。此間お邸の御宴會の時に見たはずだよ。」と母親が言ふ。

昨日橋わたしたに來た男は。其晩酔つて喋つた山口といふ人。いかに見覚えてゐる。其人の話を聞いた時に。欲しいといふ人も察した。おぼろ氣に名も覚えて居るが。見たとは。どうや面して言悪い。まんざら見ないとも亦言悪い。山口が來た時挨拶に出て。先晩はなと。言はれた事もある。そこで。

「よく知りません。」と(よく)の字を冠せて跡を晦ますと。深く斬込む必用も無い所から。

「さうかい。」と長追もせずに母親も手を退く。入代つて父親が。咳拂ひを一つして。

「あゝ見なかつたか。肥つた長の高い。誠に男らしい立派な人品だ。と。立派な人品だ。と。とお銀も少し可笑かつた。

七

父親は獨り悦に入つて欣々然と話すに引換へて。有難くないといふ顔色で。(二度目)といふ事を忘れたのか。わざと言はぬのか。何にも爲よ言はいで措かうか。と唇を嚙みさせて。夫の言葉の斷れるのを待構へてゐた母親は。

「唯お前もどうだかと思ふのはね。...

「お前も今言つて聞かせるわな。」と厭漬すやうに言はれて。

「早く話してお遣なさいましたな。」

父親の心になつて見れば。勿論(二度目)の事も言つて聞かせる氣なれど。もし之を言出したらば。お銀が二の足を踏むかも知れぬ。そんな

るけれど。三十五六。那樣ものだらう。私は十九で先方が三十五六。大分違ふけれど。女子は更け易いから直に丁度好くなる。最う少し若いと好いけれど。三十一二...二十七八...五六なら何も申分はないけれど。さう又若くしては些の書生上りで。自分の力であれほどの身分になれやう譯もなし。年齢の所はどうにも我慢は出来るとして。それから男振だが。役者や藝人ではないのだから。男振なんぞはどうでも可いやうなものだけれど。又然うもいかない。醜いにも次第がある。同じ醜いながら。何處となく愛嬌のあるのがよく有るものだが。那樣のならまあ可いとして不承もするけれど。どう考へても彼人の目が可厭だ。何だか腹の黒さうな。え、誰かに似てゐるよ。え、と誰かに... 然矣、山王様のお祭禮の時。酔つて佩剣を舞舞した兵衛の眼色に宛然！ 本當に可厭な眼色だ。ちやあやしい。媒人は、實意のある。優しいこと、云つたら外説に據らない男だといふけれど。媒人の口だもの。何だか分りやしない。あんな眼色の人に限つて。邪怪で執念強くて。薄情でやかまじやで。氣心の知れないし。ねりむつりが多いものだ。そんな人に添ふ事は否々。一月か二月なら。機嫌も取れやう

けれど。これから一生... あ、思出して肩が凝るやうだ。けれども人は眉目より心といふから。何でも心が肝心だ。容貌はまあ彼でも可いとして。どうだらう。心が？ それがさ。邪怪で薄情でやかまじやで... とは想ふけれど。鼻も殺さないやうな顔をしてゐて。随分邪怪な人もあるし。地主様の邸居様見たやうに。赤鬼のやうな顔をしてゐながら。慈悲深い人もある。さうして見れば彼人だつて優しいかも知れない。容貌は當座の花で。夫婦は相互の氣心といふから。生白い人形のやうな亭主を持つた所が。それが永久どうといふではなし。あ、容貌の事なんぞはもう... 考へまい。考へまい！ それから二度目の事だ。之が第一氣に入らない。二度目だから如何といふ事もないけれど。何だか他人のお古を引請けるのは可厭だ。先方は甚だ好い家か知らないけれど。此方は十九の嫁入盛で。初婚で。年齢の更けた二度目の所へ嫁くのはつまらない。それも此方が純物で。他に交ひての無いといふのなら仕方ないけれど。交ひては世間に許多もある。それぢや二度目がどういふ理で可厭なのだといはれて見ると。かういふ理だと返答も出来ないけれど。誰だつて二度目は可厭だ。一寸響へて見ると。古

衣を買つて仕立直して着るよりは。同じ直段なら誰しも新しいものを買ふ。古衣の方が品が良くても。新しい方が着心地が好いわけだ。どう考へても二度目は氣に入らない。否だと云はうか知らん？ 否に決めやうと思へば。親又容態として棄つるに忍びざる處もある。月給が百圓。家作が有つて。地面を持つて。中の上。上。下の下といふ生計。這慶唐縮緬のくちやの帯をしてゐる。克橋の娘銀が。忽ち奉任官の奥様！ なりたい。否どころではない。随つたり協つたりだ。男振が好いの年が若いといふのは些の當座の事だ。當座より行末を考へなければならぬ。末の事を思へば此上もない良縁だ。と奥の手に悟入して見れば。なるほど父親の喜ぶ胸中も全然讀めたといふわけ。そんならいよく適くに決めたかといへば。色氣も大有で。未練も大有で。せめて並むで行いても可厭しくないくらゐの容貌の男にしたい。那ではどうも。復分別が立戻る。胸一つに置きかねて。妹に相談をしかける。と。まづ(あの人かい)と馬蚊を撮む時のやうな顔を見せて。妹に對しても彼を我夫はちと可厭しく。合さうかとも思つて見る。否々よく。本當によくよく考へて見ると。依然適

く方が可い。私でさへ容貌の事を左右思ふのも。年齢の長かないお鐵がさう思ふのは無理もない。行末を考へて見れば那樣事を言つちやゐられない。もう誰が何と言つても。適かう適かう適かう。

中の巻

若き女子は驚の輝けたも可笑く。笑ひ興ずる心の中にも。仍苦勞は絶えずして。老けぬ間に縁付きたや。好き婿取りたや。世帯持つとも苦勞なきやうにと。金持も容色美しむづれか身のをさまりを案じて。朝暮の憂慮とせざるはなし。思へば女子の身は夏の牡丹餅のごとし。饒易くして賣れ難し。之を抱ふる心配は實にさもあるべし。縁は出雲の神の思召すまゝとかや。容色の美醜に由らず。身代の貧富に拘らず。持参が二萬圓お臺所をも持ち。御節十九にましく。容顔美麗なる姫君の。二年良媒をもとめて今に凡帳の陰に物思はせたまふもあれば。味噌汁に五厘が刺肉買ひに行く姿のかひなくしきを。至極の世話女房と見立て。望めば。綿銘仙の禮服にて。車にも乗らざる奥入に持明くもあれば。縁は

抽籤の當の知れざるに。世間の娘身を案じ。親の愛白くなりて。昨日今日空に過行く手を空うして。氣のみは奇てど所爲なく。横町の饅頭屋に河豚のやうなる縁の來たるさへ恨まれけり。此國の人口男子一人に女子百人といふ比例にもあらざれば。何のかのと案する間に吉車の劍頭向きて。圖らざる方より持込む縁談は上々吉。願ふ所と家内衆目を開き。前祝の饅頭。嫁ひなものは。鯛鯛と。食過ぎてか寝られぬほどの歡喜さ。鏡臺は何處で見て置いた。簾の扉附は今行らず。長持は邪魔もの。用に立つは用心籠なれど。彼も道具の花なれば。と深夜を知らぬ義物語。傍に娘は寐たる風して。後來の取越苦勞。其中に小袖の染色。模様工夫も揮みて。嬉しき。氣遣しき。樂しき。心元無さ。打混じて一塊となり。胸に幅たく込上げて。我と我心を持参すべし。幸なる婚殿の萬事を察して。支度金百圓結納の目録に取添へ。帯代として贈り來しければ。甘露庭の落葉に降りたるばかり。兩親膽を潰して難有がり。さあ何でも買へと。餅みあがれば。所望の品を殖してお銀の味願。其も是も一語に承けこみ。思ふまゝなる支度出來て。約定の日を迎しと待つのみ。

嫉妬深き近所の誰彼目を側め。耳耳清して。分外なる方へ適くさへ合點のならざるに。開けば支度金まで出たるよし。容色美くても然ほどの代物にもあらざれば。准妻准妻。其に極まれり。日比は鐵橋を舟で渡るやうに嚴格な言ばかりいうて居ても。其は榮耀と云ふもう。それはそれは尊い。難有い。神様から。運といふお使が來ぬ前の病我慢なり。早くお銀の三輪が東雲に結うて。大方旦那のお召古しを土産にして。歸寧の美しき姿が見たしと囁き合ひけるを。お鐵が聞きつけて口惜と母様に告ぐれば。腹立ててまた之を父親に語りぬ。新八郎は獨り打笑ひ。捨て置き。法界情氣の仇なき長屋者。陰にては大臣の事も彼此いひくさる人の口なり。そのやうな言吐す日借賃のお爪が娘は。下水渡の鳶の彌助と腐り合ひ。金銭まで掴み出して新網に逃げ。今はさながら乞食の境涯。また合羽屋の女房は我娘を茶屋奉公に出して。三十に足を懸けたる身に亭主も持たせず。淫樂の應報は此頃頭に吹出て病院入の不始末。他事よりは餘々の事を構ふべき身の猜忌と思へば。腹立つ處か不便といふべし。妬まるゝほどの銀の出世は。目出度い。と取合されば。なる程と會得して。其後は又もや縁

入の障とともならむ根も無き取沙汰を度れ。ふつとお銀を戸外へ出さず。首尾よく荷物を送りすまして。吉日もいよいよ二三日に迫れば。親類へ暇乞の次手。小娘に隣る近所を廻るは快からねど。祝うてくれたるものを捨も置かれず挨拶に行けば。陰言とは雲泥なる輕薄たらしく。お銀様に感れと小娘引出して挨拶させし。惡口の頭領株。小間物屋の(じやらくら)女房はいよいよ憎くこそ。

前日には例規の立振舞とて。一升炊の赤飯に家奇の盃事。父親は日出たいと口にはいへど。常に酒に對ふほどの元氣は無く。萎れたる顔色。母は腕も涙を浮べて。今日ばかり物懐しげにお銀の顔のみ眺むれば。庭の柿の落葉する風も哀を誘ふ心地して。お銀もしみじみ悲しく覺えぬ。お銀は涙かに盃を納め。これまでは長々お世話になりましたと。後はいはず俯むけば。母は堪へかねて涙を流す。父親は鼻聲にて。凡女子の身一たび人に嫁がば。生きて其家を出てむと思ふなかれといへり。他人の中へ出づるからは。むづかしからでも兩親の手許にある時とは。大分了簡を違へねばならぬ事なり。今改めて一々いふまではなけれど。第一夫を大切に。姑をやさしくし。奉公人を憐み。他

人には信を以て交はるべし。我等もさまざま苦勞して。育てあげたる効ありて。此度は仕合せの出世。家の面目。此上は無き兩親の満足なり。年寄れるものに苦勞無けまじきやう心して。夫の氣に稱ひ。姑の機嫌損せぬやう。随分油断なく仕ふべし。尙又女房は内を治むる大役にして。家の榮ゆるも衰ふるも女房の所爲唯一なれば。華美を好まず。冗費を慎み。事肝要なり。人情は咽喉許過ぐれば熱さを忘れ。苦しかりし時憶はで。在る時の心奢り易きは身上の大毒なれば。其方も些少なる官員の娘の今日を。奥様に成りすましての後。努力を怠るまじきぞ。嫁入りては。滋谷周三の妻。過失あらば夫がいふべし。我娘と申すての意見も此限りなれば。疎略には聞かまいと。此時は父も涙を催しけり。

我娘と申すての意見も此限りとの言葉を。何と聞きたるか母は悲哀を強め。餘りの名残情に更に酒盃を取擧げ。今一盃其方の飲さしを母がもらはんとは。其子に知られぬ親の情。こぼるゝほどお銀が酌すれば。多しとお銀のいへるに。母様の餘に私ごと。一盃の酒に親子三人の涙を酌交して。納を父親に獻し。姑はお銀の手を執りて。我跡にては二人分親人を大事にし

て。世話焼けぬやうおとなしう仕へよ。お前も身を賤うて病はぬやうなど。別れては長く會れぬか何ぞのやうに心細げなる事いうて。後には涙に濕りがちなるを。何時までも盡きじと。父親醉に紛らして小聲に諭を始むれば。其顔が可笑きとて眞先にお銀が笑ひ出せば。いづれも笑顔は雨後の月。これぞ未吉やれ日出たし。

二

先方は財産家の何不足も無く。隱居様は長持の底より白無垢の下着を出して。帯も名あつ織物。今日はかゝり息子の嫁取と。一際あらたまりたる服装にて控へらるる座敷へ。我等の嫁の兩親顔して罷出づべき衣裳の用意あるべきにあらず。願くは次の間に御免を蒙りたき仕儀なれど。此も禮なれば是非に及ばず。婿に列ぶ段になれば。父親嘉平次の袴にてもならず。母親柳條の小袖にても済し難し。さりとして知人に借るべき方はなし。また世間知れて陰言の種となるも懸けれど。娘の肩身を狭くせむには替へられじと。かゝる時の重寶は。裏の路次の口に差配の質屋が指料貸するを幸ひに。父親一走り行きて恥辱を話し。家の定紋下り藤をつけたる女小袖御座るかと問へば。顔色裏の小紋縮

縮二枚裏を持合せたりといふ。染色も質素にて間に合ふは仕合せなり。次に黒の同じ紋付の男物はと尋ねれば。黒羽二重の中古あれど。惜事には紋が少し違ふと亭主頭を掻く。いかなる紋かと聞くに。藤は藤なれど上り藤に大字とはいかさ持合せ物。此小袖六年の間。前後に借人唯の二人と。迷惑さうなる顔色然もあるべし。

亭主のいひけるは。いづれ御羽織御着用なるべし。さらば大字でも天字でも見えぬ處なれば御量見なるべしと教へぬ。なるほど。羽織だに脱がずば何の事もあるまじ。されど羽織も此方に持合せざれば。之もお宅の御厄介なり。羽織には大字の附かぬがござりまするかとあれば。亭主少時小首を傾け。損料物の中には無けれど。今月買に取りたる中に在れば。一日二日の御用ならば。御懇意の間から極内にて御用達申すべし。されば酒汚箸の掬など随分御用心下されたし。いかにも心得ました。今一つ仙臺平の袴をと望めば。其には至極上等ありとて。多時待たせおきて。世文の品々を渡しけるを。懷中にせし三布風月敷の。萌黄も春過ぎて夏も茂り。秋も末。冬の初の枯草色なるを。そと廣げて大事に包み。夜を幸ひに長屋の前を忍びて我家の

裏口に着けば。見識るはずの犬めに吠えられけり。此夜父親は長年の重荷を卸して草臥の高脚。耳にうるさく寝がての母は。明日こそいとし子を浮世の潮に突放し。許多の苦勞の爲始めと。はや行末を豫想りては。また更に過去の事を喚起し。とかくに別離の暗愁胸に満ちて。此折から目出度き心地せぬを。何故と我さへ知らず。人に奪はれて遠き國へ我子の送らるゝやうにも想はれて唯悲しかりき。

お銀は親妹に別れむ時のいよゝ過りて。銀錢金の指環を玩弄びて流許に轉がし。遂に庇間の下水に墜して涙の出るほど母親に叱られ。父親を頼みて探してもらひしが今に見えざるなど。幼稚の古蹟多き馴染の住家も今夜を見納。明日の今頃は知らぬ座敷の屏風の中と。かゝる古借家も故郷となれば懐し。

來年は廿歳と女子の春もやうゝ過ぎ行くを悲み。此度の相談を良縁と心急かれました。たしかなる思慮もなく一圖に取極めたものゝ。其姑尋常勝れて氣むづかし。夫なる男も情薄くして。居辛き家なりせば如何すべき。暇取るにしても。氣に染まぬ主取りたる奉公とは譲違うて容易き事にあらず。離れてどうぞなるかと

いへば。どうもならで荷物で来るべし。もし又縁切りたくも切られぬ義理など起りて。厭思を忍び。苦患を承へて。荆棘の床に起臥の。世に在る思出もなく暮さむには。一思に死なむよりなほぞ辛かるべき。

分別の上にも分別して。よく。添ふべき人と見立て。縁附くべき方と斷定めての後ならで。返事は唯にもすまじき事なるを。と思へば。思ふほど身上の氣遣はしさに。後悔の汗流れて。身毛は彌立つばかりたり。悪事のみ考へ窮めて。行く處まで行けば。又我を慰むる意も發りて。否々さにもあらじ。此方だに眞實を盡し自己を正しくせむには。祈らずとも神や恵を垂れたまはむ。鬼を欺く人心も自ら和きて。樂き目をも見るべし。誰もかく後來を案じ人を怖れなば。世間に嫁入する女子はあるまじく。嫁入りても孫を見る母はたかるべきに。一軒の家には其々の女房ありて。同乗して花見に行くもあれば。黒くなりて俱嫁するもあり。是皆案するほどにあらぬ證據なり。

女一代に一度は誰しも夫を持つべき身なれば。此縁天を危みて破談にすとも。其次の縁夫にも必ずこれほどの取越苦勞はあるべきを。女子を愚痴とは怨る處をぞ謂ふなるべき。今

更何程案じて悔いても復らぬ事と心を定めて。鶏の初めて鳴く頃少し交誼みしが。覺むれば小春の日影麗に。鶴も舞ふべき天と両親に語れば。斜ならず歎びぬ。

(いよ／＼今日)の今朝は。心地清しく胸は限なく舞れて。思ふ事無く考ふる事無く。唯食事の進まざるは平常に變る驗かと自ら思ふのみにて。昨夜までは涙も出で汗も湧き。悲歎に裏まれ。憂慮に悩まされ。骨も折れ血も冷ゆるかと我れ果てし其悲歎も憂慮も。涙も汗も。今日を焦點なる今日となりて。我境遇の邊に一變したらむやうに。不知不識しくも心落着きたるは。何故との疑念は融けざりき。

姉と同伴も今日を納めなれば。随分中好く洗しあうて。今まで喧嘩せし回復して。後悔の種を遺すなと母親に笑はれて。石鹼垢摩木炭。練袋には平素よりも多分の洗粉を仕込み。頭白粉の小蓋物。取揃へて新しき手拭に裏み。母は用あれば一足後より。二人は混まぬ中にと立出づる。後影を父親見送りて。まだ一人重荷がと太息吐けば。散々に世話を焼かされ。物を懸けられて。頓て手助にもなる頃唯他に取られ。女子持つは五割の損と。母親はつく／＼愚痴をこぼしぬ。

衆の大歡喜。然し我女房の事なれば。婦殿は然もあらうけれど。蚊遣火の煙たき姑はどうか。と蕪ながら心配した隠居は。なるほど人附の悪い。愛想氣の無い。竹筒を藤並で縛つたといふやうな性である代り。萬事に無頓着な。朴訥だけに面入らずで。家内も無爲にして作すとは何よりなり。

且那樣は御寵愛遊ばさるゝ。御隠居様のお中も至極好くお見受申せば。婢も書生も車夫も奥様々と奉り。威令自ら行はれて勢旭日の登るごとく。昨日の娘の身を考へて見れば。今日の奥様の我身が我身ながら不思議でならぬほど不思議で。これが玉の輿かと乗つて見れば異なもの。

庭は廣し。花卉果木は多し。裏には畑もある。家宅は大きくて座敷は奇麗で。旨いものも食べられる。嗚呼母様やお鐵にも。恚うした所で保養がさせたい。といふ念の起るは人情の常。近日呼んで御馳走でもしたいと思つたもの。日數も経たぬ内から我儘らしいと恚へてゐれど。歸寧の時に妹に。かうだあゝだと種々話をしたれば。是非近い内に。呼ぶとも呼ぶとも。呼ばなくて何としやうと。堅く約束したを待遠に思つてゐやう。と思ふほどなほ一日も早

湯より歸來れば愛結待懸けて。御視儀戴くばかりにもあらず。花容様一代に一度の賦と。腕を揮へば時間も入りて。見事なる舞形。鶴の形も高等に出来て。聊も言分なし。其鏡仕舞ふに及ばず。化粧急ぎて。やう／＼首から上の仕揚げたる頃十二時の鳴りければ。それ二時には妹の人の入來と支度を急ぎ。父親は例の羽織。母は例の小紋縮緬。借りものとは想はれぬ衣裳。附由々しげに推列び。上座にはお銀が黒縮緬の目立たぬ襦袢様の小袖に。下着は筒羽鼠地の更紗縮緬。白茶羅珍の丸帯して。帯揚は緋無地の縮緬。模様様の細手巾を履みて左に持ち。右手の遺端に迷ひつゝ。置床の前に端坐したる姿を。之を我姉かと驚く許りに見違へて。お鐵も頻に眺め入るほど艶なり。間も無く媒人の車にて駈着け。彼此談合の間に。祝の盃出でて。時分は好といふ頃日は落ちて戸外も開うなりぬ。

娘に附添ひて。兩親出揃ふ後に。夜分お鐵一人は氣遣はしと。かねて心易きお針の老女を午後より頼みて。留主は二人の役。随分氣を着けよ。遅くとも十時には還らむと契り置きて。人力車も揃ひたればいざと一同席を立てば。媒人の先を先は父親。花嫁を取圍みて殿は母親。しづ

しづと立出づれば。座敷の隅に物思はしき顔して。音も立てず沈みたりしお鐵。はばたく／＼と駈來り。姉様と袂に纏りて泣出せば。お銀も一足づゝ迫る別離に胸塞がれる折から。堪へかねて手巾を嚙緊め。顔を背けてお鐵の手を緊むれば。なほ泣立つるを門外には人の居るぞ。見悪しと母は小聲に叱りて引放せば。仆れたるまゝ。袂を敷きて涙は歌まざりけり。せめては別離の一言と。姉は物を言はむとするに。涙明眼に堪りて聲は出でず。唯一目見返りて車に乗れば。門の外には一町内の男女皆比處に集まるかと覺えて。黒山のごとく立重れり。

馬には乗つて見る。人に添つて見れば。年齢は三十六であるが。醜男子ではあるが。二度目ではあるが。濫谷周三が何の／＼可厭な譯ではない。その譯ではない譯は。謂ふに謂はれぬ譯で。之を識るものは當人のお銀。其一斑を聞いたものは獨り母親である。

半月ばかりの内に衣服が出来る。簪が出来る。黄金指環が出来る。家重代の黄金装の一万の目貨を刺して帯留が出来る。時計が出来る。此上は早く子供の出来るやうにと。両親は大熱

に肝臓を砕いても無い袖は振られぬで。當惑の極は吐息虹のごとく。最少し辛抱しなと。親の口から言憎さうな挨拶に。お鐵は失望して此上強請る元氣もなく。めそ／＼と泣出す傍に。母親は硬箱に向つて。用事があつて行きかねると返事を認め。お鐵。投函に行つてポストの蓋が裂けるやうな八當。小腹を立て。二三日はつんつんしてゐる所へ。お銀は右の返事を見て。隠居が親類廻りの留主を覗ひ。今日は書物だといふ夫に留主を頼み。車を飛ばして來て見ると。おやまあと母親は駈出て煙草盆を蹴飛ばす。臺所で水仕事をしてゐたお鐵は。妙な顔をして入口を覗けば。東妻の美しい……。

「あら姉さん！」と持つてゐた東妻を水瓶の中に投込み。飛着かむばかりの勢で駈着ければ。威嚴備はる奥方扮装。悠々として立ちたまふのに拍子が抜けて。笑ひたいやうな。たかないやうな。不思議な顔をして。膝を取りながら。びしゃんと坐つて袖の黒さうに挨拶する。お銀ちゃんは何時かの事。今は濫谷の奥様改つた挨拶をして。

「おや。お前大層髪が填れてるぢやないか。」

「あゝ。」とお鐵は悲しい顔をして。位れたさうに鬚を捻くりまはす。

「何處か悪いのかえ？」と聞けど黙つてゐる。「なあに少し御機嫌の悪い事がありますのさ。」と母親は茶を煎れながら、お鐵を尻目に掛けて笑ふ。義理に逼つて苦笑をして、お鐵は横の方を向く。

「どうしたの？」

「へへへ」と母親はお鐵とお鐵とに當てて、意味兩用といふ笑を爲る。

お鐵も之は何か曰のありさうな。其曰は何か可笑な曰であらうと笑ひかけて。

「どうしたの？」

「お鐵はくると母の方を見向いて。」

「お母様はいらうか。」と姉を得たので再氣日頃に十倍する。

「何だね。いはうかなんて。」

「何だよ。」とお鐵に言つても可からうかと母の氣色を窺つてゐるお鐵の膝を突く。

「あのね。羞かしいから止ませう。」と問答の中へ母親が。

「先日はまた度々手紙を。」と横鎗を入れる。

「何故来られないの？」とは龍の腮の珠に手頭を觸るやうな心持。お鐵は機一發と身を硬くして、俯むいて固唾を飲む。

「用事があるなんて他人がましいぢやありませんか。」

「實はね……。」と母親も言出しかねて。「お茶を。」とお鐵の前へ。籐編の茶托に露根蘭の金色燗燗茶碗を載せて出せば。

「おや綺麗だ事。家の茶碗？」と取擧げて眺める。

「失禮な事をおいひなさいな。此急須も宅の品でございますよ。」

と母親大自慢で。茶碗と對に買った急須を見せる。

「おや〜。」といひながら手に取つて見れば。蓋の鼻紐の蘭の花は好けれど。蓋が一枚缺けてゐるのにお鐵は噴出して、急須を下に置いて吃々と笑ふ。二人は何の事やら解らず。お鐵の獨して笑ふを呆れて見てゐる。

「おや御母様氣が着かないの？」

「何が。」といふ目前に急須を出して。

「蘭の蓋が一枚無いよ。御覽なさいな。」

どれ〜と見て。

「おや〜おや〜。」といふ聲に。節が附いて可笑いとして。姉妹が哄と笑ふ中に。自若として母親は、眞面目に希有な顔色で。

「怪しからん事だねえ。鐵の産相かえ？」

「あら御母様否。買立から私は怪い花だと

「何處か悪いのかえ？」と聞けど黙つてゐる。「なあに少し御機嫌の悪い事がありますのさ。」と母親は茶を煎れながら、お鐵を尻目に掛けて笑ふ。義理に逼つて苦笑をして、お鐵は横の方を向く。

「どうしたの？」

「へへへ」と母親はお鐵とお鐵とに當てて、意味兩用といふ笑を爲る。

お鐵も之は何か曰のありさうな。其曰は何か可笑な曰であらうと笑ひかけて。

「どうしたの？」

「お鐵はくると母の方を見向いて。」

「お母様はいらうか。」と姉を得たので再氣日頃に十倍する。

「何だね。いはうかなんて。」

「何だよ。」とお鐵に言つても可からうかと母の氣色を窺つてゐるお鐵の膝を突く。

「あのね。羞かしいから止ませう。」と問答の中へ母親が。

「先日はまた度々手紙を。」と横鎗を入れる。

「何故来られないの？」とは龍の腮の珠に手頭を觸るやうな心持。お鐵は機一發と身を硬くして、俯むいて固唾を飲む。

「用事があるなんて他人がましいぢやありませんか。」

「何處か悪いのかえ？」と聞けど黙つてゐる。「なあに少し御機嫌の悪い事がありますのさ。」と母親は茶を煎れながら、お鐵を尻目に掛けて笑ふ。義理に逼つて苦笑をして、お鐵は横の方を向く。

「どうしたの？」

「へへへ」と母親はお鐵とお鐵とに當てて、意味兩用といふ笑を爲る。

お鐵も之は何か曰のありさうな。其曰は何か可笑な曰であらうと笑ひかけて。

「どうしたの？」

「お鐵はくると母の方を見向いて。」

「お母様はいらうか。」と姉を得たので再氣日頃に十倍する。

「何だね。いはうかなんて。」

「何だよ。」とお鐵に言つても可からうかと母の氣色を窺つてゐるお鐵の膝を突く。

「あのね。羞かしいから止ませう。」と問答の中へ母親が。

「先日はまた度々手紙を。」と横鎗を入れる。

「何故来られないの？」とは龍の腮の珠に手頭を觸るやうな心持。お鐵は機一發と身を硬くして、俯むいて固唾を飲む。

「用事があるなんて他人がましいぢやありませんか。」

「實はね……。」と母親も言出しかねて。「お茶を。」とお鐵の前へ。籐編の茶托に露根蘭の金色燗燗茶碗を載せて出せば。

「おや綺麗だ事。家の茶碗？」と取擧げて眺める。

「失禮な事をおいひなさいな。此急須も宅の品でございますよ。」

と母親大自慢で。茶碗と對に買った急須を見せる。

「おや〜。」といひながら手に取つて見れば。蓋の鼻紐の蘭の花は好けれど。蓋が一枚缺けてゐるのにお鐵は噴出して、急須を下に置いて吃々と笑ふ。二人は何の事やら解らず。お鐵の獨して笑ふを呆れて見てゐる。

「おや御母様氣が着かないの？」

「何が。」といふ目前に急須を出して。

「蘭の蓋が一枚無いよ。御覽なさいな。」

どれ〜と見て。

「おや〜おや〜。」といふ聲に。節が附いて可笑いとして。姉妹が哄と笑ふ中に。自若として母親は、眞面目に希有な顔色で。

「怪しからん事だねえ。鐵の産相かえ？」

「あら御母様否。買立から私は怪い花だと

「何處か悪いのかえ？」と聞けど黙つてゐる。「なあに少し御機嫌の悪い事がありますのさ。」と母親は茶を煎れながら、お鐵を尻目に掛けて笑ふ。義理に逼つて苦笑をして、お鐵は横の方を向く。

「どうしたの？」

「へへへ」と母親はお鐵とお鐵とに當てて、意味兩用といふ笑を爲る。

お鐵も之は何か曰のありさうな。其曰は何か可笑な曰であらうと笑ひかけて。

「どうしたの？」

「お鐵はくると母の方を見向いて。」

「お母様はいらうか。」と姉を得たので再氣日頃に十倍する。

「何だね。いはうかなんて。」

「何だよ。」とお鐵に言つても可からうかと母の氣色を窺つてゐるお鐵の膝を突く。

「あのね。羞かしいから止ませう。」と問答の中へ母親が。

「先日はまた度々手紙を。」と横鎗を入れる。

「何故来られないの？」とは龍の腮の珠に手頭を觸るやうな心持。お鐵は機一發と身を硬くして、俯むいて固唾を飲む。

「用事があるなんて他人がましいぢやありませんか。」

「可憐い顔だねえ。」と極小な聲。
 「お銀は何ともいはず唯莞爾。
 「姉さん旦那様はお役所？」
 「あゝ。」と横を向いて。何だか耳の底が痒さうな面色でゐたが、傍に在る長煙管を取つて。「鐵ちゃん、煙草を吸むで鼻孔から出して見せうか。」とは餘程修行を積みて、自慢の一藝と見えたり。
 「馬鹿々々しいぢやありませんか。」
 奥方は煙を捕るやうな描頭をして煙草を捻つて、雁首に詰めると、ちと餘計の分を拂取つて。「いゝかい。」と鴉子に手裏剣といふ恰好で、すう／＼と吸ひ、ふうと見事に二條の煙を立てる。此處に到りてお銀も感に堪へたか。
 「おや／＼。」と極めて賞讃すると、圖に乗り、最上一服と取懸る時人の聲音、煙管を推除すと隠居が入つて来るので、二人共慌てゝ居住を正す。
 「お銀さん、御酒の支度でもなさらんか。」
 「母ならば一向不調法でございますが。」
 「お飲みんさんか、それなら御膳の……。」
 「あなたはお一盃召上りまし。」
 「私も一人なら預けませう。お鐵さん、ちとお出んさい。」と捨言葉で出て行く。

お銀はかねて姉に逢ひたい／＼で、胸には一杯話柄が溜つてゐる。扱逢つて見れば昔日のお銀ちゃんにあらざる湯谷の奥方は、流石に奥方の見識が附いて、自分とはまるで段の違ふ人のやうに考へられて、左右なくは撃つて莫らせず、何となく變に他人を見るやうな心地がしてならぬ。其辨妹の方では打解けて煙草の曲藝もして見せる。相互の外には他の知らぬ秘密事件に就て冗談口も吐く。お銀は依然お鐵の姉の定なれども、妹の方で氣性がして、兎角奥商に物を介する。其著しき證據は、何かにつけて遠慮をするやうな氣色が見える。どうも隔心があつて眞實の妹のやうに思はれぬ。親類の娘が遊びに来たやうな體格で、其では面白くないからと、お銀がいろ／＼手を盡して此隔を打破しに懸れど、お鐵は固く氣を緊めて、或親しい奥様のやうに遇つてゐる。想ふに、之はお鐵の氣質がちと偏人の方ゆゑ、姉だ。お銀ちゃんだなど心の中では思つても、奥様の姿が強く眼に染みて、多くの奉公人が氣味の悪いほど唯々いふやうに、其處等の戸棚を開散らして、立派な道具を惜氣もなく取出すやうに。此宏々とした家内を自在にする威權を非常に驚くと俱に、那樣威權ある人を崇ぶ念が出て。

どうも狎れにくいのである。二つには、かねがね兩親にいはれた言がある。姉も湯谷の奥様になつたからは、家に居た時分のお銀ちゃんと同じに思つて、仍なく狎々しくする事は決してならぬ。姉の顔にかゝる事だと、其も感化の力はあらうけれど、首には含羞が先に立つて、おのづから思ふ事も控目にして言はぬやうになるのを、お銀は不満に感じて興無がる。お鐵の方でも逢つて見れば想つたよりは樂みが少い。時分といふので御膳が出ると、尋常ならぬ馳走で、皿の数々所狭く、箸が戸惑して、見たばかりでも腹中が一杯になる。旋てお銀の案内で庭を巡覽り、裏木戸から畑の方へ出て座敷に還れば、食事の跡を一掃除して、人数ほど梅を敷き、前とは變つた茶道具を按排して、銀瓶がふう／＼と煙を吹いてゐる。茶菓子は切籠工の硝子の大蓋物に西洋懸物と、九谷の鉢に象牙箸を添へて色々の蒸菓子が山盛にしてある。隠居も同席で四方山の談話の内に、車の音がら。「お歸りい、それとお銀は急いで出迎に立つと、あ、然うか。」といふ聲がして、縁先に現れたのは主人の湯谷周三。小豆色の小外套を被つて、思ふ様縁の反つた茶の山高帽子を冠り、荒布革の書類入の、裂けさうに眠れたのを小脇に

もさせると小桶の水に映る影を、握めつ直めつ眺めてばかり。それほど氣になるなら戸棚へでも仕舞つておけ。」と父親に窘められても、猶且氣になつて竊に一策を案じ、戸棚に鏡を立てて置いて、隙を覗つては一寸々々見に来るといふ寸法。
 「いくら大事にしても寝たら形なしさ。」と母親の言つたのが、ぐと警策になつて寢像頗るおとなしく、常よりは凡そ二時間も蚤起をして、無性に朝飯を急ぎ立て、甚だ相済みん事だと、律義を言駈る父親を、昨夜から飛付二人隠りてやう／＼負して、病氣届で役所を休ませの、預留守居の我一人が貧乏圖だと、先から愚痴の出ぬ中此方から一合増といふ觸込に、父親は解はぬ前から口が利けず、頷いて、早御自身に徳利を提げて、裏口から買ひに内られるといふ手廻しの好き。此方も早くと、陰る、着る。車が来る。乗る。走る。
 車の上で衣紋を繕ふやら、襟を直すやら、何を急ぐのか、誰に送はれるのか、一向解らずに、母はお鐵に急かされるからなれど、お鐵は夢中で唯急ぎ散し、車に乗つてから少し落着いて考へて見ると、通魔がさしたやう。
 無紋袴古の二人乗。車夫は中屈の草鞋ばきで、

白地に竹に虎といふ藏膝では、玄關まで曳込ませるには大に憚りあり。と角で下りて裾を叩き、帯を直して直と玄關から懸れば、裾の無い袴を穿きて、右の硝子に裂の入つた眼鏡を懸けた書生が取次に出て、變に訛のある聲をして。「何方から。」といひながら蜘蛛の如く廻ると、小籠に一團浮いてゐた雲脂が、ちら／＼肩へ降りる既望の、氣味の悪さにお鐵はぞつとして、姉さんは疝性の癖に、よくまあ彼を何ともいはない、と入らぬお世話を氣にしてゐる。
 取次が引込むとお銀が、家にゐた時分は命から二番目であつた他所の縁に、今度出来たらしい黒縹子と更紗縮緬の晝夜帯をしめて、生憎氣な東裳に結つて御座飾氣無しといふ頭で、肉白粉を傳つて脂粉を一寸點して、絆な絆な！父親が見たら苦い顔をしさうな姿で出て来て。「おや、さあ此方へ、よく早くねえ。」といひながら案内する後に跟て行けば、四疊の玄關の次が十疊の應接間。食べたいほど綺麗な天鵝絨敷を一面に敷詰め、真中に淺黄地に花鳥の縹模様のある海羅紗の卓子被をした圓卓を据えて、一間の板床に古薩摩の唐冠の香爐、幅は一蝶が浮世人物の二幅對、床脇が寢覺棚、袋棚の上には古銅の楊柳觀音、邊棚には古代時畫の手文

庫、並べて印譜二帙、白磁の風壺には、庭のを奥様が入れたとも想はる。山茶花が一輪、此下に古竹提梁式の菓盆に佛手柑を盛つて、銀は大小二面を相對に懸けて、一面は東海自筆の七神、一面は某大臣の揮毫なり。此大奥の間の正面、鋪込袋棚の下に西洋式の書棚耶蘇の厨子のごとく、此中の書籍が凡そ千圓と聞いて御母親吃驚。障に茶櫃の大机を据え、其前に縮緬の座蒲團、障に手爐、茶道具、煙草盆などよろしく、總て主人居間の體、隠居所の暖の障にて幕開くといふ、お鐵は始終信夫が吉原に尋ねて来たといふ見得で唯きよろ／＼、母親はまご／＼、旋て奥方の居間に通れば、下女が黄八丈の黄を持つて来る。手爐が出る。茶が出て少時すると、隠居は羽織を着換へて挨拶に出て来る。「此處は汚うござる。彼方へ。」と切に勧められて母親は立上る。「貴方も。」といはれて、お鐵は何も言はずに會釋ばかりしてゐると。「これは宜しうござりますよ。」と澤山御馳走しておもらひんさい。ははは。」と男のやうな高笑をして。「さあ、あんた。」と母親を伴れて出て行く後影を、お鐵は眺と見送つて。

して。一寸會釋をして次の間に入り。頭髮を
 撫てながら直に出て来る。
 幾談のあつた時。(あの人がい)と頭を擧め
 たお鐵も。つらく視るのに。我姉の夫と思ふ所
 爲か。容貌は悪い。悪いけれども氣障な處が無
 くて。いつそ武骨らしい處が却つて好い。様子
 も言話も顔に似ず柔和で。氣も善さうな。か
 うして姉様と並べて見ると。松の樹に藤が咲い
 たやう。容色の揃はない。夫は照應が悪いとば
 かり想つてゐたが。決してさういふ事はない。
 男の異に生白いのと。女の美しいのと伴立つて
 行くのは。信に見ば好くはないものだが。此人
 と姉さんは信に照應が好いよ。眞箇に好いよ
 と感心した。

三十分許愛想をして。此から宴會があるか
 らと。挨拶をして又出て行く。夕飯を食べてから
 飯れと。陰にお鐵が留める。陽には隠居も。此
 方の暇乞の挨拶を。一向取合はずにやい／＼と
 物留はすれど。今日散財を懸けるほど。お鐵が
 姉に對して其丈心勞をしなければならず。又
 實家が良くないだけに口善悪ない奉公人に陰言
 を利かれるのも辛し。何の彼のと母親は母親だ
 けに氣を働かせ。若いものと思ひつかぬ。稀密
 な思慮を持つて無理に飯となつて玄關に出

廉立つて遊山臭くなるから。色々有めては。
 三度二度は留守番をさせる。それ又思慮をい
 ふ。御母様は一人でお樂み。つまらないのは御
 父様と私ばかり。私が一所ではどうせお邪魔
 になりませうからと泣顔をするのを。父親が見
 兼ねて。行くものなら伴れて行くと。家では責
 められる。彼方では。さしたる用のあるでもな
 いのに。何のかのといつて好く来る親だ。とま
 づ隠居が顔を擧める。といふほど實際度々出入
 るではなけれど。姑は姑根性で。生家の親の
 餘り來過ぎるのは。畢竟嫁の心の鈍る原因で。
 何時までも生の親を恃む氣が抜けない。自然姑
 が鹿末になりたがると。異に僻見を出す。母親
 からは之を僻見といへど。萬更僻見とも謂はれ
 るのである。

れば。達者さうな車夫が綺麗な二人乗を格子外
 まで附けて待つてゐる。菓子やら残りの料理や
 らを。蓋の持上るほど填めた二重箱の包を。
 下女が先に持つて出て。滴れ物だからと車夫に
 よろしく頼む。
 之に乗れば。往はよい／＼還は早い。日没
 前に家に着くと。洋燈掃除で火屋を壊して。指
 を切つて狼狽してゐた父親が。やれ待兼ねたと
 飛んで出る。

五

ふ理もなしと目を限りて。お鐵が來て見れば氣
 は着く。優しくはする。當人に言分は少しも無け
 れど。生家の家筋の卑いのが。頗る御意に召さず
 して。先方は磁石で此方が鐵。いづれ吸はるゝ
 に極つてゐると。其ばかりを苦にして。私の亡
 後は彼の東京辯のちやほやと世辭の好い母親
 が這入こむでどういふ事をするか知れたもので
 ないと思つてゐる。矢先へ。此頃はもう其下拵
 か。手廻しの好い。懐儀ほど出入を爲始めたが。
 會計はお鐵の預りゆゑ。どんな幻術も自由自在
 なれば。其處を見込むで強請に來るのかも知れ
 ぬ。事情をいつて泣付かれて見れば。親だもの。
 苦しい思をして貢ぎたいは人情。まして財布
 尻を握つてゐて見れば。掴出して扶へ捻込ませ
 るは知れた事。十が九まで其に相違はない。
 金銭の事は預置き。來る度に何か知らぬ包を
 提げて飯のの。お増に聞いて見たれば。買つ
 て置いた魚だとか。肉だとか。到來の菓子折だ
 とか。時によれば澤庵のやうなものまで。新漬
 だの。味が好いといつて持せて飯すさうだ。
 其奉行はお光が鼻薬を買つて忠義立に勤める
 といふ事まで知つてゐる。
 其だから言はぬ事ではないに。周三もまた周
 三だ。美貌望みで娶つたとはいひながら。あれ

さうなもの。同じ胎の子ではないかと少し
 妬ける氣味なり。母親の曰く。其は同じ子だも
 のを。彼が可愛くて此が憎いといふ理はさらさ
 らなけれど。お前は私の手許に居る。お鐵は遠
 く離れてゐればこそ。雨に風に寒じられる。其
 はお前。親の情といふものだ。其證據には二
 人一所にゐた頃には。少しでも分福をした覺は
 無い。一個の物を尺度を當てて二個に折つて。
 分けて遣るほどにしてゐたではないか。と切に
 分福をいへば。それでも内々姉様の方を。餘
 計に可愛がつてゐた證據が。又私の方にもあ
 る。其は謂はれないけれども。未だ揚る。
 恠る次第なれば。儘になる事なら毎日でも母
 親はお鐵の家に行つてゐたい。行つてどうする
 といふ事もない。會つてかうといふ話説のある
 ではないけれど。唯行きたい。合ひたいといふ。
 其處が親の情かも知れず。矢も楯も耐らぬほど
 行きたくても。今は我子ではない。誰谷の奥方。
 其處には主人もあれば親もある。我出店でも見
 廻るやうに。繁々は行きかねる。行きかねるほ
 ど意固持に念は増す。
 そこで。用も無いに繁々出入は不良と知りつ
 つ。何とか用を拵へては出懸ける。お鐵も一所
 に其都度伴れたい事は山々なれど。さうしては

お銀を見れば、いつもならば火鉢の前に天鵝絨の茵を鋪き、隠居所へ上げる茶でも淹れてゐる傍に、小説本の讀了が伏せてあるといふ筋なるに、今日は臺所に自身出馬とありて、午飯の茶の指揮をしてゐる。

母親は入つて来たは来たれど、變つた様子に氣を奪れて、ちと足が進みかねるといふ狀、婢等は「お入來なさいまし。」と禮を外しながらばたばた下坐をする。

「もうお支度ですか。」と愛想を興れてから、簡略に親子の挨拶がある。

此時お銀は餘り嬉しくない顔をする。「光や、之が煮えたら直にお魚を架けておくれ。」と母を伴れて中の間に入り。

「此頃はちつと御機嫌が悪いのだから。」と耳語をする。

「然うかい。」極小さな聲に極力を籠めて、母親は直と居間に通ると、隠居は一目見て、(また来た。)といはぬばかりの顔色で、變り度々来るのを變に想つて、隠居の

機嫌でも悪くなければいいがと、案じてゐる處へうんと一睨、ぐつと肝頭に徹したのである。然し自身が來てから急に不機嫌といふのではなし、むか腹立と兼て聞てゐれば、何か些事な事をいつて見れど、薬箱に物置を懸けたほども利かず。「然やうでござるかな。」など、張合のない勝答ばかりして寄せ着けず、思ふに婆めと勃然とはしたれど、可愛娘の姑、姑の不機嫌の捨所は嫁の身一つ、お銀の難儀になる事なればと、目を取つて下から出れば増長して、遂には新聞を取つて讀始める。さほど對手にするが否なら、隠居所へ引籠むだが好さうなもの、を、どうして此處が一寸でも動けるものかと、は隠居の腹なるべし。

かくまでにしても、隠居に見放された母親は、此上の手段は無しと諦めたが、お銀を對手にして談話を始め、例の用無しゆる談話らしい談話は出來ず、少しは話の無いではなけれど、其は隠居を憚る事のみなれば、母親も、感して此處少時黙然、隠居は澄して新聞を讀む。

お銀は灰に○や□や十文字を畫いたり消したり、母親は鐵瓶の蓋を、食指で摩でながら、

「四五日内にしやうかとも思つてゐるのだけれど、其前に少しお前に相談をしたい事があつてね。」

と言末了とわざと忸怩する。忸怩などはせずとも、事なれど、これからは他聞を憚る秘中の秘密、隠居は其と氣を利かして、大方遠慮をするであらうと思の外、猶且悠然自若として新紙を眺めてゐる。(讀むでゐるにあらず)

母親は此業突張といはぬばかりの悔しさうな目をして、隠居の様子を睨と視てゐる。

「さうして先方の身分は？」

お銀は此語を眞に受けて、いもゐるやうに、突込むで来るので、母親は大きに辟易して持餘す氣味あれども、目顔で知らせる事ならず、爲う事なしに落着き拂つて。

「父親の上役の方の周旋で、お役所は違ふけれども、やっぱり勤吏さ。」

「それはまあ、大相好いぢやありませんか。」

「まだ最う一つあるのだよ。」

「外に。」

「外にさ、其方は會社へ勤める人だが、之も相應の口さ、それで……。」

と娘ならば墨を拂るか、の、字を書くかといふ處なれど、母様なれば雁首の煙脂を火鉢で

湯氣の立つのを睨と見てゐたが。「それからね、お銀の縁談だがね。」と漸く一條の血路を開く。お銀の縁談といつても極秘糊した事で、未だ相談に來るほど出來たのではなけれど、隠居の手前子供ではなし、萬更用無しで遊びに來たと想はれるのが苦しさに、不圖考へて、さも用あり氣に慫言つて見たのである。

お銀は母親の切々来るのを、隠居が快く念はぬとは薄々知つたゆゑ、今日も亦來たのを南無三首尾惡し。どうか隠居の前へ取柄はなればと心を痛めてゐる處へ、妹の縁談とは成程親の來るのも尤な用事、何の用で來た、來ずとも、の事をといふ程の隠居へ是見よがしに。

「おや、お銀の……而して大概極たんですか。」

「極つたといふほどでもないけれども、まあ良きうな話だから、お前にも急に行つて相談して來いってね、また御父様が彼性急だものだから、何でもかでも今日行つて、是非話をして來いって、突出されるやうにして來ましたのさ。」

隠居は何も聞かぬ顔で、頻に新聞を讀むではゐるが、其談話をすると引耳で、其方にばかり氣を取られてゐるゆゑ、目はお留守になつて、同處を繰返して讀むでゐる。

「さうでしたか、見合は？」

「これ誰か、増！ 光！」

女が駈着けて、おや／＼と帯に圍肩、水之雜巾、拭いたり絞いたり、隠居も耐らず陣を退いて本城に遁進む。

二人は庭から裏へ出ながら、こそ／＼話。「どういふものだから此頃は、大變機嫌が悪いのだから、當分御母様も來ない方が可いよ。」

「何で那樣に機嫌が悪いのだえ？」

「何だか解らないけれども、何か且那に言はれたらしいの。」

「お前にも辛く抵るかい。」

「何、別に、辛く抵つたところが、母は、誰が來てもあ、いふ佛頂な顔をしてゐるのだから、御母様も來れば側杖を食ふから、當分來ない方が可いよ。」

「あ、もう懲々した、來やしないよ、ちや別に用も無いのだから私は歸るよ。」

歸途に母親獨以爲く。隠居の今日の不機嫌はどういふ理由であらう。銀が何か氣に入らぬ事をしたのか知らぬ。さうも想ふけれど。聞いて見れば旦那に何かいはれたらしいといふから。さうかも知れぬ。あゝいか風の姑だから。親だよ。大事な御母様だよ風を吹かし過ぎたので。旦那も勃然として何か言ひなすつたのが氣に障つて。一同に八當りのお相伴をさせるのかも知れぬ。一同のお相伴は兎も角も。私にまで當る事は無からう。私を何だと思ふのだ。馬鹿々々しい。私は銀の親ぢやないか。銀の親なら周三様にも親だ。して見れば隠居とは親と親同士で同等の位ぢやないか。それでも娘が世話になると思ふから。一段下に出て御隠居様御隠居様といつてやれば好氣になつて。他を目下に見て大きな顔をしてゐる。何の事だ！娘が可なりからこ腰を早くして。月に一度でも行つてやるのだ。何のあの佛頂面に用もある事か。もうくもくもうくもく用があらうが。何であらうが。行つてやる事ぢやない。馬鹿馬鹿しい。

「何だ、どうしたの？」と臺所から覗いて。「あら落ちてゐたの？」とふふふと笑ふ。「笑ひ事ぢやないよ。お、冷い。ほう冷い。」と面を擽めながら幾度も身軀ひをして着て仕舞ふ。火鉢の側で先服。其内にお鐵は効々しく膝立をして。母親の前に据ゑて。服捨て、ある衣類を熱みに懸る。「御母様、姉様は何をしてゐる？」と飯に茶をかける。「別に何もしてゐなかつた。」と飯に茶をかける。「何とかいひましたか。」

「魚屋がね。大變味美から味噌煮にッてね。鰯を置いて行つたから味噌煮にしたよ。本當に旨い鰯。支度をしやうか。」
「あゝ早く爲ておくれ。」
「お、早い！といひながら帯を解いて。暖めである不躰着を取らうとして火鉢を暖けると。櫛が焦げて黄臭いほどの火氣。」
「まあ此は！」と慌て、火箸を取つて。おやおや〜と埋けながら。
「お前まあ此火はどうしたんだねえ。櫛が焦げやしないかね。」と衣類を探すと櫛の上には無くて、落ちて壁の方に固つてゐる。
「何だ、ねえ。鐵」と不承々に拾ひ上げると。「何。どうしたの？」と臺所から覗いて。「あら落ちてゐたの？」とふふふと笑ふ。「笑ひ事ぢやないよ。お、冷い。ほう冷い。」と面を擽めながら幾度も身軀ひをして着て仕舞ふ。火鉢の側で先服。其内にお鐵は効々しく膝立をして。母親の前に据ゑて。服捨て、ある衣類を熱みに懸る。「御母様、姉様は何をしてゐる？」と飯に茶をかける。「別に何もしてゐなかつた。」と飯に茶をかける。「何とかいひましたか。」

「別にも何もいひはしなかつた。」と手を停めて母親の顔を見込む。
「どんな様子だつたか些と話をなさいなね。」
「別に話をするほどの事はなかつたよ。」と鰯の骨附の肉を一口入れて。菜漬を挿むで又一口入れて。其菜を茶碗の中の茶でさら〜と濯いで。木地漆の二箇所ほど割けた箸箱にしやんと納めて。櫛の小楊枝を抜取つて。大層おいしい鰯だつた。と膳を少し前へ押遣り。物思はしい顔をして尚を擽つてゐる。
お鐵は此様を見て合點がゆかず。
「御母様何だか鬱いでゐるのねえ。いつも姉様の處から歸つて来ると御機嫌が良いのに。どうしたの？」
之を聞くと母親は憤然を噴めてゐながら。一寸苦笑をしたばかり。直に又眞面目に復つて思案してゐる中に。啣へてゐた楊枝をぶつたり前へで咬折る。
どうも異しな様子を氣にしてお鐵が又訊ねる。
「どうぞしたの？ 御母様。」
「なあに。」と素氣の無い聲で拂はれて。お鐵は希有な眼色で母親の様子を測量しては見

「さう。なぜ食べて来なかつたの。」
「今日はそれ所ぢやなかつたよ。あゝお腹が空いた。お前も済むだのかい。」
「今し方。一人法師でおいしくなかつたよ。」
「何かお茶を拵へて？」

「おや〜行過ぎた。車やさん二軒後の家だよ。」
「あら御母様！」とお鐵が櫛子を取つて待つと。氣の無い聲で。
「今歸つたよ。」と毛織細工のシヤールを渡す。お鐵は所有品なるを。今日は寒いからとて時借をしたものを知るべし。
「御母様、午飯は？」
「未さ。」と五音の調子は頗る不平は響びてゐる。
「さう。なぜ食べて来なかつたの。」
「今日はそれ所ぢやなかつたよ。あゝお腹が空いた。お前も済むだのかい。」
「今し方。一人法師でおいしくなかつたよ。」
「何かお茶を拵へて？」

「何だねえ。」と母親は叱るやうな目で見る。どんな目をしてもお鐵は一向平氣で、(いけませんよ)を又繰り返して。

「これはね。これは。ホワ：ホワア：ホワルト。薔薇といふ舶來の香水の匂で。姉妹が手巾に布けるのを持つてるのをちやあんと知つてゐますよ。」

四相を情る重忠が。といふ鹽梅で。屹と見えをするほどお鐵の仕済し顔。御母様きつくり。殆ど已むことを得ず。

「さうかねえ。」と苦笑。

「でせう。」とお鐵は意有るがごとく首を傾けて。母親の顔を覗きこむ。

「奢らうよ。」

「何を。御母様。」

「何でも好いものを。」

「何にしませうね。」

お鐵にせうか。お蕎麥にせうか。いや／＼直と飛んでお鐵にせうか。其が一番好いだけけれど。餘り増長つて熱を吹くと。叱られるに違ひない。それぢやいっそ。鰻に似てゐる骨炭鰻にせうか。お刺身も好いし。蒲鉾を買つて附焼にするのも随分旨し。

母親は舌の痛くなるのも忘れて思案煙草を吃

しながら。切に今朝の無念を思返してゐる。お鐵は一思に飯と決めて言出して見やうか。「何だね。そんな大相な事を。」と遣られはしまいかと暫く躊躇ひて。任よと遂に切出す。「御母様。」とまづ呼んで見たれど一向返事無し。

「御母様。」と最一度。それでも返事無し。「一寸。御母様。御母様でば。」三度目は一寸といふ冠と。てばといふ香付で。餘程念入に呼んだれば。通じた代りに。「何だね。」と思つたより手嚴しい挨拶。其聲斜ならず不機嫌なり。

お鐵は慥然として黙然。右の食指で左の掌に。鰻のうの字を續け様に幾許も畫いた跡を摩りながら。便返つて母の様子を視てゐたが。旋て火鉢の傍へ掠寄つて。また「御母様。」と極小さな聲をして小當りに當つて見ると。従前の通り隔々として深く思案に暮れてゐる。火鉢の縁に持せて明へてゐる煙管を見ると。雁首は疾に寂になつてゐるのを夢中ですば／＼やつてゐる。お鐵はそつと煙草を捲つて填めても知らず。火を挟むで點けたのも知らず。例の通りすばすばとやる。卒に來た煙を吸過ぎて。「えへへへ。あは／＼。ほ／＼。ほ／＼。ほ／＼。」と猶且煙草の事は知「何を爲したんだねえ。」と猶且煙草の事は知

好くしたもので買手もない。

「探偵といふものは。これほどに爲なければならぬものであるから。無能無効な猫の扱毛のやうなものかと思へば。寡夫に姐が生くといつて。一家内には米鹽薪炭の筆頭たる大事の品物で。家内の女王であるから内君といひ。内實といふから實でもある。さほど有難くもまた増き品でありながら。給金を貰つた例もなく。褒美を戴いた話も聞かぬ。而して居候のごとき。懲役のごとき。境界に墮されて。花散りて空しく梅干となり。嫁古うして姑となる頃。やうやう樂をするのであらうが。其頃にはもう戒名が出来てゐる。

右の通り嫁の身は夫一人で十分で。澤山で。精一杯で。之でも如何かすると。揮舞しきれない。いかに人間一匹の始末をするのであるから。此取扱は随分至難いには相違ないけれども。先方も一人。此方も一人。ところで先方は夫で此方は女房である。天の配難妙なる哉は此處等であるか。男女の間には愛情といふものが天然と出る仕掛になつてゐて。此天産物の脂が両性の間を和けて。礼儀を過めること諸合の妙薬に出来て。歌にも香ひ離れぬ鶯の。詩曰死爲同穴。まづ恧ふ格に行く譯のものにな

「何だねえ。」と母親は叱るやうな目で見る。どんな目をしてもお鐵は一向平氣で、(いけませんよ)を又繰り返して。

「これはね。これは。ホワ：ホワア：ホワルト。薔薇といふ舶來の香水の匂で。姉妹が手巾に布けるのを持つてるのをちやあんと知つてゐますよ。」

四相を情る重忠が。といふ鹽梅で。屹と見えをするほどお鐵の仕済し顔。御母様きつくり。殆ど已むことを得ず。

「さうかねえ。」と苦笑。

「でせう。」とお鐵は意有るがごとく首を傾けて。母親の顔を覗きこむ。

「奢らうよ。」

「何を。御母様。」

「何でも好いものを。」

「何にしませうね。」

お鐵にせうか。お蕎麥にせうか。いや／＼直と飛んでお鐵にせうか。其が一番好いだけけれど。餘り増長つて熱を吹くと。叱られるに違ひない。それぢやいっそ。鰻に似てゐる骨炭鰻にせうか。お刺身も好いし。蒲鉾を買つて附焼にするのも随分旨し。

母親は舌の痛くなるのも忘れて思案煙草を吃

しながら。切に今朝の無念を思返してゐる。お鐵は一思に飯と決めて言出して見やうか。「何だね。そんな大相な事を。」と遣られはしまいかと暫く躊躇ひて。任よと遂に切出す。「御母様。」とまづ呼んで見たれど一向返事無し。

「御母様。」と最一度。それでも返事無し。「一寸。御母様。御母様でば。」三度目は一寸といふ冠と。てばといふ香付で。餘程念入に呼んだれば。通じた代りに。「何だね。」と思つたより手嚴しい挨拶。其聲斜ならず不機嫌なり。

お鐵は慥然として黙然。右の食指で左の掌に。鰻のうの字を續け様に幾許も畫いた跡を摩りながら。便返つて母の様子を視てゐたが。旋て火鉢の傍へ掠寄つて。また「御母様。」と極小さな聲をして小當りに當つて見ると。従前の通り隔々として深く思案に暮れてゐる。火鉢の縁に持せて明へてゐる煙管を見ると。雁首は疾に寂になつてゐるのを夢中ですば／＼やつてゐる。お鐵はそつと煙草を捲つて填めても知らず。火を挟むで點けたのも知らず。例の通りすばすばとやる。卒に來た煙を吸過ぎて。「えへへへ。あは／＼。ほ／＼。ほ／＼。ほ／＼。」と猶且煙草の事は知「何を爲したんだねえ。」と猶且煙草の事は知

好くしたもので買手もない。

「探偵といふものは。これほどに爲なければならぬものであるから。無能無効な猫の扱毛のやうなものかと思へば。寡夫に姐が生くといつて。一家内には米鹽薪炭の筆頭たる大事の品物で。家内の女王であるから内君といひ。内實といふから實でもある。さほど有難くもまた増き品でありながら。給金を貰つた例もなく。褒美を戴いた話も聞かぬ。而して居候のごとき。懲役のごとき。境界に墮されて。花散りて空しく梅干となり。嫁古うして姑となる頃。やうやう樂をするのであらうが。其頃にはもう戒名が出来てゐる。

右の通り嫁の身は夫一人で十分で。澤山で。精一杯で。之でも如何かすると。揮舞しきれない。いかに人間一匹の始末をするのであるから。此取扱は随分至難いには相違ないけれども。先方も一人。此方も一人。ところで先方は夫で此方は女房である。天の配難妙なる哉は此處等であるか。男女の間には愛情といふものが天然と出る仕掛になつてゐて。此天産物の脂が両性の間を和けて。礼儀を過めること諸合の妙薬に出来て。歌にも香ひ離れぬ鶯の。詩曰死爲同穴。まづ恧ふ格に行く譯のものにな

つてゐる。因て此愛情といふ和合劑の脂が。始は水のごとく。後にはとろ／＼になるほど多量に分泌されると。夫婦二體が粘着して。其から其上に脂が凝まつて粉衣を被けたやうになると。どれが夫の鼻だか。どれが女房の口だか分らぬやうになつてしまふ。此時を二身同體といつて。彼も無く我も無く。夫の心は妻の心。今日は花見に行かうか。向島へね。其が可。お酒はおよしなさい。うゝよさう。と云ふ場合には琴瑟和合の調々。雌鳩のといふ語などは已に迂かしい。

百人が百人行はせぬけれど。悠うもなすべき特効のある脂であるから。嫁が夫に事へるのは。主人に事へるやうなものではない。よし甚だものであつたに似た所が。女難非獨生であれば。頼む喬木に頼むで。其恵を受けだけの義理はせずには置かれまい。夫一式の世話に女房の役目である。それくらゐは固より譽情の前で嫁にゆく。

然し。また攻撃するやうで恐入るが。姑なるものは。實に贅肉さ。贅肉といふは嫁たるものゝ味方をしていつた言で。道をいへば夫の母であるから。則ち是我母で。贅肉とは勿体ない。大した尊像ではあるが。彼と我との間には愛

情の脂(夫婦の和合劑)といふ代物が湧かないから。何處までも心は他人で。此他人の氣を抜くには。例の脂より外に藥がないのだから爲様がない。で。他人といふものは。離れてゐると大相合が好く。あの人はと慕はしいのは。舞臺の上で役者を見るときと同じで。近いて見ると大星力彌に敵があつたり。中將姫に青龍があつたりする殺風景は免れない。紅點が見える。襷袢が出る。口論もすれば都合ふやうな事にも及ぶ。其中にも女は。豚肉に盡のゐることく。僻見と嫉妬と意地悪の三毒分を含む有機物なれば。女の字を二つ書けば(あらそふ)。三つは誰も知る(かしまし)で。途上に娘の行合ふのを見てゐると。まづ相對してゐる内は。お姫様が花道に出たやうな状で。擦違ふかと思ふと。双方の首が同時に捻れて。鬚の毛筋が通つてゐないとか。木履が何寸減つてゐるとか。精細に觀察して。やうやく得心して別れる。

此執念の可恐しきは。女難といつて男の相に表れるほどの邪氣を持つたものである。これほどの可恐しいものが。此度は不思議な御縁といひながら。一家内に落合ふのであるから。嫁姑の間の四合行かぬに論は無といふべし。これも同じの權を持つたことなら。家内は

此大姑の上に小姑といふ小附のある重荷を背負はされる御方がある。此小姑が小敵と見て侮るべからずで。姑の隠目附を勤めて。嫁の舉動は細り洩さず密告する。何日の何時頃お客へ出す茶菓子の何を振むで。二口半に食べた事から。旦那に強語つて蒔締の櫛を買つてもらつて。用算筒の何番目の抽斗の何邊に入れてある。嘘と思ふなら持つて来て見せませうかまで附言する。此中に種々潤色をして。姑が氣を悪くするやうに話すこと尤も妙なり。

之が又どういふ理であるかといふに。例の豚肉塊に外ならずで。この嫁が幅をする様に見えて。おのれはいは厄介物。と異う邪魔にするのが氣色に障るといふ僻見から面が憎くなつて。返報がしたいにも力の及ばぬ爲に。虎の威を假りやうと御注進をやる。此注進が私怨を帯びてすることゆゑ。姑が自身に見たよりは一層利が強い。で。單嫁の非を計くばかりでなく。私が恚された那された。と陰ではどのやうにか小突廻される事を情なきやうに哀訴するから。親子の情で之が又一層利が強い。薪に油を沃がれては一大事と思ふから。目下ながらも嫁は待遇を善くして。無理も聞き。我儘も通してやれば。其では此千疋鬼が満足せずには又其

修羅の巷。各の得手々で。舌戦もあらう。粗打もあらう。目覺しくも又淺ましいであらうけれど。それ姑は母といふ御旗を翻して控へたるがゆゑに。嫁は百歩を譲り。三舍を避けるは。敢て其威を懼るゝばかりではない。南方深く不毛の地に入り。孤軍糧竭きて夜胡笳の聲を聞く有様であるから。心細いこと夥しい。援兵と頼む夫は。敵が母者人の御事であれば。弓を彎くことが協はぬ。それでは更に後楯にはならぬ。こゝが嫁の窘む所。姑の憚る所。で。今は心安しと鎗機を造りて。無二無三に突進する。嫁の方は何時も敗走して。小座敷の隅に隠れて。しく／＼泣き入に事が極つてゐる。

といつて。姑が何處のも無理といふのではなく。嫁にも落度はあらう。あらうから姑の氣にも入らぬといふ話になるのだが。我子の非は見えず。他の子の徳は見えぬ親心で。嫁のわづかの過失は。精細に眼に入るところから。自然疎ましくもなり。憎くもなる。魚想があつたから言つてやらうと思つても。他人だから先と控へる。其控へる勘定が段々溜つて来る。胸がむか／＼爲だす。いゝ／＼爲る事が痛に障る。不和の基となる。

其處までに到つては回復のなるものでないか

八

摺愛に哀れを止めたのは。誰か夫人銀子で。彼は尋常ならぬ(むづかしや)の姑を持つてゐるが。姑は然したる事もなかつたのが。月日の経つほど消が割けて。おひ／＼に木地が見はれて来る。此頃の様子では。素人如の胡瓜を見るやうに。姑の心が變に曲り出して。餘程持餘した。之さへあるのに。鬼千疋の小姑が突然出現した。小姑のあることは媒酌の話には無かつたものを。と今更いつた所で爲方がない。

其小姑といふは周三の妹で。お激といつて。熊本鎮臺の工兵中尉の城井泰造といふものゝ家内である。なるほど媒酌も話さなかつた理。白歯で家に居るではなし。餘所へ縁附いてゐた所で。東京にゐるのではなし。遠い熊本に世帯を持つてゐるのであるから。此鬼とお銀との關係は。娑婆の人が牛頭馬頭を地獄變相の圖で見

くらゐのものであらう。これならば阿貴に遇ふ
理がないから。有つても無くても同じ事である。
ところが。此度城井中尉は東京詰になつて突
然出京すると。旅装束で直入に渋谷へ飛込む
で。居宅の見當るまでと桐の繩を解いて。何年
ぶりといふ親子の對面であるから。三日でも四
日でも車轡を炙るやうに。隠居とお滋の物語は
絶えぬ。絶えた所で物見遊山となる。毎日のや
うに親子連で朝から出懸けて。今日は歌舞伎座。
明日は上野。浅草の凌雲閣。玉乗。花は無くとも
久しぶりでも向島。何のかのと七日ばかりも
保養を爲續ける。家の人でも今は城井といふも
のゝ表で。ともかくもお客であつて見れば。總
菜で御膳といふ譯にも行かぬ。まして近頃は隠
居の機嫌が好くない那裏で。此お滋がお氣に入
と來てゐるのであるから。どうでも善くしなけ
ればいよく。姑の感情を害する。其報は顔面お
銀の眞向へ崇つて來る。

困でお銀が手の懸ることは普通でない。女の
癖に酒を飲む。隠居も飲む。城井も飲む。夫は
勿論飲む。毎晩夕方から四人一座で始めて。十
二時近くまでちびるから一升餘も入る。それく
らゐる事は我慢をしても。お銀を始として婢等
から書生に至るまで。之が爲に奔走させられた
無償しくつて。貪婪が多いよ。と婢等は聞
えよがしに陰言をいふ。之が耳に入つたら悉皆
自分の咎になること。とお銀は獨り心を傷め
て。止めても一向肯かずに。尻の長いのと。手
の長いのと舌の長いのが。癡人の中の一癖厄介
物だ。と之に手前節を付けて。車夫は門内の紳
袴をしたがら鼻叫で諷する。

も。同ずるものがないから。溢々出たのが一月
と二日目！
それも距れて家でも持つことか。人力車なら
三錢といふ距離に構へて。隔日にも往來をしや
うといふ。閑散の身の隠居は。當座朝夕にち
よこちよこと會ひに行く。其度に。お銀様。何か
到來の菓子をごさう。一つ下され。と抱へ出
す。鶏子か。鯉節の折はごさらんかな。と提げ
て行く。其も種が盡きると。午飯の總菜を重箱
に詰めさして持つて行つて。自分も先方で食事
をする。新漬を運ぶ。蘆を持出す。種々蠶食し
て了ふと。其後は何でも手當り次第。干鰯でも。
切干でも。高野豆腐でも。青豆でも。菜になりさ
うなもの。お滋の世帯の足になりさうな。と見
た物は精々と運ぶ。これしきの事はお銀も何と
も念はぬ。然し女といふものは。心の細な。氣
の小さいものであるから。道徳ことでも。快
ではないが。高の知れた事と一度も可厭な顔
を見せず。唯々と言ふなり次第にしてゐるが。外
に可厭な事は。なにほど良い嫁でも。中位の我娘
のやうには行かぬ。他人であつて見れば嫁でも
遠慮がある。氣兼ねがある。又氣兼ね遠慮もあつ
たで好いもの。これを取外された日には嫁の骨
が粉になる。それが。怎う娘と行通をする。

い顔をして。猫撫摩を出して。御母様どうだの。
お滋様江つたのと。懐かしい言をいふ口と腹と
は反對で。え、小瘡に降る。の念があるから。
お銀のする事爲す事其裏ばかり見えて。なるほ
ど御母様のおつしやる通りです。一然うちやら
うとも。と合體して。變に突應る舉動をする。
味方が一人旅来ただけ。隠居の偏倚が一倍劇く
なつて。お銀は手も足も出なくなる。
中尉も着京して精々一週間も休むだら。出
勤せねばならぬ身であるから。其内に借家を探
して。一日も早く引移るが至當であるのに。二
週間経つても二十日経つても。未だどうも思は
しい家がないといつて此家から出動してゐる。
貸家一目といふものさへ出来てゐる。此東京
に。どれほどの家を借りるのか知れぬが。中
尉殿の住はう家なら四五圓の店賃が精々であら
う。そんな家は腐るほどあるのに。あの(長)は
何處を探してゐるのか知らぬ。四五圓で
土蔵附の邸仕立の家などは。花のお江戸には
ございませぬ。熊本の山の中とは土の直段が
少々違ひます。一月でも店賃と米代を底はうと
思つて。無いといつて御厄介になつてゐるや
がる。一鉢お國ものといふと根性が汚いつ

も。同ずるものがないから。溢々出たのが一月
と二日目！
それも距れて家でも持つことか。人力車なら
三錢といふ距離に構へて。隔日にも往來をしや
うといふ。閑散の身の隠居は。當座朝夕にち
よこちよこと會ひに行く。其度に。お銀様。何か
到來の菓子をごさう。一つ下され。と抱へ出
す。鶏子か。鯉節の折はごさらんかな。と提げ
て行く。其も種が盡きると。午飯の總菜を重箱
に詰めさして持つて行つて。自分も先方で食事
をする。新漬を運ぶ。蘆を持出す。種々蠶食し
て了ふと。其後は何でも手當り次第。干鰯でも。
切干でも。高野豆腐でも。青豆でも。菜になりさ
うなもの。お滋の世帯の足になりさうな。と見
た物は精々と運ぶ。これしきの事はお銀も何と
も念はぬ。然し女といふものは。心の細な。氣
の小さいものであるから。道徳ことでも。快
ではないが。高の知れた事と一度も可厭な顔
を見せず。唯々と言ふなり次第にしてゐるが。外
に可厭な事は。なにほど良い嫁でも。中位の我娘
のやうには行かぬ。他人であつて見れば嫁でも
遠慮がある。氣兼ねがある。又氣兼ね遠慮もあつ
たで好いもの。これを取外された日には嫁の骨
が粉になる。それが。怎う娘と行通をする。

「どうぞ貴方からお母様へ然うおつしやつて下さいまし。私からは何だか申悪くて……」
 いかにもと思つたか。周三は頷いて、酒が済むと隠居所へ話に出懸けた。噫、またこれから一層御母様の目が光るであらう。お母様からは憎まれるであらう。ひよんな事が出来たと知り、を備めてゐたが、果して翌朝の隠居所の顔色と云つたら、何ともかとも謂はうやうが無い。
 鋭く睨めたり、慥食な聲をするのは、蓋し未だ不平の十分ならざる時の事だ。此一段上を行つたら憤死するかと思ふばかりの險境で、眼みもせねば顔も見ない。聲も出さない。唯是死灰のごとく、枯木のごとく、冷然として沈思してゐる。朝飯も食はず。湯を一つ飲まず。全く隠居所へ閉籠つて座敷へは影を見せず。周の衆を食はずといふ意氣組で、時々思はせぶりに唾壺を撃く音をいつもより暴らかに響かせる。薬人形に五寸釘を打たれるよりも胸苦しく、お銀は得もいはいれぬ心地で火鉢に取寄せて額を抑へてゐる。
 かねて合圖やしたりけむ。午が過ぎて間もなくお銀が来て、珍しくお銀に喋々しく挨拶をして、今日の結髪は大相好くなど、空々しい世辭をいひながら、立つて隠居所へ行つたが、少時

りて三十圓の借入を申込むだが、隠居所も周三へは言出し悪いと見えて、お銀に頼むとの御意。此隠居所が近頃「頼む」などといふ重い語を用ふのは、蓋し裏から眞球が出るよりも珍しいので、流石に氣毒と思つたか。何となく言語が重複して、「あのな」「誠に」など、煮切らない文句を挟むで、「お前さんから周三へ言うて見てもおんさい。どうでも用立てゝもらはんければ、城井が差當つてえらう困るので。」義理の悪い借財があるといふやうな事を感じ見す。
 「どうぞごさいませうか。後刻且那様にお話をいたして見ませうけれど、此頃は何か御都合が……」
 「(お)と聞いた時、隠居所の目は鮎貝を日向で一寸動かしたやうに、ざらりと光つてお銀の眉間を睨みつけたのである。
 「今晩にも御返事をいたしませう。」
 「何分お頼み申した。」とつん／＼隠居所へ入つて、羽織を着更へて城井へ出向かれる。
 お銀は周三が晩酌の間に此話をすると、
 「貸すことはならん」と言放つ。其勢に呑れ

思ふらしい苦笑をして。
 「まあそつとして構はん、が可からう。お銀が好くない。」と舌放をして。
 「そつとして置くが可い。」と至極落着いてゐる。
 お銀の身になつて見れば落着いてはゐられぬ。姑が突出した。餘程酷い事をするに違ひない。年寄が可愛さうだ。といはれるに極つてゐる。親類の手前も面目ない。女房に巻かれて非道を働か。親を鹿末にするとは。學者にも似合はぬ鈍漢だ。と夫までが恥辱を極めねばならぬ。其罪は皆嫁の身が被なければならぬ。して見れば世間へ對し、親類へ對し、我身上に大事が起らねば済みさうもない。
 夫に相談すれば構ふなど言ふけれど、構はずにはゐられぬ。此上は是非が無いから。年寄に心配を懸けるのは氣毒だけれど、生家へ話をし力をお願いするより外に手段はない。手紙では思ふやうに事情が解らぬから。御母様を呼んで話さうか。否々隠居所の留守を兼ねて、母親を引入れて好事をしたなど、言はれぬとも限らないから。明日生家へ行つて眞相を話して来よう。と其とは言はずに明日暇をくれといふと。夫は心快く承諾して、

ら。今は嫁にどうされやうとも。お銀といふ味方があるといふ心持から。おのづと家に居てもさあ来いといふ風で。お銀に抗るやうな處がある。お銀は之が爲にいと遇ひかねて。辛いのを飲込むでも飲込みきれぬから周三に訴へる。周三は自體少事に屑々たらざる性だから。一々取上げぬ。唯、然うか。辛抱しろ／＼。我が附いてゐるから。くらゐで張台のないこと。綿を掴むで打着けるやう。
 まよ。生れて持つた身分から見れば。數等立勝つた今の身上。家にゐた頃は。二子か瓦斯に。めれんす友禪の帯といふのが。かうして縮緬の羽織を裏起から着て。黄金の指環を穿めてゐられる身上になつたのを念へば。これぐらゐの苦勞はありさうなもの。肝腎の夫が優しくしてくれるのだから。之に倣した事はない。あの姑だからとて生涯附いてゐるでもなし。此家に波風の起るのも起らぬのも自分一人の了簡次第。と父様に聞かせたら。然ぞ有爲奴と喜びさうな健氣な分別をして。何事も姑の心に倣はぬやうにして。お銀にも可厭な顔を見せず。自分が妹でもあるやうに下から出て。臍物にさはる柳のしなひかな。まづ雪おれもなしに過ぎた。それから一月餘経つて。お銀は隠居所の口を藉

九
 「貸すことはならん」と言放つ。其勢に呑れ
 「成らんよ。今月はあゝいふ事情の費用で窮つてをるのぢやないか。都合の爲様も無いさ。然し。そりや都合して出来んことはないけれど。それほどまでにして貸す義理はない。お前は知らんけれど從來幾度貸したか。つひに返したこともない。第一あの家で那様に金銭の入る譯はないのだ。城井は是といふ酒樂のない男で。酒は飲まうけれど。藝者を買ふでもなし。球戯ぐらゐは滋の芝居を見るから思へば軽い事だ。それに二人暮しに婢一人で。月給で足りぬといふ事は決して無い。お銀が自分の好きな眞似をして足らぬやうにするのだ。熊本にゐる時も貸せ貸せいつて来て。お母様の前があるから何程か貸してやつたけれど。然う度々は此方も出来ん。あれば貸してやる。無いからいかん。さういうお母様以上上斷るが可い。」
 「はい。」とは言つたが此後は偏からぬ。

てお銀は次ぐ言葉もなく、樽管を拵つてゐると。
 「今月は半分都合も悪いのだ。好かつたところが貸しはせん。」と宛然お銀が借主でもあるやうに憤りつける。
 「でもお母様が那麼におつしやるものでございませうから。どうか御都合なすつて半分でも……」
 「成らんよ。今月はあゝいふ事情の費用で窮つてをるのぢやないか。都合の爲様も無いさ。然し。そりや都合して出来んことはないけれど。それほどまでにして貸す義理はない。お前は知らんけれど從來幾度貸したか。つひに返したこともない。第一あの家で那様に金銭の入る譯はないのだ。城井は是といふ酒樂のない男で。酒は飲まうけれど。藝者を買ふでもなし。球戯ぐらゐは滋の芝居を見るから思へば軽い事だ。それに二人暮しに婢一人で。月給で足りぬといふ事は決して無い。お銀が自分の好きな眞似をして足らぬやうにするのだ。熊本にゐる時も貸せ貸せいつて来て。お母様の前があるから何程か貸してやつたけれど。然う度々は此方も出来ん。あれば貸してやる。無いからいかん。さういうお母様以上上斷るが可い。」
 「はい。」とは言つたが此後は偏からぬ。

然し無人であるから。正午に周三が退けて来ると入替りに出懸けて。直に歸つて来る心算で朝の間湯にも行き。丁度結日でも出来て、さあ待つてゐると。十二時二十分頃隣々といふ車の音。お歸りかと思つて見ると三池といふ周三の叔父で。苦い顔をして帽子を取る。抜いて車が又一輛。これには伯父の櫻村といふ。此一門で有名な御意見番。二人が格子を入ると又車が。其は此方の人である。

二人は顧みて。

「これは丁度好かつた。」

周三は衣服も更めず挨拶に出ると。直に酒の支度をとお銀を呼ぶ。

「否。今日は御酒どころではない。」と三池が口を切ると。御意見番の櫻村は詮議の筋有之といふ顔でお銀を一睨する。大方さうとお銀は察するほど無氣味で。こそ〜と次の間へ寛げて酒の支度に取懸る。

其内に話が始つた。駈とは聞えぬけれど。御母様を。お銀様を。風波が。辛くあたる。等の不祥の語が耳に入る。聊も我心に疚しいところはなけれど。背から冷汗が出て。身が凍むやうな心地がする。燭も出来て。下物は後にしても。先一盃と話

ふのと結核が附かず。とにかく敵手は親といふので澁谷の方でも苦戦で。今の所ではどういふ事に極るか。運命は獨樂のごとく廻つてゐる。之を聞くと。生家の心配といふものは謂ふに謂はれぬ。新八郎は苦勞性の老人であるから。もしもの事でもあつた日には。と夜も寐々寝ずに考へて。一日所に親酌人のところへ様子を聞きに行く。母親は母親で。女だけに取越苦勞をして。懣とりと攻へてばかりゐる。御父様は焦燥。御母様は懣然。お銀は中へ挿まつて狼狽。日に四五度づゝは缺さず劍突を映はされて服れてゐる。

下の巻

扱も隠居の心は石に匪ず。轉すべからず。どうあつてもお銀を出さなければ。私は家へは還らぬと力む。櫻村は手甲摩つて扱つたれど。お銀。三池といふ二人の影武者が附いてゐるので。隠居は益々我を張つて。牡牛の乳を搾つてお目に懸けたら。といふやうな難題をいつて弱らせる。

いかにも。大事の母なり。一人の親ではあるが。無理は無理だと澁谷も腹を立て。罪の無

を出すところなれど。どうも座敷へ出懸いから。婢に運ばせやうかとも思つたが。親類が来たのに應待に出ぬといふ方はない。いつも出るのを今日に限つて出なかつたなら。心に快ける事があるから顔が出せないと想はれやうと。婢に手傳はせて機を啓けると。話がぶつたり斷つたやうに寝むで客の四の目が一直線に我顔に注ぐと思ふと。赫として心が悸々。

何か言はれるかと氣遣ひながら。鏡々へ照臨して酌をして。退らうとすると。周三が。「少し待て。はい。」と坐つたが。その手持無沙汰な事。何處へも顔の遺端が無くて。身體が荷厄介になつてどうも成らぬ。旋て御意見番が和やかな調子で。「親な。」を肩頭。此度の始末を一通り陳べて。昨日隠居からの手紙で。不取取今日城井へ行つて一々聞いた所が。慥云ふ話で。と隠居とお銀との口上を聞いて見ると。お銀もえ〜と吃驚。

半分は痕跡もない虚説で。三分は偏見で。残り二分は愛を鶏といひくろめた片口で。被せられた罪は綿まで透した濡衣で。餘りの事に難解にも當惑して。可恐人等と思はず周三の顔が見られる。それから筋路を正しく始終を話して。御母様

いものは難縁は出来ませぬ。と斷然した挨拶をする。さういふ了簡なら。私も澁谷家代々の位階にはなるまい。と隠居も凄じいことをいふ。其ではお互に腹でないから。と詠親類總立で宥めたけれど。兎角隠居が無理ばかり言舞るので。いづれも此處は手を退いて。今に目が覚めて。皆様頼むといふ時があらうから。其折思入れ。一構うて下さるな。」といつた口の端を掴つてやらう。今日の所はまづ〜黙つてすこゝ仕事になつたが。周三の身になつて見れば。敵味方と別れても。縁は繋る親と子の間であれば。城井の食客にして。知らぬ顔もしてゐられぬといふので。月十圓づゝ扶持を送る事にして。一時落着いた。

然し。先方が無理とはいひながら。親を別居させた紛擾の勢頭人であつて見れば。お銀は寢覺に之が懸念で如何も快くない。「親を逐出した。」といふ調は我耳にも障る。無理をいはれても親は親。邪慳にされても姑は姑。それを辛抱するが嫁の身の務なり。又いかにも邪魔を拂つて爽然したやうに。いゝわで黙つてもゐられぬ夫の手前。そこで義理と人情が糾むで。可憐しい哀願となつたけれど。周三は母親の氣の折れるのも今にと見てか更に

に然ら取られますのは私の到らぬゆゑ。此後十分氣を着けてお世話をいたしませうから。何卒お歸り下さるやうに。貴下方の御骨折を願ひますと頼めば。櫻村は理の分るやゆゑ大體疑念が解けて。

「どうも然うであらうよ。隠居様だつて餘り負けてゐる方ではない。若い時分強盜が三人押込むだ時。長刀の鞘を拂つて水車のごとく揮舞した事もあつたのだから。」と酒も身に染みて来た様子。

然るに三池の叔父の方は。元來隠居最良で。血系だけに似てゐる性もあり。酔へば即ち燃上戸。醒むれば可なり偏屈といふ人物であるから。心中大に服せず。此女の柔和に見えるほど。肚は善くないのだと只管念込む。櫻村がお銀の肩を持つたら。我は何處までも隠居の尻押をしてやらうと。兩派に分れて見ると。敵の酒は美くないか。これから城井へ行つて。まだ話す事もあるからと先へ還る。

此三池が一人あるばかりで話が斷らず。姑とお銀は益々憚立つて。彼嫁を出せと唯しく言出して。お銀のゐる間は決して返らぬといふ悶着になつて。親類の誰彼が毎日のやうに澁谷と城井へ往來して。どうで御座るの。あゝで候

怒がず。懣ひ手を着けると不可から構ふな。と一向取合はぬので。其なりけりになつてしまつた。生家では此紛擾が起ると。兩親は幾ど狂氣の沙汰であつたが。一先かういふ事になつたと聞いて。がっくりと腹の抜けるほど安心して。お銀から手紙の来た翌日赤豆飯を炊いたが。馬鹿に目出度いのだからと赤豆澤山にして。いっその事妻の飯にしたら。恐らく一生暗氣は患ふまい。と父親が洒落たほどだから。餘程目出度かつたに相違ない。

さる親の申した。凡そ世中に憂鬱をもらふのと。女子を持つほど損なものは無い。女子にはいかほど丹精しても金を懸けても。預物で。遂には手放さねばならぬに極つてゐる。扱外へ遣つてしまつたから。其で縁が切れて。死なうと活きやうと構はぬかと思へば。我子は何處までも我子であるから。苦樂を共にせずには措かれぬ。して見れば生涯の厄介で。損は立つとも徳にはならぬのが女子である。もし親たちの不心得から左關扇と目懸けたら。これほど徳の行くものはあるまいけれど。親が女の厄介になるやうで。相互の不仕合せといふもの。丸橋ではお銀を良家へ形附けて。ほつと呼吸

を吐く間も無く、今度のやうな事が起つて苦勞をする。其苦勞が一息緩むだかと思ふと、直に胸に痛めるのは妹のお鐵の身上。

さる銀行に勤めて、今新潟に出張してゐる新輔といふ長男があるから、お鐵も他へ遣りもので、今年は十八になるから今が嫁入の旬で、十九までは盛といふやうなもの。お銀などは容色が好いから、廿歳が廿一でも乞ひては許すもあるけれど、妹の方は三割も四割も品が落ちるから、一歳でも若い内が花で、女子を嫁付けるのは、後日の榎木と同じ事で、時刻が遅くなるほど捨賣にしなければならぬ。と口を探しに懸ると無いもので、長し短し、細し太し、圓かつたり角張つたりで、兎角四合と適ふやうなのが見當らない。然うかと思ふと、有り出すと又迷ふほど落合つて、都合三軒といふもの前後に言込むで来たのは、一番に官口、二番に商人、三番が職工、官口といふのは年齢が廿五で郵便局へ出て二十五圓の月給、男親が一人ある。商人といふのは濱濱の商館勤で、二十枚の給料、これは兩親の代り、地面家作が少々あり、年齢は廿七、職工といふのは砲兵第一方面砲兵工廠の小銃製造所へ勤める鐵砲鍛冶で、年齢は廿八、月給は廿圓、之全く保果無しで、

といふ處に惚れて、あの子ならば確だと父親に相談すると、長らく職人をしてゐたのだから、氣質も變らずにゐるものか、子供の時分の氣ではゐまい、と一應有理な言葉に、母親もなるほど氣が着いて、お鐵にも此事を言明かせる。それでは、舊時の氣質か氣質でないか、調べて見て下さいとも言はれず、お鐵は可厭な顔をして失望の様子であつたが、其代り郵便局も否、横濱も否と皆撥附けて、どうとも話は煮えずに、毎日紛擾してゐる内、喧しいのと觸込のあつた、信之の伯父の瀬川又之丞が、中に入つたものから丸橋の娘といふ事を聞かむで、なるほど之は好からう、と信之に聞いて見ると、悪くはない挨拶で、まことに不思議な御縁だ、早速丸橋に尋ねて来る。

伯父の瀬川から段々様子を聞いて見ると、味方同士の片口であるから、一から十まで信にはならぬけれど、十分證據のある事が許すもあつて、信之の堅氣なことは十餘年前の信様に異らず、伯父の口からいふは可笑なものだけれど、御遠慮なく申上げると、あれなれば實に御薦め申したいとまで申出した。

一昨彼工場で、二十五圓以上取るものは上等の職工で、弟子の四五人づも使つて、皆職

人風の勇肌で、大工の棟梁とか、左官の親方とかいつたやうな身持で、背越の錢をつかはず、年中びい／＼してゐるの、鋪強にして、華美がつてゐるのが風習であるけれど、信之は決して然うで無い、第一服装からして堅氣に作つて、行脚も職人風で無い、實直過ぎて偏屈のやうで、交際を外すでも無く、優しくて實意のあるのが愛嬌になつて、上役にも可愛がられ、下へも通りが好く、職も悪くない所から、随分用ゐられてゐる。

昨年の暮母親が亡くなつたが、それまでに、不自由だから女房を持つて度々勧めたけれど、未だ早いと云つて下女を置いて母の世話をさせて、自分は不変孝行にして而倒を見てゐたが、親の亡後に男の身一つでは所帯が持切れず、此度嫁を探す事になつたが、信之の行脚が甚だであるか、私が喋つたばかりでは御得心が行くまいから、兎も角も一日お出下さいまして、當人の様子も見、また家の様子も御覽下さいまし、申悪いことではございませんが、職人風情の住居とは見えませぬくらゐ、整然と致してをります。

一口に職人と申すと、どうやら縫合せの衣服に尻こけの三尺帯をして、袖の中に握拳をし

を吐く間も無く、今度のやうな事が起つて苦勞をする。其苦勞が一息緩むだかと思ふと、直に胸に痛めるのは妹のお鐵の身上。

さる銀行に勤めて、今新潟に出張してゐる新輔といふ長男があるから、お鐵も他へ遣りもので、今年は十八になるから今が嫁入の旬で、十九までは盛といふやうなもの。お銀などは容色が好いから、廿歳が廿一でも乞ひては許すもあるけれど、妹の方は三割も四割も品が落ちるから、一歳でも若い内が花で、女子を嫁付けるのは、後日の榎木と同じ事で、時刻が遅くなるほど捨賣にしなければならぬ。と口を探しに懸ると無いもので、長し短し、細し太し、圓かつたり角張つたりで、兎角四合と適ふやうなのが見當らない。然うかと思ふと、有り出すと又迷ふほど落合つて、都合三軒といふもの前後に言込むで来たのは、一番に官口、二番に商人、三番が職工、官口といふのは年齢が廿五で郵便局へ出て二十五圓の月給、男親が一人ある。商人といふのは濱濱の商館勤で、二十枚の給料、これは兩親の代り、地面家作が少々あり、年齢は廿七、職工といふのは砲兵第一方面砲兵工廠の小銃製造所へ勤める鐵砲鍛冶で、年齢は廿八、月給は廿圓、之全く保果無しで、

喧しい伯父があるが、別に世帯を持つてゐる。かう列べた所で、まづどれが好いと母親がお鐵に質ねると、官口は何だか嫌ひ、商人はどうも否、腕に藝のある職工がといふ好みに、兩親は腹を潰した。蓋し父親は官口といふものを徳川時代の武夫のやうに考へて、花は櫻に、人は暗、など直にやらかす質だから、當時では何でも官口で無ければならぬやうに念つてゐる。母親は、誰に聞いたか、商人が一番割の好利益の多いものだ、と素人簡の商賣氣を出して、どうか商人へ遣りたい、それに横濱商人といふのは、異人を敵手で格別儲ると、誰かぐらゐになれば大丈夫だけれど、卑い處では死が恐いといふ肚で、二十枚と目懸けたのである。お鐵も夫に持つなら、綺麗な仕事をする人と思はぬではない、足で飯炊いて手で金延ばすなどいふ洒落から、鍛冶屋様と極めた譯ではなけれど、腕に藝のあるのが世を渡るに一番安心、所帯も考へて、眼中常に官口無しであるが、鍛冶屋とは少し豫想外であつた。

腕にある藝といつても、あなたが職人には限らぬ、何も縁で職人でも否は言はないけれど、鍛冶屋の女房は御恩案であるべき娘氣に、ぐつと色氣を捨て、一思に其が望みといふには仔細がある。

この鍛冶屋を尋常の鍛冶屋と想ふと大いに簡が違ふ。七八年前まで近所に住んでゐた石黒信之といふ、兄新輔とは幼穉馴染で、自分も識つてゐる男である。其頃評判の孝行者で、堅人、物の道理も解つた、お銀ちゃんなども、あの人はと噂をした息子であつたが、父親に早く試れて、學問の修行もしかねる所から、十七の歳鐵砲鍛冶になつて、わづか二年ばかりの間、驚くほど腕を上げて、母親をもどうやら過せるやうになつたと聞いたが、砲兵工廠へ出る事になつて、小石川の方へ引越してからは、久しく音信を聞かずにゐた、其信様だ、職人でも、鍛冶屋でも彼人ならば添つて見たいといふお鐵の所思で、御母様、あの石黒の信様ですよといふと、然うさ、まあ不思議ぢやないか、あの信様がもう二十七になるかねえ、人間は極良いけれど職人がどうも、と一向進まぬ形で、御父様も子供の時分知つてゐる石黒の息子なら不足は無い方なれど、右同派鍛冶屋といふのが不承知で、最少し外に職がありさうなものだと首を括る。

けれど、お鐵が切りに進むのであるから、當人の縁だからと母親の思慮したのは、あの信様

「又とん／＼。今度のは石黒だ。我を見て少し笑ひかけた。子供の時の面影はあるが、いやどうも立派な男になつた。我家の新しい所へ来て。お神樂の真似をして遊んでゐた頃とは大きな違ひだ。十六七の頃も一向生意氣の風の無い。親孝行でもしやうといふ子だから何處か違つて。物柔かな裏に端然とした處のある。依然其通りで。最一息成が付いての。どうもそれは人品なものだ。八字髭を生やして。髪を撫附けて。緑緞の小袖に白縮緬の兵児帯をして。黒の袴の三紋の羽織で。乾とした扮装よ。幕止も閑雅で。口上も確なものさ。總體しつとりした。誰か見たとて。職工や承知が出来ない。まづ四五十圓も取らうかといふ官員だ。鐵砲銀治だといふから。我は鼻の下や眼の邊を炭だらけにして。棕桐箒のやうな頭髪で。胸の穴を黒くして。鼠色の臍鼻襷に。襦袢一枚で出て来るかと想つたら。さうで無い。それから酒が出て中々の御馳走よ。場木だと云つても馬鹿には出来ぬものだ。」

と云ひながら折の紗襪を解いて。勿鉢らしく蓋を取つて。

「この通りだ。こゝに鱈があるだらう。これは

味吸の種だ。この汁の加減といふのが無かつた。飲めたよ。」

「そんな事はどうでも可うございますから。それから後は。」

「信様も御父様御酒をお上んなさるの？」

「結構な事には大の下戸で。」といふと。

「それが何より。」と諷する所あるが如くに言ふ。

「何よりとは情無いなう。然し若いもの、飲むのは憎いものよ。」

「老人の飲むのは厄介なものですよ。」

「はつくしよいと大きな嘘をして。」

「誰か我の噂をしてゐると見える。」

「それから御父様どうしました。」

「それからの。勸めて二三盃したら。いつの間にか梅酒漬の生薑見たやうに。爪指まで赤くなつて。この通り不重寶でございませうといふとの。何處のも酒客は同じ事をいふと思つて可笑くてよ。瀬川がいふには。まあ、飲まないに越した事は無い。おれくらゐの年齢になれば少しは飲むが樂でと。悪く澄してゐたから。我も一寸、御同様に。」と愛想をいふと。瀬川は如何もといつて笑ひ出したて。

飲むのが二、三杯つて。信様はさぞ迷惑でしやう。」と意あるが如き母親の詞に。父親は故と無着に答へた。

「さうでも無かつた。誠に喜むでの。どうか澤山召上つて〜と。我の飲みやうが足らんで不足に思つてゐたかも知れぬ。」

「何の貴方。そんな事を不足に思つて耐ふものですか。」

「それから瀬川に案内されて。家探でもするやうに家中残らず見て来た。下は三疊が三疊。中の間が六疊。奥が八疊だが。全く瀬川のいつた通り。男世帯とは想はれんほど片附いて。何處も彼も對然と極つたものだ。餘程世帯持の好い男と見える。

我は別に不服は無し。お銀も至極同意だし。本人は勿論の事だから。どうだ。極めやうぢやないか。鍛冶屋といつたつて。鼻下を黒くしてゐる鍛冶屋とは違ふよ。此日本帝國を守護する兵士の。最も有用なる武器を製造する役人だ。どうだ合手に取つて不足は無からう。日本帝國を守護する。」

「もう解りましたよ。」

「解つたなら言つて見な。」

「言はなくても。解つてゐますよ。」

尚能く一つ調べて。覽なさいまし。と何の苦も無く極められて。母親はなほ、迷ひ出して。兎角職工といふのに我儘が爲きれず。鍛冶屋といふのにうんざりして。横濱商人にまだ未練を残してゐたが。二日過ぎて瀬川からの手紙で。明日は日曜で信之も家であるから。家内中で遊びに来てくれといふのは。家の様子見やら見合やら兼ねて。何とも付かず手輕に呼寄せやうといふ肚。

こゝはお鐵を伴れていつては拙い。我が一人で行つて見やう。と新八が出向く事になると。母親は氣を揉むで。

「貴方は惚れっぽいから可けませんよ。獨り惚れ込むで。うっかり約束なんぞをしてお出なすぢや困りますよ。」

「宜しいよ。心得てゐるよ。」と五つ六つ頷くと。お鐵は後から羽織の袴を反しながら。「御父様よく見て来て下さいよ。」

「柄の好いのであつたら買つて来やうか。」

と一同笑つて目出たく門出をする。

どんな様子であらうかと二人は言合してゐると。午後三時頃に父親は門口で嘘氣をして。折詰を二箇ぶら懸けて御機嫌で歸つて来る。待兼ねた母親とお鐵は左右から詰寄せて。さま／＼

な事を問懸けるので。何と應答して可いのやら。さう一度に話す事は出来んよ。二人とも控へてゐて。我が一通り話して聞かせるから。扱な。まづ家を出て新橋から鐵道馬車に乗る。と本町通りで線路を外しての。と言出すとお鐵は可憐しがつて。

「お父様。那様事はどうでも可いから。先へ行つた所から話して下さいよ。」

「さうか。そんなに先を急ぐなら。道中は端折つて。小石川柳町にまづ着いたとする。柳町といふ所は新聞町での。」

「そんな事も端折つて下さいよ。」

「無闇と端折らせる。鈍漢が驟雨にでも遭つたやうだ。社文なら爲方が無いから。思入れ端折るよ。ずつと端折つて。石黒の家を尋當てたとする。貸家ではあるが。軒建の極新しい。一寸した家よ。格子窓での。出窓の下には矮箱が植ゑてあつて。南向の二階屋だ。我が案内をするとの。瀬川が直に出て来て。岩様も御一緒だと心持にしてゐたのに。残念だ残念だといつての。まづ二階へ通した。」

「信様は居りましたか。」と母親が嘴を容れるとお鐵は俯むいた。

「まあ急くなよ。追々話すから。二階へ昇つて

見るとの。八疊一間だけれど。實に小洒落として。道具建が好かつた。塀段通を一杯に敷詰め。更紗の洞が三枚。桐の列坡の手爐に櫻炭が埋つて。此方から三人行くつもりで待受けてゐたのだ。床には巖が二鉢。掛拵には梅が入れられて。置物には。何だか自然木に蠟石のやうな青い玉が載つて。墨畫の山水の軸だ。時代な竹の聯に詩のやうなものが懸つてあつて。斑竹の編むだ短冊掛に何かいつたつて。信之の句ださうだ。發句があつた。それから袋戸欄の下に唐机が一脚。これに種々段だの水筒だの。筆架文鏡のやうなものを列べて。筆筒に孔雀の尾が二本ばかり。右の方には書物が五六冊。其他に桐の手頃な本箱が對あつて。胡麻竹の茶棚に大分茶器類が綺麗に飾つてあつた。北の窓には小鉄製造場の寫眞が金縁の額にして懸けてある。床の向うが押入での。襪に千鳥の形のある襪で。明取の好い。風通の好さうな二階。南は掃出しになつてゐて。下が庭で。庭は中々手入が届いたものだ。裏へ通ふ處に枝折戸があつて。其外には盆我が澤山列べてあつた。我は瀬川に挨拶をしてゐると。附子の音がとんとん／＼。誰だと思ふ。信様だ？ 大進ひ。四十ばかりの婢がお茶を持つて来たのだ。それか

「何解するものか。日本帝國の武器を守護する。兵士の最も有用なる製造の...」

「おほ、ほ、ほ。御父様違ひました。」

「それ御覽なさいな。貴方だつて其通り...」

「なに我は違つてゐても解つてゐるのだ。」

「貴方は實に惚れっぽいから可けませんよ。」

「惚れて可いものなら早く惚れるのが目がある」と謂ふのだ。恐らくも日本帝國を守護し奉る兵士の最も有用なる武器を製造する役人。東京府土族石黒信之の妻鐵子か。鍛冶屋の女房に鐵子は合性だ。

「可厭。お父様は！」

三

母親は獨り不得心な顔をして見たもの。當人が得心で。父親が得心で。お銀がまた得心で。都合三得心に敵しかねたる一不得心。皆が然ういふ事なら。爰に始めて四得心となつた所へ。濱川又之丞が来て。どうで御座らう。御承知は下さるまいかといふに。此方からも望む所と。目出度く話が纏つて。然らば棧橋をした羽田氏に嫁約を頼みませう。そこで之。儀式でござるから。一寸見合といふやうな事を。なるほど何處に致したが可うござらう。左やう此見

合といふものは。お互に手持無沙汰な。妙に冷たい汗の出る不気味なものでござるから。家の中で顔合せするのは廢止にいたして。京橋の勸工場で落合ふといふのは甚敷ものでござりませう。之は新しく至極お思附でと。來日曜の午後二時を合圖に約束して濱川は立歸る。お銀は此前姉の事を啗つたが。今我身上になつて見ると。依然誰の情にも差違はないもので。氣の揉めるやうな。嬉しいやうな。變に不思議に。餘程妙な心地になつて。儼然として了ふ。之をむづかしいふと萬感交する。泥鰌の穴へ酒を沃けたといふ恰好で。心裏で何か無上に悶ゆるやう。さしあつて夜更られず。晝夢を見て。御飯が吐へ通らず。何か氣になつて。而して唯唯したくなる。其中に絶對絶命の日が来て。京橋の勸工場へ出懸けたが。此日は父親が留守番で。仲人の羽田と母親と三人連。入口は繪紙と玩具。曲ると瀬戸物に小間物。もう二時を打つたから先方も直に來るであらう。後から來るか。それとも出口から入つて。待伏をしてゐるだらうか。と會ふのが主意で來ながら。其の合ふの辛さ。辛さといふのは安當で無い。辛いやうな心地。此(やうな)の三字が最も力がある。約言すれば差かしいの

極で。少しの間でも會はぬやうにと。一寸れの氣が出て。もし出會つたら身を匿さうといふ下心から。母親と仲人の間に挟まつて。店の品物を見る目を儼然なく働かせて。前後の屏にきよとし。聲音にびくりとして。顔は上氣して火のごとく。胸は早鐘を撞いてゐる。母親がまだ見えませんねといふと。羽田が前に前後を胸して。もう見えなければ成らない理ですがと話す一言毎に。毛孔から汗がたらたらと浸出す氣の不快感。いよゝ時刻も追つて來たと思ふほど。横を向くことも出来なくなつて。造りつけられたやうに。見たくも無い物をまんじりと視て。中頃まで來ると。おや前前か。と羽田の聲。それと思ふと體が凍む。足が舉らなくなる。「さあ鐵や。」と母親に手を曳張られて。我にもあらず歩き出して。唐木細工の店の前で。はたと出會ふと。首がぐつたり。双方で頼りに挨拶を始めると。誠實いつもお變りなくといふのは信之の聲。舊時とは全で變つた大人染みた。底に濁のある。響く聲が耳に入る。顔と顔を擧げやうと思つても。どうも擧げる事が出来ない。「お鐵や。御挨拶を。」と母親に曳張り出されて。も。協はない。一寸顔を舉

けた其間。電光。石火。利那。瞬。ちりと信之の顔を見たばかりで。後は唯唯を扇めて。先方ばかり物を言はせて。それでも挨拶になつて。下ばかり向いてもゐられぬからと。趣を變へて今度は横を向く。それから。御一所にと。これ。もう。深山なのに。五人一語になつて舊の道へ還す。此時の方が陰にゐられて。却つて能く信之を見る事が出来る。

勸工場を出ると双方へ別れる。今度の挨拶は前よりは幾分か確に出來たつもりで。信之の顔もどうやらかうやら見て。まづ氣が澄む。ぶらぶら煉化通を歸り道に。母親は今日の見合で大分惚だむ様子で。羽田を捉へて切りに褒めるのを。聞くお鐵の心地は不快は無い。

翌日羽田が結納を持って來る。酒を出す。目錄を披けて。噫。見事な手蹟だ。石黒が認めたのでござるか。父親は恐悦がると。媒約は當惑した顔で。左やう。伯父様がお認めになつたやうでといはれて。まごつく。二日過ぎて。お銀の處から祝儀として。惣桐の重簀篋が來ると。母親は嬉しさに價ぶみをして。安くふむで父親に呵られる。お鐵は此中一杯になるほど衣類が無いとて氣を揉む。漆臭い道具が毎日二つ三つ宛殖えて。座敷に飾附けてある前に。繪が列

ぶ。壘節が列ぶ。長持と籠篋に場を取られて。父親は今夜から獨り二階へ寝ることになる。當日も通るといふ大騒ぎの最中へ。お銀が顔出しに來ると。おやまあ大層だ事。悉皆揃ひましたね。と妙に笑ひかけてお鐵の顔をじろりと見る。お鐵は橋に袖を散々浴かした廉があるし。さうでなくても。お銀様は一鉢他を浴かしたがる方だから。どんな事をいつて諷はれるかも知れないと大に恐れて。座敷の隅に小さくなつて懐けてゐると。

「お鐵ちゃん此度はお日出度うございます。」とわざ／＼前へ來て。改つて挨拶をされて。居附まらずに臺所へ通込むと。連には三人で笑ふ聲がする。もう出ることが出来なくなつて。籠の前に立つて釜の縁を撫でゝゐる中に。女の如く信之の姿が現れて。自分と盃をしてゐる。あゝ死にたいほど極りが悪いと思ふ途端。空中濺閣ががた／＼と寒れる一霹。一鐵や。と母親に呼ばれて。振向くと障子を開けられた。

火鉢の端に三人坐つて。皆此方に向いてゐるから。又顔を背けて釜の縁を撫でゝゐると。父親が吐ては笑つてゐるらしい眞面目な顔をして。一姉さんに御祝の御禮を言はんのか。」

其は知つてはゐるけれど。其處へ行き難くて。相惚してゐると。母親が又。如何いふもんだね。とお銀は例の氣輕につぶ。鐵ちゃん／＼。とお銀は例の氣輕につぶ。それでも返事無しでゐると。「可厭な鐵ちゃんだね。今産むでさ。そんな事で信之のお嫁になれるものかね。」とお銀が詰ひつゝ容める。

何と言はれても動がざることに山のごときに。お銀も腹合抜がして捨置いて。母親と話を始めると。父親は今度は極眞面目に。「鐵。」と呼ぶから。もう好頃とやう／＼座敷へ出て。母親の陰から。「姉様。一昨日は有難うございます。」といふと。お銀は話を極めて。「どういたしまして。貴方も石黒様へ御縁がお極りで。さぞお嬉しくつてゐらっしゃいますやう。あのお婿様は當時何處にお住ひで。」お鐵は俯むいて黙然。

「お幾歳でゐらっしゃいます。」と聲みかければ未だ黙然。「おや石黒様の奥様はお咄ね。」と笑ふと。お鐵は有合ふ煙管を把つて。竊とお銀の膝を壓首でぐい。

「あ痛。」と不意に駭いて立てた聲に、兩親は吃驚して、

「何だ。」

「どうお爲だ。」と目を圓くして訊ねる。お鐵は済して、可笑さを忍むでゐると、お鐵が

「鐵ちゃんだね。」と肩を一寸衝く。

「何を。」と恍ける顔をお鐵は睨と見て、

「お婿様が附いてると思つて、他を慮めること。」と慙と悔しさうにいへば、

「妹様はもう否。」と袂を拂つて、佛然といふ聲に立上る所を、

「まあ石黒様の奥様。」と留める。

「お鐵様はもう……。」と母親の方を向いて、

「御母様、妹様が種々な事を言つて。」と憐れを乞ふと、母親は嬉しさに、吃々笑つて取合はず、父親は妙に眼底で笑ひながら、

「石黒の奥様に逢ひないぢやないか。」

「だから私が石黒の奥様……。」

「解りましたよ、妹様だつて澁谷様の奥様。」

「はい何でございます。」と落着き拂つて、

「石黒様、何御用でございます。」

「私はもう、知らないわ。」

御母様と一緒に来たやうなもの、今夜は私一人で行かれるのだ。明朝からは石黒の家の人になるのだ。年に幾度と勘定するほどしか家に行くことの出来ない。御父様の肩が凝つても揉むものは無い。御母様が頭痛で寝たら臺所を爲るものがあるまい。姉さんとも今迄のやうには逢へない。

と念ふと浮む涙を指頭で拭いて、おや白粉が剥げはしないかと、懐中鏡を取出して見る。どうもなつては居ない。鏡を出した次手と、ほんの少しばかり曲つたかとも想はれる前髪を理して、延紙で油手を拭いて、鏡を仕舞ふと同時に、狭い路の片側長屋の格子戸の前に車が停る。お鐵は幌の中から窺と見ると、父親の話に違はぬ結構で、窓の前に垣があつて矮柏が植ゑてある。

此處で下りて、媒め夫婦兩親に前後を圍まれて、俯むいたまふ。玄關から中の間を通つて奥の八疊へ入ると、我家から送つた荷物の飾つてあるのを見れば、他國で知人に會つたやうに、何と無く懐しい。

話に聞いてゐた婿が香煎湯を持つて出て、お鐵の顔を上覧と、視と見て退る。嫁御寮は此時既に三分の正氣を失つて、體としてゐな

がら心は落着かず、腋の下から汗を出して、顔は熱る。頭痛はする。少時にして媒めが彼方へと合圖に來ると、母親が唯と挨拶をして、

「さあ、お鐵。」といつても、お鐵は遠慮してゐるから、小さな聲で、

「お、盃だよ。」と聞くと、心臓がどきどき、裂けて一時に血が出たかと思ふほど、動氣で、火に驅されたやうに惣身が熱くなる。此時はは七分の正氣を失つて、何が何やら一向痛んで、二階まで伴れられたが、ふと座敷の障子の硝子越に人影が見えたので、また心臓がどきどき、

座敷へ入ると、三方の長燈籠、三組盃、雄蝶の鏡子など、草紙の大團圓で能く見る道具が眼前、下座に羽織袴で、兩手を膝の上に置いて、俯首になつて控へてゐるのは、花婿の信業（では無い）石黒信之。お鐵は赫として眼がくらくら、脚がわななく、汗がたらたら、前後不覺の中に盃が済むで、下座敷に還つて來ると、始めて人心地がついたやうな、間も無い、二階で却類の盃が始つた様子、また彼處へ出るのか、と那様事を苦勞にしながら、お鐵は獨り茫然、眩暈を開放して、顔を下して逆上を下げてゐる所へ、媒めが呼びに來ると、續いて

「あ痛。」と不意に駭いて立てた聲に、兩親は吃驚して、

「何だ。」

「どうお爲だ。」と目を圓くして訊ねる。お鐵は済して、可笑さを忍むでゐると、お鐵が

「鐵ちゃんだね。」と肩を一寸衝く。

「何を。」と恍ける顔をお鐵は睨と見て、

「お婿様が附いてると思つて、他を慮めること。」と慙と悔しさうにいへば、

「妹様はもう否。」と袂を拂つて、佛然といふ聲に立上る所を、

「まあ石黒様の奥様。」と留める。

「お鐵様はもう……。」と母親の方を向いて、

「御母様、妹様が種々な事を言つて。」と憐れを乞ふと、母親は嬉しさに、吃々笑つて取合はず、父親は妙に眼底で笑ひながら、

「石黒の奥様に逢ひないぢやないか。」

「だから私が石黒の奥様……。」

「解りましたよ、妹様だつて澁谷様の奥様。」

「はい何でございます。」と落着き拂つて、

「石黒様、何御用でございます。」

「私はもう、知らないわ。」

結納の交換も済み、三荷の荷も目出度く送り込むで、お鐵は唯わくわくしてゐる中に、はや黄道吉日も今日となる。

お天氣で仕合せだと喜ぶだも午前の事で、二時頃からほつりくつと落ちて來たのが、しとしとと降出して、雪にもならず寒いこと。

「今はどういふものか流行らないけれど、三類の方が好いやうだね。」

とお鐵の頭を濃厚と塗りながら、

「お前赤飯にお茶をかけた事があるだらう。だから酒麩に雨が降るんだよ。」

と妙な事を責めると、又お鐵の應答が妙、

「お餅にお茶をかけた事はあるけれど。」

父親は火鉢の傍で、此妙な問答を聞いて笑ひ出し、

「餅にお茶をかける。大、お彼岸に降られるだらう。」と二人を笑はせて、

「天氣の好いのに幌をかけるのは可笑いものだ。雨で幸ひよ。」

と極無理な負け惜みを言ふ。

こんな事を言ひく、支度の出來た所へ、媒め夫婦が乗込む。そこで簡略な立派舞があつて、

いづれ先方でゆつくり、といふやうな舌な口上で膳を置き、五臺の人力車を操へて小石川を指して急がせる。

旋て石黒の近所まで來ると此處彼處の辻や軒下に、骨の折れた編組傘やら、番傘やらさしかけて、お神様達娘子供が花嫁子を見物に出てる。車の音を聞くと齊しく、彼地の窓から首が出る。此地の格子から體が現れる。それらが無遠慮に覗き立て、其甚しきに至りては、僕々と車に近寄つて、阿部宗任が八幡太郎の氣息を併ふといふ身で、幌の内を覗きこむのがあつた。暗い中に白いものが見える許で、あれは紀國蜜柑船だか、何だか解るもので無い。お鐵は前櫓を櫓に車外の様子を見て、自分も那して折所へ來て嫁を見に出た事もあつた。それが今は見られる身になつたかと、難しういへば、俯仰今昔の感に堪へず、御父様や御母様も年輪を取つた理だと思へば坐に心細くなる。

お鐵が誰か様へ嫁く時には、別れるのが悲しくつて、袂につかまつて泣いたらば、お鐵も泣いて、私の手を握つて放さなかつた。今日は家を出る時、誰も残つてゐる人が無かつたから、それほどでは無かつたけれど、随分可厭な心地だつた。よく歩へて見れば、かうして御父様や

四

せんけれど二三日。などと言ふと。其處は親子の情で。又色々世話にもなるといふ心から。唯々と貸してやる。返してもらはらう氣も無ければ。返さうといふ了簡も無しで。

如く此重寶な。秀菊が龍宮からもらつて来た米依のやうな。無盡蔵の財を持つてゐる御母の事であるから。何かと氣を付けてお遊ばせ孝行する。城井も此魂膽を表面は知らぬ顔の御存じであるから。隠居を邪魔にする所では無い。口には税が賦らぬと思つて。虎兇で掩はれてゐる鰐口を窄めて。御母様から遊ばせ。あゝなさいませ。おや、愛が出ましたな。お風邪を召すとなりません。遊や其の私の襦袢を。いや今日の飯は硬うてならん。貴方には好くない。粥にして上げるが可え。なんのの至誠優しい言をいふ。隠居殿は眞に受けて。ほく／＼喜び。實の子でもない城井が。軍人のやうにも無く。きつう優しうしてくれる。其に。周三は如何いふものぢやあらう。嫁と心を合せきつて。私を邪魔にして。年寄つたものを流人同様に遇うて。私を城井の門から葬式を出す事か。それでも。激しい。城井といひ。揃うて優しうしてくるゝものがあるから。不仕合せの中の仕合せじや。と周三夫婦を情無く怨むだけ其丈城井を頼も

しく嬉しがる。焉んぞ知らむ。周三といふものが無く。月十四といふ扶持を仕送る源が微かつせば。隠居の境遇は甚だなものであらう！奥の四疊半に置火燵をして。好きだといつて。床に花を絶えせず。牛乳は異人臭うて飲めんから。半熟の鶏卵を二個に。食鹽とスプウンを添へて。午餉には鴨を細く砕いて。商離でも潰せるやうに調へさせて。晩が五勺などいふ。寸法に行くものと心得らるゝか。これ大いなる不了簡の極度。まづ世間の手本を見るに。いはれぬ前に氣を利かせて。天氣の好い日には洗濯の二つも偽ねばならぬ。孩兒のがあれば。孫の可愛さの酔興から。いふやうな貌をして。傳もせねばならぬ。と一々數へ立てたらば。下女奉公人のする事をも敢て辭せず。喜んで其勞を執るやうにせれば。我娘はともあれ。舞殿が好い瓶をする。ことではあるまい。太甚しきに至りては。我孫を坊様の嬢様の。不倫千萬の尊號を奉りて。湯屋の女房に。備裝と間違へらるゝほどに身を隠さなければ。臺所の隅になりと合いて。死水を取つてやらうといふ罪が多度あるものではない。已に此位にしても。十人が九人までは無くもがなと念はれる。嫁にやつた先方の厄介になるのと。茶吞友達を欲しがるのは。壽長き

女の恥辱としてある。鮮魚と珍客は三日おけば臭ふといふ。西洋の論があるが。當分は隠居も珍しいのと。十四の扶持といふので。珍重されたやうなもの。日が経ち。月が果るに就けて。第一の要素の(珍しい)が消えて。差代りまして(厄介な)といふ感情が。先づ城井の心に萌し始めると。踵いで第二要素の(月十四)も。補充になる。重寶にはなるが。唐辛子も食慣けると辛味が鈍くなるがごとく。今では尋常のやうな氣持になつて。これ丈でも入らなかつたら一寸困るのだから。さて入りつけて見ると。さまで有難くも無いやうな理屈で。自分の方の爲筋になる事は少しも。不利益になる。一塊の老肉團が。悪く厄介で。兎角邪魔で。所で近來は餘り(御母様)を唱へない。少しお激がぢやほやいふと。城井の御機嫌が麗しからぬ。

賣食してなりとも。命の蔓にありつくまでは。龍城しなければならぬ。それも一二年の中に有附けば好けれど。長引かれると大事になる。まづ此家作を賣擲つて。四五圓の借家に。隠居と極めて。時節の到来を待つ外無しと。恩顧の奴婢に暇を出す。入るものは書齋屋。道具屋。近所へは面目無し。自分は心細して。お銀は夫が腹せぬ親世御前といふ思で。混雜する中に半病人で働いてゐる。

是は扱置いて。隠居は當座ほど珍重されぬのを。面白く思つてゐないのに。根が我儘の方であるから。一寸した事まで腹が立つて。こんな譯のものではあるまいにと。(御母様風)の吹かせ損ひをして。獨り脚を悪くしてゐる。お激も亦親子の心易立から。長い月日には随分龜末な待遇もすれば。氣に障る言をいひもする。始めの内こそ。嫁の優しい言葉よりは。娘の鋭突が嬉しくもあつたが。此頃になつて。見ると。城井の爲所の面白くない所から。自然顔見を及ぼして。お激も餘り香しくもなくなつて来た。因で折々は嫁の事も憶出される。周三も優しかつた。と考へると。稍歸心が動き始めて。家の様子はどんなであらう。一寸一晩泊で遊びに行つて見たいけれど。未練らしく其も否だ。先方から説を入れて。歸つてくれといつて來

に心の色を面に表はして。借れがしに仕向ける。けれど。お激が中になつて。色々遠回しに宥めるので。隠居も心地に好くないけれども。今急に澁谷へ澄した顔で還る譯にも行かぬ所から。節を屈し。疝を抑へて。潜龍無用と忍むのである。其所で破裂も無しに。納まらぬやうに納まつてはゐるが。正に是機一發といふ處。所謂七分三分の兼合。

一夜城井中尉が飲過ぎから舌を吐らして。ちくと喉を言ふと。腹を立てる段では。自分が無理でも膨れる代物の隠居だから。況んや理あるに於てをや。無料で置いて貰ひはしまし。怪しからん事をいつたものだ。と散々に立腹して。憤て翌日は二食絶食をするといふ勢。お激が種々に詫びたので。晩には快く五碗召上つて下さる事にはなつたものゝ。隠居は此事に。此家は長く留まる處で無いと始めて曉つたのである。時に不運なるかな。官海風の波濤かなならず。餘齡大いに恐慌の折から。澁谷周三も非の字となつて。官制改革後であるから。三年間の涙金は下らぬ始末。手許に現金といつては。愧かしながら。從來の生計を二月と続けるほど無幾分か氣強いのは。地所と我住むである家作と。外に株券が少しばかり。差當つては之を

怒る次第なれば。此際どうか勘辨して一所になつて下さい。それとお可厭ならば。六圓に減じて不承してもらひたい。此二者何方か一つといふ。掛合を城井方へ差向けると。隠居も吃驚。憎いの怨めしいのと謂へば謂ふものゝ。懸り息子が一世の浮沈。厭まで屬してゐる家を出て。背の低い疎な杉垣に。歳古る丸太の御門といふ構は。餘り嬉しくは無い。辛からうと夫婦の心の中も思ひやられる。又自分にしても。今こそ思つて知の家。客分になつて。何不足無く暮してゐるのも。原はと云へば。周三といふ確とした後楯があるから。お激も大事にしてくれるには違ひないが。老の杖となるのは周三ぐらゐの事は隠居も心得てゐる。但し之は近來悟つたことゝ知るべし。其證據は。顔面六圓と

いふ誠實。六圓では小遣も浮かぬ。然し此上は出し切れぬといふ其も道理。ではあるが此方も窮る。其で勘辨が出来ぬといふなら。一所になれといふ。今更一所になるも意氣地が無さ過ぎる。六圓でどうか我慢はなるまいか。それとも胸を撫つて一所にならうか。何方にしても昨日に變る身上を。心細く考へるばかりで。どうも分別が着かぬ。是は扱置いて。隠居は當座ほど珍重されぬのを。面白く思つてゐないのに。根が我儘の方であるから。一寸した事まで腹が立つて。こんな譯のものではあるまいにと。(御母様風)の吹かせ損ひをして。獨り脚を悪くしてゐる。お激も亦親子の心易立から。長い月日には随分龜末な待遇もすれば。氣に障る言をいひもする。始めの内こそ。嫁の優しい言葉よりは。娘の鋭突が嬉しくもあつたが。此頃になつて。見ると。城井の爲所の面白くない所から。自然顔見を及ぼして。お激も餘り香しくもなくなつて来た。因で折々は嫁の事も憶出される。周三も優しかつた。と考へると。稍歸心が動き始めて。家の様子はどんなであらう。一寸一晩泊で遊びに行つて見たいけれど。未練らしく其も否だ。先方から説を入れて。歸つてくれといつて來

れば。其を機に歸りたいものだが。今となつて此方から口を切る譯にも行かぬ。と些の意地ばかりで持つてゐた矢先へ。六圓といふ一大事が起つたので。さあ愛が考へもの。誰かの言分には。十圓では送りがなから。六圓で免してくれ。もし其で御辨がならぬなら送つて下さい。此迄抄では心から我に還つてくれろと頼む氣は無いので。六圓で否なら。どうでも可い了簡なのを。有難さうに喜んで送る事もない。最う少し辛い思をして。客分でも見やう。周三だつて一人の親をいつまで妹に預けて苦勞をさせもしまし。今は未だ還る時節でない。其趣を誰かへ答へたのは立派であつたが。六圓の幣が懸ると。忽ちお隣に其反響がして。二斤の魚は一斤となる。鶏卵のお菓が葱ばかりとなる。その理屈ではあるが。今更のやうに隠居は氣を擧げた。金拾圓でさへも他かれたのが。殆ど半分の減額であるから。これではほんの米代だけで。少し孝行の眞似でもすると。忽ち食込む始末。それも城井の會計に。ちつとでも餘裕があるのなら兎も角も。從來隠居の脚を豫算に入れて繰廻してゐたほどの内證であるから。世話の焼けるだけでも損に立つと。實の親であつて見れば。お澁もそれほど精算をし

てかゝる譯でもあるまいけれど。打明けて言つて見た所で。十圓の時ほど嬉しくないには相違あるまい。是に於て城井は随分煩くお澁に氣障な事をいふ。隠居は隠居でもお澁に香味をならべる。中でお澁が大弱り。此分では逆も頼りさうも無いから。いつそ大悶着の起らぬ内に。誰かへ選したのが得策と。此筋を隠居に微見して見ると。どうか物になりさうな難儀であるから。かねて一味の親類三池方へ出向いて。自一至十を話して。舊の鞘に納るやうに話をしてくれと頼む。其は其の口からは言難い。程村めに其見るといはれるのが業腹だ。我からでは却つて被が立つて好くないから。お前が自身に周三に會つて然う言つたが好いからと斥られた。

六

彼此悶着があつて。結構お澁が我を折り。隠居が角を折つて。多く謂ふ本木に勝る末木無しで。始は矢張り世話になるといふ事に納つた。水の流と人の身は。今日に知らぬ飛鳥川。と歌でも聞くと豪勢意氣であるが。澁が瀕に廻られた身の上まらなき。外套の裾を朝風に翻してハハナの煙を口唇に柱籠めながら。馬上に出勤した姿は。玄關に立つて見送

折周三に口説くと。おつに無弄かされて。太平樂の仕舞は定文句の。我を誰だと思ふ。澁谷周三だ。お前たちを乞食にはさせぬからと大きく敲きせられて。すど／＼お酌するが例である。却説お澁の方は脱む姑も無く。面仏な親類も無く。且澁は幼稚調染の信濃で。成人したお坊婆と飯事するやうな樂世帯。意と謂つたら蚤起が辛い知らねど。亭主の出勤を送出して。了へば。其から五時頃までは一人天下である。お澁の蒸焼をして寝ながら食べて。お腹がよくなつたら書睡をしても。誰が何と言ふものも無い。但戸鎖をしておかぬと。此近邊は下駄泥棒が行るから。と叔父さんの言つた通りの始末で。嫁に参りましたと謂はうより。舎兄の處に助手に來た方が適當らしい。身分を謂はうと。月高も輕少なもので。其に應じて活計もお澁末ではあるが。憚んながら宵越の錢は待たねえのさの肌ではなくて。生れ得て元來篤實一遍。元朝から後に近き大晦日の事を。應る質の信濃であるから。吝嗇にはせぬが奢侈がましい眞似も爲ぬといふもので。月給の四分の一は。毎月相違無く便貯金通帳に記入されて。月に二度ほどは日曜日に。夫

るお澁も。通れ殿と心勇むだものが。此頃では建附の悪い格子をがたくり引開けて。葱の味噌汁の暖氣をしながら。ぼく／＼出て行くのを見るにつけて。情無いやら。味氣無いやらで。胸が一杯になる。それがお澁ばかりでは無い。親は親だけに。老婦は老婦だけに悲しさも勝る。あのやうに身を卑して苦勞をしてゐるのに。と有難に隠居も我儘を節むで神妙にしてゐられると。角に出はせぬ窓の月だから。お澁も自づと低しくして上げたくなる。其處でやさしく爲る。喜ぶ。喜ばれる。やさしくする。愛が家内の治る大木とも謂つて。御母様といへばお澁様やと。和氣氣堂に満つる澁谷家今日の有様は。諸道の障子としてある本文が人に疑はれる。案じられるのは。此家内和合の樂みは。恐らく周三が再び出世の曉に。忽ち消滅して了ふであらう。して見れば。他日の茶事は寧ろ今日の日貧樂に如かざる譯であるが。それは唯の理窟で。富と貧とは。人の願ふ所。少々家内に風波があつても。不自由の無い方が先づ。と色氣を出すが常情で。一日も早く好い官途があれば。と隠居もお澁も只替ればかりを念じてゐる。他と思ふほどにも無く。本人の且澁様は神々

(廿四年八月)

二人比丘尼色懺悔

自序

二人比丘尼色懺悔成る。既の九華。香夢樓思案...

ず。翁は汝を渡つて死す。鳥の如に如かざる...

一口してその奥に格闘のあるを知るか。...

紅葉山人

此小説は涙を主眼とす。一時代を説かず場所を定めず。日本小説に此...

を愛して研鑿に耽り。後世なんどの事は露...

似たれども、愛欲を棄てずしては。一日假の住...

紅葉山人

發端 奇遇の巻

紅葉は眉目容すぐれ髪長し。常は西施が鏡...

かりは少かる可し。此の眉目容姿——此の年紀
善提の程には河がなりし。まだ爪紅の消えやら
ぬ指に。珠数つまぐる珠勝さ……過ぎて衰な
り。我身に思ひ較べて濕む涙を。爐の相振動
かして。煙しと紛はす。客も手を見れば。世に
捨てたるべき委かは。世に飽くといふ年かは。
或は我に似たる身の果か。聞かまほし。語らま
ほしや。我が事、人の事、互に一樣の思は有
れど言出づる機会なくて。山路の險阻——麓
の川の名——堂塔伽藍——昨夜の水。其等を他
に。語る程に。粥煮えたりと。主客夕餉の箸を
取り。やがて又少時の物語。
「旅の疲もさぞ。心置かれず御床なれ。」
と紙帳釣下して。切に勤むれば。明朝を契り
て客は先づ臥戸に入りぬ。
里ならば初夜撞くほどに夜は更けて。山を吾
物に暴す風。其に吹轉けじと。松の梢に取付く
鳥の洞聲。其に呼吸つまらせて。月に啼く狼
の遠音。庭にたまりし落葉の。又其に採れて。
映と一度に板戸を打てば。夢破られし客の比
丘尼は。目を見開きて。今眠りしと思ひしに。
同じ床に主の寐姿。外は凄く。内は寒く。目を
閉ちても心は互え。微なれども耳につく主の
鼻。枕邊に夜を守る行燈の火影に。紙帳の反

古の文。鮮に讀まれければ。寐られぬまゝに
頭を擧げて。目近の一面を見るに。
一書置の事。
一筆申のこし候。我此處戰場に罷り向ひ候
上は。一命は無き物との御覺悟有之度候。勝
負はもとより時の運に候の間。相構へて捨
つる命に辱れるにも候はず。やがて目出度候
陳致さん事も。有之べきかなれど。兼而今日を
期し候千歳の一時。仇に過すべきや。日頃の
主恩を報ず可きに候へば。比類まれなる忠
戦に美名を留め可申所存に候。宿世いかなる
縁に候てか。悉くも上様の御立を以て。
其許と祝言致し候過分の條。人々に羨れ
候ひしも。夢の世のしばしにて。淺からぬ
情の嬉しく。玉梅の八千代。二葉の松の末
と解みしも。今は仇と相成申候。速添ひて
より今日まで廿日に足らぬ東の間に。友白髮
の年月を締め。他かぬ思の短き。長の別の
今と相成候ては。なまじひのかたらしこそ殘
念至極に存せられ候。始より斯ある可しと知
り候はんには。いかに御心淺からずとも。將
又主命重ければとて。假の世の假の契は思も
かけざる事と。女々しくも後悔致され候。よ
しなき契ゆるに。其許にも數の苦勞相掛け。又

我とても此のみ死出の途と相成申候。翌日
にも我許死と聞及ばれ候とも。構へて狭き了
簡出すまじく候。若々も頼入候。一面の心よ
り世を憐み。髪を切り衣を染め。わが亡き
魂の修羅道の苦患を救はんなど。思ひ立た
ん事最も不所存の至に候。主の御心には家
を忘れ身を忘れ候は。武門の掟に背へば。吾
家の面目。吾身の。懐。何事か之に過ぎ候は
んや。妄談少しも無之。往生致し候べく候。た
だ折々思ひ出され候。一編の回向なし。さ
れ候は。最も過分に存候。其許はまだ年若く
在し候へば。何方へなりとも似合しき縁逢を
求められ。萬々年の御壽命の後。冥途にてか
きさて對面を期し候。此儀はわが一生の願
に候。暮々も逆有あるまじく候。もし御入れ
申さざるに於ては。未來永劫他人と相成るべ
く候。別れの過去狀。認め置候の間。可然身
の振方取計はれ度候。當座の用までに金子五
十兩。華籠の内には差置申候。春雨の香は殿
より升領の品なれば。平常大事に懸け候を。
此度宛に焚しめ出陣いたし候餘りを。形見
と思召され度。取急き候間名残をしき筆と
め申候。以上。
若菜どの

涙に得られつゝも離れり。首を傾けては
又打眠め。
「はて小四郎様に其儘の筆の蹟。」
「行く思案に沈みしが。」
「あゝ氣の迷。」
と口にはいへど。心に懸るか。半頃より七
八行見返して。
一亂世の習とはいひながら。酷たらしい殿御
の討死。南無阿彌陀佛。其故の御發心か。
お道理や。似た身の上もあるもの。」
人の哀——吾哀。一時にさしくむ涙を拭ひ。
「噫。思へば夢の浮世。」
「主の足は目覺して。其の獨語を聞かぬ。」
「如何遊ばしました。」
「客は鼻つまらせて。」
「お目覺め遊ばしましたか。只今此のお文を拜
見致し……。」
「聞くより主は眉を蹙め。」
「文を！」
「この紙帳のお書置。」
「不注意を悔る主は。呷と言ひしまゝ。語は
次で出でず。扱は認する事か。卒爾なと心付
きけんやうに。客も且く遅ひしが。」
「このお書置の若葉様とは。あなたの俗のお名

で御座りまするか。」
此の山中の住居。遁世してより若干の月日。
今の法名だに。知りて呼ぶ人あらざるに。ま
して俗の名。若葉。他人の名か。鈍や我耳
に珍しくも聞ゆなり。我名。若葉。俗の名
。俗の時。それを思へば早や涙。聲も萎れて。
「はい。若葉と申しました。」
書置の名宛は若葉。討死せしは儘に其の夫。
傷はしやと思ふ心はいと切に。
「運あらば目出度候ると之には書いてござりま
するが。あなたの其お姿では。まさしく討死
なされた事と存せられますが……。」
「仰せの通り。敢ない最期を遂げました。」
「これほどお勇ましい御覺悟では。寤めてまあ
花々しい御鶴を遊ばしました事で御座りませ
うなあ。」
「はい。ようお尋ね下されました。人傳に聞き
ますれば。武士の手本と成候な。目覺しい働
きを致して果てましたとの事。私までが何の
様に嬉しうござりませう。」
「けなげな事おつしやるだけ。お心の中が御推
量申されて。他人の私まで涙が零れます。」
「お察し下さりまし。」と言ふにや。聲は斷
れて。鮮に聞えず。

「よしな事を申出し。お款を懸けましたは
私の無調法。御免なされまし。」
「何のく。やさしいお心に絆されて。不義
な……お詫ならば此方より。」
とやうく涙を収め。
「先程から私一人が味ないやうな事ばかり
申上げ。お見受申せば。あなたにも花の盛を
其の有様……尼法師には勿體ないお姿を。」
あれと頬らむ顔を枕にさしつけ。嬌羞を笑
む初心の風情。振袖着たる昔見たし……さぞ
やしをらしき聲して普門品。見れば麗しく。
思へば憐なり。
「おいたはしう存じます。どういふ因縁で御
發心なされましたか。苦しからずばお物語が
承りたう存じます。」
「お心にかげられた其の尋問。思出すも涙の
種。儂い身の上で御座りまする。」
姫百合は露の重きに堪へずありけん。すゞ
ろに零す一雫。
「両親ともに世に在りながら。頼む夫に死別
れ。味氣ない身の浮世を觀じ。佛の御弟子と
なりまして。話に聞き——前に見たやうな旅
路をば。同行もなくさまよひあるき。死ぬに
もましたる艱難辛苦。夫の事は片時忘るゝ間